宿禰善男可所爲奈利　驚恠比賜比天令所司勘定爾正身固
爭天不承伏止云止毛子幷從者等乎拷訊　須留爾云々　萬葉
卷十六味飯乎水爾釀成云々昔有娘子也相別其夫望
戀經年爾夫君更娶他妻正身不來徒贈裏物因此
娘子作此恨歌還酬之也　落くぼ物語藤原の君の卷
に所々に見えたりさうじみとは今の俗語に本人當人
などいへると同じ(釋)この說共のごとし　**ひたやごもり**　同ウ　(河)直隱(細)和泉式部うきによりひたや
ごもりとおもへどもあふみのうみはうちいでゝ見よ
(新)ひたやは日本紀に永字ひたすらと訓じ後に一向
をひたすらなどいふに同じこゝはひたすらに打こも
りてといふなるをかく一向に情なき意に轉じていへ
り或抄に直隱の字をあて和泉式部が歌を引たるはあ
しからず直もひたすらてふ意に用る也云々(釋)この
注は玉小櫛よろし新釋もいたくはたがはずひたすら
に屋に隱る意なるべし　**うるせく**　廿六丁ウ　(餘)河
內本にはうるせくと有しよし河海にも同じ青表氏は
うるさくとありしとぞ湖月抄にもうるさくとせしは
わろしうつぼ物語初秋上あるじのおとゞ仁壽殿はう
るせき人にこそ有けれ宇治拾遺十四西おもてのさう
しにうるせき女ありけり同卷にこのわらはも心えて
けりうるせく思そかし云々口口口はなれどもかしこ
くうるせきものはかゝる事をぞしける按ずるに口口
口はしきとしたるをいへる詞なるべし鈴蟲卷に故大
納言なにのをりにもなきにつけて云々いらかひある
かたのうるせかりし物を若菜下宮の御ことの音はい
とうるせくなりにけり著聞集九賴義を身をはなたで
もたりけるがきはめてうるせくおぼゆるなり云々
(釋)此詞は功者にかしこき意也餘滴にうるはしき意
のやうにいへるはあたらず言の本はしられがたし
あえ　同(餘)契沖仁德紀に饗田に肖給ひぬ古今集
秋上こよひこん人にはあはじたなばたの久しきほど
にあえもこそすれ素性法師○按ずるに契沖の古今集
を引れしは秋上にはあれど今本は待もこそすれと有
是は六帖卷一に七夕の歌にみえてあえもこそすれと
あれば古今はあやまりなるべくやみつね集にひさに
こぬ人をまつにやあえぬらんときはの戀と我はなり
ぬる○あえとはたなばたつめにひとしくてたちぬふ
かたはあえずぞ有ける後撰秋の上閑院右京大夫宗平女
同書に源昇朝臣時々まかりかよひける時ふむ月の四

五日ばかりなぬかの日のれうにさうぞくてうじてと
いひつかはして侍ければ　**よきぬ**　廿八丁ウ　(新)萬
葉によき道といふを曲道と書たりこゝは只そのゆく
道のほどにある家を云或說によきがたきと云は過た
り只よきぬ也(餘)萬葉卷七みわのさきあらいそもみ
えず浪たちぬいづこよりゆかんよき道はなしに六帖
卷三口すれ引よく道なしと聞てこそいとふの神もた
ちはよりけれ契沖云よきはよけといふに同じ古今に
花のあたりをよきてふけ萬葉のよき道を曲道と書り
しからばよきぬ道とは通り道といふ詞也萬葉十一を
かざきのたみたる道を人なかよひそありつゝも君か
きまさんよき道にせん古今集戀二藤原敏行住の江の
岸による波よるさへや夢のかよひぢ人めよくらん
(釋)通り道といふ詞也といへるはわろしよけず通る
道などこそいはめ　**つゞしり**　廿九丁オ　(新)嚶の字
をつゞしりと訓がごとくくひきり〳〵てうたふ也き
とさだかにうたふべきをりにあらねば也萬葉にかた
しはをとりつゞしろひと有(餘)末摘花卷に御つゞし
り歌のいとをかしき同卷たゞうめの花の色のごとみ
かさの山のをとめはすてゝとうたひすさびて出給ひ
ぬるを命婦はいとをかしと思ふ心しらぬ人々はなぞ
御ひとりゑみはとゝがめあへりあらずさむきしもあ
さにかいねりこのめるはなの色あひやみえつゝん御
つゞしり歌のいとをかしきといへば云々俗にひとロ
うたといふものにや云々今昔物語越前守爲盛が段に
宮人ども物ほしきまゝにいそぎて此鮭鯛しほからな
どをつゞしる程に(釋)案にきれ〳〵にうたふよしな
るべし衣の破れたるをつゞれといひそれを補ふをつ
づるといふつゞに同じ言也　**ねたます**　同ウ　(玉)物
語にねたしといふ言はすべてつねにいふごとく妬忌
む意にはあらずたゞ時にのぞみてかろく思ふ事にい
へりたとへば人の我にむかひていふ事する事などに
ふれてその時にあたりてそをくちをしなど思ふやう
の意にてこゝもふみ分たる跡もなしといはるゝをく
ちをしとおもふがねたく思ふなりさてねたますとは
さやうにねたく思はするをいふ也(譯)ザンネンガ
ラス　**あざれ**　同(餘)たみ詞にあまへされならんと
いへるはたゞこゝの所につきて解したる也あまへた
る義はなしをとめの卷にいとあざれかたくなゝる身
にてと有土佐日記にしほ海のほとりにてあざれあへ

るなど見えたり〔譯〕オジヤレル　あゑか　三十丁ウ〔拾〕和名抄第九淡路國津名郡平安阿惠加此あゑかは鄕の名なり今のあゑかの心にてつけたる歟然らば平安の字にて心得べきか〔玉〕拾遺に云々もとは一つ言なるべけれど物語のあゑかは更に平安の意にはあらず用る意のうつりかはれるなるべし〔新〕これは物のあやうきよりいでゝ乳兒のいと弱きにも又かく女のなめ心はなくてなよびがちなるにもいへりあえの假字也あへと書べからず〔雅譯〕あへかはいとわかくて物はかなくよわき意也〔釋〕此語の義詳ならず右に擧る說どもを思ふに拾遺の說は小櫛にいはれたるがごとしされども小櫛には此語の解なし新釋には夕顏卷にもあやうげといふ事也とてむつかしくいはれたれどあやふげとあゑかとはいと異なれば從ひがたしたゞ雅語譯解のごとく心得てあるべし假字はしばらく平安の阿惠加にしたがひて物しつ譯解にはあへと書たり案にこれもすてがたしあへは敢なしなどの敢と同じ意にやとおぼゆるよしもあれば也猶考ふべし

しれもの　卅一丁ウ〔餘〕萬葉集卷九詠二水江浦島子一歌に老もせず死もせずしてながき世にありける物をよの中の愚人のわざもこに告てかたらく云々土佐日記にわらは迄ゑひしれて云々竹取物語にこゝちしれにしれて新猿樂記に白物新釋別記に本朝文粹卷一高鳳刺二貴賤之同一交歌源順不レ足レ言不レ足レ嘲其恥白物之入二青雲一左傳成公十八年云無慧不レ辨二菽麥一注曰不慧也世所謂白癡也〔譯〕バカモノ　**いざや**　卅三丁オ〔新〕いざは否てふ語也人の間に不レ知をも又其間の意に述ぶをもいなともいさともいふ故に萬葉に不知の二字を書たり人を率ふを云とは異也　**さすらふ**　卅四丁オ〔餘〕孟伶傳サスラス已忍作傳十年事杜甫今考るに杜子美が詩は宿府の作なり伶傳は行不正也と字書に注せり顯宗紀にも此字ありてサスラヘと訓ぜり文選寡婦賦にサスラフとよめり金葉戀下出羽辨おくりてはかへれと思ひしたゞしひのゆきさすらへてけさはなきかな〔釋〕舊注に吟流離伶傳などの字を擧られたる中には流離よくあたれり、或抄には流浪の字の心といへりこれもよろしおちぶれて深ひわりく意也〔雅譯〕オチブレル　**たもひをつはす**　同〔拾〕萬葉十三の歌に藤浪乃思纒若草乃思就西云々〔釋　糸の物に纏はるによそへて思のはなれがたきを

いふ語なり　**人やりならぬ**　同ウ〔新〕百今集に人やりの道ならなくに云々といへるより後の歌にも文にも多し其本は人の爲に遣るゝ道なり轉じては我心よりせぬ事をもいへりこゝは人もなさせぬむねをひとりやくならんといふ也〔餘〕契冲云古今集離別源さぬ人やりの道ならなくにおほかたはいきうしといひていざかへりこん人やりは人のいひつけやる也されば人やりならぬは人のいひつけぬ事なれば我心からなすことにとりなしていへり　**くすし**　卅五丁オ〔餘〕萬葉三きゝしごとなことたふとくくすしくもかんさびをるかこれの水島同十八あやにくすしみ十九にいにしへに有けるわざのくすばしきとといひつぎちぬをとこ清少納言に物いみなどくすしうするものゝ紫式部日記に我はとくすしくくひもちけしきことゞくしくなりぬる人は宇治拾遺物いみくすしくいふやつは命もみじかくなど有契冲說に稱德紀に奇魂をクシミタマとよめる奇の字をクシビと訓る心と云り　**なでふことか**　同〔餘〕何條とかくはわろし何てふにて何といふことかといへることなり　**とりまちさん**　同ウ〔玉〕とりは御けしきとるなどのとるにて俗言に何事を御意に入れませうぞといふ意也〔餘〕明石卷に源少納言さふらひ給はゞたいめしてことの心とりまうさんと云又云いととり申がたきことなれど云々（多ク引タレド今略ク）たゞ申すといへる詞にとりとつけていへる迄也宣長が云々とかけりしはあたらぬ事也〔釋〕案に小櫛の說はさる事なるを餘滴にたゞつけていへるまで也といへるはいと〳〵ひがことなり　**ふすぶる**　卅八丁オ〔餘〕蜻蛉日記にもしほやくけふりの空に立ぬるはふすべやしつるくゆる思ひになどとありさかしらするまでふすべかはして同書長歌ふじの山べの煙にはふすぶることのたえもせず元眞集の詞書に久しくこずとてふすべて出ぬひとに　**はやりか**　同〔雅譯〕テアライ　テヅヨイ　手あらきさまなり〔釋〕はやりは疾といふ事をりると活かしてはやりはやるといふ詞かは例の形容辭なり意はいざみたちてきは〳〵しく物する事と聞えたり聲もはやりかとは聲の高く勢あるさまをいふ　**うべ〳〵しく**　同ウ〔釋〕諾々し也諾とはげにと承諾する意にて俗書にモットモといふにあたれりうべ〳〵しくはそれを重ねていへるにてモットモラシイといふ意なりさて假字

はひべと書たるを今改めたりそのよしは首卷にいへり **むくつけき** 四十丁オ〔雅譯〕ミグルシイ オソロシイ キミガワルイ 尾張の田舍の詞にムツケタと云卽是なり(釋)むくの義未おもひ得ず意は譯解のごとしむく〳〵しといふも同じ意と聞ゆ **つまはじき** 同〔餘〕高光集詞書にうちとけてもあらぬ人をわりなき所に引とゞめてかくやはとつまはじきをしかくれば土佐日記にひと日風やまずつまはじきしてねぬ落くぼにつまはじきをちから〳〵しくし給ひて槇柱卷になほめづらしうみしらぬ人の御わり樣なりやとつまはじきせられうとましうなりて云々南史宋順帝禪于齊泣而彈指曰願後身世々勿復生天王家空蟬卷にをさなかりけりとあはめ給ひてかの人の心をつまはじきをしつゝうらみ給ふ〔雅譯〕にくき物事を見聞時のしわざ也 **あはめ** 同〔新〕あばめは家を發くといふはひらきちらす意也其如く式部が物語をいとわろしといひちらし給ふをいふ也或說に出したる字どもはみなあたらず〔餘〕河海に淡と有よろし淡しといへるにてうとみにくむをいふ詞也はを濁りて拒也といひ又いさめにくむやうの心などいへるはひが事也たみ詞の發といふ說もいとわろし(釋)うとみにくむ心とあるはさも有べし淡しとするといへるは今少しうけがたし玉小櫛も河海によられたれど猶いかが〔雅譯〕サミスル **からうじて** 四十三丁オ〔新〕辛くして也物を五味もてたとふる常の事也こゝは長雨のはるゝをいと待わびてふに同じ〔譯〕ヤウ〳〵ノ「デ **にがみ** 四十四丁オ(釋)上の新釋によるときはこれも五味にたとへていふなるべし俗言に苦々しといへりこゝは只つぶやく意也 **あなかま** 同〔新〕今あゝやかましといふ是なりされどやかましてふ語は見えずかしましとはいと上代よりいへばあゝかしましの二つのしを畧してかまとはいふなりけり(釋)此說の如くならめど解ざまいとむつかしくやあらんかまびすしのかまと同語なるべし囂字を訓り **やをら** 四十六丁オ〔拾〕柔らかなり云々本文ニ引ッ〔玉〕拾遺の說のごとし俗言にそつとゝいふことなり **ほゝゆがめて** 同ウ〔拾〕和名抄云野王按云頰音狹和名豆良一云保々面旁目下也かほをかたぶくればほゝのゆがむ也くつろぎがましくといへる此心なり枕草子にも夏ひるねしておきゐたるえせかたちはつやめきねはれてようせずはほゝゆがみもしつべくといへり云云〔玉〕河海をはじめ細流孟津などにほゝを方の意に注せられたるはひがこと也又拾遺に頰也として顏をかたぶくれば頰のゆがむ也といへるもいかゞ也枕冊子を引たれどかれも頰の意にはあらじか此詞たとひ本は頰のゆがむより出たるにもあれかならずしも頰のゆがむをいへるにはあらじこゝも物へだてゝ聞給ふなればその頰のゆがめるは見ゆべくもあらず(釋)なほ頰ゆがみの意也さてこれはまさしく頰のゆがむ意にはあらでゆがむ事を强くけにくゝいはんとて頰といふ事をそへていへる也今俗の語にもたゞ憎しといひても有べきを頰にくしなどいふ事ありこれも其事がらをけにくゝいひなさんとていへると同じくかかる事外にも猶多し拾遺の說は解ざまいかゞなり小櫛は事の情は得られたれどさりとて頰といひたるを何事ともいはでは事の意辨へがたし又新釋に次にくつろぎがましくといふはよりふしなどしてゐる故に物いひのほゝゆがみていふやうに聞ゆるなりとあるは正しく頰をゆがめて物いふ事と見られたりと聞ゆさては文の義いたく違ふべしたゞほゝゆがむといふ詞あるをもてゆがむことを强くいはんとて頰を添たるのみなり **あてはか** 四十七丁ウ〔新〕あては伊勢物語古本に高貴の二字を用ゐたり高貴の人ぶりてすがたよろしきをいふなり諸抄にさま〳〵字をあてたるは皆推量のみ其字どもをあてと訓たる例なしはかはそこはかのはかに同しく量度の語なるを轉じて程計の意にいへり何ばかりの人何ほどの人なりなどいふがごとくその位階分際をいふ詞とす〔餘〕河勝人細姙妍日本紀 契冲云河海に出されたる字何に出たるかしらず細流の二字日本紀に有ことなし〔雅譯〕ウチアガッテキル キャシャナ 品ガヨイ(釋)あての義詳ならず意は譯解の意をおの〳〵相兼たり新釋の說はさることながら古本の伊勢物語といふものは妄作なる事本居翁の玉がつまに辨へられたるがごとしそのうへ高貴二字の意のみにはあらずうつくしく品のよき意などかねたれば此字のみにては解がたしはかの說もさる事ながらいたくむつかしたゞあてやかのやかと同じく形容辭と見て有べし **つきづきしく** 四十八丁ウ〔新〕着々敷にて似着こと也かの後妻に配せんにもつきづきしき也〔雅譯〕ニツコラシイ モット

モラシイ　**すぢかひ** 五十丁オ（拾）すぢかひは筋替角違など心得る人あるべしすぢるといふ詞あればすぢりちがふといふなるべし　**やとれびゆ** 五十一丁オ（餘）新後拾遺集釋教大納言道綱母思ひ出ることもあらじとみえつれどやといふにこそおどろかれぬる者絮卷にかゝる朝霧をばしらでいぬるものかとて入給へばやともえ聞えず宇治拾遺はやく左の自にいたつきたちにけり海ぞくやといひて扇をなげすてゝのけざまにたふれぬ○新撰字鏡愕然於比由（釋）萬葉二吹なすふえのおとはあだ見たる虎かほゆると諸人のおびゆるまでに　**すくよかに** 五十二丁ウ（新）健の字をよめるごとくたゆまず情なきさまなり總て物の餘情なく見ゆるをすく〳〵としてなどいふめり（釋）すくはきすくすく〳〵しなどのすくに同じく情なき意よかは例の形容辭也　**たをやき** 同 たをはたわむなどのたわと通ひてたわ〳〵としたるさまやぎはやぐともはたらく形容辭也とをゝなどのとをも同じ　**たろかならず** 五十四丁ウ（釋）おろかはおほらかと同じ言の約りたる也おほはすべてとりしまらぬ意なること上にたび〳〵いへるが如しらかろか共に通ひたる形容辭也愚をおろかといふも細しからず大らかなる心をいふ也さておろかならずは細やかにといふ意にてこまやかに語らひ給ふといふ義なり　**ことく** 五十六丁ウ（玉）ことゝは何事にまれ其事をとりたてゝ事とする意にてとりたてゝあかくなるなり家持集といふ物にある歌に秋風はことゝ吹來ぬとあるも同じ河海に事となりとあるよろしわざとがましき心なりとあるはたがへり細流にことゞくとあるはかなはず（雅譯）何事にもあれ其事を取立て事とする意也俗にキットヨイなどいふキットのこゝろなり　**あたらしき** 五十九丁ウ（餘）今の俗あつたらものといへり古事記上に阿多良斯登許曾又萬葉にも見えたる語也玉かつらの卷に故少貳のうまごはかたはなんあなるあたらものをといふ落くぼに明くれはあたらものにいひ思ふ（釋）可惜の字を訓來りたるがごとし古事記の阿多良斯は猶異なるべし　譯 ヲシイモノニ　**ふつゝか** 六十丁オ（拾）萬葉十七に太馬をふつまとよみたればふつゝかは人のふとり過たるがいやしげなればそれより起りて萬の事しなゝくてしたゝか過たるをふつゝかといふ歟末摘花卷にみちのくにがみ

のあつごえたると文かける紙さへわろき事をいふとてかけるも准らへて知るべし人のやせ過紙のうす過たるもわびしくわろけれどふつゝかなるとあつ過たるとのわろきまではあるまじき也（雅譯）太つか也デックリトコエテキル轉じていやしき心になる時俗語に同じデンブナ

○空蟬卷語釋

かゝづらひ 初丁（釋）かゝづりあひの約りたるにてかゝは拘はる義なり俗言にカヽリアヒといふに等し　**たどりよらんも** 同（釋）探り寄る意にてたづねよらんといふがごとし空蟬のかくれたる所なるゆゑにたどりとはいへるなり　**とぢめ** 同ウ（釋）とぢは閉めは活辭なり物を束ねて結び終る意を本にて何事にも竟をつくることにいへり（雅譯）シマヒ　**うれたくも** 同（釋）先達憂痛と訓れたる意にて憂の痛く甚しき也舊注に日本紀の慨哉などを引れたるも本は一つなからこゝの意には遠し　**まぎるべき** 三丁オ（釋）目遮の意にて人の目を遮るべき几帳といふこと也すべてまぎるといふ語はみな此意にて見とはしを障斷る也紛らはしなどいふもこれをはたらかしたる也　**のげなき** 同（釋）物氣無にて物々しき氣のなきよし也俗言にミスボラシイといふに近し（雅譯）ゼニメガナイ　**位ガナイもの〳〵しのうらなり**　**ないがしろに** 同ウ（拾）蔑此字也物ともせぬ心なりこゝにてはきたる物かともせぬ樣也しどけなしと注せるもたがへるにはあらねどよくはかなはず（雅譯）シドケナウといふ意になる事有慢りたるさまなれば也　**ほうそく** 同（拾）放俗なりはを清てこを濁るべし（新）傍若無人の意なるをさまでは詞のしたゝか過たれば傍著とのみいひてしらする也且じやくをぞくと訓は此國の唱への例なり（餘）おもふに凡俗の字なるべきにや遊仙窟にも出てたゞびとゝよませてふるくいひならひたれば大かたは此字なるべし云々もしさならずは僕遨か云々源語のうちにてはかげろふの卷に人おほくみる時なんすきたる物きたるはばうそくにおぼゆると見えたり此外見えず○身のかたみといふものに第七御ひきあはせの事御むねにつね〳〵御心をそへられ候はねはいかにうつくしきえりなりともしどけなくばうそくにひきなされとりはづしては胸ひろ

暴字アラハス　音泊トキトヨムニテハ　レアドラズ　ノ字音入聲サハ　用ナルグトキヲ　カハニ引テ　ウトカ師ヲク　ホウシ綠　移ヲロウ　サウ＋ド　モウ例令　ナレバク類　モサヤスベキ　トヒセコテ　ニヒセメレ　ハセメテ　試ミナリ

がりてちのしたまであきとほり見にくき事も出るものにて候〔玉〕傍側飽足など注あれどいかゞ拾遺に放俗の字をあてたれどこれもいかゞすべてかやうの字音の詞はその意によりては字は當がたきもの也字は字にて意はあらねさまにも轉し用ゐるものなればなり〔釋〕右の説どもいづれもげにいはれたりとおぼゆるもなし玉小櫛にいはれたるやうに心得てあるべきなりされどなほ試にいはゞ暴側の字などにやあらん餘滴に引る身のかた見にむねひろがりて乳の下までありきとほりといへるすなはち暴側の意にて胸のあきて身の側までも見ゆるを側を暴すといへるにもあらん歟こゝにもむねあらはにといふより續けたるを思ふにさるさまなるべくは聞えたり猶考ふべし　譯　ジダラク〔雅譯〕ゾラク　**つぶ〳〵と**　同〔新〕つぶらかとは丸き物の形を一つぶ二つぶなどいふそれより轉じてこえ丸がりたる心にこゝにはいへり〔雅譯〕マルマルと譯する時はつぶらなる也コマ〴〵と譯する時はつぶさなる也　**そゝろか**　同〔新〕大どかならですゞろに心かろきさまなること上にも下にも見ゆ〔餘〕狹衣につき〳〵しうそゞろかなるかたちなどいとゞいみじう云々とうかへばや三これは今少しそゞろかになまめけるけしきまさり給へり云々柏木にたけだちもの〳〵しうそゞろかにぞ見え給ひける河海にたけの高きさまにやといへるはよき説なり〔釋〕この語大かたは新釋のごとくにてかなふべし然れども餘滴に例ども擧たる其外をも考へわたすにげにもたけ高きさまをいふがごとく聞ゆかれ考るに萬葉集詠二立山一賦に天曾々理たかき立山とよめることありこの天そそりいかなる義とも知れねど天に聳えて高きさまとは聞ゆればこゝもその意にてそゝりかといふをかよはしいへるにやあらんさらばすゞろとは本より別なる語也そもじも清てよむべし古事記上に於二天浮橋一宇岐士麻理蘇理多々斯豆とある蘇理もかよひて聞ゆるやう也暫く餘滴に從ふべし　**さがりば**　同〔餘〕枕草子にうらやましき物かみながくうるはしうさがりばなどめでたき人〔新〕さがりたるほどあひを云萬葉にかやかり許爾といふばかの如くその程量をばかといふを畧してばとのみもいへり濁るは音便也〔釋〕額髪の下りたる端の事也端をはとのみいふは軒端山の端などのはに同じ新釋の説はいたくたがへり　**さうどけば**　四丁ォ〔雅譯〕さうは騷なりどくはどかの活きたる也どかはらかの類也大らかを大どかともいひ夫を活らかしておほどくともいふにて知べしザワヅク　**ねびれて**　同ゥ〔新〕春海考るにねびれはねびさるなど有と同語にてとしのふけたるをいふ也語釋は詳にしりがたし和名抄に能登國婦負郡禰比とありこれも年更たるをいふ詞ゆゑに婦負の字を禰比とよめる也此負は嬢と同じくて老女の稱なり〔餘〕契沖云としのふけたるをいふ〔釋〕此説どもはねびといふ語にはかなへれどこゝにはいかゞ鼻などもねびれてとつゞきたる語勢さらに年のふけたる事とは聞えず頭書に擧たる玉小櫛のごとくなるべし但し草木の萎しぼみたるやうのさま也といはれたるはいかゞなり新釋にも俗に木などのみづ〳〵しからぬをすねびたる木也といふ是にて過捻ぶりの意なるべしなどいはれたれどすべていかなる事とも聞わきがたし大かたは細流に鼻の高からぬよし也と有ぞよろしき　**そぼるれば**　同〔新〕そばへるをいふか上卷にそばづきざればみたるといふに萬葉のいそばへをるてふ語を引ていへるがごとし又そゞろくをいふか〔餘〕若菜上なしかうじやうの物どもさま〴〵に箱のふたどもにとりまぜつゝわかき人々そぼれとりくふもありてふの卷にかきざさま今めかしうそぼれたり○そゝくといへるに似たり〔釋〕新釋にそばへるをいふかとあるはよろしそゞろくをいふかとあるもかなふべしそばづき云々とあるはいたく違へり〔雅譯〕ソヽカシイといふに近し　**まろ**　六丁ォ〔新〕まろとはむかし男女ともに我を下していふ語也才あるをかど有といふに對へてかどなく丸くのみして愚か也てふ意なり〔雅譯〕男女ともに自稱の詞也少しはげみ高ぶるこゝろあり今の世男ならばコノ方女ならばコチャといふがごとし〔釋〕打とけていふ語ときこゆ新釋の説は暗推にちかし　**とばかり**　同ゥ〔新〕時ばかりを略しての語也萬葉に例有されどこゝなどはいとしばらくの事に用ゐたり萬葉に夜のふけぬとにとあるは時にの略也〔釋〕此説もいかゞあらんたゞしばらくの間らひをおもはせたる語としてあるべし　譯　チトバカリ　シバラクノウチ　**いだにねられず**　七丁ォ〔餘〕契沖云いは心のよくねらるゝ事也たゞねるといふとはすこしくかはれり○朗云これは熟睡をうまいにあてたるなどを

見ていへるにやさるわかちあらんともおぼえずいぬ。二言のつゞきたる間にてにをはを入るゝこといもねずいをぬるなどあり引切もせずといふ心をひきもきらずといふがごとし　しふねき　八丁ウ（雅譯）執念しきなり字音にはたらくてにをはをそへて和語のごとくしたるは裝束するをさうぞくといふ類なり　うらもなく　九丁オ（釋）うらは心の裏の事にてうらさびしうらがなしなどのうら也されば心もなくといふ義にて何のこゝろもなくうちとけたるさま也　譯　何ノワケモナウ　オクソコモナウ　よべ　十丁オ（新）夜方にて前の夜をいふそれを音便によんべと云今も田舍にてはよんべといへり前夜をゆふべと云は誤也　うつせみ　十一丁オ（新）うつせみは萬葉のころまでは顯の身てふ意にてうつそみの妹うつそみと思ひし時などさへいへり然るを萬葉に字を借て空蟬とかき又顯身ははかなく死る意にもいへるをたゞ蟬のもぬけの事とのみ思ひ誤りたるを紫式部の比に至りてはひとへにもぬけの事とのみおもへるもうべなり此女房かくかしこしといへど時に古學のなければをしむべし（釋）うつせみの解は右にいはれたるごとくなれどこゝにうつせみといへるはたゞ蟬の事にてもぬけまではあらぬこと也さて身をかへてけるとあるがやがてもぬけたる事也然れども此語によりて蟬をうつせみとはいへりとおぼしければ空蟬の字をにほはせたることは論なしそれやがて歌の巧なるなりこのかへし歌にうつせみの羽におくつゆのとよめるにてうつせみはたゞ蟬の事なるよしを知るべきなり

○夕顔卷語釋

むつかしげ　一丁オ（新）むね〳〵しからずきたなけなる家どもの立こみたるをいふ下京邊のさまむかしもさぞ有けん（釋）すべてむつかしといふは物の繁くわづらはしきをうるさがる意の詞にて今俗にいふとはやゝ異也こゝは新釋の說のごとし　譯　ムシヤクシヤトシタ　ムサクロシイ　ひたぶつき　同（釋）このころの女は髮を垂たる故にふと見て先額より人の目にもとまるなるべしさるからにをかしき顏つきの透影といへりかしらつきといふにひとし　やつし、やつる　同ウ（釋）やつすは形をわろくしてしのびまぎらはすをいふ今世にいふとはいたく異也俗言にミスボラシクスルといふ意也又やつるといふはおのづからミスボラシクなる事にて形の痩衰ふるさまをいふたおのづから形のわろくなるをいふやつ〳〵しは貧窶の窶字を訓來れるがごとく貧しくミスボラシキ貌をさしていへり此けぢめを心得おくべし（雅譯）忍びて出立時輕く身ごしらへをしわろきのり物にのるをいふカルイナリニナル　ついゐて　二丁オ（除）契沖河社に云崇神紀云急居此云二菟岐子一これは倭迹々姬命と申が立ておはしけるがものにおそはれて心ならずとみにゐ給へるをかくはいへりうつぼ物語に宮のついゐならひ給へといひ平家物語の六代などについゐてとかきつゐにもついゐぬるついくるといふは急の字を菟岐といふを岐を伊に同韻にかよはしていふ也何につけてもついゐとはすみやかなるにいへり雅望云此說ことわり有こゝも何の花ごと源氏の間給ふに御隨身のとみにひざまづきて御こたへ申すさま也若紫卷にこちやといへばついゐたり云々（釋）此末例ども多く鄭たれど今略きつ　このもかのも　同（新）此面彼面てふ意にて萬葉東歌に足がりの平豆母このもにさすわなとよめるも彼面此面の意也古今集にはこのもかのもとよみ此さか木の卷にもあり　譯　アチラコチラ　よろぼひ　同（拾）徒倚ヨロボフ神代紀下（除）仁德紀天皇幸二山背一時視二桑枝泛一水而流一歌之曰云々河のくまゝ〳〵豫呂朋餓ゆくかも（釋）小家のさまの傾き倒れかゝりたるをいへるなり　譯　ヒヨロヅキ　むね〳〵しからぬ　同（除）綱花棟々河宗々按ずるに棟々と書るは皆わろし河海の說によるべしもしこれを棟の心とせば葵の卷にものゝけとてもわざとふかき御かたきと聞ゆるもなしすきにける御めのとだつ人もしは親の御かたにつけつゝつたはりたるものゝよわめにいでなどむね〳〵しからずあらはるゝとかけるむね〳〵しをば何とか解べき崇神紀十七年船者天下之要用也この要用の字を牟禰津毛乃と訓り神記にもしかり（雅譯）オモダヽヌ云々　あやめ　同ウ（河）綾目黑白文目文をあやとよむ也毛詩曰聲成文ほとゝぎすなくやさつきのあやめ草あやめもわかぬ戀もするかな清輔朝臣奥義抄云黑白もしらずといふやうの事也云々（釋）文は黑き白きにかぎらず物の色のさわやかに分るゝをいふめは顯注密勘に網の目籠の目縮め布めなどを引出られたるがごとく其分れたる際を

いふ事と聞ゆわやめもわかぬは其文のめの分れがたくしてみだれたるをいふこゝは貴き賤き人のさまを見分つことなきをいへるなり　**ららがはしき**　同（釋）湖月抄傍注に亂みだりがはしき也といへるよろしらうは亂字の音をなだらかにしたる例の語と聞ゆがはしは形容をたとへいふ辭なり萬水一露にそうぞうしき小路也と注せるはすこしたがへり　**よろこび**　同（釋）此詞かく體言にいへるは今の俗言に禮をいふといふにあたれる事先達のいはれたるがごとし歡びて謝する意より轉れるなるべし又帚木卷によろこびに思ひといへることありそは常のごとくうれしく思ふ意なり何れも今俗にいふとは異なり　**ひそみ**　三丁ウ（新）なかんとする時の口つきをいふ萬葉に百とせに老舌いでゝよらむともわれはいとはじてひはまずともと有を六帖にひそむともと有是萬葉の訓をば誤りしかどひそむはさる口つきをむかしいひけん證とは六帖を以てしるべし老の泪もろに口つきひそみて源に見ぐるしく御覽ぜらるゝ也（餘）朗云ひそむは眉にも口にもいづこにもかぎらず顏のうちにわたるなるべし雅望按ずるにあげまきの卷に姫君の御心をあやしくひが〳〵しくもてなし給ふをもどきくちひそみ聞ゆ（釋）源注拾遺の帚木のうちひそみぬかしとある所の注にも萬葉集の老舌出而與餘牟ともとあるを引出ていはれたれどよゝむといふ方の解をのみいひてひそむといふ詞の說なきはいかにぞやおのれが釋はそこの頭書にいへり朗の說の顏のうちにわたるといへるはさも有べしされど本は口もとより出しにこそさて新釋にも拾遺にもよゝむといふ事を引れたれどよゝむは舌のもつるゝ事にてひそむとは異なればいたづらなりひそむは俗言にビリクチスルナキガホスルといふにあたれり　**つきしろひ**　同（拾）和名抄云說文云觝丁禮反楊氏漢語抄云牛相觝豆木之良比以角觸物也此觝の字つきしろひと讀たれど今は衝突などの字なるべし（釋）つきはげに衝突などの意也しろひは辭にてあへしらひ引しろひなどの如く互にする意也しらひとしろひとは音通ひて同じことなり　**めくはす**　同（餘）いせ物語に世をうみのあまとし人をみるからにめくはせよともたのまるゝかな清少納言にかつぎするあまのすみかはそこなりとゆめいふなとやめをくはせけん若紫卷に中將中務

の君などやうの人にめをくはせつゝうつぼ卷二はべる雜色共にめをくはすればはしりよりて云々若菜上あなかたはらいたとめをくはすれどきゝもいれず云云など有　**しほだれ**　四丁ウ（餘）齋宮式に哭稱鹽垂とあり（釋）鹽の垂るは沾しめりて干がたきものなるを本にて涙のかわきがたきにたとへいへる語なり　**ばうざ**　五丁オ（餘）土左日記に舟ぎみの病者もとよりこちゝ〳〵しき人にて（釋）病者をつゞめてばうざといふは言をなだらかにする例のことなり　**かごとばかり**　七丁オ（餘）契冲云榮花物語にわかやかなる女房四五人ばかりうす色のしびらどもかごとばかりひきゆひつけたり古歌にひたち帶のとつゞけたるこれにおなじかたばかりなどいふにかよひて聞ゆ雜記六帖東路の道のはてなるひたちおびかごとばかりもわはんとぞおもふ　**てかく**　十二丁ウ（餘）柏木卷にてゝちせんかたなくなりにければ出させ給ひねとてかきせいし給ひて蜻蛉日記にはつせまうでに音せでわたる森の前をさすがにわなかま〳〵と手をかき面をふり云々後拾遺雜俳諧天台座主源心雲ゐにていかであふせと思ひしにてかくばかりになりにけるかな（譯）手ヲフル　**なにがしくれがし**　十三丁オ（新）くれがしとはそれがし也なにくれなどいふくれなり（釋）くれはこれといふ意なるがくとことかよふ例あり　**そらたぼれ**　同ウ（新）そらは虛言の虛なりおぼれはおぼろ〳〵としてことの意をわかぬさま也さてそらしらぬさますると常に云に同じ（釋）おぼれはおほほれの約りたる也おほはおほらかおほやうなどのおほに同じくとりしまらぬ意ほれは老ほれなどのほれにて心の惚る也或抄云此詞は前の見給へおきながらといふ詞にかゝる也見給へおきながらはかられまかりありくといふ意なり　**へんぐゑ**　十五丁ウ（餘）くゑんぞくほくゑ經など同じ例也（釋）驟速といふ人名を紀にクエハヤと有けを重く唱ふる時の音と聞ゆたゞにけとよむといふ說はわろかめりさて物の變化とは鬼物の變化して形をあらはしたるをいへる也（新）古事記に溝くひひめのもとへ誰ともなくうるはしき男の夜のみかよひて其住所しられねば男の衣のすそにへその苧をつけこゝろみるに其苧は戸のあなより通りて有をとめ行てみむろ山の神の社までいた

れる事ありこれらをいふならん（河）三輪明神倭迹々日百襲姫命にかよひ給ひし也日本紀の心はおほものぬしの神の妻也然るを其神晝は見えずして夜來るやまととゝ姫の尊夫に語ていはく君常に晝は見えず明るかにみかほを見ることなしねがはくはしばらくとどまれいましが形を見んと答ていはく君がくしげの中にをらんおどろく事なかれやまととゝひめの尊心の内にあやしむ夜明て匣をひらきて見るにうるはしき小蛇ありおほん衣紐のごとし云々下略（釋）右の准據ともさしも用なき事なれど何れの抄にも擧られたれば因にこゝに記しつなほ河海には中關白殿の赤染之兄弟の女に語らひて云々などいふ事もあれどうるさくて今はぶきつ　**ごほ〳〵と**　十八丁オ（餘）これはことに物語ぶみにあまた見えたる語なりひとつふたついはゞうつぼ物語國ゆづりに御屏風御几帳もごほ〳〵とたふれぬ蜻蛉日記にまだひるよりごほ〳〵けた〳〵とするそひとりゑみせられて枕草子にやり戸などあくるもいとにくしすこしもたゞるやうにてあくるはなりやはするあしうあくればさうじなどもたふめかしごほめくこそしるけれ紅葉賀に屏風のもとによりてごほ〳〵とたゝみよせて朝顏にごほ〳〵とひきてとやうのいといたくさびにければ落くほにはらごほ〳〵となれば雅望按ずるに萬葉卷十六つくゑの島のしたゞみを云々早川に洗ひすゝぎから鑒に古胡ともみとあり古胡も物の鳴音なればふるくよりいへる語と聞ゆ今の俗ぐわら〳〵ばた〳〵などいへるに同じかるべし云々朗云上略皆聲をかたどりたる言也案るに古胡をのべてこう〳〵といひならひたるなるべし（釋）聲をかたどりたりといふにて事足るべし古胡をのべてといへるはわろし古胡とは俗言にコク〳〵と又コッコトなどいへるに同じ　**こちたし**　二十丁ウ（拾）こちたしは萬葉に言痛とも事痛とも書ておほき詞なり心にかはる所あり人の言をいたむと事々しきと事おほきとなり今はことおほきこゝろ也おほきなる心也といふ注はかなはず（釋）こといたしのといの反ちとなる故にこちたしといふ萬葉には事言をたがひに通はして書たれば強て此字になづむべからずさてこゝは言痛の意にて言のおほき意也此詞物語の中にては多くはわづらはしくくだ〳〵しき意に用ひたり意の轉れる也（雅譯）ヤカマシイ　クダクダシイ　ギャウサンナ　**こゝろもとなかめり**　同（餘）これは品定の卷に夕顏をいへる所にこの心もとなきもうたがひそふべければといへるにあたれり夕顏の本性よろづおほどかに若びて老らかなれば源の心ばみたるかたをすこしそへたらばとさへぞのたまひしこゝも源の二世を契りてこの世とのみはおもはざりけりとてこちたくゆくさきをたのませ給へるにこゝの歌に行すゑかねてたのみがたさよとよめるなどかやうに大どかなるが心もとなき本性也といへる也しなさだめの卷をあはせて考ふべし宣長說にこゝの心もとなきは歌よむことの未熟なるよしにて紫式部が卑下也といへるは誤なりこゝろもとなきは夕顏の歌をさして其本性をいへる也（釋）この說さる事のごとくなれど猶歌をさしてかやうのすぢとはいへるなれば歌の未熟なるよしなること論なしされどすぢなどもとあるもの餠にて落着は本性の心もとなきをいへる意とは聞ゆ小櫛の說も誤にはあらず　**いさよふ月に**　同（新）いさよふとは專ら出んとして猶豫て有十六夜月をいへるをこゝには入がたにまだたゞよひて有かたにいひなしたる也かやうにもいひなすが此文のつね也惣て此語の意をいはゞ出る月にのみいふべきならぬ事は萬葉にいさよふ波たゆたふ船などいふを見よ○常樹云家隆卿のいるもいさよふとよまれしは是より得られけんかし（河）山のはにいさよふ月をいでんかとまちつゝをるに夜ぞふけにける（餘）萬葉第七續後撰雜中よみ人しらず（雅譯）立やすらふ意也月のいさよひ同意なり云々　**けいめい**　二十二丁ウ（餘）うつほ物語祭使の卷におほいなる御けいめいにこそ有けれと有此卷の末にも此詞見えたり上林賦に逶迤經營乎其內と有けいめいといへるは音便也敬命と孟津に有はおぼつかなし東鑑に爲洛中警衛出辻々可懸篝之由被定郭璞江賦經營炎景之外韻會曰縱橫爲經回旋爲營又考るに警衛の字にてもあるべきか　**そらめ**　廿三丁ウ（餘）河海拾遺雜下かもにまうで侍けるを男の見侍りて今はなかくれそいとよく見てきといひおこせて侍ければ伊勢「そらめをぞ君はみたらし川の水あさしやふかしそれはわれかや（釋）これは空目といふ語の類例まで也　**あいだれたり**　廿四丁オ（河）あまへたるやうなる體なり（釋）この御說のごとき意とは聞えたり桑に愛垂と

いふ義にや猶考ふべし　**しとゞに**　廿六丁ウ〔河〕伊勢物語みのもかさもとりあへずしとゞにぬれてまどひきにけり「朝霧にしとゞにぬれて呼子鳥佐保の山べに鳴わたるなり〔花〕きたる物の身につくほどぬれたるをいふ也〔餘〕朗云シト〳〵ノ畧今シト〳〵ト云〔釋〕案に河海に引れたる歌の二句を萬葉集に之怒々爾所沾而と書たりされば本はしぬゝなりけんを怒字を濃音にドとよみ誤りてしとゞとはいひそめしなるべししぬゝはしぬゝれの約れる言と聞えてしぬはしなへたるかたち也さて意は轉りても同じくして沾たるさまの甚しきをいへり俗言にシッポリヌレルといふ意なり　**うつぶしふし**　廿八丁オ〔釋〕うつぶしは内伏の意にて面を内にして伏すさまなりさて一つの語となりたる故に又臥てとはかさねいへる也今の言にていはゞうつぶしにふしてといふ意なり　**けどられ**　同ウ〔釋〕或抄云正氣をとられたるなりといへり此說のごとく鬼物に氣を奪はれたるをいふ　**むくむくしさ**　三十丁オ〔河〕いぶせくおそろしきなり〔餘〕あづま屋の卷にかゝる人の供人こそ心はうたてあれなどいひあへりむく〳〵しくきゝならはぬこゝちし給ふ〔雅譯〕ミグルシイ　オソロシイ　キミガワルイ尾張の田舍の詞にムッケタと云卽是なり〔釋〕むくの意は未思ひ得ず河海に蠢字をかゝれたるはむぐめく意にとられたるかいかゞあらんつかひたる意は雅語譯解にいへるがごとく猶心づきなくあらびたる意をもかねたり　**よゝとなきぬ**　卅二丁ウ〔新〕萬葉にもゝとせに老舌いでゝよゝむともとよみてなく時の口つき也〔釋〕萬葉によゝむとあるは舌のもつれて聲のあやなき意と聞えたりこのよゝはなく時の聲と聞ゆるを口つき也と有は少したがへり〔雅譯〕オイ〳〵トナク　**びんなかるべし**　同〔釋〕びんは便字の音也びんなしはたよりのわろき事又たつきなき事をいふ轉りてつきなきこと不都合なる事にもいへり　**みつはくみて**　卅三丁オ〔河〕髮白くて老嫗の體也といへり後撰としふれば我黑かみもしら川のみつわぐむまで老にけるかな一說年よりぬれば腰かゞまりせくゞまりて二の膝とがり出たる中にかしらまじはりて三の輪をくみいれたるがごとく也云々〔新〕今昔物語舊本十二增賀法師の事をいふ條に云美豆波左須夜曾知阿末利乃於以乃奈美久良介乃保禰爾阿布曾宇禮志伎かくもあれば三齒さすともいふ也老て齒のまばらに落て上の齒下の齒と三つさし合ひくみあふ樣になるをいへり三輪とおぼえていふ說は皆誤也右にも美豆波とこそ書たれかの檜垣の嫗がよめるも同じ〔餘〕年ふれば云々後撰雜三にありて詞書につくしのしら川といふ所にすみ侍けるに大貳藤原興範朝臣のまかりわたるついでに水たべんとてたちよりてこひ侍ければ水をもていでゝよみ侍けるひがきの嫗とあり水をくむといふにかけていひたる詞なればわと書べきことわりなし此事大和物語にも見えたり舊本今昔物語に云云くらげの骨てふ歌袋草子にも引て落句あひにけるかなとせり云々後拾遺雜五冷泉院東宮と申ける時女の石井に水くみたるかた繪にかきたるをよめとおほせごと侍ければ源重之年をへてすめる清水にかげ見ればみつはくむまで老ぞしにける又重之集に二の句すめる泉のとあり〔釋〕後撰集の歌檜垣が集には老はてゝかしらの髮はしら川のみつはくむといふ語の意は詳ならず新釋に今昔物語を引れたるにてみつはさすといへるも同じ意とは聞えたり然れども三齒くむとていはれたる說はかなへりとも聞えず齒の落たればとて必三つさしあひくみあふ物にもあらざればいかゞなるにくむといひさすといへる意もかの說のごとくにては聞えがたし猶異なる意あるにこそ考ふべししばらく年老たるかたちとのみ心得てあるべし雅語譯解に極老にて腰膝のかゞまる也と注せるは舊說のまゝなればたのみがたし　**かこか**　同ウ〔河〕四圍ともいふかこめる心也四方をかこむ心と也〔雅譯〕ひそみかくれて靜なる心ときこゆ湖月抄にカンゴリとしたりといふこゝろ也〔雅集〕松風卷窓もり詞みづからうずる所に侍らねど又しり傳へ給ふ人もなければかごかなるならひにて年ごろかくろへ侍りつる也〔釋〕案にかこの意は河海のごとく圍みたる意なるべしさらばこもじは清てよむべき也カンゴリカコ〳〵などいふにあてられたる說はさも有べけれど猶いかなる義ともたしかには知れずかは例の形容辭にて一本にかこやかとあるやかも同じ新釋に閑居やかも也といはれたるはいみじき强言也　**むしくゝみて**　同〔餘〕金葉集雜下大路に子をすてゝ侍けるおしくゝみに書付侍ける云々若紫にひとへばかりおしくゝみて桜花物語ごき

かばわびしとなける女房うせざせ給ひぬれば云々御そにおしくゝみてゐておろし奉らせ給ふ(釋)これらは類例也さてぐゝむはつゝむといふに同じ萬葉集にわが子羽裏とも書たり　**こしらへたき**　卅七丁オ(釋)源注拾遺に喩字を舉られ孟津に異見をする也とある共にあたらぬにはあらねど猶この意のみにはあらで心をとりてあざむきすかしなだむるをいふ詞なり今俗の言に物を造るをこしらふといふをも思ひてよきさまに作りなす意なるを知るべし(雅譯)ナダメル　取ナス　スカス　ス、メル　**わりたちて**　同(釋)此詞は其事を人にまかせずしてみづからいたつくをいふ本は馬船などより下立(オリタチ)て手づから其事をとりていたつく意より出たるなるべし　**御やつれ**　卅八丁オ(釋)やつれやつると用(ハタラ)く言を體言にしたるにてこゝは源氏君の御しのびすがたをいへる也やつるの語は上に擧たり　**道のそら**　四十一丁オ(拾)萬葉卷十五挽歌云いめのごと道のそらぢにわかれする君新古今戀三道信朝臣心にもあらぬわが身のゆきかへりみちのそらにて消ぬべきかな(餘)小大君集に「おされども草葉の露やとはれまし道のそらにてきえなま

しかば「たちてゆくゆくへもしらずかくのみぞ道の空にてまどふべらなる　**はぶれ**　同(新)澄「崇神紀にはぶれと訓り萬葉に大きみを島にはぶりといふも古今に心をだにもはぶらさじといふも皆通ひて身の行方なくなるも心の定なくなれるも水のあふれ出るやうの事にたとへていへり此物語にあぶれともいへり放埒などいふは古語しらぬ人のふといひ出しもの也(拾)はぶれは此物語におほき詞なりあぶれともあり云々日本紀の崇神紀に溢の字を用たり古事記には波布理と假字にかゝれたり孟津に放埒とあるは音にてはうらつにて常にもいふ詞也はぶれとは大に違へり云々下略(餘)玉かづらの卷にわか君をさる物の中にはぶらかし奉るとあるもすてはなつ心なり東屋卷にかうまどはしはぶるゝやうにもてなすことゝいみじければ落くぼに夜いかに寒からんとの給へば北の方つねにきせ奉れどはぶらかし給ふにやあくばかりえきつき給はぬ(雅譯)はぶれて　流浪シテ　はぶらかす俗のホカス　ホオルは此詞の轉也ヤリッパナシニスル　ステモノニスル　**ことなるなごり**　四十三丁オ(釋)なごりといふ語は先達餘波の字にあてゝ解たる

ごとく波の引さりて後になほ所々に海潮の遺れるをいふを本にて何事にも其物其事のはてたる後に其氣の遺れるをいふ詞也のこりといふ詞も此語の轉れるにやあらん大かたは同じさまにきこゆてゝは體言なる故に又のこらずとはいへる也人のなごりをゝしむといふも其人の去たるあとに其けしきのおもかげに覺ゆるをゝしむ意也然るを今俗の言には未わかれざる前よりナゴリヲシなどいふはいと〳〵轉りたるにて理なしさてなごりは波凝(ナゴリ)の約れるかこゝは源氏君の病のなごり殘らずといへる也　**しにかへり**　四十九丁ウ(餘)うつぼ物語樓の上にしにかへり思ひそめにし世中のわかぬこととそおはれなもけれ落くぼにまして ほのきくわかき人はしにかへりわらふ狹衣にしにかへりまつにいのちぞたえぬべき中々なにゝたのめそめけん　**こりずまに**　五十一丁オ(新)今夕顏に物ごりし給へど空蟬軒端荻をも猶忘れ給はぬは又もあだ名は立給ふべしと也おぼし出るににくからずといひて古歌を引面白し云々萬葉卷十五にあはずまにしてといふも只不逢しててふ意といふ人ありさる意とは誰も見れど猶まの語助辭とも聞えずこりずまひの略なるべしいせ物語にすまふ力なしといふに依るに一度こりたることに猶すまひつよりて物をなすをいふ也(釋)この說はいかゞあらんされどまの義はいまだ思ひ得ず猶考ふべし後撰集に貫之風をいたみくゆるけふりのたちいでゝなほこりずまの浦ぞこひしきこれは須磨浦にいひかけたれば論なし

この六年あまりかほと中風にて手をやみたりけれは板下をかく事たにえせす源氏の評釋たえむとする事いとうれはしくかなしかりけりこれによりてさきに彫せつるちうさくをものしてまつかくなん五卷の草紙とはなしたる語釋をも別にせんとおもひしかとはつかはかりのほとなれはついてにてゝにとりそへつ次の卷々よりは人の手にかゝしめたれはいたうかはりたるになん

文久のはしめの年なか月

左なからに

廣　道

しるす

源氏物語語釋二之卷

○若紫卷語釋

しゞこらかし 初丁ォ〔雅集〕梁塵秘抄口傳集十おこりごゝちにわづらひてしゞこらかしてありけるに〔新〕凝かたまる也うたてはせんかたなき也右のごとくなまゝのまじなひなど爲しこらかしては瘧の忘れがたくしていかにともせんかたなく成るものなり〔釋〕新釋の說爲し凝かしてといはれたるはわろし頭書にいへるごとく縮み凝る意の語なるを活かして凝かしてとはいへる也うたてはいよゝわろくなる意なり **ならひ給はず** 同ウ〔釋〕すべてならふは馴といふ語を活かしたる也物學ぶを習ふといふもたびたび物して其事に馴るをいふ意なりこゝも源氏君はかやうの山道などの步行を馴給はぬ故にめづらしうおもほすなりみな之に准へて知べし **所せき御身にて** 同〔細〕河海云ひろき心也云々誤歟只せばき心也御わりきなどかろ〳〵しくはなきさま也〔釋〕此詞末はさま〳〵につかひたれど何れも所狹の意より轉りたる也こゝは源氏君は貴き御身にて下ざまのものゝごとく心にまかせてそゞろありきもえし給はぬを所狹御身といへる也俗にキウクツナバセマナなどいふにあたれり又所によりては河海にいはれたる如くひろき心にいへるもありそれは其物事の廣くなりて餘地の狹くなれる意にて所狹とはいへる也轉れる末に心をつけて見るべし皆所狹の意となる也 **ひじり** 同〔釋〕此詞もとは皇國の天皇の御事を稱奉れるにて日知の意なりさるは天皇は天照大御神の御子として天津日嗣を知しめせば高光日の御子など申たる意にて日知とはいひしにこそ然るに漢國にて王の德あるをば聖人といふをもて日知に聖字を充たるより轉りて後にはひじりとは聖をいふとのごとなれゝども其もとはいたく異なる事にてよくも充らぬ字としるべしさて又法師の德行至れるにも又此字を借て聖人といへりしよりつひには行德ある僧をいふ名のやうになれりしなるべしされども僧は位あるものならねばいよゝたがへる事となれるうへにいともかしこくまが〳〵しきことゝいふべし今世にはます〳〵轉りて乞丐僧を殊にひじりといへるなどはいはんかたなく

（釋）雅集六帖三のみよしの大川のゆひほひふかにとはなしかにあらんのとつら

かしてき事也さてこゝなるひじりは行德ある僧の事なり **大とこ** 二丁ォ〔餘〕釋氏要覽曰僧史略云卽唐代宗大曆六年四月五日勅京城僧尼臨檀大德各置二十人以爲常式此帶臨檀而有大德二子以爲始也增輝記云行滿德高曰大德 **すかせ奉る** 同〔河〕すかせはのまする也世俗に飲いるゝをすきいるゝといふ也〔箋〕食字吸ふ心也松の葉をすきてなどいふにおなじ〔拾〕日本紀第二十四皇極紀云以水送飯うつほ物語に松の葉をすきてといへり〔餘〕契說のうつほはあて宮の事也 **ゆほびか** 四丁ォ〔河〕寬ひろき心也地窄虛空寬白氏文集「御芳野の大河水のゆほびかにあらぬ物から波のたつらん〔岷〕私云何のこもりたる景もなく海の面のひろき體こと所に似ず面白しと也いたりふかきくまとは手のこもりたるをいふべし〔拾〕ゆほびかに寬大の心とは見ゆれど引く所の六帖の歌より外には見えぬことば歟然ればその字と定むべからず又大河のべのと引きたれど現本大川水のとあり現本よき證下にいたりて見ゆべし〔新〕萬葉に波のゆたなどいふ寬の字を用ゐしと思ひ合するにゆほびかもゆたかにひろきをいふと見ゆ〔釋〕此語六帖三の歌を河海に引れたるより外には大かた見あたりがたることなければ其心も又よく知れがたし然れども河海に寬ひろき心と注せられたるよりこのかた諸抄みな其意にのみ釋れたるはいかゞあるべきさるはかのみよしのゝ大河水のといふ歌のゆほびかには全く寬大の意とは聞えざれば也其故は詞のつゞきゆほびかにあらぬとあればゆほびかならぬ意なること論なしされば是れを寬大の意としては不寬大のゝ浪のたつらんといふことゝなりて其心聞えがたきにはあらずや寬大ならず狹少なる所ならばかの古歌に淺きせにこそあだ波はたてといへらんがごとく波の立べきことわり也然らば波の立らんと疑ふべきにはあらざるべし結句はなど波のたつらんとやうに疑ひたる例の辭なるをやされば是れは中々に不寬大をゆほびかとはいふことゝぞ聞ゆるさてはゆほびかにあらぬ物からは狹少ならぬものゝといふ意になりて結句の波の立らんにかけあひて聞ゆるなりかれ假にツンボリトシタと譯しつそこの頭書にもいへりしごとく明石浦は前に淡路島ありて海の面は廣からずいと狹りたる所なればかたゞ〳〵寬大の意にては

かなひがたき事也さて右の歌の二句を大河のべとしたるは湖月抄にのみ有て河海には大河水のと引れたりされば拾遺にいへる引そこね給へるにはあらで湖月の寫し誤なることあきらけし　**いつきむすめ** 五丁ウ（釋）いつきは神代紀に崇字を訓る意にて忌清まはりて敬ひ崇ぶをいふを本にて大切にする事に轉しいへりされば萬葉集にいはひ兒とよめるごとく大切にしてもてかしづく女をいつきむすめといへるにて體言なりをとめの卷にかぎりなきみかどの御いつきむすめも云々ともあり　**さいなまるゝ** 八丁ウ（釋）さいは河海の傍注に罪字を充られたるごとく此字の音なるべしなむは辭にていとなむたしなむなどのなむに同じ又河海に事態などの字を出して日本紀論語文選など記されたるはいかゞあらん此等の字の意はさらになし例の暗記の誤などにやさて意はただ責はたることにひひて俗にイヂメルといふによく あたれり　**おくらす** 十丁オ（河）おくらかす也云々（新）おくらすは古今に「かぎりなき雲ゐのよそにわかるとも人を心におくらさんやはと出たる語也云々（釋）この物語の中に後らかしといへる語あまたあめ

それと同じ詞にて俗にオクレサスルといふ意也　**あさはか** 十七丁ウ（河）あさくはかなき心歟（拾）今按只あさきにてはかはそこはかなどのごとくそへたる詞なり萬葉第十二に紅のうすそめ衣あさはかに又あらぞめのあさらの衣あさはかにとよめる歌にともに淺の一字をあさはかと讀り（釋）此拾遺の説のごとし但萬葉の歌は略解にあさらかにとよめるよろしはかもらかも形容辭ながら意はいさゝか異なり　**さしくみに** 十九丁オ（拾）後撰戀四「いにしへの野中の清水見るからにさしくむ物はなみだなりけりかげらふ日記に人の家のまへちかきいづみに八月十五夜月の影うつりたるを女ども見るほどにおほぢにふえふきてゆく人あり「雲ゐよりこちくの聲をきくなべにさしくむばかり見ゆる月かげ（玉）拾遺に云々此蜻蛉日記の歌によれば涙といはでもさしくむといへは涙のさしくむ也然ればこゝの歌も初二句さしくむ涙に袖ぬらしけるにて源氏君の歌の四の句のこと也さて下句は花鳥に山にすめる身は心もさわがぬといへるなり云々（餘）真淵云後撰の歌は目に涙さし含むことを水をくむにいひよせたり蜻蛉日記にさしくむばか

り見ゆる月影とあるも手にくみて見るばかり月のただちに見ゆるとおなじく水によせていへりこゝのもこれらをとりて水に寄たりされども此語のもとはさし含を略せりと見ゆさてさしてふ語もさしあたりさしつけなどいふ時はたゞちなる意あれば物をたゞちにはかなる意にいふ也けり今のも瀧波の音を聞とさしつけに袖ぬらすとよめりと聞ゆ此さしくみ云々の歌を同君の歌也などいへるはわろし僧都に疑ひなし（雅望考るに袖ぬらしける山水とは多武峯少將物語に「昔より山水にこそ袖ひづれ君がぬるらん露は物かはさしくみとは打つけといへるにちかしやどり木の卷に宮もあながちにかうすべきにはあらねどさしくみは猶いとほしきをと有など思ふべし（釋）此詞さしつけにうちつけになどの意といへる説はよろしさて詞のもとはいかなる意ともしられがたしさし含の略とあるもいかゞあらん猶考ふべし　**めも、あやなるに** 二十丁オ（餘）真淵云あやなしとは織物の紋のあざやかならぬより出て萬の事に轉じていへるそのごとく是は紋の鮮なるより出てうつくしき物にいへり萬葉にあやに戀しきといへるも鮮なる方にて

いふ也朗云あやにはあなにともいひて虛語なりめもあやにのあやにとは異なり（釋）新釋の説あやを紋より出たるやうにいはれたるのみはよろし見る目も文有てうつくしき意と聞ゆ　**さだすき** 廿六丁ウ（拾）さだは河海に央の字を出し給へりなにゝ見えたる字にかおぼつかなし萬葉十一に「人間守あし垣ごしにむぎもこをあひ見しからにことそ左太おほき「おきつ浪へなみのきよる左太の浦の此さだ過てのちこひんかも此後の歌は第十二にもひれり初のうたにつきて按するにさだとはころといふ心と見えたりさてころとは此ころの心なり此物語になかさだのすぢなどあるは中頃也年のさだ過たるとはよきころほひを過る心也央の字はかなひても見えぬ字也（釋）大かた此説のごとしさだは定の意にてよきほどの定りたる時をいふ人の噂するをいふもいひ定むる意なりこれにていづこもたがはず　**なげの御ことのは** 卅七丁ウ（拾）後撰「ことのはなげなる物といひながら思はぬためは君もしるらん六帖「あはれをはなげのことばといひながら思はぬ人にかくるものかは 秉盛集「ことのはをなげなる物とおもひせば何かは人のつ

らくしもあらん（釋）なげは無氣の意にて俗にナササウナといふ意なりさてその無氣なるは物の眞の無氣なるをいふことゝ聞ゆかの「くれなばなげの花の陰かはとよめるも暮なば無氣になる花の陰かはといへるにてこれも同じ意より出たるなりたゝ末のつかひざまのいさゝかかはれるのみなり　**よにしらぬ**　卅九丁ウ（釋）此世中にはいまだ見も聞もしらぬといふ意也すべてめづらしき事うつくしき事いみじき事にいひならひて皆甚しき意なり　**よしばみ**　四十一丁ウ（釋）ばみは形容辭也よしはよしありなど云よしにて上品に奥ゆかしきをいふ詞なり

○末摘花卷語釋

こりずまに　一丁オ（河）「こりずまに又もなき名は立ぬべし人にくからぬ世にしすまへ」は今古集（新）是はこりずにの意にてまは添たる詞と誰もいへり萬葉卷十五に中臣宅守か遠き任にまかりたるに茅上娘子がよめる　ぬば玉のよる見し君を明るあした安波受麻爾して今ぞくやしき此安波受麻爾の麻を添たる辭とする時はこりずまもこりずてふ詞と聞ゆされど猶思ふに不逢妻の略ならむと覺ゆる也しからば古今なるもこりずつまを略せし詞にや古へ夜逢を夜妻朝にみるを朝妻などの語多ければ也（湖師）夕顔上の事のさま〳〵の物思ひに猶こりずして也（釋）新釋の說よろしきを不逢妻の略ならんとあるより下はみなひがと也さる詞あるべしやは論ずるにも足ねばさしおきつ湖月師說はよろし隨ふべし　**いしきばみ**　同（玉補）俗に氣持があるといふ意の詞也（釋）ばみは形容の辭にて氣色をたてゝ見するさまをいへる也さて案にこゝのけしきばみといふ詞は體言にて次のいとましさといふ詞に對へたる句法と見えたりさらでは打とけぬかぎりのとあるのもと穩かならずけしきばみにて句を切てよむべし打とけぬかぎりのけしきばみと心ふかき方の御いどましさと四句一對の文法也心をつけてよみあぢはふべしさて打とけぬかぎりのけしきばみとは源氏君のかよひ給ふ御かた〳〵いづれも心をゆるさず打とけずして氣持を見するをむねとし給ふを云心ふかきかたの御いとましさとはいづれも心ふかくおくゆかしげに見せんとて劣らじと上べをつくろひかざりて吾はと思ひあがり爭ふをいへるも也　**かたじけなしと思へど**　四丁オ（拾）かたじけなしはづかしきなり物などを得てかたじけなしといふは俗に過分といふことゝ無德なる身をかへりみればこの物を賜はるとはづかしといふ心也（釋）かたじけなしに辱字などを當たるは此拾遺の說のごとき意なりされど物語文どもにつかひたる意はさらに然らずみな俗にアリガタイ　モッタイナイ　オソレオホイなどいふ意也こゝは命婦が打とけてすむ所に源氏君を置奉りたるはうしろめたく氣にかゝりて且は恐多く勿體なく思ふよしなり拾遺ひがことなり　**こまぶえ**　八丁オ（拾）和名抄云篇云々此笛の事歟但かゝるもの吹給ふべき物ともおぼえねば常の笛を高麗より作りて來たるをいふか（釋）此說いかゝ也高麗笛はもとより狛樂に用ゐる笛にて今の樂家にもふくもの也いかに思ひ混へてかくはいはれつらんいぶかし　**さまあしからんなどさへ**　九丁ウ（湖）わが心ながらも世の聞えもおもはぬほど思ひしむべきとなり（釋）こゝの意は湖月のことし但さまあしからんといふ詞はたゝ樣體のわろき事のみなるをこゝにては深く心の迷ふ方に轉し用ゐたりさるは心のまよひて我ながらも樣のあしきやうにおもはるゝほどにといふ意なる故にしか轉したるにぞあるべき　**よづゐず心やましう**　十一丁ウ（湖）世人に似ずつれなき心也（釋）此說たがへり惣てよづかずとは男女の間の世をしらす著なきをいふ詞なるをこゝは末摘花君へしば〳〵いひやり給へどいつまでも猶おぼつかなうのみありて返事なき故案外に男女の情を知ぬ人のこゝちして心やましうおぼすよし也さらに世人の世にてはあらずひがこと也　**いなびぬ**　十五丁オ（河）いなともいはぬ心歟（孟）不二辭退一さすがに人の申事は聞給ふと也（釋）注の如き意なるはいふも更也さて此詞いなまぬなど有べきをいなびぬとあるは詞の八ちまたにいはゆる中二段の格にていなびいなぶいなぶるとはたらく類の詞也心得おくべし　**こゝろげさう**　十五丁ウ（釋）此詞は心繫想の意にてうつくしき人などを見ていかで我に思ひをかけよかしとやうに思ひてよろづ引つくろひ心にくきさまして人の思ひかくるをしたゝ待つ意にいへり故心化粧の意にやとも思ひしかど化粧といふは古からぬ詞なればなほ繫想の意にて心中に人のけさうするをまつ意としられたり　**しゝま**

十六丁ウ　〔拾〕無言進退兩説の中に無言を用へし其故は小侍從か返歌に其證明か也日本紀に棲ー遑進ー退をしゝまひと點したる所なければ其義かはれり〔餘〕しゝまとは口をしゝめをるよりいひけるなるべし〔河〕日本紀曰唯咽二進退一一泣懷悒無レ所二訴言一垂仁天皇巻又曰棲遑不レ知二其所一第七此事秘ー説有〔孟〕河海に日本紀を引て進退の字をひける尤可然也幾度もそなたの進退にまけて堪忍する也云々當時皆しゝまを無言のやうに用ゐ心得るはひがごとにや進退本の心也云々然はしゝまと聲を讀べきにや先公此聲を用ゐ給へり天文八年五月十二日於二議定所一講讀の時此由を申了云々〔新〕しゝまひとは先おのがじゝてふ詞は萬葉にも後撰にもおのが心々てふ意によめり此所のしゝまひもおのがじゝめきて有心をいへり且まひは辭のみ譬へは否とて否むるを否まふ否まひてなどいふが如しさて其心々めくはおのが心を構ふるにて己をたてゝ人にも默して物いはぬ方にも又急にはいはてやすらひをる意ともなりぬ然れは日本紀に棲遑をも進退をもしゝまひと訓みてゝに物いはでであるをもいへり云々下時〔釋〕しゝまといふ詞の義いかなる事ともしられがたく右の説どもの中には餘滴にいへるや近からんされど猶考ふべし河海孟津の説は拾遺に辨へたるが如し新釋の説は何事をいはれたるにか聞とりがたし否まひ否まふなどいふ語も聞つかぬ造言めきたり又しゝまひといふ詞のみをとかんとせられたりげなるはいかにぞやこゝはしゝまにてしゝまひとは別なれば何の用ともなしさて清濁は上のしを清て下のしを濁るべきかされどそれも決くはさだめがたければ今はいづれも清てよみつ拾玉集述懷百首の中に「うき身にはしゝまをたにもえこそせねおもひあまればひとりごたれてしあるはこゝを思はれたるなれば無言の義とは決せられたるなり　あやなき十七丁オ〔餘〕眞淵云もと綺の文目のそこなひなどして分れずなりしをいふを始にて何にもその類にはいへりそれを轉してかひもなきにも益なきにもいへり朗云本居の説はあやなきはワケモナウ ラチモナイ事也〔釋〕右の説いづれもよろし必しも綺の事にはかぎらぬどあやは文の意なる事はたがはず文のなきは埒もなき意よりわけのなき事にいへる也　そゝや二十四丁オ〔湖師〕おどろく心也すはやなど云心也云々驚破と書新古今の歌にそゝや木枯けふ吹ぬといふ類なるへし〔餘〕考るに驚破の字そゝやとよめる白氏文集長恨歌の點に出たり眞淵翁はこれを忘れてかく書てそゝよとよめる事なしと新釋にしるされたり木枯の歌は高圓の野路のしのはら末さわきと有て新古今集秋上に有て藤原基俊の作なり蜻蛉日記にあなたに人の聲すればそゝなとのたまふにきゝも入ず東野州聞書そゝや是はなぞなにぞなど申詞同事也招月の被申候はそゝやと云詞はすはやと云やうの詞也夫木「こも枕高瀨のよどにたつ鳴のおとものそゝやとあはれ也けり」頭略〔釋〕驚破の字長恨歌點にはソヨヤとつけたりとにかくに此字たしかにそゝやに當りたるにもあらざるべし俗言にソリヤコソなといふにあてて心得べし　さらぼひて二十六丁オ〔河〕髑莊子やせつまりたる也〔餘〕髑の字莊子至樂篇に見えたり曰莊子之レ楚見二空髑髏髑然有レ形注髑然空處而堅固之貌とあり音哮白骨貌ト釋文ニ見エタリ　なほ〳〵しう卅三丁ウ〔釋〕なほはたゞといふに同じ凡なる意也平人をたゞう人ともなほ人ともいふなほの義に同しさて二つ重ねいひて繁といふ形容辭にて活かせたるなりすぐなる事にはあらずまがふべからず　くはや卅五丁オ〔餘〕かゝり火の卷に人のあやしと思ひ侍らんことぞわび給へばくはやとていて給ふに後撰集戀四「ひきまゆのかくふたごもりせまほしくくはこきたれてなくを見せはや　あらず同ウ〔新〕問に答へてしかはあらずてふを略してあらずとのみいふ常の事也古今集に「春きぬと人はいへども鶯のなかぬかぎりはあらじとぞおもふてふあらじも是なり〔餘〕清少納言になに事ぞなりまさがいみじうおぢつるはとゝはせ給ふあらず車のいらざりつるといひ侍ると申ておりぬ宇治拾遺にあなあふなのめぐみやといひたりけるをめくら取もあへずあらじ鼻くらなゝりとぞいひたりける此外あまた見えたる詞也朗云此詞はやく空蟬にあり小君詞そこの本居説にイヤ何テモナイと云今の俗語に當るといへり　たをやき三十七丁ウ〔釋〕たをはたわと通ひて和らかなる形をいふたをやめたわやめなど猶多しやきは形容の辭にて若やぎなどのやぎにおなし　ひいな三十九丁ウ〔餘〕崇神紀歌比賣那素寐公望私記曰言不レ知二殺逆之謀一爲二兒女之遊一今案比々奈遊也釋日本紀　かくあれは

ひゝなの假字を用ゆべし（釋）契冲雜記 雛ヒヽナ ひゝはひゝと聞ゆるこゑなは鳴かとありこれ鳥の雛をいふ言の本義なるべし又玉かつまに云人の形をちひさく作りてわらはのもてあそぶ物を物語ふみともにひゐなといへりこれはちひさくつくれるを鳥のひなになずらへていへる名にて字も雛とかき今の世の人もひなといふをふるくひゐなともいへるは詩歌をしいか四時をしいじ女房をにようばうといふたぐひにてひもじを引ていふなれば假字はひいなと書べきをゐと書るはたがへり物の雛形といふもちひさく物したるよしの名なりと有今按に比々奈を切めて比奈といへるをさらに引てひいなといへるなるべく比々奈の下の比を音便に伊の如く訛れるにはあらざるべしか定むる故は比々奈といふ言比二つ重れるを比伊などはいひうつしがたく比奈とは直に切り安けれは也されば假字は玉かつまに隨ひつ　あへなん 四十一丁オ（餘）案にあへなんといふ詞うつぼ物語國ゆつり下にあしかるべくはおそろしき物の中にすてたりともあへなんたゞ神佛にまかせ奉る云々又同卷この御箏の琴はいとよくなりぬべしといへばあへなんとて御かへりもなし柏木卷に御とがあることはあへなんふたついはんには女の御ためこそいとほしけれ蜻蛉卷にすぎたる物きたるはばうそくにおほゆるたゞいまはあへなんとてとづからきせ奉りたまふ

○紅葉賀卷語釋

けざやか 八丁オ（拾）河清萬葉 今按萬葉に清の字さやかとはおほくよめどけさやかとよめる事なし氣清と書べき也（新）此說は氣鮮の意なるをこゝには外樣の人めきたるもてなしてふ意にとる或說に清を萬葉にけさやかとよみしやうにいへるは例のそら言也清字をさやかとは古書によみたれど上にけの語をそへたる事なし此けはけしきの事なれば付ていふべきにあらず（釋）氣鮮は猶いかゞ氣清の方此語の本の意也（譯）サッハリ ハッキリ リッハけざやぐと活かしてもいへり同意なり　そゝぎ 十丁ウ（帳）聞書そゝめく也あつかふ心也をさなき人のあそぶ體なり（雅集）帚木西おもてのかうしそゝきあげて人々のそくべかめり鈴蟲わかき尼君たち二三人花奉るとてならす云々さまかはりたるいとなひにそゝきあへるいと哀なるに狹衣立さまよひつゝろひさわくきぬのおと木丁などの音に云々今やそゝきやむと物いはでつくつくとゐ給へは同若君おはしてそゝきありき給ふを（釋）雅集になほ引たれとすこし心の異なるもあれば今ははぶく何事にまれいそがはしくもてあつかふ意也こゝも紫の上の他事をはさしおきてひいなをとく取出していそがはしくつくろひあつかひ給ふ樣也そめくとは同語ながら少し意異也譯は其所のふりに隨ひて物すべし　うけはしげに 十四丁ウ（河）（孟）呪詛（ジュソ）のろふと云心也（拾）今按日本紀に咒の字かしり咀はとこふと讀てうけふとよめる事なし誓の字祈の字をうけふとよめり萬葉にも祈の字をうけふとよめり日本紀古事記の意は善惡につけて祈るをいふかならずのろふにはかぎるべからず（釋）此語本は紀記の意なれど轉りて此物語などの比は河海の字の意にてのろふ事也ざるは神に祈りてのろふより意のかはりたるものなめり伊勢物語に「罪もなき人をうけへはわすれ草おのがうへにそおふといふなるうつほ國ゆつり下に「あなかまやかの君の云々うけひのろひはせんとてなと皆此意也うけひのろひと有にてきる意をしるべき也なは此物語にも數多見えたりみな其意也　ひとま 十五丁オ（拾）日本紀に間の字をひとまとよめりひまといふはこの略語歟こゝにては人のなきまと聞ゆれど貫之の「梅の花いつのひとまにうつろひぬらんといふも必人まとは聞えぬにや（餘）朝云此歌もやはり人間（ヒトマ）として聞ゆ（釋）鈴木氏の說よろし人間の意也 譯 人ノ見ヌマ　御こゝろの鬼に 同ウ（花）心の鬼とは心におそろしく思ふ事也謀德公集「我ためにうときけしきのつくからにかつは心のおにも見えけり（餘）枕冊子心の鬼いできていひにくゝ侍なん物をとあり紫式部集「なき人にかごとをかけてわづらふもおのが心のおにゝやはあらん谷川士清云列子注に疑心生鬼と見えたり正法念經に闇羅獄卒非實有情以衆生妄業力故見之とあり按ずるに列子を引たるは林希逸が注文なり　くねくしう 二十二丁オ（新）古今集序に女郎花の一時をくねるといへる詞他には見えず此くねくしといふにあはせて知べし（餘）東屋の卷に母なる者も是をこと人に思ひわけたるごとくくねりいふ事侍りておちくぼいみしうくねりためるは淵石集三老ひがみてくねりはらた

ちて(釋)古今序のくねるは別に論あり餘滴に引るくねりとは同意なり意は恨むるにも責るにもまほにはいはずしてひがめゆがめて腹あしくいふやうなる意也俗にウネル ゴネル グズルなどいふに近しこゝも源氏君に對してかよひ給ふ女がたの人の物にかこちよせて事々しく恨むるをくね〳〵しうと形容にいへるなり **をこ** 三十一丁ウ(新)をこの者とは異國の一所の名にてそこの人はよろづわろかるによりてこにもすべて心にもすがたにもひがみ見くるしきをいふ事とはなりつらん(餘)古事記に袁許と書日本紀に于古とあれどもと此國の語にてはあらず唐ざえのつきて後かうやうの語を常にいひならひたる也紀記ともに後世になれる書故からぶりの詞もおのづから入たるなるべし谷川士清か說にをこはもと國の名也後漢南蠻傳に烏滸の人の事委く見えて笑はしき事多かりといへり(釋)右の說ともいたくひがこと也烏滸といふ蠻國のならはしの笑はしきとて其國の名を係て笑はしきを烏滸といはんはいと物遠きことなるに漢國にてだにさはいひならさぬ物をまして御國にていふべしやはそはとなれかくまれ應神天皇紀に見えたる歌の語をからざえのつきて後云々といへるはさらにあたらず漢才などいふは漢籍行はれて後こそいはめかの御世にわづかにわたり始たる漢籍の語をさながら其世にいひならはめやはしならひたりとも歌によまめや日本紀などの訓點などならばこそ後世になれる書故云々ともいはめ歌は其御世々々の人のよめるなれば此ぢやうにはあらじをやいかにまがへてかくはいひけんいと〳〵いぶかし應神紀に伊夜袁許爾斯豆と見えたるは正しき皇國言の證とすべしさてをかしといふ語は此をこを活して轉じたるなり 譯 バカ アホウをかしはバカラシイ アホウラシイ **は**

と〳〵 同(拾)(孟)殆也今按上のとをすみ下のとを濁るべしほと〳〵とはあやふき心なり歌にしかよめりあぶなく何せんとしつるなど俗にいふ是にかなへり程々しとよめるは程をふる心にてことなり(餘)萬葉卷七の旋頭歌「みぬさとるみわのはふりがいはふ杉原たきゞきりほと〳〵しくもてをのとられぬ萬葉八「我宿の一むら萩を思ふ子にみせでほと〳〵ちらしつるかな(新)萬葉にほと〳〵しくも成ぬとよみたるは事の顯はれんに迫れる意なり然れは殆の字を訓は

よくかなへり殆は危近き意といへりさてほと〳〵は本なりほとんどゝ訓は音便のみ萬葉卷の十五に中臣宅守の遠き國に在を娘子がまつ心をよめる歌に一かへりける人來れりといひしかば保等々々之爾吉君がとおもひて是はとゞ〳〵と智のさわく也(釋)拾遺にいへる清濁の說わろし皆清てよむべきこと萬葉の假字にてもあきらか也意は殆の字の如く大かた其事に及ばんとして未レ及危きほどの心にいへりこゝもふき出して笑はんとしてこらへて笑はぬやうの意なり(雅澤)過去の時モチットテ ステノコニ 現在未來の時トウヤラ ワルウシタラ 殆の字をホトンドとよむ卽是也殆はアヤフキ意チカキ意なり **すまふを** 卅二丁ウ(拾)遊仙窟推の字禁の字をともにすまふとよめり(釋)此注はいかゞ也打まかせて此字の意にはあらずすべて漢籍の訓はあたるとあたらぬとあなるをよく思ひ定めていづこへも當るをのみ引べき事也此詞は俗にイヤガリテセヌといふ意にてさはすまじと爭ひいとむ意也 **たもなのさまや** 卅三丁ォ(拾)日本紀に安措をおもなしとよめり面目なく耻かしき心也(河)無レ面也(細)面つれなき事をおほす也(新)今按萬葉に暮に逢てあした面無み云々といふに同じ意を朝面無ともかきたる所あれば面はぢする事也さていせ物語に面無ていへるなるべしといへるまゝにはぢていふにはあらで面なき事も忘れて猶面つよくいく度もいふ也今もその如く面無かるべきことをさも思はで內侍のいひおこせし故におもなのさまやとはのたまふなりかく他の事をこなたよりいふは傍痛きてふ詞の用ゐざまなどに多きこと也

○花宴卷語釋

たくしがちにはなじろめる 二丁オ(細)慮したるさま也(雅集)鼻白むなるへし○俗のシラケルといへるも語意同じきか下りたる代の軍物語にもクロミワタルといへるは冑をうつむけて敵にむかふ勝軍の勢ひをいひシラクルはあふむきて負軍の體なりといへり(釋)花鳥に鼻のうへがしろ〳〵と見ゆる也とあるはいとふるくよりいふ言なれどいかにかあらんいかさまにも臆したるさまとは聞えたり **なほあらじに** 五丁オ(湖師)猶かくのみにてはあらじと思ひ給ふ心にと也(釋)大かたかくの如したゞはあらじといふ

を體言にしたる也〔拾〕細「なほあらじとことなしぐさにいふことを聞しれらくはすくなかりけり萬葉七默然不有○今按此引歌今の本にはもだあらじとことのなぐさにとあり事之名種爾と書たれば胸の句は誤なり古點にはなほあらじとよみけるにや蜻蛉日記などにも此詞ありしかれども彼集中此詞おほきにもたと假字にも書たれば今の點叶へり直の字たゞともなほともよめばなほあらじはたゞにはあらじ也或注に猶かくのみにてはあらじと思給ふ心とあるは違へるにはあらねどよく心得られたるにはあらず〔雅譯〕其分デハオクマイトイフキデ **すさめぬ** 七丁オ〔河〕不肯萬葉〔拾〕今按萬葉に此詞なし〔釋〕拾遺に萬葉に此詞なしといへるはいかにおのが見たる本には不肯に日本紀とかゝれたりよしやそはとまれかくまれ河海にはスサメヌには不受の心也云々と釋れたる大かたにはかなふべし只俗にトンヂヤクセヌといふ意にてたがふことなかるべし又雅言集覽に例多く擧たれど少しばかり引出たり委しくは本書を見るべし〔雅集〕元眞「足柄の山にしけれる玉こすげ行かふ人もすさめざりけり後春下「谷さむみいまだすだゝぬ鶯のなく聲わかみ人のすさめぬ後拾「香をとめてとよ人あるをあやめ草あやしく駒のすさめざりけり〔雅譯〕賞翫セヌ「駒もすさめずかる人もなし又人に見すてられたることをすさめられたりといふは後に轉じたるなり **ふさはしからず** 十四丁オ〔拾〕河不祥日本紀○今按日本紀に不祥をさがなしとはよめりふさはしからずとよめる事なしふさはしからずとは俗に相應するをいへり神代よりある詞なり古事記八千戈神御歌云奴麻多麻能云々許禮婆布佐波受云々許母布佐波受云々この中のふたつの布佐波受も俗にいふと同じ心に聞ゆ又萬葉十八に大伴池主おなじき家持より針袋のをかしきをえて「鳥が鳴あづまをさしてふさはしにゆかんと思へどよしもさぬなしこれもふさはしきにゆかばやとおもへど行べきよしなしと讀る歟〔雅集〕夕霧ふさはしからぬ御心のすぢとは年ごろみしりたれどさるべきにやむかしより心にはなれがたう思ひ聞えてヤドリ木源中納言のいたうすゝめ給へるに宮すこしほゝゑみ給へりわづらはしきわたりをとふさはしからずおもひていひしをおほし出るなめりカケロフたいの御方のかの御ありさまをふさはしからぬ物に思ひ聞えて〔雅譯〕似合ヌ 相應セヌ

たはぶれ 同ウ〔雅集〕おほどか○俗に大ヤウト云ルニ同シ○おほどけも同じ帚木おほどかにことえりをし椎か本何ごともあるにしたがひて心をたつるかたもなくおほどけたる人こそ云々竹川いとわかやかにおほどいたるこゝちす夕顏人のけはいいとあさましくやはらかにおほどきてものふかくおもきかたはおくれて〔釋〕おほどけおほどか同しきよし雅言集覽にいへり按におほどきおほどか又同じかるべし各所によりて少しづゝのけぢめはありと見えたり〔雅譯〕大やうにくだ〳〵しからぬ心なり 大サヤカ アトナウ トリシマラヌ

校正譯注源氏物語餘釋一之卷

萩原廣道纂注

此巻は本文の頭書に入るべきことなるを其説どもの長くして書加へがたき事ども或は公事の故實そのかみの衣服調度などやうの注せではえあらぬ事どもあるは本文義の通えがたき所々の考また舊注どもにいはれたる説のいかにぞやおぼゆる條どもを論ひ辨ふべき事などを取集めて物したるなり引出たる文詞の下におの〳〵某丁と標したれば本文と引合せて見るべし引たる舊注の標は頭書に同じければ更に記さず

校正譯注源氏物語餘釋一之巻目録

桐壺巻

女御
更衣
あまたさふらひ給
もろこしにもかゝる事のおこりにこそ
楊貴妃のためし
北のかた
玉のをのこ御子
よせおもく
まうけの君
坊にも
きずをもとめ
御つぼねはきりつぼなり
うちはし
わたどの
あやしきわざをしつゝ
えさらぬめだうの
御はかまぎ
くらづかさ
をさめどの
みやすん所
てぐるまの宣旨
いかまほしきは
例のさほう
愛宕(すがぎ)といふ所
はひになり給はんを
はだ寒き
ゆげひの命婦
やへむぐら
みなみおもて
内侍のすけ
松のおもはん事だに
歌すゞむしの云々
雲の上人

御さうぞく一くだり
御くし上の調度
長恨歌の御繪亭子院のかゝせ給ひて
まくらごと
歌あらき風云々
なつかしうらうたげなりしをおぼし出るに
いとおしたちかど〳〵しき所物し給ふ御方にて
右近のつかさのとのゐまうしの聲
よるのおとゞ
あさがれひ
大床子のおもの
ふみはじめ
高麗人のまゐれる
うたのみかどの御ゐましめ
鴻臚館
國のおやとなりて
無品親王の外戚のよせなき
すゝえう
先帝
三代のみやづかへ
名たかうおはする宮
ひかる君
かゞやく日の宮
御元服
穀倉院
いしたてゝ
申の時にぞ
大藏卿くら人
御休み所に
さふらひにまかで給ひて
親王たちの御座のすゑに
内侍宣旨うけ給はり傳へて
上の命婦
大うちき
御衣一くだり
長橋よりおりて舞踏し給ふ
左のつかさの御馬
藏人所の鷹
をりびつ物こもの
とんじき

藏人の少將
さとの殿は
帚　木　卷
名のみこと〳〵しう
いとゞかゝるすき事どもを
なよびかにをかしき事はなくて
御物忌
かしこまりもおかず
大となぶら
はづかしげなれば
品さだまりたる中にも
ころほひなり
なま〳〵のかんだちめ
非參議の四位
こと人のいはんやうに
さらにもいはず
うちあひてすぐれたらんも云々
上が上はうちおき侍りぬ
白き御衣
なほしばかり
女にて見奉らまほし
あふさきるさ
墨つきほのかに心もとなくおもはせ
さやかにも見てしがなと
みゝはさみがちに
びさうなき家とうど
打もゑまれ涙もさしぐみ
おほやけばらたゝしく
あはれとも打ひとりごたるゝに
物語よみしをきゝて
ごだち
額髪をかきさぐりて
うちひそみぬかし
にごりにしめる
やがてあひそひて云々あしくもよくも
實になんよりける
つらずゑをつきて
人なみ〳〵にもなり
歌手を折て云々
臨時の祭

はかなき花紅葉といふも
かたき世ぞとは云々
この人のいふやう云々心ぐるしきとて
おり侍りぬかし
和琴
をりつきなからず
歌ことのねも云々
今一聲きゝはやすべき人のある時に
さてそのふみの詞はと問給へば
むかし物語めきて
歌咲まじる云々
されば かのさがなものも云々
吉祥天女を思ひかけんとすれば
ほうげづき
妻子
はかなくくちをしと云々子細なきものは侍める
はなのわたりをこめきて
ぐくねちの草藥
歌さゝがにのふるまひしるき
つまはじきをして
ひげにしらずいたらずしもあらんすこしもかどあら
ん人の耳にも目にもとまる事云々
うたよむと思へる人の
五月のせち
えならぬねを引かけ
九日のえん
中神
紀伊守にてしたしくつかうまつる人
こゆるぎのいそぎありく
きぬのおとなひはら〳〵として
さうじのかみより
もや
歌ずじがちにもあるかな
いづれかいづれ
まうと
いたづらぶし
なげし
心のしるべ
おくなるおましに
かやうなるきはゝきはとこそ侍るなれ

見なほし給ふのちせもやとも云々
かりなるうきねのほどを
月は有明にて云々
ぬるよなければ
あこ
歌數ならぬふせやにおふる
御かたはらにふせ給へり

空蟬　卷

さりげなきすがたにて
こきあやのひとへがさね
なにゝかあらんうへにきて
白きうす物のひとへがさね二藍の小うちき
かどなきにはあるまじ
おくの人は
たゝみひろげてふす
ゆかのしもに
いせをのあまの
歌うつせみのはにおく露の

夕顔　卷

六條わたりの御しのびありき
ひがき
はじとみ
玉のうてなも
きりかけだつ物
隨身
歌こゝろあてに云々
揚名介
歌よりてこそ云々
かごとばかり
げにをこがましう云々
むすめをばさるべき人にあづけて
御よはひのほどもにげなく
さぶらひわらは
ながや
右近の君こそ
いそぎくるものは
かづらきの神
しひておはしまさせそめてけり
あかつきのみち
あしたの露にことならぬ世を

何をむさぼる身の祈にかと
あれたるかどの
おきなが川
べちなふ
御くだものなどまゐらす
なごりなくなりにたる御有さまにて
をかしげなる女ゐて
ことなる事なき人を
つる打してたえずこわづくれ
むかし物がたりにこそ
いのちをかけて
神事なるころは
かしこくもとめ奉らせ給ひて
さらに事なくしなせと云々
川の水にて手をあらひて
ぶくいとくろうして
けがらひいみ給ひしも
御名がくしも
すみわび給ひて山里に
さればよと
かのありし院にこの鳥のなきしを
歌見し人の云々
歌とはぬをも云々
あやしやいかに思ふらんと
歌ほのかにも云々
うちとけで
四十九日
願文
歌なく〳〵も云々
伊與介かんな月のついたち頃にくだる
ぬさ
歌あふまでの云々
歌せみの羽も云々
歌過にしも云々秋の暮かな
見ん人さへ

○桐壺卷餘釋

女御 一丁ォ〔岷〕周禮云三夫人九嬪廿七世婦八十一女御比二三公九卿廿七大夫八十一元士二〔河〕周禮天官云女一御掌レ叙ニ御于王之燕寢一云々〔新〕女御は今の夫人に當れり女御てふ語は續日本後紀卷八に女御從四位下藤原朝臣淨子卒と初めて見えたれど是より前奈良の朝の末などより此稱有しにや此物語に顯れては三人見ゆ云々雄略紀に女御の字はあれど是は漢文によれるのみにて其比女御てふ事あるにあらず權輿のやうに思ふは誤也〔弄〕女御は無位以上二位三位にいたるまである也云々〔釋〕女御の事岷江入楚に諸抄を引て委しくいはれたれど今は略きつ彼書を見るべし本居先生の玉がつま十三の卷に云女御といふ班をたしかに定められたるは何れの御世の比よりの事にか有けん雄略天皇の御世の稚媛を始といふはひがこと也書紀の彼御卷に女御とあるはたゞ撰者の例の漢文にこそあれそのかみ實に此號ありしには非ずすべて彼紀はかゝる文字につきて後の人の思ひまどふ事多きぞかしそも〳〵女御といふはもと漢國にて王の御す女をひろくいへる目にて一つ定まれる號にはあらず皇朝にても本は然なりしを後に定れるしなにはなれる也かの雄略紀なるもたゞ御す女とし給へるよしなり **更衣** 同〔湖師〕此局にて天子の御衣をめしかふる故更衣と云なり漢書灌夫傳の顔師古注に更改也凡久坐皆起更レ衣といへり衞皇后傳にも帝起更レ衣子一夫侍二尙一衣一とあり本朝の更衣は仁明天皇承和三年正五位上紀朝臣乙魚授二從四位下一爲二更衣一是始なり河に委し細流云便宜の御殿にさふらふしかるべき上達部などのむすめ也〔新〕更衣は今の嬪にあたれり更衣といふ事は仁明天皇の御時の紀に見ゆ云々更衣の字は漢書に云々また東方朔傳に私置二更衣一注に爲二休息更衣一之處亦置二宮人一てふより出たれば更衣を御休息所ともいへりされどさらぬ女房も御子をうめばみやす所といひはた東宮の御妃をも御休所と申す事となれり此文の樣たゞにては更衣といふも御子をうめる後ぞ御やす所と書たる東宮の御休息所はもとよりなり〔釋〕新釋一本には更衣を御休所ともいへりといふ次に凡后を大御息所とも申し東宮の御妃を御休所といひ又皇子をうみ奉りしをみやす所といふ

例也よりて此文には更衣の御子うみし後に御息所と書たり是皇子をうみまつれるをいふと有にて少し後のこと也と有后を大御息所と申し云々といはれたるはいかゞあらん是はいせ物語又此物語の六條御息所などの事を思ひていはれたりとおぼしけれど强說に似たり御息所の事は小櫛の說よろしさて玉がつまに云續後紀に承和九年正月丙申朔戊戌云々是日詔授二從五位下秋篠朝臣康子一正五位下无位山田宿禰近子從五位上一並太上天皇更衣也と見ゆこの更衣といふものはいづれの御代のころより有そめけむ物に見えたる事はこれ始也そも〳〵後宮職員令には妃二員、右四品以上、夫人三員、右三位以上、嬪四員、右五位以上宮人、とあるを中昔よりこなたはこれらの號は絕て大かた妃夫人にあたるほどなるをば女御とし嬪にあたるほどなるをば更衣とせらる三代實錄六の卷に光孝天皇更衣といふことも見えまた仁和三年には勅以二更衣從五位上藤原朝臣元善一爲二女御一中納言從三位山陰之女也とも見えたりといはれたり清涼殿記に更衣其員十二人以下不レ滿二其數一尙侍宣三下諸司一着二禁色一などいふ事も見えたり **あまたさふらひ給** 同〔河〕延喜御代后宮、女御五人、更衣十九人、中宮以下都合廿七人也、桐壺帝后宮實名露顯之分 女御三人承香殿四宮母 麗景殿花散里姉 一人八宮母 更衣二人 桐壺 後凉殿 后二人 大后弘徽殿 女院藤壺 此物語に書のする所七人なり〔釋〕延喜の御代の事は例の准據なりあながちにとるべからず **もろこしにもかゝる事の起に** 同ウ〔細〕殷の紂が妲己を愛し周の幽王褒姒を寵せしより世のみだれたる事等を引ていふ也 **楊貴妃のためし** 同〔湖師〕玄宗の寵愛ゆゑに安祿山が亂出來たるためしなるべし〔花〕桐壺の御門の更衣におくれ給へる事を唐の玄宗の楊貴妃にはなれ給てなげき給へるにたとへて長恨歌の詞をかりて一卷の始終を書侍れば其事をいはんとて楊貴妃のためしも引出つべくと先言出せり作者の意趣すぐれて聞え侍り〔岷〕云々前のもろこしにもかゝる事のといへるとは別段と見るべし花鳥にはひとつの心に注せらるる歟云々〔釋〕かゝる事の起とある中に楊貴妃の例もこもるなるべしさて此卷は長恨歌によりてかゝれたる事は論なきをかの歌の全文を知らざれば此文のいみじき事どもの知られがたき故にわづらはしけれど

白氏文集のまゝをこゝに舉つ引合せて見るべし

漢王重レ色思二傾一國。御宇多年求不レ得。楊家有レ女初長成。養在二深閨一人未レ識。天生麗質難二自棄一。一朝選在二君王側一。回レ頭一笑百媚生。六宮粉黛無二顏色一。春寒賜レ浴華清池。溫泉水滑洗二凝脂一。侍兒扶起嬌無レ力。始是新承二恩澤一時。雲鬢花顏金步搖。芙蓉帳暖度春宵。々々苦レ短日高起。從レ此君王不二早朝一。承レ歡侍レ宴無二閒暇一。春從二春遊一夜專レ夜。後宮佳麗三千人。三千寵愛在二一身一。金屋粧成嬌侍レ夜。玉樓宴罷醉和レ春。姊妹弟兄皆列レ土。可レ憐光彩生二門戶一。遂令天下父母心。不レ重レ生レ男重レ生レ女。驪宮高處入二青雲一。仙樂風飄處處聞。緩歌謾舞凝二絲竹一。盡日君王看不レ足。漁陽鼙鼓動レ地來。驚破霓裳羽衣曲。九重城闕煙塵生。千乘萬騎西南行。翠華搖々行復レ止。西出二都門一百餘里。六軍不レ發無二奈何一。宛轉蛾眉馬前死。花鈿委レ地無二人收一。翠翹金雀玉搔頭。君王掩面救不レ得。回レ首血淚相和流。黃埃散漫風蕭索。雲棧縈紆登二劍閣一。峨嵋山下少二人行一。旌旗無レ光日色薄。蜀江水碧蜀山青。聖主朝々暮々情。行宮見レ月傷レ心色。夜雨聞レ鈴斷レ腸聲。天旋地轉廻二龍馭一。到レ此躊躇不レ能レ去。馬嵬坡下泥土中。不レ見二玉顏一空レ死處。君臣相顧盡沾レ衣。東望都門信レ馬歸。々來池苑皆依レ舊。太液芙蓉未央柳。芙蓉如レ面柳如レ眉。對レ此如何不二淚垂一。春風桃李花開レ夜。秋雨梧桐葉落時。西宮南苑多二秋草一。宮葉滿レ堦紅不レ掃。梨園弟子白髮新。椒房阿監青蛾老。夕殿螢飛思悄然。孤燈挑盡未成レ眠。遲々鐘鼓初長夜。耿々星河欲レ曙天。鴛鴦瓦冷霜華重。翡翠衾寒誰與共。悠々生死別經レ年。魂魄不曾來入夢。臨邛道士鴻都客。能以二精誠一致二魂魄一。爲レ感二君王展轉思一。遂教二方士慇懃覓一。排レ空馭氣奔如レ電。昇レ天入レ地求レ之遍。上窮碧落下黃泉。兩處茫々皆不レ見。忽聞海上有二仙山一。山在虛無縹緲間。樓閣玲瓏五雲起。其中綽約多二仙子一。中有二一人一字太眞。雪膚花貌參差是。金闕西廂叩二玉扃一。轉教二小玉報雙成一。聞道漢家天子使。九華帳裡夢魂驚。攬レ衣推レ枕起徘徊。珠箔銀屏邐迤開。雲鬢半偏新睡覺。花冠不レ整下レ堂來。風吹二仙袂一飄々舉。猶似二霓裳羽衣舞一。玉容寂寞淚闌干。梨花一枝春帶レ雨。含レ情凝レ涕謝二君王一。一別音容兩渺茫。昭陽殿裡恩愛絕。蓬萊宮中日月長。回レ頭下望二人寰處一。不レ見二長安一見二塵霧一。唯將二舊物一表二深情一。鈿合金釵寄將去。釵留二一股一合一扇。釵擘二黃金一。合分レ鈿。但令心似二金鈿堅一。天上人間會相見。臨レ別殷勤重寄レ詞。々中有誓兩心知。七月七日長生殿。夜半無人私語時。在レ天願作二比翼鳥一。在レ地願爲二連理枝一。天長地久有レ時盡。此恨綿々無二絕期一。

この次に陳鴻が撰べる長恨歌傳といふ物一篇あり玄宗と楊貴妃との始終を記したれど長ければこゝには略きてたゞ其要とある所のみをいさゝかぬき出て注しつけぬ委くは本書を見べし

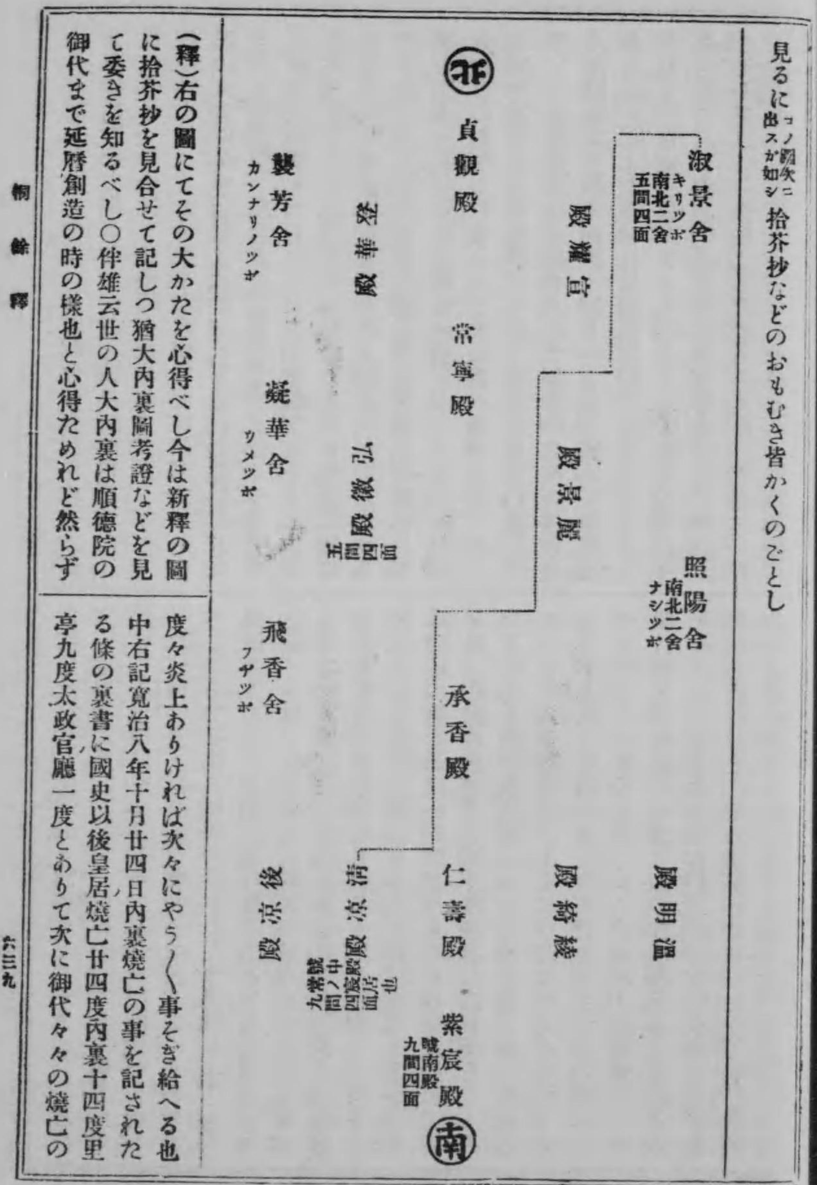
開元中泰階平。四海無事。玄宗在レ位歲久。倦于旰食宵衣。政無二小大一。始委二于右丞相一。深居遊宴以聲色自娛云々。詔高力士潛搜二外宮一。得二弘農楊玄琰女于壽邸一。既笄矣云々。上

悅云々。明年冊爲二貴妃一。半二后服用一。是治二其容敏一。其詞婉孌萬態以中上意。上益璧焉云々。璧有二三夫人九嬪二十七世婦八十一御妻一。暨後宮才人樂府妓女。使天子無二顧盼一。自是六宮無復進幸者。非二徒殊麗尤態致一。蓋才智明慧。善巧便佞。先意希旨有不可形容者。叔父昆弟皆列在二清貴一。尉爲二通侯一。姊妹封二國夫人一。富埒二王室一云々。出入禁門不レ問。京師長吏爲側目云々。天寶末兄國忠盜丞相位。愚弄國柄。及安祿山引兵向レ闕。以レ討楊氏一爲辭。潼關不レ守。翠華南幸。出二咸陽道一。次二馬嵬亭一。六軍徘徊持戟不レ進。從官郎吏伏上馬前。請誅二錯以謝天下一。國忠奉二麾纓盤水一。死二於道周一。左右之意未レ快。上聞之。當時敢言者。請以貴妃塞天下怒。上知不レ免。而不レ忍見二其死一。反レ袂掩面使レ牽之而去。蒼黃展轉。竟就絕。於尺組之下。既而玄宗狩二成都一。奪二玄宗爲太上皇一。就養南宮。遷二于西內一云々。適有二道士一自蜀來。知上意心念二楊妃一。

如是。自言有李少君之術。玄宗大喜命致其神。方士乃竭其術。以索之不至。又能遊神馭氣。出天界沒地府。以求之不見云々。使者還奏。太上皇々心震悼。日々不豫。其年夏四月南宮晏駕云々。下略

北の方 同〈河〉男は南女は北に住べき謂也陰陽につかさどるゆゑ也仍て貴賤ともに妻室を北の方と號する也后妃を椒房と號するも北向に住給ふ故也云々

玉のをのこみこ 一一丁オ〈玉〉萬葉五の卷に生れ出たる白玉のわが子古日は云々うつぼ物語たゞこその卷に玉ひかりかゞやきたる男のいとをかしげなるをうみ給へり白居易詩に掌珠一頼兒二三歳〈餘〉うつぼ物語としかげの卷に玉ひかりかゞやくうなゐこ同卷になやむこともなくて玉の光かゞやくをのこをうみつ云々此子やしなひもてゆけば玉光りかゞやきて見ゆれば杜詩に掌中探見珠新などいへるも生れたる子をさして玉に比していへり云々 **よせおもく** 同ウ〈玉〉續日本紀八の卷に寄重務繁文粹貞信公辭攝政表に擔重寄於微身負大任於小材これらは寄せ任ぜらるゝ事の重さをいへるをそれより轉りてこゝなどは注に外戚がたのおも〳〵しき也といへる其意也〈餘〉三代實錄卷一安倍朝臣安仁抗疏請解大將曰云々此職任當股肱寄重爪牙又同書に縞以將軍之職寄重責深などあり **まうけの君** 同〈釋〉儲君とかきて即皇太子の御事也皇太子は皇位を嗣せ給ふべきために豫て儲置るゝなれば儲君と申奉る也まうけは儲の音便也 **坊にも** 三丁オ〈釋〉東宮坊の事にてすなはち皇太子の居給ふ所なり坊は宮殿をさして申す也東宮のもじはもろこしの易の理にとりて震の卦を長男とし又東方とす時にとりては春とする故に天皇の長男のおはします宮といふ意にて東宮とまうし或は字を春宮とかきても東宮とよめる也 **きずをもとめ** 同ウ〈河〉所惡則洗垢求其瘢痕家語吹毛求疵漢書なほき木にながれる枝もある物をけをふききずをいふがわりなき〈餘〉吹毛求疵とは前漢景十三王傳また韓非子にもみゆ歌は後撰雜二にて高津内親王の歌なり **御つぼねは桐壺なり云々** 同〈新〉弄花に桐壺は清涼殿の丑寅なり花鳥に弘徽殿麗景殿宣耀殿などを過てゆく馬道つゞきなればあまたの御かた〴〵をすぎさせ給といへり今圖にて見るに出スが如シ拾芥抄などのおもむき皆かくのごとし



（釋）右の圖にてその大かたを心得べし今は新釋の圖に拾芥抄を見合せて記しつ猶大内裏圖考證などを見て委きを知るべし○伴雄云世の人大内裏は順德院の御代まで延暦創造の時の樣也と心得ためれど然らず度々炎上ありければ次々にやう〳〵事そぎ給へる也中右記寛治八年十月廿四日内裏燒亡の事を記されたる條の裏書に國史以後皇居燒亡廿四度内裏十四度里亭九度太政官廳一度とありて次に御代々々の燒亡の

年月を記されたる中に一條院四度長保元年六月十四日亥時内裏燒亡同三年十一月十八日口時内裏燒亡寛弘二年十一月十五日内裏燒亡同六年十月四日半夜一條院燒亡云々とあり此事を本朝世記に六月十四日内裏火太皇避二之八省小安殿一遷二御太政官朝所東一皇太子避二火縫殿寮一此夜遷二坐朝所東舍一とありて七月十一日造宮の國を充られ廿二日造宮雜事定ありし由見ゆ同八月十四日造内裏始られたりと日本紀略に記されたり但し今度は殿舍の寸法を減ぜられたる由承久二年十一月九日の玉葉別記に見え又同三年燒亡にて殿舍高大を止られたる事百練抄に見えたりかゝれば大内裏の趣もこれまでのさまに違へる事多かりかくて此内裏翌年九月造營了られ十月二日新造内裏仁壽殿にて安鎮國家法を修せられて同十一日夜一條院より遷御中宮も御入内あり同廿一日造宮賞として叙位五十人ありしよし權記日本紀略にのせらる皇太子は十二月十三日東三條院より入内なりかくてまた同三年十一月十八日内裏燒亡ありて同五年九月新造内裏なりて十月八日一條院より遷御なり此時の造營もいたく省略給へりと見えて三年十一月廿五日の百練抄に造宮定止二殿舍高大一云々同四年三月十九日の條に定二造營雜事一戒二梁柱高大一（樞記も同じ）などあり度々の火災にてかく事略給へるなるべし云々○此說いと委しければ因にこゝに引出つ物語よまん人よく心得おくべしさらでは違ふ事多かるべし　うちはし　同〔新〕或說にうちはしは切馬道に板を打わたして通ふ道也といへるはよし用あらん時とりはなつべき料なるべし日本紀萬葉などに打橋とあるはかりに板一ひら打わたせしにて夕顔卷に見ゆるも同じ宮中なるは多く板をわたしながら釘してかためねば打はしといへり或說に内橋と云はいかにぞやわたどのは渡殿にて廊をいふ和名抄廊保曾止乃殿下外屋也〔玉〕移橋（クワシハシ）をつゞめたる名也よのつねの橋はいつも同じ所にかゝりてところをかふる事はなきをこれは時にのぞみていづこへも〳〵用ある所へもて行て渡すかりそめの橋にてこゝがしこへうつす橋といふ意也こゝは渡殿などの間に横に下を通はん爲に切れたる所のあるに時にのぞみてわたせる也内橋打橋など注せるはかなはず萬葉などに打橋とかけるは例の借字なるをや（釋）移橋（ウワノハシ）といふ名の釋はいかゞわらんなは考へて定むべし

わたどの　同〔餘〕禁秘抄云渡殿二行各二疊敷二黄端一公卿在二殿上一之日不レ論二花族諸家一着レ之不レ然之時可レ然之人不レ着レ之北方副二高欄一立二布障子一間（立柱打付）畫二打延一向二下戸一横女官戸ヨリノ道ヲ通テ立二馬形障子一（號二波禰一也）注に云下戸禁腋秘抄末ニ脇戸アリ下ノ戸ト云女官戸同抄小壁ノ外ニ南ヘ向タル脇戸ヲ女官戸ト云女官是ヨリ小庭通（ルル）道也　波禰馬古今著聞集渡殿にはね馬よせ馬の障子を立て又同じ渡殿の北邊朝餉の前に馬形の障子あり〕其西南二間有二遣戸一其下一間籠テ下女居住（スル）如二手水物一置二燒火一置レ水自二中古一事歟高遣戸侍臣已下參（ハル）所也〕注に云有二遣戸一　按是高遣戸也禁腋秘抄殿上人ナト春花門ヨリ入テ南ヲ經テ修明門ヲ入テ殿上ノ高遣戸ヨリ上ケリ（釋）餘滴の本書いたくみだれたりしかば今は階梯本を寫しつさてこれはやゝ後世のさまめきて聞えたりそのかみはいかにありけん猶よく考ふべしさて新釋に和名抄の廊（カウノノ）を引れたるはいかゞ渡殿といふものは今世に釣屋（ツリヤ）といふ物に似て彼此の殿舍の中に建渡したる所と聞ゆ空蟬卷に中將といへる女房の渡殿に局（ツボネ）したる事あるをも考ふべしされば廊とは別也思ひながふる事なかれ　あやしきわざをしつゝ　同〔花〕〔新〕世繼物語に村上天皇の御時宣耀殿の女御（芳子小一條左大臣師尹公女）藤壺にさふらはせ給ふを中宮（安子九條右大臣師輔公女）のよからずおぼせしまゝに中宮の御方人かの女御の參り上り給ふ道に不淨をまきちらしたる事ありそれによりてこゝは書しなるべし〔餘〕安藤爲章云世繼物語に花山院の女御のまゝ母のさがなくてみかどの女御へわたらせ給ふうちはしなどに人のいかなるわざをしたりけるにか我ものぼらせ給はず上もわたらせ給はずとあり源氏物語に書たる事は世間にありしさまをふまへて作りたり小右記等の舊記をよみし人はしりぬべし○あやしきわざをしつゝ云々此所の文きたなきものゝ所をよくかくしてかけり糞なとをまきちらしたる事のありしと云をふくめりきぬのすそたへがたうと書るにてしらる古へも糞などまきちらしたる事のありしとなり〔玉〕不淨をまきちらすは人を詛（ノロ）ふしわざ也釋日本紀に見えて神代須佐之男命の故事よりおこれり但しこゝは詛ふまでにはあらでたゞ衣のすそを穢さんためのみにもあるべし（釋）世繼物語の准據はさもあるべしされど例のかゝはるべからずこれらみな作

りぬしの耳にも目にもあまりておしこめがたき中の事どもなるべし　**えさらぬめだうの**　四丁ウ（釋）伴雄云馬道めんだう共に同義にて和名抄に辨色立成云向レ堂之道也とあるがごとく殿中の眞中の板敷をいふ也簀子よりつゞきて孫庇、庇、寢殿、身舍を貫通して直行すべくわざと構へたる板敷の道なりさて前後の口に妻戸あれど晝も夜もあけ渡しおきて直宿の人などの往來の便とせり但し殿舍ごとに必馬道あるにはあらず仁壽殿承香殿常寧溫明後涼弘徽の六殿に限りて其他は清涼殿の北庇と宣耀殿の南に切馬道とてあるのみ也かれ思ふにむねとは天皇通御のための設なるべし武家ざまに大廊下といへる所と同じ趣なりめだうは間通の約れる意の詰なるべし古今集物名にめどに削花させるとあるも馬道の入口の鴨居にさせるをいへる也めんだうはめだうの延言也榮花晩明星に承香殿のめんだうより云々平家物語長門本に主上をば時忠卿いだき奉り雪の御所のめんだうにたち給ふ云々また後の書ながら年中御成記に長橋殿にて御冠をめされ御式裝に改られてめんだうつゞきに御前へまゐり給ふ也など有然るを陽成院の皇子におはしける時馬を牽上せ給へるより號くといへる古說はいといまだしき解也こゝは承香殿の北廊にてすなはち弘徽殿南馬道をいへる也此廊は常寧殿と承香殿の間にありていと長き廊也東の方にては承香殿馬道とも承香殿のはざまともいひ西の方にては弘徽殿のはざま又弘徽殿の細殿ともいへり淑景舍より上にのぼるには桐壺西の渡殿より宣耀殿の南の中門に麗景殿の簀子傳ひに片庇廊へ出て此廊の中門を南に承香殿の北廊（すなはちこゝでんの南馬道是也）を折れて中殿の北廊づたひに清涼殿の北庇より參のぼるなるべしかれ女御のさがなわざしたるは居所近き方にて也他の馬道と見る時はあたらず　**御はかまぎ**　同ウ（河）皇子三歲着袴の例冷泉院東宮ノ時圓融院親王ノ時花山院東宮ノ時一條院親王ノ時　**くらづかさ**　同（新）（餘）職員令、內藏寮、頭一人、掌ニ金銀珠玉寶器錦綾綵氈褥諸蕃貢献奇瑋」義解謂ニ非常之物一其金銀已下雜物皆自ニ大藏省一割一別而所レ送者也」之物年料供ニ進御服及別勅用一物事一といふ類の御物なり式にも委し　**をさめどの**　同（湖）後涼殿にあり諸國よりの進物などをさむる所と也（新）納殿也累代の御物は宣陽殿に納ひなど西宮抄に見ゆ

右二所の御物は御料に專ら用ゐさせらるゝを此度の御ゐたちに出させられしといふなるべし（餘）拾芥抄云納ニ殿累代御一物納レ之在ニ宣陽殿一恆例御物納ニ藏人所一綾綺殿紙御屏風在ニ仁壽殿一頭藏人雜色爲レ預以ニ藏人雜色出納小舍人一爲ニ預人一進月奏これらの御物どもをことゞく用らるゝを云々をつくしてとはいへり　**みやす所**　五丁オ（玉）此物語の例をもて考るに細流にも注せられたる如く御子をうみ奉り給へば御息所と申せりさてそは女御更衣などの外に別に此品あるにはあらず女御更衣などにわたれも若紫卷源氏君詞に此御母更衣の事を故御息所との給ひ上若菜卷に明石女御をも御子を生奉り給へる後のところに御息所と申せり六條御息所といふも姫宮（秋好中宮）の御母なるにつきての稱也竹川卷に鬚黑大臣の姫君冷泉院に參り給ひて懷胎のほどにも御息所とあり然れば御子いまだ生れ給はねどもすでに妊み給へば申せるにこそ　**てぐるまのせんじ**　六丁オ（餘）和名抄云輦周禮注云后居ニ宮中一縱容所レ乘謂ニ之輦一和名天久流萬爲ニ輕輪一人一挽所レ行也（新）西宮抄臨時に輦車親王大臣之中老一宿人有ニ此恩一女一親一王女一御尙一侍每ニ出入一藏人經ニ奏聞一仰閤門吉上（雜載雜式每度仰）云々或抄云手ぐるまは輿のやうにてちひさき輪をかけて轅は輿のやうに短きなり石階などを上り下るにいとゞやろかず中の重を出入給ふためなり（又延喜雜式云凡乘ニ輦車一出ニ入內一裡「者妃限ニ曹子一夫一人及內一親一王限ニ溫一明殿後涼殿後一命婦三位限ニ兵衞陣一但嬪女御及孫王大臣嫡妻乘レ輦限ニ兵一衞陣一云々是によりてかの上局に據ありといふ說はおほつかなし上御局はまゐりの時の局也病にふし給ふは桐壺なるべければこの臨時の勅ありてそこより乘べき也（玉）續日本後紀に承一和六一年二六一月庚一戌朔己一卯女一御從四位下藤原朝一臣澤子卒故紀一伊一守一總一繼之女也天皇納レ之誕ニ二一皇子一皇女一也寵一愛之隆冠ニ後宮一俄病而困一篤載之小車一出レ自ニ禁一中一纔到ニ里一亭一便一絕矣天皇聞レ之哀一悼遣ニ中一使一贈ニ從三位一也とあり桐壺更衣の事これによりて書るなるべし似たる事多し　（歌）**いかまほしきは**　同ウ（拾）いかまほしきとは生に行といふを兼たるにてこそ歌なるを諸抄に此意を注せられず今類歌どもおぼえたる限り出して證すべし（拾遺別「かめ山にいく藥のみありければとゞめんよしもなきわかれか

な戒秀法師・同巻四「何せんに命をかけてちかひけんいかばやと思ふ時もありけり實方朝臣・後拾遺「しぬばかりなげきにこそはなげきしかいきてとふべきわが身ならねば小式部内侍・新古今・別「都にもおもふ人のみおほかれはなほこのたびはいかんとぞ思ふ藤原惟親同「わかれ路はこれやかぎりの旅ならんさらにいくべきこちこそせぬ道明法師・大和物語「しねとてやとりもあへずはやらはるゝいといきがたきこゝちこそすれ後拾遺哀傷「わかれにしその日ばかりはめぐりきていきもかへらぬ人ぞこひしき伊勢大輔 **例のさはう** 七丁ウ〔新〕喪葬令に見ゆるごとく此時もたがはさりけんされどいかめしうと書たれば二位に准ぜしほどの禮にし給ふをいふなるべし **おたぎといふ所に** 同〔河〕鳥部野をいふ也〔細〕今の六道これなり昔の葬所なり〔拾〕今按和名抄に愛宕郡に鳥戸の外に別に愛宕郷あり〔新〕云々されば此葬は鳥部にもあらじ或説は後をもてのみいへり **はひになり給はんを** 同〔餘〕河もえ出てはひになりなん時にこそ人をおもひのやまんごにせめ此歌拾遺戀五にありてよみ人しらず也〔釋〕これは類例也引歌にはあらず **はだ寒き** 九丁オ〔玉〕はたは又の意にて又寒くもありといふ意の詞也そは秋になりて大かたはまだ暑くて涼しきがこちよきころ俄にあまり涼しくなりてこゝろよきながらはや又すこし寒くもある意也今もさることあるもの也さる故に此詞はかならず八月ごろにのみいへり心をつくべし几帳などにはたかくれてとあるも同じ意にて大かたは顯れて居ながら又すこし隱れもしたるさまにて居るをいへり拾遺に萬葉の膚寒を引ていへるはひがこと也かの膚寒とは別なるをや〔釋〕案に此説はたといふ詞のつかひざまをいはれたるはさることなれどこれはなほ膚寒の意也拾遺新釋餘滴ともに皆膚とあるに隨ふべしはたは又の意ながら少し異にては又も又などの意につかひたり野分たちてはた寒きとある語勢はたの意としてはさらに受つぎがたし野分の風たちて膚寒きにていとよく聞えたりかならず八月ごろにいふも其ほどより膚寒くなるころほひなればなりさて膚寒き故に常よりも更衣の事をおぼしめし出さるゝ事實にさもあるべき情なりあぢはふべし舊注又餘滴などに野分だちてと濁りよみて野分めきてふく風也といへるはひがこと也めきてといふ意ならばふく風といふ言なくてはさは聞えぬことなるをや **ゆげひの命婦** 同〔花〕靫負と書てゆげひとよめり靫は矢を入るしこをいふ左右衛門は弓矢を帶するつかさなるによりてゆげひといへり〔河〕命婦は今の世に内侍の外織物を着せぬ中臈を昔は命婦と號せり殿上人已下の女なり〔細〕ゆげひの命婦は衛門の命婦也拾遺の詞書にも有命婦は惣じては禁中にあるを内命婦といふ私の妻をも命婦といふそれを外命婦といふ也當時も禁中に侍ふ女房の中に内侍より次に御下(シモ)とてさふらふ其中に命婦女藏人とてゐる也〔新〕命婦とは令より延喜式のころまでは五位以上の人の妻を外命婦といへり中右記などの頃よりは女官の中臈を命婦といへり或説にたゝ中臈を昔は命婦といへりといふはくはしからず此女房の父兄弟などの中に衛門の官有しに依て喚名(ヨビナ)とせしもの也惣て女のよび名はさる事多し〇是は御門の御おぼえもよく更衣にもしたしかりし人也さらではかゝる御使はかひなければ心をやりて書たりさてかしこに行ての心づかひなどよにことに侍り〇靫負はギオの反ゴなるをゲに轉してユゲヒと云さて衛門の官は靫(ユギ)を負(オ)ふゆゑにこの名あり **やへむぐら** 同ウ〔釋〕和名抄に本草云葎草和名毛久良(モグラ)と見ゆこの草よく生しげる物なる故に彌重葎(ヤヘムグラ)といへるなりさて葎また蓬茅(ヨモギチ)などは人の住ずして荒たる所に殊によく生るものなる故に葎生(ムグラフ)蓬生淺茅生(ヨモギフアサヂフ)などいひてあばれたる家のさまにいへりあながちに葎蓬などの一種をさすにはあらず唯多く草の生たる意まで也心得置べし **みふみおもて** 十丁オ〔玉〕すべて人の家も南向を正しとする故に南おもての舍屋を正面とするから必しも南向の家ならで南おもてにはあらざれども方角は何方にまれ正面のところを南おもてといひならへる也内々の方を北おもてといへるも同じ物語の中に多かる事也心得おくべし〔釋〕今案に此説のごとし但し古への家は大かた他し方には向ずして皆南向に建たりとおぼしければ面は必南なりし也今も田舍の家は大かた南向ならぬは少し是古への作りざまの遺れるなるべし **内侍のすけ** 同〔釋〕令云内侍司(ナイシノカミ)尚侍(ナイシノスケ)二人掌(ツカサドル)供(シ)奉掌侍奏請宣傳(ツタヘ)檢(シ)校女(ヒメ)孺(タチ)兼知(ルカタ)内(ウチ)外命婦朝(ル)參及禁内禮式之事典(ツカサドル)侍四人掌同(シ)尚侍(ニ)唯不(ル)得(ヒ)奏請宣傳若(スルカタ)无(ハ)尚侍者得(ヒ)奏請宣傳 **松のおもはんこ**

とだに 十一丁ウ〔新〕是は古今集に「何をして身のいたづらに老ぬらん年のおもはん事ぞやさしき又「いたづらに世にふるものと高砂の松をや老の友と思はん此二首などを以てつゞめて書けんかし例の古歌を取用るに巧なるもの也然るに或説に「いかにしてありとしられし高砂の松の思はん事もはづかしてふ六帖の歌を引たり此歌今の六帖にはあれど古本にはなし後に此抄より書入しなるべしよりて思ふに歌のつゞけも意も穩ならず侍り恐らくは此文の抄作る人の詞にあはせて作れるなるべし此説どもにはさる僞り事多しはたさる歌を其まゝ引ては此文の例にもたがひて拙く聞ゆ(釋)此説一わたりさることの如くなれど六帖の古本になきはおとしたる本ならん事もはかりがたしされば古ながちにしか定むべくはあらぬわざ也まづは諸抄に引れたるかたをとるへしさて湖月抄に細流を引ていかにしてありとしられしの歌のしもじを濁りてしられとしたるはひがことなり

歌すゞむしの云々 十三丁ウ〔玉〕此てもは常にいふてもの意にはあらずもしもじは俗言にまあといふにあたりて一首の意を深くいふ辭也後京極殿の「里はあれて月やあらぬとかこちてもたれ淺ぢふに衣うつらんなどのてもも同じ(釋)案に此説一首の意を深くいふ辭也とあるはさることなれど俗言に云々といはれたるはいかゞ也此てもはあかずふるといふへ係れる辭にて常のてもとかはることなし後京極殿の歌なるもてもはうつらんへ係りたる意にて常のてもなり異なるにはあらず

雲のうへ人 十四丁ォ(釋)雲の上とは禁中を天に比ふるからにいふ詞なり雲の上人は雲より上の人といふ意にてすべて大宮に仕奉る人をいふこゝは御使の命婦をさしていへり〔玉〕花鳥に昇殿の人を男女ともに雲の上人といふべしとあれどもこゝはたゞ禁中の人なるゆゑにいふなり昇殿の事にはかゝはらじ

御さうぞく一くだり 同〔新〕或説に裳唐衣など一領なるべしといへるはうたがはし雅亮裝束抄の五節の條に童のさうぞくを女院あらば使に女房のさうぞくを賜ふべき也裳唐衣濃張袴これを女房のさうぞくといふ也つゝみに入てとり重ねてたまふ也といへりやんことなきおまへののたまふにはかまよりうへのきぬなるべきにや右は五節に限りていふ事か又今昔物語に伊勢の御のもとへ伊衡のまうでられし時も右のごとくさうぞくを出せし事あり猶うたがはしとぞ仰られし也おちくぼ物がたりの中納言どのゝ八講八月に有りしに中宮よりの御使に綾のひとへがさねはかまくちばの唐きぬ薄物のかさねの裳をかづけ給ひつと有こはことなる御使なれば事のそひたるにや猶考ふべし

みくし上のでうど 同〔新〕髪をあぐるてふ語はいにしへ天武紀萬葉などに見えたれど其形定かにいひがたし云々内宴のさま書たる古き繪に女樂の形ありその舞妓の髪の樣と紫の日記に髪あげし樣をからの繪に似たりと書しをむかへて見るにげに相似たりといふべきさま也猶くはしき事はあだしものにも書つその調度は雅亮裝束抄に五節の姫君髪笄差櫛とりぐして打みだれの筥のふたに入て云々と書し類かされどこゝは楊貴妃の事もていへるによそに釵子鈿合などもあるべし或説々多けれどみなよくあたらず

長恨歌の御繪亭子院のかゝせ給ひて 十五丁ウ〔新〕是は寛平のみかどおりゐさせられて後に一條の通油小路の東にわたらせ給ひておはしましければていしのゐんのみかどゝ申也亭子院のみかどの人して長恨歌の繪をかゝせられいせ貫之に其心の歌よませられたるが傳りてあるを今桐壺の帝御なげきにつきてあけくれ御らんずる也云云〔河〕亭子院七條以南油小路以東一町 伊勢集云長恨歌の御屏風亭子院にかゝせ給て其所々をよませ給ひけり御手にてもみぢ葉に色見えわかでちる物はものおもふ秋の涙なりけりまた玉すだれゐくるもしらでねしものを夢にも見じと思ひかけきや〔餘〕今のいせ集には亭子院にはらせ給てとあり紅葉に云々後撰戀四玉すだれ云々今本の伊勢集には初五字玉だれの結句思ひけるかなとあり〔花〕長恨歌のうた紅葉の色にわかれずの一首は帝の御手にてかゝせ給へりと伊勢が集にのせ侍れば亭子院の御製にてあるべきにや今一首の玉簾ゐくるもしらずといへるは伊勢がよめる也貫之が歌はいまだ見出し侍らず可尋之〔玉〕上に女房四五人さふらはせ給ひて御物語せさせ給ふといへるはすなはち此長恨歌のすぢの事を御物語せさせ給ふなりたゞそのすぢをぞまくらごとにいへるすなはち上の御物語をさせ給ふよしをことわれるなり此所かやうに見ざれば長恨歌の繪歌の事こゝにはよしなし

まくらごとに 同〔新〕左傳に籍ゝ辭といふに

似て更衣をおぼしめす筋によりたる事を下敷として
それにつけてなげきの御おもひをのべ語らせ給ふと
也枕は頭の下にしく物なれは體の中にも第一のしき
物也まくらごとにとは其故事を籍ものゝごとく本と
して必それによりつゝ今の御なげきの御心をのたま
へばいふ也冠辭てふ物とは少し異也(釋)今案に此說
はいかゞあらんまくらごとゝは御寢物語といはんが
ごとき意なるべし枕ざうしといへるも寢ながら見る
草紙といふ意と聞ゆればこゝもその意にて帝の寢給
ひながら長恨歌のすぢの事を仰らるゝ意なるべし寢
ながら物語するは打とけたる意なれば打とけ言とい
ふにちかき也さらでは枕といふ事用なく聞ゆ枕詞と
いふはたゞ頭におくといふ意にていへるなれば別な
り **歌あらき風云々** 同〈拾〉拾遺雜下 東三條太政大
臣の長歌にたのもしき陰にふたゝびおくれたるふた
葉の草をふく風のあらきかたにはあてじとてせばき
たもとにふせぎつゝ云々 **なつかしうらうたげなり
しを おぼしいづるに** 十七丁オ(釋)萬水一露の本に
此詞につゞけて「女郎花の風になびきたるよりもな
よびなでしこの露にぬれたるよりもらうたく」とい
ふ句を載て花鳥の說を擧たり其御說に此一段爲相卿
本にはかゝず其心を案ずるに桐壺の更衣のかたちけ
はひをおぼしいづるに花鳥の色にも音にもよそふべ
きかたなしといへるに又しかも女郎花撫子にたとへ
侍れば前後の詞相違するによりて此詞をすべて略し
侍るにや河內が家の本によらば云々如此心をやりて
見侍れば前後相違もなきにや但し源氏の本一樣なら
ず人の所好にしたがふべしと有げにも此御說のごと
く此文ありては中々につたなし誰人かいたづらに書
加へしものなるべき今は青表紙の諸本にしたがひて
はぶきたりされど又わたくしに捨べきにもあらねば
こゝにかゝげてしるし置つ **いとおしたちかど〳〵
しき所物し給ふ御方にて** 同ウ〈抄〉大臣など薨ぜら
るゝ時事の淺深によりて或は廢朝五ヶ日三ヶ日也廢
朝とは天子みづから政に臨み給はぬなり廢朝の時は
音奏警蹕をやめ禁中に物の音なし惣別更衣などの卒
する時には廢朝に及ぶべからず殊に數日の物の音な
どをとゞめらるべきにはあらずそれを義を立たるが
かど〳〵しき也されども帝の風のおと虫のねにも御
思ひのまさるべきほどの御愁傷をしらずがはにすべ

き事頗無骨の事也時宜にかゝはらざる所をいましめ
て書る也 新釋同 **右近のつかさのとのゐ申のこゑ
同**〈奥〉亥一ノ刻左ノ近衛夜ノ行官一人初奏レ時終二子四刻一丑一ノ刻右ノ近衛宿ノ申ノ事至三卯一ノ刻一內ノ豎亥一ノ刻奏二宿簡一(釋)とのゐまうしとは近衛の武官の人當夜御直宿に參りたるよしをまうす事也さるは武き事もて仕奉る人の御防衛に參りたるよしをまうして上の御心を安からしめ奉る意なり宿簡とは其夜とのゐする人の姓名をしるしたる簡也これをよみて奏するなるべし猶夕顏卷にも有瀧口の名對面といふ事も見ゆそこにいふを見るべし **よるのおとゞ** 十八丁オ(釋)おとゞは大殿所の約れる語也大臣をおとゞといふも大殿所の意にて大殿といふに同じさて夜御殿は淸涼殿にありて帝の大御寢ます所也四方に妻戶あり南は大妻戶一間ありと諸抄に見えたり猶禁秘御抄にくはし **あさがれひ** 同〈河〉朝餉二間也於レ此供レ之〈湖師〉朝餉の間とて御膳をとゝのふる所也或抄云陪膳の女房御さばをとりはしをたてゝ末を折かけて出すばかり也いづれも儀式ばかりに成て小供御とて御乳母などの奉る分にてうるはしう三度常の御所にてまゐる也〈玉〉此說はいと後世の趣にてこゝの趣にはかなはずこゝのやうは大床子の御ものは外ざま朝がれひは御內々也云々〈萬〉云々早朝にまゐる也むかひ給供御にはあらず神供なるべし箸をいかにもよわくけづりてあまたたつる也わざと箸を折てたつるといへりをるゝはよき相といへり(釋)これらも皆後世のさまにて此物語の比のさまにあらず小櫛の說に隨ふべしさていにしへは貴賤にかきらず飯は日に二度たうべし也さる故に朝の飯は此外なれば或は粥或は干飯などを食ひし也さればかならず干飯をめし給ふにはあらねど朝のおものをば朝餉と申す也下の卷に源氏君頭中將なども御かゆこはいひなどをまゐりし事見ゆ考合すべしされば朝餉をめし上らるゝは御內々の事なる故に御陪膳も女房たちのつかうまつるなるべし〈新〉西宮抄臨時部陪膳事云々御本殿朝夕陪膳四位奉仕(女房不供也)朝干飯(アサカレヒノ)陪膳女房候(スル)無(シ)二女房一者五位以上候(スル)正下公卿供(スル)二朝夕膳一者挿(ミ)レ笏不レ脫(ス)レ劔云々なほ禁秘抄に委し其中に大床子御膳爾八時々必可レ有二着御一其作法藏人奏(スル)二御膳一時御直衣自(ニテ)二帳後一着(ス)二大床子一(ニ)黙レ膳着(シ)之(ヲ)向陪膳人警(シ)レ候(スル)昔正食(シ)レ之(ヲ)云々大槐秘抄

云おほろけの事候はぬ限りは日の御膳大床子につかせおはしますべき事となん申傳へて候へ陪膳もをのこの必つとむべきとなん申つたへて殿上人の見參のはじめにて候云々　**大床子のおもの**　同〔湖〕禁中に大床子所とてあり机を二つたてゝ其上に御膳をすうる也〔孟〕御膳をおものとよむ也つねの御膳也大床子を置て其上に御膳をたてまつる也日の御膳と號す〔細〕朝かれひは女房の陪膳大床子は殿上人の陪膳也いづれをも御覽といれぬと也〔釋〕ものとは食物の事也今も物をくふなどいへり天皇の御なる故におもものとはいへる也さて大床子は孟津にいはれたるが如く大床子を立る故に御膳を大床子のおものといひ其たてたる所を大床子といへりこれ正しき大御膳也故に殿上人陪膳せらるゝ也されどもしか正しくいかめしき方は御物思ひにものうく思しめして朝餉の御心安きかたをのみけしきばかりふれさせ給ふと也諸抄あまりにくだ〳〵しくして竟によく事の意を說得られたるもなし又いと後世の書などを引て注せられたるはたがふ事も多き也　**ふみはじめ**　十九丁ウ〔河〕皇子七歳御書始例村上天皇親王時承平二年二月廿二日一條院寛和二年十二月八日〔花〕御書始には御註孝經玄宗注也或貞觀政要を讀始給ふ也博士讀云御註孝經序五字尙復云此許次尙復讀二五字一如レ先皇太子親王等の御書始には聊替る事共有也〔釋〕これらの事猶西宮記江家次第などに委し　**こまうどのまゐれる**　廿一丁オ〔玉〕延喜のころまゐれりはみな勃海國の使にて高麗にはあらざれども勃海も高麗の末なれば皇國にてはもといひなれたるまゝにこまといへりし也文德實錄一に高麗國遣レ使と記されたりその時にかの大使橘清友の弱冠にてあるを見ておどろきて骨法非レ常子孫大貴と相せし事ありはたして嵯峨皇大后を生奉れりき　**うだのみかどの御いましめ**　同〔新〕こは寛平遺戒の事也それに云外一蕃之人必可二召見一者在二簾中一見レ之不レ可二直一對一耳李環朕已失レ之愼レ之と有をいふ也されども是はおのづから來る三韓などの人の故ありて必見させ給ふべきを猶簾中にて見給ふとのたまふなるべしきと外蕃の使として來たるをば專らは節會などのついでに豐樂殿大極殿などへ召て百官威儀を備へて使人拜禮の後に位に叙せられて昇殿すれば天顏顯れ給ふべき也かゝる事は貞觀儀式の正月七日の儀に委し云々　鴻臚館　同〔抄〕日本の玄蕃寮也細には今の四塚といふ所の邊也とあり漢書應劭注鴻聲也臚傳也傳レ聲贊レ道也云々〔新〕玄は僧尼蕃は蕃客等を掌るてふ謂也其玄蕃といふは或抄云此館は延曆遷都の始東西の大宮にこれをおかる然るに弘仁に東の鴻臚館をもて東寺として弘法大師に賜ふ西の鴻臚館を西寺として修因僧都に賜ふ其後七條朱雀に鴻臚館を立て三韓の官舍を其中におくと云々今の四塚邊也云々〔花〕僧尼といふ物も昔は百濟國より來朝せし故に此寮につかさどる也云々鴻臚は聲をつたふるといふ心也異國人來朝の時は通事といふつかさありて兩國の心ざしを傳ふる故也　**國のおやとなりて云々**　同〔抄〕又の字に太上天皇の尊號を得給ふべき意こもれりおほやけのかためとなりて天下をたすけば亂れうれふべからんずる相はたがひてよかるべしといふ心に見たる人は又の字をうしなへり〔新〕源氏のみこ天位にのぼるべき相おはする人ながらしか定めて見れば亂れ憂ひやあらんとみゆさらばとて臣下として天皇を補佐する人になしては既に天皇の相そなはり給へるに違ふべしといひたる也故に臣とはなし給ひたれど此相をもて終に太上天皇の尊號を得給へりけるをおもふべし云々　**無品親王の外戚のよせなき**　廿二丁オ〔餘〕むぼう親王のげさくとよむべし云々源平盛衰記卷十九前兵衞佐光能といふ人は文覺にはげしやくに付てゆかりなり云々〔新〕親王は儲の第二といひて皇太子に事あらん時のまうけなればいとおもくおはして品に叙し給ふにも后腹は三品たゞの四品より立給へり又幼き時に親王宣下あるは多くは無品也今源氏君なだ元服し給はぬ故にかりに無品親王をもて事をおぼしめぐらすのみ也さて古へ皇威の盛なる時には親王は臣下とは格別にて威光おはしつるをこのちかき御代どもとなりて臣下に威のうつりたれば外戚にしかるべき大臣などの有て後見申さぬ親王はいづれへもつかぬやうにておはせりされど御父帝の御代久しくばおのづから光君の威もおはさんをわが御よはひも久しからじとおぼしめせばいよいよ親王にてたゞよはさじ臣となして政事とらせんさらば帝の御いきほひつよりて其身も時を失はざらんと也げにもあさましく皇威のおとろへゆかせられしかな天皇の御子とまうさんに臣の外戚のよろしき

御後見なくてはかなはぬやうになれるはくちをしき事也凡昔は親王こそ政を知給へれば御代もさかりにましませしを後には臣下のみかはるゝ〳〵政を執し故に皇威おとろへ給ひて遠き國のものすら我意をおこしつゝ其頃よりぞかの平將門が亂貞任らが亂も起りにける然ればいかで古にかへして皇子を執政の臣として后をも皇胤にてたて皇子に威あらば御門のさかえまさんと思ふ意よりかくは書るなるべし今より思ふにこの頃臣下のわがまゝせし餘りは終に平家にうつり鎌倉に及べりこれを思ふに此記者は天皇にふかく忠なりけるをさる事をあらはにかゝば罪をも得べく又俄なることわりは人の心にしまぬ物なればかくこのましき事を表としてつら〳〵見給ひしらばおのづからすべらきのおぼしうたがふべきすぢを書まうけたるなるべし源氏君のはぶれたるわざどもは皆ちひさき事也記者の大なる意は別に有とこそ見ゆれ

（釋）岡部翁の此物語の見やうすべてかくのごとし猶所々に評ぜられたる事あれど思ふ旨わりて大かた略けりこゝは殊に甚しき所なれば引出つ　**すくえう**

同ウ〔新〕宿耀也職員令云天文云々義解云天文者日月五星二十八宿也云々これ天文博士の掌ることにて星の行度を考へて人の運をはかるをいふ　**先帝の**

廿三丁オ〔新〕當時一條院の前代の花山院なれど此文はそれよりもむかしのさまに書のがれつればいづれの帝などいふ説はわろし帝をたいとよむは呉音なり云々　**三代のみやづかへに**　同〔新〕伊勢物語にみよのみかどにつかうまつりてといふ語例なればみよとよむべしさて此三代をいつよりてふ事はさてもいはでよし此文の次を朱雀其次を冷泉と書たればそれに泥みて或は光孝宇多醍醐三代などいふは皆いふにもたらず〔餘〕雅望考るに此説に隨ふべし既にいづれの御時にかと初に書出たれば時代をあてゝいふべき書にはあらず〔玉〕河海に此先帝は相當光孝天皇歟典侍詞にも三代のみやづかへとあり光孝宇多醍醐たるべきかとあるを弄花細流にさして三代ならずともたゞ久しくといはんためかとあるはいかゞ久しくといはん爲ばかりに三代とはいかでかいはん河海に隨ふべし先帝も光孝天皇に當たるなるべし（釋）今案に小櫛に弄花細流の説を辨へられたるはさることなれど光孝天皇に當たるなるべしとあるはいかゞ也しひて准據をいはんは前後の例ならねは新釋餘滴に隨ふべし　**名たかうおはする宮**　廿五丁ウ〔新〕是はみかどの藤壺を見給ふ御心也名たかうおはするとかくは御かたち人々と世に名高きなりさて此ふたつをあげてそれよりもひかる君の猶增り給ふをいふ也（釋）新釋一本の説は頭書にかゝげつ同意也今案に此段いとまぎらはし舊注はみな弘徽殿の宮たちの事とせられたりげに上よりの文のはこびはさやうに聞えたり然れども名高うおはするといふ事弘徽殿腹の宮たちとしてはいかゞ也そは上に女御子たち二所この御はらにおはしませどなずらひ給ふべきだにぞなかりけるとことわりたればこゝにふたゝびいふべきよしなしもしくは東宮の御事かともおぼゆれど東宮はたゞに東宮と申て宮とはかゝぬ例なればさも聞えずされば新釋のごとく藤壺の宮の事なるべしされど又世にたぐひなしと見奉り給ひといふ事帝の見奉り給ふことはすこし聞えがたきやうなるに下に又藤つぼならび給てといへればたしかにさやうにも聞えがたきにや猶よく考ふべき事なり拾遺玉小櫛共にさるさだのなきはみな湖月抄のごとく思はれしにやいといふかし　**ひかる君**　同〔河〕亭子院第四皇子敦慶親王號玉光宮好色無双之美人也又光孝天皇皇子式部卿是忠親王始賜源姓號光源中納言源光仁明天皇源氏號西三條延喜元年任右大臣一〇日野系圖といふものに左大臣高明を光源氏とこれを書く云々〔新〕光君といふ事を或は敦慶親王或は是忠親王又高明公などをも光源氏といひしなどいふ説々あれど定かなる記をも引ずよしさることいひつとも必其人々の據ありとは見えず大かたにておくべし　**かゞやく日の宮**　廿六丁オ〔河〕中宮彰子御堂女上東門院十二歳入内のまゐらせ給ひしをりこそかゞやく藤壺と世の人申けれ榮花物語〔新〕一條院の御時彰子皇后の藤壺におはせし時かゞやく藤壺と聞えし事は榮花物語に有て其卷の名にも擧たり薄雲女院又同し藤壺におはせしをかゞやく日の宮と申す也今此物語は專ら當代の事を書しと見ゆれば是をばまさしくいひたれどことの心をことなるやうに書しによりてつみなき也〔新〕一本に云々榮花物語に見ゆ是をうつしてかけるならんと思ふには男君もさるたぐひありて光る君とはいひしにや或説に云々此中には高明公は讒にあひて左遷し給ひし事其

西宮記ノ文校訂シテ末ニ此卷ノ奉ゲタヘカヲ見テ

外にもおろ〳〵此源氏君と似たる事有にやとおぼしければかれをうつしてや書けん猶いひうつしたる人はなくともあるべけれど後の考の料にいふのみ（釋）准據の事は例の作りぬしのふかき心しらひ有し事とは見ゆれど今正しくしられがたき事なれば大かたにてあるべし其中に上東門院の御事に准へたりといふ事はいかゞあらん猶よく考ふべし　**御元服**　同（新）元服の式はそれ〳〵定れる事なるが中に猶事をそへ給ふなりさて西宮抄に親王元服一世源氏元服などの式は少し異なれども此度は事をそへて文句の中に親王元服のさまにあたれる事多ければ親王の條をひく其條に云云々この外一世源氏元服の式は却て略す皇太子御元服の式など西宮抄江次第などに委し（釋）新釋に西宮抄を引れたるはいとよろし今其文を擧べきなれど本書いたく亂れて事の意聞えがたきにつきて西宮抄四五本をもて校合しつれどなほ全く聞えがたければしばらく略きつよき本を得て糺し竟なばおひつぎて加ふべくなん　**こくさうゐん**　同（新）拾芥抄云穀倉院二條南朱雀西在二大學西一納二畿内諸國銅錢無主位職田及沒官田太宰稻等諸庄物一勤二年中饗一有公卿及四位五位別當預藏人等一或云朱雀門前云々續日本紀などに穀布をも收らるゝとみゆ（釋）勤二年中饗一とあるごとく右等の物を出してさま〴〵饗の料に充らるゝ故に今度も穀倉院に仰付られし也　**いしたてゝ**　同ウ（新）天子の御座也西宮抄親王元服に畫の御座を撤して大床子二脚たてゝ出御の事あり源氏元服には殿上の御倚子をこゝへうつさるゝ事はあれど此度は親王の式によるべく見ゆ　**申の時にぞ**　同（湖）稱名院殿御說云盛明親王天慶三年三月十五日申時綾綺殿の東廂にて御前において元服を加ふ此時刻ほどの事も心をつけて見るべし先例なきことはかゝずと云々　**大藏卿くら人**　同（釋）餘滿に弘安論義の雅有卿と康能朝臣の問答を擧て大藏卿藏人の事つまびらかならぬ事右の論をもてしるべし傳寫の書たがへなども有けることにやといへりむかしよりしられがたき事にこそ頭書に擧たる玉小櫛に隨ひてあるべしとにかくに理髮の事なくては聞えがたしさて餘滿に引たる論義はとにかくに知れぬ方なれば引ても用なくて略きつ又大藏卿藏人などの令文をも擧たれどそれも略きつ　**御やすみ所に**　同（玉）注に康保二年

二月八日御記下侍東第一間旋二立屏風一其中敷二土鋪二枚茵一枚一といへり今花鳥餘情を考るに茵一枚の下に爲二親王一換レ衣所一といふ文ありこゝの注には此文までを引ては事たらず略けるはいかゞ　**そひぶし**　廿七丁ウ（玉）北山抄皇太子加元服條裏書云息所參事寬平九年七月三日丙子爲子内親王當夜參入延喜十六年十月廿二日甲辰故左大臣女參入用レ輦應和三年二月廿八日辛亥昌子内親王參入俗謂二之副臥一乎　**さぶらひにまかで給ひて云々**　同（餘）禁秘抄下侍三間有二炭櫃一四面敷レ疊號二侍臣亂遊所一也如二折一松一於二此所一也或又酒宴等於二此所一行レ之清華人近代不レ着レ之（新）西宮抄の親王元服を考るに加冠の儀終て皆しばらく御前を退き冠者舞踏など有て後に引入と理髮とを御前にめして祿引出物など賜はり退く後に元服せし親王の曹司に引入を召て酒祿などあり其後又引入を御前へめして宣陽殿の西庇にて饗を設させらる此時は王卿も御前の孫庇に候して酒肴を賜ひ樂舞など有也是を以てみればこゝに侍に退て大御酒などまゐるといふは此度は曹司へ召て酒祿はなくて下侍にて酒まゐることゝせしなるべし曹司にての酒祿は有無不定と有からは此度は無よしなるべしさて下侍にて坏酒例有と見ゆ或說に此時に天皇もおはしまして饗ある樣にいへるは誤也此次に引入を內侍御前へ召といひ又光君へ左大臣どのゝけしきばみ給ふと云など御前にてのさまならず（釋）今案に西宮抄の注に親王下二下侍一改レ衣とある下侍と引入被レ召二親王曹司一とある親王曹司とは同所なるべしさるは親王は常は何方の御曹司に住給ふにもあれ其日は事の便につきて假に下侍を轉じて御曹司に定らるゝなるべければ也御休所とあるも同じく此下侍の事也されば引入被レ召二親王魯司一とあるはすなはち曹司にて親王の引入を謝し給ふ也故に盃祿の事あり有無不定とあるもこれは必しも朝廷より賜る盃祿ならねばなるべしさて朝廷より賜る方は加冠依レ召着二御前座一とある注に內侍於二廂妻戸下一召二引入一女藏人授二給祿一云々とあるが帝より賜はる御祿也又召二御前一とある下の注に有二酒祿一云々とあるは帝より賜る酒祿なりその以下は事にあづかり給ふ公卿たちをねぎらひ給ふ所の酒祿なりかく見る時はまぎらはしからず但し此物語にあるぢやうは曹司にて御酒給ふより後

に内侍宣旨承り傳へて大臣をめすさまにかゝれたるは西宮抄といさゝか異なり此物語にては彼記に又召二御前一とある所にて内侍の引入をめしたるさま也これは事を記しもてゆくついでによりてかくは書れたる歟或は西宮抄のかた遠へるか猶よく考ふべし

親王たちの御座のすゑに 同〈新〉一世源氏の無位は臣の三位の下に着こと後世のならひなれど此度は別勅にて親王の下大臣の上に着給ふと見えたり花鳥に李部王記延長七年當代の源氏二人元服の時盃酒御遊の間兩源氏四品親王の次に着仰によりて也無位の人なれば親王の次に着べきいはれなき故に別勅有しさまにて如此かけるかと覺えたりとあり〈湖〉源氏元服の時殿上にての盃酒に仰によりて源氏四位親王の次に着座のよし西宮抄にあり

内侍せんじうけ給はり傳へて 同〈新〉既に擧る西宮抄に加冠依レ召着二御前一座一注内侍於二廂妻戸下一召二引入一女藏人授二給祿一下二長橋一不レ着レ沓於二庭前一拜舞云々これに同じく女官の内侍の傳へて大臣を召也さて傳へてといふは職員令に尚侍勅を承て掌侍に傳へて告るよし有是に依るに今のは掌侍の傳へ承りて書て大臣を召をいふ也依てこゝに内侍といふは掌侍也或說に藏人の宣下を内侍宣といふにおもひ誤りたることあり

うへの命婦 同〈玉〉帝のおまへちかくつかうまつる内命婦也弄花に内裏に伺候するを内命婦といふそれを上の命婦といふべしといへるはたがへりこれは外命婦に對へる内命婦のよしにはあらずうへといふはうへみやづかへうへつぼねなどあるうへ也〈釋〉西宮抄に女藏人授二給祿一とある女藏人にあたるべし

大うちき 同〈新〉袷のうちきを二つ重ねたるを大袿といふとおぼしたゞうちき一かさねといふは袷袿一つに單を下にかさねたる也女のうちきに對へて男のを大袿といふと有說はいかにぞや委しく考ぬ說也さてうちきは袴に同じくて裔のあこめよりは長きのみのかはり也

御そ一くだり 同〈新〉御表衣御下襲御表袴と三つをいふべし江次第天皇御元服の祿に太政大臣青色御表衣御下襲表袴と有右に引西宮抄親王御元服の祿に白袿一重御衣一襲大臣加二白橡一と有此御衣一襲と書るは明らかに意得がたし右の江次第のごとく御衣下襲袴などやうに有けんをおとしゝにや云々

長はしよりおりてぶたうし給ふ 廿八丁オ〈釋〉西宮抄に

下二長橋一不レ着レ沓於二庭前一拜舞とあり舞踏は手の舞足の踏をも忘るばかりに辱きよしを表したるもろこしざまの儀禮なり〈餘〉草木子に舞踏唐制也自二武后賜二宋之問一始と見えたり拾芥抄云舞踏事再拜置レ笏立左右左居左右左取レ笏小拜立再拜

左のつかさの御馬 同〈釋〉左馬寮の御馬なり職員令云左馬寮右馬寮准此頭一人掌ㇾ左閑馬調ㇾ習養ㇾ飼供ㇾ御乘ㇾ具義解云謂ㇾ是卽自二內藏寮一所ㇾ給者ㇾ其在二大藏一賞ㇾ賜之料亦同途焉配給穀草及飼部戶口名籍事上云々

藏人所の鷹すゑて 同〈花〉鷹飼は藏人所の所ㇾ掌也近衛隨身さならぬ人も御鷹飼に補せらるむかし出羽陸奥より鷹を貢ぜしも藏人所より奏する也〈弄〉藏人所は禁中仙洞執柄大臣家にもあり殿上の次の間に布障子をへだてゝ藏人所といふ也下の者の候する所なり〈新〉或說に引入の大臣の祿には馬鷹などはかき也限ある事に事をそへ給ふといへる此義歟といへれど今考るに西宮抄親王元服里亭にて有に鷹の事見ゆ吉部秘訓抄にも此例あるよし侍りひたふるになき事ともいひがたしさて令の時鷹主司あり天平寶字八年に廢して放生司をおかる其後ゝ主鷹司をおかれまた後に藏人所にあはせられしなゝよりて今は藏人所の鷹といへり〈釋〉拾芥抄云藏人所在二校書殿一有二別當一左大臣一人頭二人預人八人出納三人小舍人六人有二然食一年官進月奏或云衆十二人有二內官一或所衆廿二人瀧口廿二人或藏人八人五位二人或三人六位六人或五人是皆職事也

をりびつ物こもの 同〈河〉献物也或は籠物葉籠ともいふ籠をくみて薄樣をしきて五菓を入て木の枝或は松に付る也大臣以下これをとり後には膳部に給て調ぜらるゝ也五菓は柑橘栗柿梨〈花〉献物は蟲名なり元服の人の奉る物也其中に籠に入たるをば籠物といふ又折櫃に盛たるもあり親王元服の時は献物あり王卿已下是を取て庭中に列立す第一の大臣一人座にとゞまりて何ぞの物とたづぬれば上首の人奏していはく其たてまつる御贄と申て名物の名を奏す其時大臣仰ていはくかしはでに給へ卽膳部內膳司等すゝみ出てうけとる也一世源氏の元服には献物なきにや但し此物語にはかぎりある事に事を加へさせ給ふとあれば一世源氏の元服なれども親王の時の例をもて献物など右大辨うけ給はりて用意せるにや〈玉〉籠物なり献物にはあらず〈新〉折櫃物籠物なり諸記錄には惣てを稱して献物と

書たる多く又たまゝは外に折櫃をいひて又籠なるをとり分て献物といひしも侍るに似たれどこゝにかくならべいひては籠物てふ説に依べくおぼゆ或説に五菓は松子榧棗榴栗と見ゆ事に隨ひて用ゐらるゝに や○西宮抄裏書に親王元服献物百棒又六十棒などあり **どんじき** 廿九丁オ〔河〕屯食つゝみ食といふもの也下蔀にたまふ飯也云々〔花〕元服の人の本家より諸陣の役者にわかち給ふもの也〔新〕花鳥云云々 西宮抄に見えたり孟津云屯食つゝみいひと訓下蔀に下さるゝ物也などいへど今考るに屯食は幾十具と諸記にしるしたれば器に盛て物に居たるを一具といふべしかつ台記寿日記の條に屯食幾十具裏飯幾百とあれば屯食をツゝミイヒと訓説はわろし屯食は今世に二重の臺といふ物ぞ其遺製ならん **くらうどの少將** 同ウ〔河〕執政息補二藏人少將一例清慎公實頼貞信公一男母宇多院皇女源順子延喜十九年正月廿八日任二左近衛權少將一延長四年二月二十五日補二藏人頭一 **さとのとのは** 卅一丁オ〔花〕榮花物語にかくて大殿十五の宮盛明親王のすゑせ給ひし二條院をいみじくつくらせ給ひてもとより世におもしろき所を御心ゆくかぎり

つくりみがらせ給へば云々今案法興院は二條京極にありもとは二條院と號せるを正暦三年法興院と名をかへられたる也源氏の御里の二條院は是に可レ准にや(釋)これは例の准據なりかゝはりなづむべからず○土にもらしたる西宮記の親王御元服の條をこゝにしるす引合せ見てその大かたをさとるべし **天皇出御。** 垂二母屋御簾一撤二畫御座一鋪二毫代一立二大床子一。 **親王着座。** 東廂南二間敷レ茵所錦疊三枚上敷レ之。有二二人一敷二二枚一。北面元服之時東向。 **引入着二孫庇南二間一。** 依レ召疊一枚置レ茵。二人候鋪二二枚一。第一二間大臣錦端。納言南面茵。本家儲二置加冠具一。親王座頭。唐匣一合。泔坏一口。巽角二階御冠。入二柳筥一。 **理髮着二親王座東一。** 菅圓座。理髮了入二巾子一。候二南小戸前一。 **引入進。** 執レ冠入了。自二座下一着二本座一。有二二人一之時。引入並進。或自二上蔀一進。 **理髮進搔レ髮出了。親王退。引入退。** 親王下二下侍一改レ衣。本家立二四尺屏風三帖一。鋪二地敷茵一。着二黄衣一。 **親王拜。** 入レ自二仙華門一。出二於東庭一。拜舞。 **加冠依レ召着二御前座一。** 内侍於二廂妻戸下一召二引入一。女藏人授二給祿一。下二長橋一不レ着レ沓。於二庭前一拜舞。懸レ頸出二仙華門一。白袿一重。御衣一襲。

大臣加二白櫟御衣一。云々 **理髮給レ祿。** 候二南廊小板敷一。白袿加二阿古女一重。同拜舞。自二仙華門一退出。 **牽出物。** 左右入レ自二北門一。牽二于庭中一。引入取小拜。授二櫳入一。引入出 或引入被レ召二親王曹司一。有二盃祿一。有無不レ定。 **又召二御前一。** 有二酒祿一。或奏見參。 **宣陽殿西廂設レ饗春興殿西庭立二屯食三十具一。** 給二祿男女一。或本家設。 **内藏寮備二酒饌一。賜二王卿殿上人一。本家獻物王卿。** **日下所人執。** 入レ自二北廊一立二御前一。重行人少召二内豎一。屯食所所檢非違使分行。 **王卿候二御前孫廂一。賜二酒肴一。有二樂舞一。** 近衛府奏加冠同候。有二御遊一。供二天酒一。 納言已上白袿。親王同。參議紅。四位或御衣。殿上四位五位衾一條。六位。童。疋絹。樂人同。尚侍白袿。典侍更衣乳母命婦紅袿。掌侍命婦藏人衾。已上后腹儀也 **或叙品。** 后腹三品。親王同レ之。餘四品。

○帚木卷餘釋

名のみことゞゝしう 一丁オ〔新〕此語つゞけてよむべしことゝしうの下にて切はわろし(釋)この説はいかゞ也もししかよび時は名のみといふことうきて聞ゆたゞ光るといふ名のことゝしき事とすべし

いとゞかゝるすき事どもを 同〔玉〕いひけたれ給ふ好色のことが多きに其中にも殊にいたく忍び給へるかくろへ事をさへ也いとゞといひさへといへるを思ふべしかゝるといへる詞はそのかくろへ事をし給ふ時にみづからおぼせる心をいふ語なれば也物語の地よりいふにはあらず云々宗祇注などかゝるすき事といふを物語の地の語と心得たるからいひけたれ給ふとがをば好色の事にはあらざるさまにいへるはひが事也(釋)この小櫛の説は中々にわろきよし補遺にいへるを本文の頭には注したりその方にていはゞいとゞといへるはいひけたれ給ふ他の咎の多きうへにいとゞ也さへといへるは他の咎の多かなるにかゝるかくろへ事をさへ也聞えざるにはあらずさてこれを源氏君のみづからおぼせる心と見られたるはいと〳〵めでたき考なり **なよびかにをかしき事はなくて** 同〔玉〕實にをかしき事なしとにはあらず是はかたの少將などのごときもて出てたはれたる人の見てわらふかたの心よりいへる也 **御ものいみ** 二丁ウ〔玉〕河海に引れたる儀軌の事拾遺にわきまへたるが如しこの儀軌にいへる説は物忌といふ札を簾などにつくる

事あるによりてそれをやがて鬼王の名として造りたるものもいと拙し(釋)儀軌の事不用なれば今は物せず河海また拾遺を見るべし餘滴に禁秘抄を引るはよろしけれどこゝに擧つ但しこれは後世のさまなるべしさて文は本書を考へて引たれば餘滴にひきたるとは異同あり(餘)禁秘抄云御物忌之時惣不レ出御他殿舍中諸事於簾中有レ之或出御廣廂不レ固之時例也云々同記匡房卿江記也云御物忌時初參籠人丑時可レ參レ之云々御物忌數日相續不快例也云々禁中御物忌時諸禮近代公卿參籠極難レ叶仍多不レ重破レ之近代萬事如レ此物忌不レ加御字以レ柳造レ簡三分指御冠纓上御放本鳥時附左御袖書レ紙白云々御物忌諸陣立レ札御殿之御簾毎レ間附物忌書屋紙也外宿人不レ參御前云々諸穢皆大内別司各穢也不レ引禁中禁中穢又不レ引諸司有レ穢モ仰諸陣令レ立レ札云々これらにてその大かたのさまを知るべし **かしこまりもおかず** 三丁オ(新)大臣の君達と一世の源氏とは後世はいとことならぬ樣なれど此文の比まではまだ一世の源氏は貴く有つらんが中に既に元服の宴席の座も大臣の上に源氏着給ふことに書たれば其君達はかしこまるべき理りなるをむつましき御友なれば相いどむなるべしされど終に源氏には物ごとに劣れる意を末々にも書たり **おほどなぶら** 同(餘)延喜式卷七大嘗祭式悠紀主基二國進御殿油二斗と見ゆ此外物語ぶみにあまた見えたり云々 **はづかしげなれば** 五丁オ(餘)この注に頭中將の體なりとばかりかけるはことたらず此はづかしげをよく解えたる人なし此書の中に見えたるは初音卷にかきまぜつゝあるをとりて見給ひつゝほゝゑみ給へるはづかしげなり夢浮橋卷に涙ぐまれぬるを猶僧都のはづかしげなるにかくまでみゆべきことかはと思ひかへして手習卷にさならんともしらずながらはづかしげなる人にうち出の給はせんもつゝましくをとめの卷に子ながらもはづかしげにおはする人ざまなればまはならず見え奉り給ふ清少納言にかぢすこしして いかにさわやかになり給へりやとて打ゑみたるもはづかしげなりこれらにてしるべしその人の德にかたはらの人の恥るなり古今俳諧何をして身のいたづらになりぬらん年のおもはん事ぞやさしき契沖云やさしきははづかしき也心ある人をやさしきといふは向

ひてまみえんも心づかひせられてはづかしき人といふ心なればこなたの心をかなたに名づくる也云々とありさればやさしきの同じかることは年のおもはん事ぞやさしき世中をうしとやさしと思へどもなどの歌にて心うべき也 **品さだまりたる中にも** 七丁ウ(新)惣ての國の守は一わたり品定まりたれど大國小國によりて位もことなりそれはおきてこゝは右のなり昇りなり下りたるが類にていふ時は大臣の末にて前播磨守なる明石入道の女中納言の子にて伊豫守の妻となれる空蟬君など也又惟光が女も既に宰相までなりたる上なれば中の品には入べしされどこゝはなり下りたる方にて專らいふと見ゆれば上の方につきていふべき也 **ころはひなり** 同(玉)當時のさまをいふ也又はどゝいふ意にて受領の分際をさしていへるごとくにも聞ゆれど上よりの語のはこびを思ふになほ然にはあらじ **なま〳〵のかんだちめ** 同(玉)花鳥に物のなまなりなる心とあるは言の本の意にはかなふべし始めて公卿になりたる家とあるはいたくたがへりそはなまなりより出たるひがこと也たみ詞にもとは筋目なき人の公卿になりたるをいふといへるも同じひがこと也(新)なまとは物の熟せぬを云ことは先凡家がら高からぬ人は參議の公卿とならずされど時を得て三位の上達部には至れども寄かろくて勢なし非參議の四位とは終に大臣ともなるべき家の子のまだ四位の大辨にてあるほどをいひて即非參議の四位とは四位大辨をいふ名目也しかれば家がら高くておのづから勢も富もなま〳〵の上達部の及ぶ事ならず是はおとゝへたるならで盛まつほどの淺官の人の女なればおとしめがたき也 **非參議の四位** 同(釋)近藤芳樹云三位にも四位にも非參議あれども三位にての非參議は公卿補任の所見前官か散三位か也四位の非參議はいまだ參議にはならざれども大辨藏人頭衞府督などの顯職に居て宰相にすゝむべき途すでにしるき人々をいふされば左とへ位は三位にても齡のほどやゝたけて昇進のおぼつかなきかた〳〵はみなま〳〵の上達部也夕顔卷に父は三位の中將にてなんおはせしわが身のほどのおぼつかなさをとあるは三位にておはしながらまだ參議にもえなり給はぬをなげき給ふよしにてこれらをなま〳〵の上達部といふ但攝關大臣の御子達に非參議の三位のあるを

殿の三位中將などいひて諸書に見えたるはやがて此源氏の君頭中將などにひとしき御方々にて品定の内には引出べからぬかみの品なれば別也同じ三位の非參議にてもかくけぢめある事也又四位の非參議にても竹川卷に左の大殿の宰相中將大饗のまたの日ゆふつけてこゝにまゐり給へり云々右兵衛右大辨にてみな非參議なるをうれはしとおもへりとあるはこゝの非參議の四位とは少し意かはれりこれは鬚黑のながらへ給ひて家門おとろへずは子共もその蔭にて左大殿の宰相中將と同じなみにすゝみ居んものをと玉がつらの君のなげき給ふよしをいへる也云々さればかく非參議の四位にても世をうれふるもありまたかはらかにもてなしふるまふもありてさま〳〵なればよく〳〵文義をあぢはひてあげつらふべきこと也されど三位の非參議に攝關大臣の御子たちの外さらに世のおぼえくちをしからずといふきはの人はあるべきならねばこの文青表紙に三字なきを正しとすべきなり」といへりなほ委しく寄居歌談に見ゆ本文には玉小櫛を注したれども此說いとこまやかなれば隨ふべし新釋に四位の大辨にかぎりていはれたるはよろしからず　**こと人のいはんやうに**　八丁ォ〔新〕源氏は何の意もなく右の論どもにつきてにぎはゝしく富るかたによるべきなりけりと戯れてのたまふを上の宮づかへに出て幸ありといふは御母更衣にちかくはた打あひてよろしく又自然にわろきふしはかくるゝなどいふは頭中將のかたなどにあたれば中將は耳とどめてにくゝおもふとなり心得ず仰せらるゝなどいふ詞にてしらるしかればこゝにて一段きれて又そのやんことなきがおとれることを書るは馬頭も右の源の語をとりなほし論ずる意なるべし〔餘〕末摘花卷にこと人のいはんやうに咎なあらはされそと有こゝは中の品の女のうへなどは源のしらせ給ふべきにあらねばくちいれ給ふべきにあらずと思ひてしかいへるにや〔釋〕案に新釋の說委しきやうなれどさてはあぢきなし餘瀋に引たる末摘花卷の詞は畢竟他人がまし といふ意なりこゝもその意にて源氏君は帝の御子にてかつ左大臣殿の婿なればこの上もなくにぎはゝしく富榮え給へるをそれしらぬ他人のいはんやうにぎはゝしきによるべきなど心得ずげに仰らるゝとてかりに憎むといふまでにて中將のわが方の事或は桐

壺更衣の事など思はれたる意にはあらずもしそれしかいはゝ源氏君の心の底にあたる所ありていといひにくき情景となるべしよく〳〵前後の勢ひをあぢはふべし餘瀋の說は心得ずしてといふ意に見たるならめどひがことなり　**さらにるいはず**　同ウ〔玉〕此詞は次のうちあひてすぐれたらんも云々心もおどろくまじとある下へかけて心得べしさやうの品の人は何事も打あひてすぐれたらんももとより然るべきことなればめづらしからぬをましておくれたらんはさらにもいはずいふかひなくおぼゆべしと也〔釋〕此說はまさらはしこゝはよく聞えたる所にてさるやんことなきあたりの内々のけはひのおくれたらんは殊更に論ずるにも及ばずといふ意をさらにもいはずとはいへる也さる故に何をしてかくおひ出けんといふかひなくおぼゆべしとことわりたる也打あひてすぐれたらんもことわりとはさる品の人は何事も打あひてすぐれたらんも尤しかあるべきこと也といふ意をことわりといへるにて文の抑揚よく意貫きたるところなるをや　**うちあひてすぐれたらんも云々**　同〔玉〕上にひへる條々は或はもとのしなはよけれども時代のおぼえなく或はときよのおぼえはあれどももとのしなわろきなどをいへるをこれはともに打あひてよきをいへるにてこれもなほ中の品の一種也上が上の品をいへるにはあらず思ひまがふることなかれもとの品とは家がらのよきをいふ也もとのといふに心をつくべしやむことなきといふももとの品と時代のおぼえとうちあひたるをいふ也上が上のよしにはあらずされば これを女三宮にあたれり薄雲にあたれりなどいへるはかなはず〔釋〕此說いはれたることなれどこれをなほ中の品の一種也といはれたるは心得ず上が上の品の事也もとの品とは種姓のよきをいへるにて家がらの事にはあらず血脈の事也もとのといふに心をつくべしといはれつれどこゝにもとのといへるは上に「もとよりさるべきすぢならぬはといひ又「もとはやんことなきすぢなれどゝいへるをうけていふ所なる故にもとのとはいへるにてもとはよかりしがおとろへて後に又時世のおぼえあるをいふにはあらずもとより種姓の貴きをいへる也さてさる貴き人も時代のおぼえなくてはあかぬ事なるをそれも打あひてやんことなきなれば此上もなく貴きをいふにて上

が上なる事論なしされば次の詞に上が上はうちおき侍りぬとことわりたる也此一語にても上が上の事なるをしるべし女三宮にあたれり薄雲にあたれりなどいふ注はしかあてたる事こそはよからねど上が上としたる品はげにさばかりのあたりの事なるべし　**上が上は打おき侍りぬ**　同〈玉〉まづ此品定は皆中の品の事にして上が上と下が下とはあづからざることをしるべしはじめに中將の詞に人の品たかくうまれぬれば云々中の品になん云々下のきざみといふきはになれば云々此語のやうを思ふにもはら中の品を論ずべき下がまへに書るもの也かくて中の品の事をいふうちにおのづから上と下との心ばへもこもりてある也云々(釋)案に此說もいかゞ也中の品を專らといふ論にはあれど始より終までみな中の品の事にはあらぬをいかに思ひまがへられけん此一語をもて此品定をみな中の品と定められたれどこゝまでの論は上が上の品なる故にこゝにてかくことわりてさしおきたる也さて又此次の條に「世にありと人にしられずさびしくあばれたらんむぐらの門にといひ「父の年おいものむつかしげにふとりよき云々といへるなどは下が下の品ならずして何とかせんされば「かたかどにてもいかゞ思ひの外にをかしからざらんとつよく論じまたすぐれて疵なきかたのえらびにこそおよばざらめなどいへるみな下が下を論ずる詞なりこれをもおしくるめて中の品とせられたるはいかにぞやはじめに中將の詞に云々とあるをもて中の品を論ずべき下がまへに書るものなりといはれたるはさることなれどかく三つにいひ分てるにてもなか〳〵に上中下三つの品をいふことゝは聞えたるをやとにかくに中の品のみの事にはあらずとしるべし　**しろき御衣**　九丁オ〈弄〉御そとは先きぬをいへり但衣裳の惣名をいへる所もあるべし〈新〉みそとは服をすべていへどこゝは御下着の單襦(アコメ)などの白きをいふ也一條院の比よりは小袖てふ物も出こしといへどなゝかなるとあるからは小袖にはあらじ　**なほしばかり**　同〈孟〉下がさねをばぬぎて直衣ばかりをめしたる體也白衣にてはましまさずと逍遙院說(也)云々〈細〉夜陰なれば知音の中にては指貫を略して直衣ばかり引かくる事勿論なるよし一條禪閤の說也然れども直衣には必下にきぬをかさぬる物也こゝにはきぬをかさねざる

をなほしばかりとはいふか指貫を略する說はあまりなるか云々〈新〉下がさねをばぬぎて單などの上に直衣のみ着給へるをいふならんさしぬきもなくてなどいふはいかゞ也末に右大臣殿へおはする時なほしに下がさねの尻長く引て有しをおほきみすがたといひたり此時のみならず常にも御門の御前へ出給ふ時など常の晝のさうぞくは直衣に下襲ならんさらば下がさねを去たるを直衣ばかりといふべし　**女にて見奉らまほし**　同〈餘〉紙注我女になりて見奉らば猶無類なるべき義歟此說非なりこゝは源氏君のしどけなくおはしてもとよりうつくしきかたちし給へるをほめて女ともいはまし女なりともかばかりなるは上の品なるべしといへる也紅葉賀卷にも女にて見ばやと有そこにても細流孟津の說あやまりとさたり繪合卷にも限の御さま女にて見奉らまほしと有みなこゝと同じ其證をいはゞ榊の卷に藤壺の尼になり給はんとて御子の冷泉院へ參り給ふ時に冷泉院の御かたちをあげいへる所に云々ゑみ給へるかをりうつくしきは女にて見奉らまほしうきよらなりと有冷泉院のいときなきさまのうつくしくて女子となして見奉るともにげなからずといへる也皆うつくしきすがたをほめていへる也見る人のみづからの女になりて源氏にむかひたく思ふ也ととけるはいとおろかなる書の見ざま也云々〈玉補〉江戸人石川雅望が源注餘滴に云此語いづくにありても皆その人を女にしてといふ事也わが女になるにはあらずといへりされど葵の卷に女にては見すてゝなくならんたましひ必とまりなんかし又榊の卷に藤壺の宮の東宮の御事をばの給ふ事あるなどを見れば此說ひがこと也(釋)餘滴の說をかしきが如くなれどなほ補遺に辨へたるごとくなるべし冷泉院の幼きほどに申せるもたゞうつくしきかたを主と書る所なればぞかしこれによりて其證とはなしがたし補遺に引る葵卷のかたたしか也そのうへ女にてといへる語はおのづから然るてにをはにて女に爲てといふ意にはならぬ物をやおのれも始は女にしての意とおもへりしかどいとわろかりき　**あふさきるさにて**　十丁オ〈河〉古今集俳諧歌　そへにとてとすればかゝりかくすればあないひしらずあふさきるさに(釋)この歌いかなる事をよめりとも聞えがたけれど一わたりいはゞそへにとては舊說に領狀する事をそ

いにといふといへる意とは聞えたり俗言にさうじやといふてといふ意也さて人の物する事をそへにといひて左すれば右あり右すれば又左ありといふ意をつづめてさてあないひしらぬまでわづらはしと歎息たるにつゞけていへりと聞ゆあふさきるさは餘滴に引る往左來左などのごとく合にも離るにもといふ意にてさは往左來左の左と同じ意也諸抄にあふきるといふ語をたゞに往來といふことにしてとけるは言の本にかなはずひがこと也さて此歌をこゝに引出てたらはであしかるべき大事はかた〴〵にあれどかのあふさきるさにといひけんやうに一事よければ一事あしくなのめながらにさてあるべき女はいと〳〵少きを云云といふ意にひゞかせたる也此歌をかくとかざれば本文の意聞えぬを諸抄に其さだなきはいとおろそかも也新釋にそへにとて添荷といはれたるはいみじきひがこと也(餘)萬葉三白菅之眞野乃榛原往左來左君こそ見らめ眞野の榛原このさはさま也といへり散木集恨レ躬恥レ運雜歌百首今よりはうれしからせよおしかへてあふさきるさの我身とおもはん　**すみつきほのかに心もとなくおもはせ**　十一丁オ(餘)詞をえらびかすめてかける故によむ人その心を得ずこゝろいられしてとく其ふみのこゝろをしらばやといらちおもふをこゝろもとなしとかける也　**さやかにも見てしがなと**　同(餘)このふみのかうおぼつかなきをかくはあらであざやかにつゝまずかきたるをもみまほしと思へどせんすべなきまでにうちすてゝ女のおくをいへるなり　**みゝはさみがちに**　十三丁オ(餘)うつぼ物語藏ひらきの卷にしろきあやの御そを奉りてみゝはさみをしてまどひおはすと有又横笛の卷にもみゝはさみしてそゝくりつくろひていだきてね給へりと有紫式部家集にやよひのついたち川原に出たるにかたはらなる車に法師のかみをかうふりにてはかせだちをるをみて「はらへどのかみのかざりもみてやらにうたてもまがふみゝはさみ哉としるせりこれによりてみゝはさみといふ物は別にある物なるべしとひさしく思ひゐたるに圓光大師の剃髪の所を系がきたるを見るに耳に袋のごときかたちの物をはさみてゐり是いにしへにいへるみゝはさみなるべしむかしの女は髪をたれて有ければかはに髪のかゝらざる爲にかゝる物を用ゐたりとみゆ(釋)此說はいみじきひがこと也頭書に擧たる玉小櫛のごとくなるべしみゝはさみといふ物の別に有しことは何の書にも見えぬ事也引たる紫式部集の意は法師の髪なき故に紙を冠にして博士めきてあるををかしく思ひて戲れたるなりみゝはさみかなとよめるはかの冠を耳にはさみてとめたるを髪ある人の耳はさみするさまにいひなして戲れたる也さればこれをもて證とせんことはいとあぢきなし(玉)或物語にわかけれどすこしもはぢらひたることなくみゝはさみして云々といへりこの物がたり題號に正三位とあれども此名はうけがたし　**ひさうなきいへとうじ**　同(拾)今按無二美相一主人母といふなるべし遊仙窟に主人母をいへとじと點ぜり六帖第五の題に家童子をおもふとあるをある人流布の印本に他のかきたる本にて校合したるには假字にてとじとあり日本紀第十三に允恭天皇の后忍坂大中姫いまだをとめにて母の御許におはしましける時鬪鷄國造と申ものゝとじと呼まぬらせけるをはら立てふづくませ給へる事ありそこに戸母此云二覩自一とあれば家をまかなひをさむる以上の老女をいふ故に腹たゝせ給へるなり和名抄負俗作刀自劉向列女傳云古語老母爲レ負漢書五娼武負佐引之今按俗人謂二老女一爲レ負字從レ自也今訛以レ貝爲レ自歟今案和名度之萬葉の一に吹黃刀自おなじく四には坂上郎女が娘におくる歌にわが子の刀自とよめれば老少に通じていへり家童子とわろく心得たるより六帖にも後人眞名に書る歟とじをとうじといへるは音便なるべし(新)いにしへは只とじと云て戸は即ひとつの家をいひじは主の略にて宮主といふがごとくなりしを中頃より又家てふ語を上にそへていふは俗になれるもの也云々　**うちもゑまれ涙もさしぐみ**　同ゥ(新)これは語りも合せばやとてつゞきたれば其女のいふかひなきを打わらはれ又かゝるものと相すむくちをしさに泪ぐまるゝといふなるべしさなくてはいひつゞけたる意通らぬが上に次にうちそむかれて人しれぬ思ひ出わらひもせられあはれとも打ひとりごたるといふ詞其妻の事を笑ふならば思ひ出といふべからず是を思ふにこゝは却て其愚なる女をあざけりゑまるゝにて次なるは公私に有し事を思ひ出て獨笑し獨歎といふなるべし又上も下も同く世に有し事をかたり合せんよしなければ思ひいでゝ笑ひもあはれともいふにて同じきに似

て少しことなるを二つ擧たりとせんかされど上の詞のつゞきはさとも聞えず(釋)この說いかゞ玉小櫛にもかうやうにとかれたれどなほいかゞ也こゝの意は朝夕の出入につけても公私の事につけてもよきあしき事の耳にも目にもとまる有さまを思ひて打ゑまれ涙ぐまれもしは何となく腹立しく思ひあまる事の多かるをうとき人にわざと打まねばんやは近く見ん妻にかたりもあはせばやと思ふにきゝわき思ひしる事もなければ何にかは聞せんと思ふにつけておのづから打そむかれて人しれぬ思ひ出わらひもせられわはれとも打ひとりごたるゝに其妻の心を得ずて何事ぞなどいひてあわつかにさし仰ぎ居たらんはいかゞはくちをしからざらんといふ意なるをかくあやなしていへるは例の文法にていとめでたしかたりもあはせばやと心ひとつに思ひ餘る事など多かるをとつゞく語脉の中に其事のさまを挿みたる法なり心を付べし然るをよのつねのごとく上よりつゞ〳〵と書たるやうに見られたる故にかゝる說は出こし也其妻のいふかひなきを笑ふといはれたるはさる事ながら相すむくちをしさに泪ぐまるとあるは言の意過たるべし又其妻の事を笑ふならば思ひ出といふべからずといはれたるはさることのごとくなればこれは公私の事の耳目にあまる事を思ひ出るにもあるべし然れども其妻のいふかひなくさし仰きゐたるさまのをかしきを見て人にかたらふべき事にもあらねば人しれず思ひ出笑ひをする意としてもきこえぬことはなしあはれと打ひとりごたるゝは其妻のいふかひなきと相すむことを歎息する意なりかたりもあはせばやとゝいふ語よりつゞきたればといはれたれどこゝはいはゆる隔句法なること上にいへるがごとし然れどもかたはらつゞきたる語の意は耳目にとまることのよきあしきをかたらはゞやと思ひてがたらぬさきより打ゑまれ泪ぐまれといふ意としていとよく聞えたるをやそのうへ涙もさしぐみもしは云々思ひあまることなど多かるをといふ勢ひみな一つことをさしたりと聞えてさらに別に妻のことをいへりとは聞えずもしこの說どものごとくならんには涙もさしくみにて暫く句(すい)て何にかは云々へかゝる語としもしはは上の耳にも目にもとまるありさまをといふより受たる語とせでは語の脉とはりがたし然れどもありさまをうとき人

にとつゞきたる勢さらにさやうには聞えがたし見ん人よく〳〵思ひわかつべしさて又上も下も同じく世に有し事を云々といはれたる說はまさりたるを詞のつゞきはさとも聞えずとあるは中々にひがこと也

さしぐみ 同〔拾〕後撰にいにしへの野中の清水見るからにさしぐむ物はなみだなりけり(釋)此歌は類例までなり引歌とは心得べからず **おほやけばらたゝしく** 同〔玉〕枕冊子にあさましうおほやけばらたちてけんぞくのこゝちも心うく見ゆべけれど身のうへにてはつゆ心ぐるしきを思ひしらぬよ紫式部日記にすゞろに心やましうおほやけばらとかよからぬ人のいふやうにくゝこそ思ひ給へられしか榮華物語見はてぬ夢卷にげにはおほやけばらたゝれけるなど見えたりあやなきことは我身にあづからぬ事に腹たつをもて云る也云々 **思ひ出わらひもせられ** 同〔玉〕有し事を心のうちに思ひ出してわらふをいふこゝは心ひとつに思ひ餘る事の中に笑ふべき事を思ひ出してはわらひもする也思ひあまる事は必しもうき事かなしき事などにはかぎらずあやしき事をかしき事などにても心にあまりて人にかたらまほしき事はあるなり宗祇注にくちをしく思ふ相手などを云々といへるはひがこと也 **あはれとも打ひとりごたるゝに** 同〔玉〕これは思ひ餘る事どもの中に歎息すべき事どもを思ひては歎息する也さて人しれぬといひひとりごたるといへる皆妻に語りてもかひなかるべきが故也宗祇注にあはれ我身が云々といへる又ひがこと也何事とさしていふべきにあらず(釋)こゝは此說のごとくにても聞ゆべし然れども上にもいへるごとくうちもゑまれ涙もさしぐみ云々とあるが其事なればこゝは妻のかひなきを笑ひなげくなるべし見ん人えらびてとるべし **物語よみしをきゝて** 十五丁オ〔拾〕今按大和物語に平仲が色好みけるさかりにといふより男ぞよにいみじき事にしけるといふまでの武藏が事の一段こゝに似たり〔新〕此條はいせ物語の男の家を出たる女心かろしといひやせんとよみて出しに又有しよりけにいひかはせしが終には中ぞらに浮たる雲のごとくてはなれはてたると又有常のめの尼になりてわかれしなどをかねてそれに事をそへて書たりと見ゆ〔餘〕これは大和物語に平仲がむさしの守の女をよばひてさてあひて後いかざりければ女うら

みわびてこもりゐてつかふ人にも見せで尼になりけるを平仲聞てゆきけれどぬりごめにかくれていらへをだにせねばことの有やうをつかふ人々にいひてなきけるよしかの物語に有こと長ければこゝにいはず蜻蛉日記にもさることゝ見えたりこゝに物語よみしと有はこれなどにやあらん(釋)げにかやうの事を思ひてなるべし然れどもしひてかゝはりていふはわろしかゝる事は何の物語にも多き事なれば昔物語よみしを聞てしか思ひしといふばかりに心得て有べし **ごだち** 十六丁オ(拾)御等といふ意なるべし本朝文粹第一慰二少男女一詩 菅徒跳弾レ琴者閭巷稱二弁御一 注ニ俗謂二貴女一爲レ御蓋取二貴人女御之義一也何御といふたぐひ貴女よりおこりてさらぬにもいへり **ひたひおあをかきさぐりて** 同(新)いにしへはそぎ尼として髪の末をそぎたり額髪をばことに短くそぐ故にいふといへど額髪を殊に短くせし事何の證あるにやおぼつかなし思ふに是はくやしき時頭かくてふ事を本にてかのそぎたる髪のくやしさを思はせてかく書るのみなるべく覺ゆ **うちひそみぬかし** 同(拾)萬葉第四に百年爾老舌出而與餘牟とも我はいとはじ戀はますとも 家持 これを六帖第二おむな題なり老女の事なり女にはあらず の題においくちひそみなりぬとも我は忘れじと引なほして入たりゝむとは下にかをる大將のいときなき時たかんなをつと握りてしづくもよゝにくひぬらし給へりとあるに合せて案ずればよだれをたるゝをいふか云々(新)これは泣ときの口つきをいふ萬葉に云々てふ歌を六帖に云々とよみて有萬葉にては只おいじた出てとよむ事にて六帖はよみ違へなれどまた口ひそむてふ事のあれば語例にはすべし或人まゆをひそむといひ又老舌出を遊仙窟にありといふもわろし **にごりにしめる** 同(餘)古今集夏蓮葉のにごりにしまぬこゝろもてなにかはつゆを玉とあざむく **やがてあひそひてうらめしきふしあらざらんやあしくもよくも** 同ゥ(拾)今按注に此二十七字異本になしといへりなきは落たるなり其故はあまにもなさでたづねとりたらんもやがてあひそひてとあらんをりもかからんきざみをも見すぐしたらん中こそちぎりふかくあはれならめとはことわりのつゞかぬなり猶おもふにやがてそのといふ下にをりなどいふことの落たらんにや(玉)一本にやがての下にあひそひてといふ

五もじのあるぞよろしき此詞なくてはやがてといふことと聞えず湖月の本に此言なきは同言の下にもある故にわづらはしと思ひてさかしらにはぶけるにや又一本にその思ひ出といふよりあしくもよくもといふまで廿七もじのなきはあひそひてといふ詞の二つあるによりてその中間の語を見おとしておちたるなり此語どもゝなくては聞えずやがてあひそひてとは一たびそむきし後男の心のなごむべきふしもなくてそむきしまゝにて又かへりてあひそふ也その思ひ出はさきにそむきて家を出しことを思ひ出るをいふ(釋)右の說どもさることなれどかくながらにても聞えたり拾遺にやがてそのといふ下にをりなどいふことの落たらんかとあるはそのをりの思ひ出といふ事なるべければこれはおだやか也小櫛にやがての下にあひそひてといふ五もじのあるぞよろしきとあるは理はさることなれど文づらむげに手づゝに聞ゆいくたびもよみあぢはひて考へしるべし此語のこゝにある本は下の語よりまぎれて衍りたる也やがてといふ詞聞えずといはれたれどこれは例の隔てゝ係る文法にてやがてうらめしきとつゞく意也されば今はもとのまにしてあひそひてといふ事は省きつ又案に此下のわれも人もうしろめたく心おかれじやはといふ語は上下に緣なくはなれて聞ゆもしくはたづねとりたらんもの下に此句のありてさてやがてその思ひ出云々とつゞきたるを此所いたくみだれて寫しひがめたるを後に補ふとてかく入ちがへたるにはあらじかもし然らば事の意貫きて聞ゆべしとにかくにこゝの落着はあしくもよくもあひそひて云々ちぎりふかくあはれならめといふ所なれば其下に又立かへりてわれも人も云々といふべくはおぼえされば猶よく考ふべし **なほじちになんよりける** 二十丁ゥ(玉)三つのたとへ皆同じ意にて女のけしきばめるうはべのなさけと實なるとのたとへ也注にその實なる方のたとへを本妻たるべき女のたとへなどあるは意たがへり又宗祇注に源氏君頭中將は世をなつりぞち給ふべき云々といへれどさる意はなしとにかくにしひてから書の意にかなへんとするはむかしのものしり人のあぢきなきくせなりかし(釋)こゝにいはれたるごとく三つのたとへはざればみたると實なるとのたとへにはあれどその實なるが本妻となるべき意をいふなれ

ばつひにはたがふことなしさてこの實によるといふ事品定の中のむねとある所なる故にかく三つのたとへを擧て何のうへにもたがふまじく萬の事皆かく有べきことわりをくりかへしねんごろにいひ定めたる也

つらづゑをつきて 同〔餘〕伊勢集よもすがら物思ふ時のつらづゑはかひなたるさぞしられざりけり古今集俳諧大輔なげきこる山とし高くなりぬればつらづゑのみぞまづつかれける契沖云貫之集にことしげき心よりさく物思ひの花の枝をばつらづゑにつく

人なみ〳〵にもなり 廿二丁ウ〔拾〕萬葉十八大伴家持敎ニ喻史生尾張少咋ニ歌の中に云ちさの花さけるさかりにはしきよしそのつまのことあさよひにゑみみゑまずみうちなげきかたりけまくはとこしへにかくしもあらめや天地の神ことよせて春花のさかりもあらんとまたしけん時のさかりぞ云々こゝに似たり

歌手を折て云々 廿三丁ウ〔新〕意は指を折て物をかぞふる也さて指をかゞめてといふをそへたりさて上句は伊勢物語の句を皆用ゐたり惣て物語ぶみにはかくのごとくするを興とする也其伊勢物語に先古歌を詞をかへ又上句と下句と別の古歌をよせなどして作れるを始として此文をも作れる事なるべし〔釋〕古歌を用ゐたりといはれたるはさることなれどこゝは指をかゞめてといふ詞の緣よりかの句を用ゐたるまでにて下句をいたく轉してこゝの意ををかしくいひなしたるがめでたき也さるを古歌をとり合せたる例のやうに此文をも評ぜられたるはあたらぬ事也〔玉〕やはゝたゞやの意也やといふべきをやはといへる例多し君がうきふしは女の馬頭をうしと思ふべきふし也一首の意は指を折て逢見そめしよりこなたの年月をかぞへて其間の事を思ふに君が我をうしと思ふべき事はたゞ此度の一ふしのみこそはあらめ外にはなしと也次の言にえ恨みじといふも此意にてこそたしかなれ注は誤なりもし四の句これのみならずの意ならばこれ一つかはとこそ有べけれやはといふべき語にあらず古人の歌にさやうのつたなきことはなきなり〔釋〕舊說のひがことなるよしは小櫛に辨へられたるがごとしさて小櫛の說も猶いかゞ也これ一つとさしたる詞は此度の一ふしをさしていへりとは聞えずすべてこれなどいふ時は一つの物をとらへてさす語の例なれば一時の事としては似つかはしからずなほ嫉妬をさしていへりとぞ聞ゆるえ恨みじといへるも馬頭が女に對ひていふに女の馬頭をえ恨みじといふ意としては事がらの情穩かならずよく〳〵味ひ考ふべしさてうきふしといへるは馬頭が心にうしと思ひたるふしと見るべしさらばえ恨みじといへるも馬頭が女をえ恨みじといふ意となりて事なく聞ゆるなりずといはずしてじとしもいへるは女の方を推量りていへるやうにも聞ゆれど猶さにはあらじ俗言にユメユメ恨ミハスマイといふ意なればさても聞ゆる也

りんじのまつり 廿四丁オ〔餘〕大鏡五十九代寬平十一月廿五日のほどにかものみやしろのへんに鷹つかひあそびありきけるにかの明神たくせんし給ひけるやう此へんに侍る翁なりはるは祭おほく侍り冬のいみじくつれ〴〵なるに祭り給はらんと申給へば云々おのれはちからおよび候はずおほやけに申させ給へと申させ給へば云々かいけつやうにうせ給ひぬいかなることにかとこゝろえずおぼしめしけるほどにかく位につかせ給へりければりんじのまつりせさせたまへるぞかしかもの明神のたくせんして祭せさせ給へと申させ給ふ日西の日にて侍りければやがて霜月のはての酉の日臨時の侍るぞかし云々

はかなき花紅葉といふも云々 廿七丁ウ〔玉〕上文頭書ニ擧タリをりふしの色あひとは花紅葉はもはら色をめづる物なる故にいへるにこそあれ人の物染る色のくらべ物にいへるにはあらずこゝは上にはかなきあだ事をもまことの大事をも云々といふよりそのかたもぐしてといふまでをすべてうけて花紅葉をくらべ物にいへるなりこれを唯物染る事のみのくらべ物としては次の語にさるによりかたき世ぞとは云々といへること似つかはしからず物染ることのつたなからんばかりをばかくはいふべきにあらず女の身のうへのすべての事としてこそ次の此語もよくかなへれ又たみ詞の此あたりの說もひがこと也

かたき世ぞとは云々 同〔玉〕此所湖月又たみ詞などすべての意を誤れるによりてひがことと多しかの女の早くうせて契のみとかゝゆし事を難としていへるはたがへり又或說に嫉妬の深かりしを難としていへるもたがへりこゝは彼女の事はもはらほめたる所にて難の方をいへる所にはあらず定めかねたりといふはかの女の如く大かた何事もたらひたるは有がたき世中なる故に定めかねたるよし也次の

詞にいひはやし給ふとあるを以てかの女をばもはらほめたるにて難の方をいへるにはあらざることをしるべしさて文湖月に世は定めがたき物ぞとゝいへるもいみじきひがこと也定めがたきは女の事にこそあれ世の事にはあらずつひのよるべとも定むべき女は有がたき世中なる故に定めがたき也　**この人のいふやう云々心ぐるしきとて**　廿八丁ウ〔玉〕これは馬頭が木枯女の家に立よらむと思ひて殿上人にいふ語なり然るを昔よりこれを殿上人の語と心得たるはいかがさては此所聞えがたしさればこの人のいふやうとあるはもとこの人にと有けんを殿上人の語と心得たる人のにをのに改めたるかはたのと誤りたるから殿上人の語と心得たるにも有べしもしこれを殿上人の語とする時は下にもとゝりさる心をかはせるにや有けむといへる事たがへり其故は待やどのあると初にいひたらんには心かはせるはもとよりの事なればにや有けんなど疑ふべくもあらずそのうへこれ殿上人の語にてはとてといふ辭も下にかゝる所なしおのれもさきには殿上人の語と心得て此とての下にそなたざまに物するになどいふ詞の落たるかと思へりしをなほよく考ふればとにかくに殿上人の語にてはかなはず馬頭が語にてとては下の下り侍りぬかしといふへかゝれる辭なり殿上人に云々といひて車よりおるるなりさればこの語はさすがにてといふ下へうつして心得べし(釋)この小櫛の說珍らしきやうなれど猶つら〳〵考ふるに殿上人の語なり其故はまづこの車にとあるは馬頭が車あひのりて侍ればとあるはうへ人なること論なしさて大納言の家にまかりとまらんとするにとあるは馬頭なればこの人にいふやうとありては語つゞかずもしこの人にの意とせばまかりとまらんとしてなどなくてはとゝのひがだし下にもとよりさる心をかはせるにやありけんといへることたがへりといはれつれどさもあらず人待らんやどのあるといひたるは殿上人の馬頭が車に相乘てゆく道のほどの物語と聞えたれば馬頭はその待らんやどを何處とも知るべきやうなし下にてしかいへるは既に殿上人の車よりおりてこの女の家に入て簀子だつ物に尻かけたるを見てはじめてこの殿上人と木枯女と心をかはせる事をさとりてさては今宵のみならず元來心をかはせるにやありけんと思ひたるなれば難なし

又とてといふ辭も下にかゝる所なしといはれたれど殿上人の語としてもとては同く下侍りぬかしへ係る也侍りぬといへるは馬頭めきて聞ゆるやうなれどこれは源氏君頭中將などに對ひて語り申す敬ひ詞なれば論なし上にもあひのりて侍ればとあるも殿上人の事なればしかいふべき例なりかしといふ辭もわがうへにては用なく聞ゆるを思ふべしさればかた〴〵殿上人の語といふかた穩かなり但月たにやどるすみかをすぎんもさすがにてといへるは馬頭が思へる心めきても聞ゆれば此あたりに必脫文はあるなるべしとての下にそなたざまに物するになどいふ詞の落たるかといはれたるはさもや有べきもし然らばおり侍りぬといふ語は馬頭のうへとなるべしされど正しくさなりともおぼえずすべて此一段は殊にかすめたる筆つきにていとなきらはしきをなほ試にそのさまをいはゝ上に忍びて心かよはせる人ぞ有けらしといへるは後に此段を語らんとての結構なれば重りたるにはあらずさて神無月のころほひ云々といふよりこの物語の始なるが馬頭が內裏より退出るに或殿上人來會て馬頭が車を乞て相乘しつかくてなにがしの大納言といふ人の家にて行とまらんとしてゆくにこの殿上人のいふやう今よひ云々といひて車より下侍りぬといふ中間にこの女の家のけしきを挿みて語れるなり大納言の家にまかりとまらんとするにといへるは大納言の家の門にて車をとめんとするやうにも聞ゆれどこの女の家はたよきぬ道なりければとあるは大納言の家までゆくによけられぬ道の家なればといふ意なるべければなほ大納言の家にゆきてとまらんとてゆくみちのことゝすべしさて女の家の前を過んもさすがにて馬頭も立よらんと思ふうちに殿上人のまづ下て內に入て簀子だつ物にしりかけて月を見たるなるべし此所の文ざばかりくはしくは聞えねど前後のさまをおして思ふにさる意と聞ゆさてこの殿上人の先車よりおりて入るを見てもとよりさるこゝろをかはせるならんと馬頭のさとりたるなりさてこの時馬頭はもろともにおりて物かげなどよりうかゝひ見たるか或は又車に在ながら見聞したるか其ありさまを省ける故に今少しまぎらはしされど女の體馬頭が來れる事はつゆもしらぬさまなれば馬頭は外にありてかいまみたる事は著く聞えたりこれら名文の故に

もあるべけれどかいなでの筆にては必馬頭が所在をあらはしおくべき所也さてこの大納言は河海に馬頭が父歟と注せられたるげにさもあるべし少しゆくりかなりされどなほ誰ともなし又とまらんとするにとあるも車をとゞめんとする事か或は行て宿らんとする事か何れにても聞えたれど猶まぎらはし　**おり侍りぬかし**　同〔玉〕馬頭車よりおるゝなりもし上のことよひ云々の語を殿上人の語としてとてをこゝへかけて殿上人のおるゝにしては上よりのつゞきかなはず〔釋〕おりは殿上人のおるゝ也とてはといひてのの意にてなほ殿上人也又案に上にもいへるごとくすぎんもさすがにてといへるは馬頭が心めきたれば馬頭ももろともに下たるにもあるべし殿上人のいへる詞と馬頭が思ふ心とを引すべて相共に下たるを語る也かやうの法をり〳〵ありさらば馬頭は物陰よりかいまみたる也　**和琴**　廿九丁ォ〔河〕和琴に能鳴調ありそれにそへていへる也和琴は伊弉諾伊弉冊尊御時令二作出一給云々仍諸樂器乃最上ニ置レ之也あづま琴ともあづまともいふなり鳴長明記云和琴はもとは弓六張をひきならべて用ゐけるを後に琴に作りたる也云々りちのしらべとは春夏は呂双調也秋冬は律平調也云々〔新〕倭琴の始を神代に有といふは據なし仲哀紀に弓六張をならして神託を申させ給ふより始れりといふ説はさも有べき事也さて萬葉には梧桐日本琴一面と書たればやまとごとゝいひしを其後倭琴とも書しより後には字音にてわごんといふ此物語にはいかでやまとごとゝかゝざりけん未にあづまといへるを思へばこゝにもあづまとや有つらんおぼつかなし此琴は鳴尾琴ともいひしこと和名抄にみゆ〔餘〕和名抄云日本琴萬葉集云梧桐日本琴一面天平元年十月七日大伴淡等附二使監一贈二中衛將督房前卿一之書所レ記也體似レ箏而短小有二六絃一俗用二倭琴二字一夜萬止古止云々〔釋〕河海に能鳴調とあるはさる曲名かいとまぎらはしてゝはたゞすぐれてよく鳴る琴とのみ見るべし伊弉諾云々の事うけがたきこと新釋のごとし天照大御神の岩屋戸にこもり給ひし時に起るなどもいふにや皆證なき妄説也琴の事は古事記上に天詔琴と見えたるが始也されど其形はいかなりけん知れがたし又これを諸樂器の上におく事はわが御國の物なれば伊弉諾云々の故にはあらずさてまた新釋にいかでやまとごとゝかゝざりけんといはれたるはいかゞわごんとなべていへりし世なりしかばしか書たるまでにて何の事もなしあづまといへるは又しかいひてよろしき所也わごんと書たるが拙きにはあらずさて又呂律を陰陽五行四時などに充たる説は其器をたふとくせんとていふこと也あながちに此理有にはあらず　**をりつきなからず**　同〔餘〕をりふしのをりにもつきなからずなりつきなからずはつきづ〳〵しきにてをりからに似つきたりと也　歌　**琴のねも云々**　同ウ〔新〕月を一本に菊とあるは菊を折てと有に菊のよせ少しも歌に見えねば本は菊と有しにやされどことの樣月とあらんぞ歌には似つきたる此二つ穩ならぬをおもへばもしはつれなき人はうつろふ人とや有けん然らば今菊のうつろひ盛ならんによし有其上つれなき人と打つけていはん理も此前後に見えねばかたゞ〳〵此句も違へるかとおぼし〔釋〕月とあるは實に緣なし菊とあるかたをとるべしこの新釋にいはれたるごとくうろふ人などあらば歌のよせはあめれど事がらに似つかはしからずつれなき人と打つけていはん理もなしといはれたれどそはつれなきを普通に見られたる故也つれなきは必しも其人に對ひてつらき意のみにはあらず俗言にナンノヘンモナイといふにあたる詞なればこゝに論なし予が説は頭書のごとし　**今ひとこゑ聞はやすべき人のある時に**　同〔釋〕この今といふ詞は今一聲のきかまほしさになどいへる今にて俗言にモ一コヱといふモにあたれり然るを諸注に即今といふごとく見られたる故にこのきゝはやすべき人とあるを殿上人のみづからいふと解れたりいみじきひがこと也よく〳〵味ひて知るべし　**さてそのふみの詞はと問給へば**　卅三丁ォ〔玉補〕此詞にて中將の思ひ入てしばし物をもえいはざる體のしらるゝは面白きかきざま也かの左傳の有窮后羿晉侯曰后羿何如とある所も是に同じ左傳の注家はさらにこれを得しらぬを式部は才子なる故によくさとりてうつし取たるにや又はさらずとも才子どちのしわざはおのづから符合もしつべし此卷の品定は皆論のみなる中にまことに有し事の昔語のあるも此卷限にて後につゞく事なしそのなからに此一段を挾みいれて後の卷々の伏脉としたるいとおもしろし〔釋〕この説賞たる所はげにさることなるを左傳を引てうつし取たるにやなど

いへるはわろしこれほどの事の似たらんは何のうへにも多かなるをこればかりしかいはんものかは此卷の品定はといふより下つかたの論はいとよく見出たるにてめでたし　**むかし物語めきて**　同〈新〉うつぼの俊蔭のむすめのあれたる家にひとりゐたるさまなどよく似たり其外にも今見えぬふみにも有べし是もさだかに何れとは聞えぬにて却てよし物の注などの如く思ふべからず　歌　**さきまじる云々**　同〈新〉なでしことこなつ同じ花ながら二つの名あるにつけてなでしこは撫あはれむ子にたとへとこなつは相ぬる床にいひかくれば女の方にたとへなしたるのみさて此花夏を專らとして秋の末冬かけてもかつ〴〵あれば夏を常とはにするいひにてとこ夏とはいひはた其花いともらうたげにてうつくしまるればなでしことも いふ也云々心をとるは其人の心にかなふべき筋をとりなす也上の夕顔の歌は我身をおきてわが子のうへをいひたるを中將はわが子をばおきて母の心をとるべき返しなりこれもかへしの一つにておもしろし

さればかのさがなものも云々　卅四丁ウ〈新〉これよりは或人は馬頭が語といひ或人は猶中將の詞といひてとり〴〵なり中將のならばかのさがなものとは馬頭にむかひてのたまはじか馬頭ならばあきたき事もおりなんやことのねのすゝめりけんもなどの詞よそよそしき也仍ておもふにこゝは下にみなわらひ給ひぬといふ詞などをもておもへば右のさればといふよりは中將と馬頭ととり〴〵いひし詞を一つに書ませたりとすべし餘りに各いひことわりたれば又かく二人の詞をかきまじへんも文なり〈玉〉これより又馬頭が語といふ說と中將の語といふ說といづれもすてがたき所ありてさだめがたきをたみ詞に賀茂翁のいはくこれより下の皆わらひ給ひぬといふまではまづ馬頭のいふよりはじめて中將の詞も有上には問答を分て書こゝにては二人の語をひとつに書たる物也さて皆わらひ給ひぬといふにいたりては源氏をもかねたりとある說よろしそれにとりてなほ二人の語を分ていはんにはさればかのといふよりありなんやといふ迄は馬頭也其故は中將の語にては馬頭に對ひてかの女をさがなものとはいふまじくわすれがたけれどゝいふも人のことゝは聞えざれば也有なんやのやはよの意なり次に琴の音云々よりうたがひそふべければ

といふまでは中將の語と聞えたりすゝめりけんは馬頭が物語をきゝていへるやうに聞えこの心もとなきもといふはおのがうへの事をいふやうに聞ゆれば也さていづれとつひにといふよりは馬頭ともすべけれど上よりの詞つゞきたれば猶中將の語なるべくこのさまゞ〳〵のといふよりぞ馬頭なるべきこれも猶中將とせんもあしからじ〈釋〉右の說どもさることのごとくなれど猶よく案に花鳥に中將の語とせられたるにしたがふべくおぼゆ其故はさればかのと打出たる詞わが語をつぎて端を起したりとのみ聞えて人の語を受て答へいへりとはきこえず此物語の文かゝる所にてきはやかに自他の差を立ぬは例の事ながら猶誰が語とも分らぬやうにはあらず自より他に移る所などは必その人の形容などを挾みて其わかちをば立られたるを此所は聊もさるさまには聞えざれば也さがなものといひたるは上の馬頭が詞にこのさがなものを打とけたるかたにてといへるを受ていへるにて人の物語するには其人のいふまゝにかたる事今世にもある事也わすれがたけれどゝあるも馬頭が物語をさながらうけていへるなればこれはた中將の語とせんにな

でふ事かあらんありなんやのやを小櫛によの意也といはれたれどこれも激辭のやにて問かけたる意なれば中將の語として論なかるべし琴の音といふよりを中將の語とせられたるはさることなれど上を馬頭が語としてはゆくりなく聞ゆべしこの心もとなきといへるはかのさがなものとある彼に對へたる詞なればかた〴〵一つゞきの語なること決しさていづれとつひにといふよりを又馬頭が語といふ說はとられざりしかどこのさまゞ〳〵のといふよりをば馬頭とも中將とも定まらぬさまにいはれたりされどこれも皆中將なり然れども又わびしかりぬべけれとて皆云々とある語勢を思ふにこのさまゞ〳〵のといふよりは誰ともなくてみな〳〵同じくいひしらがはれたる語とすべし皆といふにて然聞ゆよく〳〵味はふべし　**吉祥天女を思ひかけんとすれば**　卅五丁オ〈釋〉玉小櫛に引れたる日本靈異記の事はげに此事のよりどころなるべくみゆその事は聖武天皇の御世に信濃國の優婆塞和泉國和泉郡血渟の上山寺に來り住るが其寺にある吉祥天女の像を見て愛戀の心を生じいかで天女の容のごとくなる好女をあたへ給へと毎日六時に願ひ

けるほどに或夜夢にかの天女の像と交合すと見てけりあくる日かの像を見奉れば裙腰淫精に染穢し給へりとぞ記したるそのかみの物語にて誰も知たる事にこそありけめ〔玉〕狹衣云御供の人々はまだかゝる事はなかりつる物をいかばかりなる吉祥天女ならんさるはいとものげなきけしきなるをとおの〳〵いひあはすべし云々これ狹衣大將の御供の人々の飛鳥井の姫君の事をいふ也〔餘〕うつぼ物語初秋の卷にみん人に心とめられぬべき心ありて吉祥天女にもいかゞせましとおもはせつべき大將なり云々 **ほうげづき**

同〔玉〕濱松中納言物語ににびいろかうぞめなどあまたかさねてうちやつれ給へるいろ〳〵にしやうぞきたらんよりもなまめかしくさまかはりほげづきたふとげになりて **さいし** 卅七丁オ〔新〕續日本紀八元正養老四年四月三位以上妻子及四位五位妻子並聽レ服二蘇芳一也と見えたるも妻の事のみを妻子といへり〔餘〕妻をさして妻子といふこと唐人の俗語にもしかいへり

はかなくくちをしと云々しさいなき物は侍める 同〔細〕藤式部が詞也女を或ははかなし或はくちをしなどは思へども宿世にまかせてあれば男はしさいもなき物なりとなりすぐせのひくかた侍めればとよみきりてをのこしもといふよりおこして見るなり大かた男子はやすきものなりとなり花鳥の義には上へつけひとつに見る也をのこのためしさいなきと云々いかが〔孟〕男は身が持よきと也〔箋〕此段猶思惟すべきよしあり〔萬〕大かた男子はやすき物也云々すぐせのひくかた侍めればとよみきりて次の詞を見るべし云々〔紙〕をのこほどよき物は侍らずの心也云々〔湖〕女は才智なくてくるしからぬゆゑをいふ也云々男にしも子細なくて大やうなるものある物をまして女は才學はいらざる物ぞとの心也子細は物のこまかなる事也子細なきとは大やうなる義なり〔新〕既に馬頭のいひけんかたちなどよきも心したらねば口をしきこと多きとは異なるやうなれど此さかしものはたゞかたくなゝる男のさまなればはたいふにもたらずかゝる女よりはまだかのはかなくくちをしきも緣にしたがひて男の心に捨がたく思ふをばさてもある事なればただ男ばかりぞ何のいひどころなくよきものなりと申す也とかく女には既にいひしごとくの難あり又申すごときも侍るぞといへり女の心かしこきをひたぶるにすてよといふにはあらず次下にそのよきほどのまなびなどをばことわりて書たるをあはせて見るべし

○しさいなき物は云々是は男ぞ何の難なき物也といふをかくなき物は侍るとも書又なきものはあるなども物語ぶみ枕草紙などに書たり後の俗はしさいなきものはなしといふをのみ思へる人の說には違ひ侍り且此しもの二辭は必しもと云入れ又は青柳の絲よりかぐる春しもぞなどいふが類にて一つの辭也常にいふしは助辭もは物をかねていふ辭と思ふべからず且此なんはぞといふがごときいひざま也〔釋〕此段いたくまぎらはしきを諸注解得られたりとおぼゆるも見えずされば**いづれ**も引出てこゝに擧たりくらべ見て考ふべしこの中に細流は大かたよろしと聞えて花鳥の義をいかゞと難じ給へることわりあり萬水一露はたゞ花鳥細流のむねを記したるのみにて事のすぢ聞えず湖月は子細なきといふ注はかなひたりと聞ゆるを女の才學はいらぬ物といふ心とあるはすべてひがことなり新釋は長々しく解れたれどすべて何事とも聞わきがたく大かたはあだし事をのみいはれたるやうなるはいかにぞやその中にも男ばかりぞ何のいひどころもなくよきものなりといはれたるはいみじきひがことなり頭書に擧たる玉小櫛はすべての意をば得られたりとは聞ゆれど女の擧間はなくてもありぬべきといふことをふくめたりといはれたる本文にさる詞なければうつなくさやうには聞えずすべて何れも〳〵かなへりとおぼゆるはなしさて今試にいひたりとも又かなふべくはあらざめれどおのが思へるよしをも聊いひてんさは先はかなしくちをしとかつ見つゝもといへるはわがあひそふ女をはかなしくちをしとかつは見ながらもといふ意たゞわが心につきすぐせのひくかた侍るめればとはたゞ相見る男の心につきて宿世の因緣のひく所もありと見えたればといへる意にてわがは相見る男の我なりこゝろにつきては俗言にきにいりてといふにひとし宿世は例のものがれがたき自然の理をいふ侍るぬればゝありと見えたればの意なりめればといふに心をつくべしをのこしもなん子細なきものとはをのこは男子なりしもは例の物一つとり出たる意の辭にて女もあれど男をつよくとり出でしもといへるなり子細は字のごとくこまやかなる意なれば子細なきはこまやかならず大

やうなる意なりかくて上文の詞どもよりつゞけて解んに才學ある女を妻としては無學の夫のなまわろならんふるまひなど見られんときその妻に對してはづかしきやうにも見え侍りき我等だにかくのごとしまして君たちの上なき御ためにはさる才學だてする後見をまうけて何にかはし給はんといふ意にてすべて女といふものはたゞなつかしきをのみこそめづべきものなるにさはなくて才學のしたゝかなるは我妻といはんにもかゞやかしく心おかるゝものなり然れども我らがごとき賤しき者はその妻の才學にて身を立ることなどなきにしもあらぬを君たちはさる後見せん人は他にいくらもおはすべければなつかしかるべき女のさはなくてなか〳〵にしたゝかに才學ある後見は何にかし給はんたゞなつかしくらうたきをこそもとめ給はめといふ意を含めたる也そはたしかにふくめたりと見ゆる語はなけれども上文よりつゞけたる語の勢にてさる意とは聞ゆる也さてはかなしくちをしとをりふしにつけてかつは見つゝもいはゆる宿世の因緣といふものにひかるゝ所もありと見ゆれば我心にかなひだにすれば男ほど何のむつかしき子細もなく大やうに事すむものはなしといふ意也わが心につきすぐせのひくかた侍るめればとは宿緣ありてきにいるといふ意なりそは氣にいるも卽宿世の因緣にひかるゝなれば我心につきすぐせの云々とはいへる也かくして見る時は大かた事もなく聞ゆるやうなるは猶ひがことにやあらん **はなのわたりをこめきて** 同〈玉〉俳優めきたる顏をして也西宮記に右近衞內藏富繼長尾末繼善ニ散樂一合レ人大咲 嗚呼者也注にをかしきをこらへたるさま也といへるはひがこと也。こもじを濁るもわろし〈釋〉鼻のわたりは鼻の邊也をこめきてはをこなる顏をして也をこは今いふバカアホウなどにあたれり **ごくねちの草藥** 卅八丁オ〈拾〉後拾遺俳諧にひるくひて侍ける人いまは香もうせぬらんと思ひて人のもとにまかりたりけるになどりの侍けるにや七月七日に遣はしける皇太后宮陸奥「君がかすよるの衣をたなばたはかへしやしつるひるくさしとて〈餘〉宇都保物語國ゆづりの卷に日頃はかくごくねちのころに侍ればいるしうて內にもまねり侍らずと有〈釋〉古事記云到二足柄之坂本一於食御粮處其坂神化二白鹿一而來立 爾卽以二其咋遺之蒜片

蹈一待打者中二其目一乃打殺也日本紀景行四十年日本武尊云々山神令レ苦レ王以化二白鹿一立二於王前一王異之以二一箇蒜一彈二白鹿一則中レ眼而殺之云々先レ是度二信濃坂一者多得二神氣一以獲臥但從レ殺二白鹿一之後踰二是山一者喘レ蒜塗二人及牛馬一自不レ中二神氣一也とあり此草げにかゝる効ある物にて寒暑の邪氣山海の瘴氣を防ぐにさはめてよしされば夏の土用にも暑氣を拂はんとて喰ふ故に極熱の草藥とはいへるにこそ細流にも記されたるを思へばふるき世よりのならはしと見ゆ風病に効あることは小櫛に引れたる春記の韮草にて明らか也韮も蒜も効は大かた同じき物から蒜は殊に勝れたり 歌 **さゝがにのふるまひ** 卅九丁ウ〈餘〉わがせこが來べきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも是は古今集墨滅の歌也日本紀に見えたるは我せこがくべき宵なりさゝ俄泥のくものおこなひてよひしるしも〈釋〉日本紀なるは小竹之根の隱るとかけたる枕詞にて小竹の根はいとしげくこもりて隈ある物なるを蜘蛛にいひかけたなり隱るとは隈とは通ふ音にて同言なり然るを古今集にさゝがにとよみそこねて入られたるによりて蜘蛛は小竹の中にすむ蟹のごとき物なる故に小竹蟹といふなどいへる說も出來にたるは笑ふべし蜘蛛と蟹といかでか同じからんもし足の八つあるをもていふといはゞ蛸なども其類なるべしとかへす〳〵をかし日本紀の泥字はネにのみ用ゐてニにはあらざるをやさてこゝにさゝがにを卽て蜘蛛の事としたるは山をあしびき奈良をあをによしといへる類にて枕詞を其物に轉していへる歌詞の例なり **つまはじきをして** 四十丁オ〈釋〉或抄にこの下に「かのにほひはかげどもまたまねびなせそ」といふ詞ある本あるよしへり然れどもかげどもとある所今少し言の意たしかならねば諸本の此詞なきにしたがへり後人考へて定むべし **むげにしらずいたらずしもあらん** 同ウ〈玉〉學問のゾぢを也 **すこしもかどあらん人の耳にも目にもとまるこゝと云々** 同〈玉〉かどあらんにて切べしたてゝ學問とてはせねどもすこしもかどあらん女は世の人の耳にとまるしわざはおのづからおほかるべきことにてめづらしからねばそれに高ぶりほこるべきことにはあらずとの意也かどあらん人のとつづけて見るはわろしかどあらんは其女の事にて人は

世の人也(釋)この小櫛の說はひがこと也まづおほやけわたくしにつけて云々とあるを學問のすぢと見られたるはいかにぞや三史五經の云々といひたるこそ學問の事なれこゝは世にある事の公私(オホヤケワタクシ)につけてとあればたゞ公私の事につけたる世中の事なる事論なしはじめに學問だてする事の愛敬なきを先(ッ)いひて次に世間の事を知がほするけにくさをいへるにておのづからよく別(ワカ)れたるをや案(ッ)にかどあらん人のとあるかどをふと學問の事と思ひたがへられたるよりかくは解れけん才字をかどゝはよめれどかどゝいふ時は才智の事をいひざえと音にていふ時は學才の事をさす例なればさは聞えがたしさてさるまゝには云々といへるは學問だてと事しりがほと二つのことをうけていへるなりかどあらんにて切べしといはれたれど切てはあらんとあるん。の辭とゝのはず何事とも辨へがたくなるなりよみあぢはひて知るべしさて又湖月抄におほやけ私の事につけて態と習ひ學ばねども又かどある人の耳をとゞめ目をとゞむるほどの事女のしわざにも自然に多かるべしさやうにありとて又女文字を眞名にかきなどせんはあしからんと也といへるは耳にも目にもとまる事とあるを女の行狀と見たるにていみじきひがこと也かくては女といはんからにとある語の勢にかなひがたくさるまゝにといへるにもつきなしかどあらん人とは女といはんからにといへる女をさしたるにて其女にすこし才智あらば世間大小の事につきて耳にも目にもとまる事自然に多かるべしといへる意なるをや

歌よむと思へる人の四十二丁ォ(釋)玉小櫛にこれを消息文かく事をいへるやうに釋れたるはいかゞ消息ぶみの事はさるまじき中の女ぶみにとあるが消息の事にてそはすでに此かたのたをやかならましかばと見ゆかし云々と評じをはりたればこれよりは歌よみにほこるかたのわろきをいへる事論なし歌にまつはれとは我は歌よみなりと思ひほこれる其歌にやがて我身のまつはれてさま〳〵つきなきふるまひするをいへるなりやがてといふ詞に心をつくべし然るをやがてとは歌よみなりと思ひをる心にてそのまゝ消息文も歌にまつはるゝなりといはれたるは事のすぢいたくたがへり人の歌にまつはれとあるか消息ぶみの歌にまつはれとはいかでか聞ゆべきかく思ひたがへられたる故によ

みかけたるとあるをも消息ぶみに歌をよみてやる也と注せられたりよみかけといへるはたとひ消息ぶみの中にかきてやるにもあれ言のすちはたゞよみかけたる事のみなる物をや

五月のせち 同(花)五月五日の節天皇あやめのかづらをかけ給ひて武德殿に行幸あり內辨外辨等節會のごとし宮內省獻二菖蒲一內侍藏人續命縷を群臣に賜ふ三献をはりて六府騎射の事あり云々

えならぬねを引かけ 同(拾)なにのあやめは菖蒲にかけていへりえならぬは伊勢物語に本の葉ふりしくえにこそありけれわたれどぬれぬえにしあればなど江に緣をかけて淺き事にいへば淺からぬをえならぬといふ歟それにとりて深きためしには堀江などを引ていふ事にて江は淺からぬ物なればこれは江にはあらで瀨をいふ歟。えとせと同韻にて通ずる故に兄をせともえともよむこれになずらへて知べし然らばえならぬ根はふかき根すなはち上のあやめのね也それを深く思ふ長くわすれじ又はいはひにもよみかくるは藥玉(クスダマ)かくるに緣ある詞なれば引かけといへり(新)えならぬとはえもいひしらぬといふ略語にて是はあやめの長き根とほめていふなりさてこゝには只あやめの根を引かけといひて足れるやうなれどしからずこゝは參內に心いそがしくてのみ有時に却て似合ぬ艶なる詞をもていひかくるなればわざとえならぬなどの語をおきて侍りかくわざと詞などの似つかぬを用るも又文なり文意をさとらぬ說々あり いふにもたらず○引かけとは其あやめの根にいひよせて歌をよみかくるを文(アヤ)にいへり次の句に菊の露を託(カコチ)よせといへるにむかへてしるべしかこちは繫着(カケツク)る事なれば引かけといふに意同じ(釋)右の說どもくだくだしくして言の意聞わきがたし拾遺にえならぬに江を兼たるやうにいはれたる意はあるべき歟さらずともこゝは聞えたり江にはあらで瀨をいふ歟云々とあるは殊に何事とも聞わきがたし引かけも藥玉などではかゝらざるべし新釋にえならぬをえもいひしらぬといふ略語といはれたる略語とてはわろけれど意はさることゝ聞えたり然るに又あやめの根を引かけといひて足れるやうなれどしからずとていはれたることは例のくだ〳〵しくて聞とりがたしあやめの根の緣に引かけといへるにて事足れること也何のふかきえにかあらん頭書に舉たる玉小櫛を得たりとすべし舊

注どもにえならぬを緣ならぬ或は艶ならぬなど注せられたるはいみじきひがことなるを拾遺も新釋もそれにかゝづらはれたるからにかく何事とも聞えぬことをばいはれたるなるべしえならぬのえはいかなる心とも思ひ得ざれども湖月師說に只ならぬ樣とほめたる心也といへる意にいづでも〳〵つかひたりされば こゝも急ぎ參內するとて心あわたゞしき朝にたゞならぬ根をよせにしたる歌をよみかけてわづらはする意なりされどもえならぬにては猶あかぬやうなればもとはえさらぬとや有けんさらば去ることを得ぬ意となりて引かけとゞめられたりといふにいとよくかけ合て緣あるこゝちする也 **九日のえん** 同〔花〕重陽の宴には天皇南殿に出御ありて內辨外辨等有文人博士を召れて題を奉らしめて各韻の字を探りて詩を作て文臺の上にて講ずる也三献あり氷魚を賜ふ御帳の左右に茱萸の袋をゆひつく御前に菊の花を瓶にさして立らる近代は宴の儀絕たるによりて宣陽殿にて平坐とて上卿以下着座して菊の酒を給ふよし仰らるそのよし計なり **なか神** 四十四丁ォ〔餘〕古今雜上かたゝがへに人の家にまかれる時にあるじの衣をきせける後撰戀四かたふたがりて男のこざりければ「あふことのかたふたがりて君こずは思ふ心のたがふばかりぞ大和物語に監の命婦のもとに中務の君おはしましかよひけるをかたのふたがればこよひはえなんまうでぬとのたまへりければその御返りことに「あふ事のかたはさのみぞふたがらんひとよめぐりの君となれゝば貫之集詞書にちかどなりなる所にかたゝがへにある女のわたれると聞て云々又三條のないしのかたゝがへにわたりてつとめてかへるに伊勢集にかたゝがふとて京極なる人の家にいきて云々金葉集戀下をとこのけふはかたゝがへにものへまかるといはせ侍りければつかはしけるよみ人しらず「君こそは一夜めぐりの神ときけなにあふことのかたゝがふらん 江次第抄云天一己酉至二甲寅一六日在二艮方一乙卯至二己未一五日在二卯方一庚申至二乙丑一六日在二巽方一丙寅至二庚午一五日在二午方一辛未至二丙子一六日在二坤方一丁丑至二辛巳一五日在二酉方一壬午至二丁亥一六日在二乾方一戊子至二壬辰一五日在二子方一癸巳至二戊申一十六日在二天上一在二天上一之時向レ乾拜レ之爲二秘事一〔新〕中央に立つ神なれば中神とはいふべし巡行の時日と經てある故に長神と云といふはいかにぞや **きのかみにてしたしくつかうまつる人** 同〔新〕紀伊守は源氏の家人也といふ說ありいにしへは其家につかふるを家人といふは諸氏にていふ名也令を考るに職事の親王には一品以下四品以上皆文學家令扶書史等あり今源氏親王にはおはせねども別勅にて親王の下大臣の上に座する程の事なれば文學以下を賜はるべきか然ればそれらが中より考撰にあひて昇進して國守ともなる有べし又さなくとも女房などのよし有て名簿(ミヤウブ)まゐらせて家來の樣にして終に官に仕るもあるべし必家人とさだむるはおぼつかなし云々〔釋〕中ごろ唐國の制度を摸(ウツ)されし時はよろづ彼國ぶりに物せられしかば君臣の分別(ワカチ)もさばかりけちえんにはあらざりけん我國の上古のさまを又今世のさまをもて見るべきにあらずまた令條に記されたる事もやゝ後世となりてはさながらに行はれたる事のみにもあらねばひたぶるにそれをもてもいふべからずこの一條院(ノノ)天皇の御世のころは地下の官人などは大かた權勢ある家々に私につかへてその勞をもておほやけにつかうまつるくさはひとして官位をも賜はるさまなることと多しこの紀伊守もさる人にて國守にはありながら源氏君に心よせつかうまつる人なるべし空蟬卷に紀伊守國へ下りなどしてとあればこゝは暫く上京せしほどなるべしとにかくに朝廷よりさだめ給へる文學などのさまとは聞えず今俗の言に出入の者といふべきさまと聞ゆ・**こゆるぎのいそぎありく** 四十五丁ウ〔餘〕拾遺戀四小式部命婦「いかにしてけふを〻んこゆるぎのいそぎいでゝもかひなかりけり同雜戀よみ人しらず「こゆるぎのいそぎてきつるかひもなくまたこそたてれおきつ白波〔釋〕これは類例なりこゆるぎのいそぎといひかけたるは枕詞の例にて津の國のなにはおもはず山しろのとはにあひ見んことをのみこそ又みちのくのしのぶもぢずり高砂のをのへの鐘などの類ひなりさてこゝに引る風俗歌にあるしはいもとさかなまぎにとあるを舊注どもになきにとせられたるはまぎといふ事を心得かねてさかしらに改められたる物と見えてなか〳〵いみじきひがことも也又玉だれの小がめをこがめとあるも誤也王垂(タマタレ)のは緒(ヲ)とかけたる枕詞なればこがめといひてはあらぬ事となれり改むべし **きぬのおとなひはらはらとして**

四十六(丁ォ)〔細〕夏はみなすゞしをきるべきほどに音あるまじきといふ説あり頗いりほが歟夏もひぬりがさねとて下のかさねは板びきなり音あるべし又はり袴もいたびきなれば音なくては不レ可レ叶〔拾〕日本紀に喧響の字をおとなひとよめり詞花集雜上にしのびたる男のなりけるきぬをかしがましとておしのけければよめるいづみ式部「音せぬはくるしき物を身にちかくなるとていとふ人もありけり　**さうじのかみより**　同〔新〕障子の上よりなるべし紙より火かげのもる也てふ説は今の紙一重はりたるあかり障子の事と思へるにやさらばいかにもすきかげ有べきをひましなければといへば必古へ絹布などを表として紙の中へをはりたる障子にこそあらめ且次下にすのこの中のほどにたてたる小さうじの上よりほのかに見え給ふ御ありさまといふはついたてさうじなるべけれどかみよりてふ詞の同じきを思ふにさうじひきたるなげしの上に透たる所あるより火かげは見ゆるなるべし源氏をおはしまさせたる間のへだてをうすき紙してはれる今の如きさうじのみにては有べきにあらず〔釋〕この説一わたりいはれたり然れどもこゝは猶紙なるべきにや火ともしたるすきかげさうじのかみよりもりたるにとある語の勢あつき障子とは聞えずあつき物としては透影の漏るといふこといかゞなり上文に格子はゐげたりつれど守心なしとむつがりておろしつればとあればなげしの上より見ゆるさまとも聞えず格子にそへたる障子に女の影のうつりたるが格子の間よりもりて見ゆる意と聞えたりひましなければとあるはしか影のもりたる故にもし見ゆるかとおぼしてのぞき給へど障子の紙にさへられて間隙のなきよし也さればこゝは猶紙なるべし又次下なるは上なるべし其故は簀子の中のほどにたてたる小障子のかみよりほのかに見え給へる御有さまをとある語の勢をおもふにこれはもとより簀子にて人ある處にもあらねばこゝより西の方へゆかぬへだてにかりに小障子をたてたるならめばさばかりきびしくさへきるべきにもあらずかつ小障子としもいへれば上のあきたる事もしられたり然るを小櫛にこれをも紙よりの意として破れそゝけたる所のある穴などより見ゆる意と解れたるは上より見え給へるといふ語勢にかなはず破れたる穴などより見ゆる意ならば必そ

の故をいはではさとは聞えぬ事也然るを「小障子といへども上よりあなたの見ゆるばかりひきゝ障子は有べくもあらずたとひ有とも上より見んにはあなたよりもよく見ゆべければひそかにはいかでか見んといはれたるは中々にいかにぞやひくからぬ障子を小障子とはいかでかいふべきよしや又常ざまの障子なりとも簀子にたてたるならば其上は必あきてあるべき事なるをや上より見んにはあなたよりもよく見ゆべければといはれたれど彼は西ざまの格子をそゝきて遠くかくれて見出すべければこなたよりしか見ゆべきやうもなしされば**ほのか**に見え給へるとことわりたるにていとよく情景をはづさずかゝれたるもの也されば**これ**は上よりとすべしたとひ同語の似たればとてそれをのみもて一つ事といはんは猶委しからずとや云べき　**も屋**　同〔拾〕上文略頭書ニ載　又延喜式に身屋とかゝれたる所ありみともとかよへばこれももや歟身狹とかきてむさとよむもみとむとかよへば也身狹は大和高市郡にある地名也〔玉〕身屋也身を古へはむといへる例多しさてむともとは殊にちかく通ふ音にてもやといひなせるを母字を借て母屋と書るそは母をおもといふ故に借て書るのみ也おも屋の義也といふ説はわろしさて身屋とは屋の内の眞中に在て主とある所なるよしの名也俗言にも物の眞中を身といふに同じ〔釋〕案にこの二説のうち小櫛の説よろしげには聞ゆる物からなほ身屋といふはいかゞしくおぼゆいにしへは身をむといひ且みとむとは殊にちかくかよふ音にはあれど家の眞中なればとて身屋といはんはことやうなる名也延喜式に身屋とかゝれたる所あるこそ却て借字めきては聞ゆれ拾遺の説は母をおもといふ義をもていはれたるに此歌ハ頭書ニ引タリ　ほそどのひさしなどを子に似たればとあるも故なきにはあらざるに似たり且おもやとは今俗の言にもいひおもの**お**を省くもあいうおの喉音を省く例なればさることゝ聞ゆ身屋の意なるをみやとはいはでおしてむやといはんもいかゞなるに又轉しかよはしてもやといはんは餘りに迂遠く聞ゆる也さればかたゞ〳〵拾遺の説に隨ふべくおぼゆ但しそだつる恩のおもき故に母をおもといふやうにいはれたる説はしひごと也さてまた小櫛に身屋とは屋の内の眞中に在てひねとある所なるよしの名也とあるもいかゞ眞中にあるは母

屋のみならず寢殿も中にある也家の中にては寢殿こそ主とある所なれ母屋は主人の居る所にて今世に云勝手がたの所なれば旁いかゝ也　**歌ずしがちにもあるかな**　四十七丁オ（釋）萬水一露本又一本などに此下にともじあり案にされどゝありしを寫し脱してともじばかりのこれるなるべし「されど猶見おとりはしなんかしとあれば事の意たしかに聞ゆるなり　**いづれかいつれ**　同ウ（釋）此語いさゝかまぎらはしさるはいづれかいづれかとゝひ給ふ意なるを下のかを一つ省きたるにやと思へどさては今少したしかならぬ意となれり又かもじを濁りていづれがいづれといふ意とすれば今の俗言にてはことゝもなく聞ゆれどかかる所のかを濁るは雅言の例にあらざればそれもいかゝ也さればなほかもじは清てよむべしいづれかいづれなるといふ意なるを下のなるといふ辭を省きたる例とすべしかもじはなるにて結ぶ意也　**まうと**　同（新）眞人也古へは皇子に氏賜へるは某眞人といひて八等の姓の第一眞人第二朝臣と天武紀に見えたるを後に藤原朝臣盛になりてより源にも朝臣の姓を賜へりさて後に此物語の比となりてはかく對へる人を稱していふ語にも用ゐたり故に此同じ人をさして眞人とも朝臣とも源氏ののたまひしなり（釋）いにしへはさま〳〵の姓ありしを天武天皇の御時に混じて八姓と定められたり其中に朝臣は字がらのよろしき故にや後にはこれを申し賜はるをいみじきめいぼくとしたるさま也史を讀てしるべし藤原朝臣の故のみにはあらざるべし朝臣はもとより借字なれど朝臣のもじの朝廷の臣といふがごと見ゆるからにおのづから尊びたるなるべしさて又唐ざまの御制度より後は人の實名をいふをば無禮き事としたればかく姓をもて呼しことも有しにこそされど其もとは其人の正しき姓をこそ呼つらんをこの比となりてはさる事も既に失てたゞ朝臣とも眞人ともいふが其方などいふばかりの事となれりし也　**いたづらぶし**　四十九丁ウ（餘）孟いかなりし時くれ竹のひとよだにいたづらぶしをくるしといふらん此歌拾遺戀三に有てよみ人しらず也またいせ集に人まちてなきつゝあかすよなよなはいたづらねにもなりぬべきかな後撰戀四藤原成國秋の田のかりそめぶしもしてけるかいたづらいねをなにゝつまゝし象盛集あふことのなきつゝかへるよな〳〵はいたづらねにもなりにけるかな（釋）孟津に引れたるも類例のみ也引歌にはあらずたゞ女と共に寢ぬをいたづらぶしともいたづらねともいへるなり　**なげし**　五十丁ウ（餘）契冲云夕顏の卷におまへちかくもえ參らぬつゝましさになげしにもえのぼらず榊の卷に三寸ばかりひきゝてなげしにおしかゝりてともあり殿舍の中に上段と下段と有て其上段の敷居の下になげしを付る是也なげしの下とは下段をいふ宇治拾遺三になげしのうへにのぼりて扇かきて引よせられけるほどに云々雅望考るに和名抄本朝式云長押和名奈介之と有源平盛衰記卷十七に祇王祇女をば一長押落たる廣廂にすゑられたり云々　**心のしるべ**　五十一丁ウ（餘）古今戀一よみ人しらず「しるしらぬ何かあやなくわきていはんおもひのみこそしるべなりけれ（拾）（新）同引之　**おくなるおましに**　五十二丁オ（餘）眞淵云このおましを母屋といふ說はわろし上に寢殿の東おもてはらひあけさせてといひその次にかの女房どもの物語をたちぎゝし給ふ所にこのちかき母屋につどひたるなるべしとあれば源のおましは東西に二間あるかその二間のおくのまに夜のおましはしたるなるべし（釋）此說よろしきを新釋一本にひさしのおましのやうにいはれたるはわろし案に一本はまだかたなりなるほどの說にぞあるべき　**かやうなるきはゝきはとこそ侍るなれ**　五十二丁ウ（祇）心はぬしあるものにはかゝるたはふれせぬ習ひのよしなり（新）既に夫定りてはかくは有べからずてふ物のさだめはしろしめすべきにいと押たち給ふは見下しあなづり給ふものなりと是ははら立たるいひざま也（玉）かやうに夫ある女は夫ある女と其きはをたつることにてこそ侍れと云也（釋）頭書に舉たる餘滴にいへる如くきはといふは例の分際の事なること引たる末摘花卷の詞にてあきらか也もしくはきはとは極の意にてかやうにおしたち給へるはあながちなる事の極といひつるにやあらんと思ひしかども前後のやうを考るにそれも猶わろかりきとにかくに諸說のごとく夫ある事をきはといはんは例なき事にていはれなし花鳥餘滴に隨ふべし　**見なほし給ふのちせもやとも云々**　五十四丁オ（河）若狹なる後せの山ののちにまたわはんかならずけふならずとも（餘）此引歌六帖卷二國の部に有三句後もわはん四句吾思

ふ人にとせりまたく此歌也しかるを眞淵の說に萬葉に後瀨山後毛將相と思へこそしぬべき物をけふまでもあれてふ歌の本語を取てかけるのみにて云々或說に若狹なる後世の山てふ歌を引たれど何より引たるや云々と新釋にかけり六帖に有をば忘れしと見えたり云々式部が心には六帖の歌を思ひて書たるにたがはずこそ〔玉〕こよひこそかく心なきものに思はれ奉るとも後には又さもあらずと見直し給ふやうもあらんかと思ひてわが心をなぐさむべきにといへる也なぐさむるは源氏君になさけなきものに思はるゝがかなしきをなぐさむる也花鳥に御心ざしおろかなりとも云々とあるは聞えず又河海に引れたるわかさなる云々の歌は萬葉四にかにかくに人はいふとも若狹路の後瀨の山の後もあはん君といふ歌をおぼえたがへ給へるなるべし（釋）こゝは引歌に及ぶべからずのちせはたゞ後の時といふほどのことにてせはうれしきせかなしきせなどいふせにて時といふ意也かつ右の歌どもには後瀨の山とこそあれたゞに後瀨といへるにあらねば類例にもならずいたづらごとなるをかにかくにあぢゝらはれたる說ども皆ひがこと也さて小櫛にこよひこそかく心なきものに思はれ奉るとも云云といはれたるはいかにぞや聞えたりこゝはうき身のほどの定まらぬありしながらの身にてといへるにてたゞ大かたの事をせめていへる所なれば畢竟はものゝたとへまでにいへるにてさらに今宵の事にはあらず御心ばへを見ましかばとあるましかばの辭を味はひてしるべしされば見直し給ふは我らがごときいやしく見にくき者なれどもし後には見直し給ふ事もやあらんと思ひなぐさめてもしたがひまつべきにといふ意なる事はあるまじき我だのみにてといへるにしるきものをや花鳥の御說のごとくなるべし **かりなるうきねのほどを** 同（釋）かりなるはかりそめなるといふ意うきねは打とけて寢たるにあらずたゞさながらに逢たるなればうきねといへりうきは浮たゞよひたる意なるべし小櫛に拾遺集戀二かた岸の松のうきねと思ひしはされば水鳥の鴨のうきねのやすけくもなしといふ歌どもを引れたるは類例なり然るを餘滴に水鳥のうきてぬるといふよりいへる也といへるはいかゞあらんこゝにては本末たがへる

やう也〔新〕こゝはいと心をいひのこしたる物にて上の有しながらの身にて云々おもひ給へなぐさめましをといふ次に人の妻と定りて思ひもかけ侍らぬにかく源とかりそめながらもそひぶしするは又げに宿緣も有ての事にやとおもひまどはるといふ也さて折がたになりての詞なるにてもしらる下に心えぬすぐせ打そへりける身を思ひつゞけてとあるも卽是なり

月は有明にて云々 五十七丁オ〔新〕月は猶有て夜の明る比は月の餘光はなくなりて月の形のみ空にさやかに見ゆるをいふ此影を地にうつれる影也といふはいかにぞや古今集に白雲にはね打かはしとぶ雁のかげさへ見ゆる秋夜の月といふ歌をも地にうつる影と意得そこなへる說あるによれるにや彼も是も地にうつれる影をいふべき所にあらずたゞその形のみゆるを影とはいへる也惣て影といへるは物にうつれるを多くはいへどまた其物をも遠く幽かに見てもいへり〔玉〕ひかりは月のあかり也をさまるはきゆる也影は地にもあれ物にもあれあたりて見ゆる月のかげ也有明のさまなことにこゝにいへるごとくなるものなり（釋）こゝは新釋よろし小櫛影の說は猶いかゞなり光をさまりては物にうつる影はあるべからねばなり

ぬるよなければ 五十九丁オ〔餘〕細戀しさをなにゝつけてかなぐさまん夢にも見えずぬる夜なければ此歌出所しらずたゞしぬるよなしといへるは萬葉集卷十一にしきたへの枕をまきて妹と我ぬるよはなくて年ぞへにけるまた古今戀一夢のうちにあひみんことをたのみつゝくらせるよひはねんかたもなしなどを思ひていへるにや（釋）此歌奥入河海にも引れたり餘滴に見る所なしといへれどこの歌なくては此所は解得がたしされば昔ありて今傳はらぬ集などに有し歌とすべし此事惣論にいへり餘滴に引たる萬葉も古今もこゝにはかなはず **あこ** 六十丁オ〔拾〕日本紀にはこに濁音の字を用ゐたればあごなりあきともいへり云々萬葉十九大船にまかぢしゞぬきこの吾子をから國へやるいはへ神たち是は光明皇后の御歌にて藤原淸河をさして吾子とのたまへり（釋）案に日本紀にとあるは餘滴にもいへるごとく神武紀の歌に阿誤豫阿誤豫とある事なるべしかれは歌のはやし詞と聞えて吾子の事とはさらに聞えず又あきとあるは古事記傳の說のごとく吾君也されば是はひがこと也こも

と清べし　**くびはそしとて**　同〔餘〕和名抄髓詞切韻云頸頭也頸居井反和名久比頭莖也とあり今の人頭をくびといひ頸をのどゝいへりみな誤なり云々（釋）此語にて源氏君はなよゝかに痩てなまめきたる姿伊豫介は物々しくふとり過たるかたちをおもはせてかけるにもあるべし　秋　**かずならぬふせ屋におふる云々**　六十三丁ウ〔餘〕袖中抄に勘國史云仁明天皇承和二年六月勅如聞東海東山兩道河津之處或渡舟數少或橋梁不備由是貢調擔夫來集河邊累日經旬不得利涉云々宜毎河加增渡舟二艘其價重者須正税又造浮橋令得通行及建布施屋備于橋寄其造作之料共用救急稻云々又云陽成天皇元慶四年云弘仁十三年國分寺尼法光爲救百姓濟度之難於越後國古志郡渡戸濱建布施屋施粥田四十餘町渡舟二艘令往返之人得其穩便而年代積久無人勞濟屋宇破損田疇荒廢望請被充越後國傜五人永令預守云々今按ずるに信濃國その原といふ所にもせやといふ別に有かと思ふに布施屋とて所々につくれるにこそされば信濃國そのはらにも此布施屋をたてけるにや又俊頼朝臣田家秋興の歌に「山田もるきそのふせやに風ふけばあぜづたひしてらづらおとなふ是は谷のふせ屋賤のふせやなどいふ體かと存ずるに信濃の岐岨にもかの布施屋あるにや又きそその原相近しといへり〔新〕或説に或は各ひとりごち也といひ或は贈答也といへる二つながら委しからず光君は右の歌を小君して贈り給ふを女の見てかくはよみたる事同じくふせゝのはゝきゞの事を詞とせるにてしるしされど女は返しをまねらせしにはわらでかくよみたるのみなるべし詞に聞えたりとあるはよみたりてふ意のみならん光君に返し聞えしならば上の詞にまどろまれざりけりとはかゝじ此詞の樣かの御歌を見ていと久しくねもいらずありてよめるをしるべし（釋）餘滴に引たる袖中抄は岷江入楚にも引れたり然れども猶かの歌の意は詳ならずさて新釋の説は弄花にいひたる趣の委しきもの也然れども岷江入楚にもいはれしごとく下に小君いといとはしきにねふたくもあらでまどひわくとあるは取傳へたるさまをあらはしたるなれば返しとはなくよみたるを傳へたりとは見るべき也さて又此歌の下句は源氏君の

わたり給ふをまちつけ奉らずして逃かくれたる事をきゆるとはいへる也と或人いへりあるにもあらずといへるを思へばさもやあるべき　**御かたはらにふせ給へり**　六十四丁オ（釋）この小君が事を頭書に男色なるべくいへりしをかたふきいふ人もあらめど吾邦にもふるき代よりそのさまこれかれ見えたる中にこの物語の比小舍人童などいひしものは近き世武家にて童小姓などいひけんものゝさまになん見ゆめる神樂歌に大宮のちひさ小舍人玉ならばひるは手にとりよるはさねてん拾遺集に山ぶしも野ぶしもかくてこころみつ今はとねりがぬやぞゆかしきなどあるを考へ合すべし

○空蟬卷餘釋

さりげなきすがたにて　二丁オ〔湖師〕今夜のさま然るべからずとは思ひしり給ひながら出給ふ故源氏とは見えぬやうにしておはすなり〔新〕夕顔の宿へかりぎぬ姿にておはせしがごとく光君のさまならずして也（釋）按に此説どもはこの子もをさなきを云々とあるよりかく考へられたるならめどいかゞなりこゝはたゞ御忍びありきなどのさまならで何事なきさまにもてなして出給ふ意なりさりげなきといふ語はやつすなどいふとは異にてさあらぬさまにもてなす意ばかりなり　**こきあやのひとへがさね**　三丁オ〔花〕女房の裝束五月五日よりひとへがさねをきるなりひとへ二つをひねりかさねたる物なり此時はさらにひとへをきずこきとはこうちきの事也濃き紫にそめたるべし河海には紅の色こきとしるされたりいかゞとおぼえ侍り〔細〕花説可レ然紫なるべし（釋）新釋にもこきを紅といはれたれどいかゞなり伴雄云濃は紫のいと深く染たるにて令に滅紫と見えたる色是なり今も濃といふ色一種あり後世の紫色にはあらず朱を奪ふといへる色また枕草紙に紫だちたる雲のといへるやうの紫をやしほに染れば濃といふ色になる也赤み底に沈みていとなつかしきもの也打まかせて濃とあるみなこの色なりその餘は某の濃濃き某色などことわりて物する例也云々此説のごとし　**なにゝかあらんうへにきて**　同〔新〕こきあやのひとへがさねは色もこくて火ちかければてり合てまがはぬ也さて何にかあらん上に着てと云はこれは小袿なるが色のいとう

すくて見わきがたきなるべし小袿なる事は下に見ゆ（釋）伴雄云ときあやの單（ヒトヘカサネ）重なめりとは今ささしく見とい給へるおもふきをいひ何にかあらん云々はその單重のうへにうちかけて着たる物の何ともわかねども一種ありしをいへる也その着たるを小袿（コウチキ）とさしたる新釋の說もわろし小袿を着たらんには其下なる單重の色は濃とも何とも知らるべきやうはあらじをやこゝはいと打とけたるさまなれば上に着たる物も何物ともしられぬがよそめに見えたる文章のあやと見るべきにやといへり細流もこの說のごとく唯火かげにさだかに見えわかぬなりと有これに隨ふべし但し猶新釋をたすけていはゞ下に着たる單重の色は衣（エ）領袖口などより見えたるにもあらんか次なる軒端荻はないがしろに着なしてとあれば小袿をはづれて單重の色の見えたる事勿論なれどそれに准へてもいさかは見えたりともすべきにや又上に着たる物も小袿の外に着べき物もあらねばしひて小袿ならずとも定めがたきかされどさばかりいはんはあまりにこちたきわざなればたゞ右に擧る說共の如く見てあるべし　しろきうすものゝひとへがさねふたあゐのこうちき　同ゥ（釋）白さ羅（ウスモノ）の單（ヒトヘカサネ）重二藍（フタアヰ）の小袿なり伴雄云軒端荻のさうぞく單重も小袿もあざやかに見せたるは白さ羅に二藍の色のうつろひたる透かげと東向にてのこる所なく見ゆといふ文を利（キカ）せたるたくみなり云々荻は西の對よりたゞ今來たる人にてまづは客（マウト）人なり故小袿（カウチキ）も着たるなるべし空は上に着たる物何物とも見えずいさゝか打とけざまなるはあるじさびたるにやといへり（細）二藍なりふたへともいふ也同じ事なりあか花あを花二色にて染る也（花）こうちきは唐衣（カラヰヌ）を着せざる時表着（ウハギ）のうへに唐衣の代（カハリ）に着する物なり云々　かどなきにはあるまじ　四丁オ（餘）契沖云源の心なるべし朗云上の内よりはさゝざりけりは草子地ながら源の心也下の姉君まちつけていみじくの給ふ云々はづかしめ給ふは草子地ながら小君になりていふ也此たぐひ猶あるべし（釋）この鈴木氏の說のごとく源氏君の心ながら草子地より評じたる語なり下のすこし品おくれたりとあるも同じ長澤氏は脫文などあるべし本のまゝにては解しがたしといへり　おくの人は　同（花）此時源氏君のかいまみは東のつまどより西ざまに見やり給へり母屋の柱にそばめる人は空蟬の君なり今ひとりは東へむきたる故に

のこうなく見ゆ西の御かたをいへり東より見れば母屋のはしらがくれにあたるは西へむきたればうしろでばかり見ゆべし西はおくのかたなればむかふ方をとりておくの人とはいへるなり西の御方おくに居侍れどあらはに見ゆるははしのかたへむきたる故なるべし（細）空蟬なり座敷のおくなるべし花鳥の義有ニ不審一（釋）細流のごとくなるべしさて此段のすべてのやうを考るにまづはじめにひんがしのつま戸に立奉りて我は南のすみの間より格子たゝきのゝしりて入ぬとあるは源氏君を東の妻戸ある所に立せ奉りおきて小君は角（スミ）の間の南の方より格子をたゝきあけさせて入たるなるべし此格子は角（スミ）の間の南の格子のごとくなれど下文のさまを思ふに東庇（ヒサシ）のへたての格子と聞えたりさるは直（タヾ）に東より入らば源氏君のかたを内より見とほすべければ南の方より入たるなるべしさて次にやをらあゆみいでゝすだれのはざまに入給ぬとあるは妻戸の所より歩（フユ）み出て少し南の方なる東おもての格子と簾（スダレ）との間に入給へる也此所常は格子をおろして其外に簾をかけたるべしさて次にこの入つるかうしはまださゝねはとあるは小君が入つる東庇の隔（ヘダテ）の格子にて其あきたる所より西ざまに見とはし給ふ也細流にたつみの方よりすぢかひて西さまに見とほし給ふ也とあるよろしさて次にもやの中柱にそはめる人とあるは空蟬の柱に側（ソバ）み倚（ヨリカヽ）て西へ對ひたるさま也この中柱は母屋の北の長押（ナゲシ）ある所の柱にて母屋と北庇との界なるべし碁盤はその内にすゑたるなるべし長澤氏は庇の方なるべしといへり猶考ふべしさて帚木卷にわた殿より出たる泉にのぞきゐて酒のむとあるは此下に渡殿の戸口によりゐ給へりとある所と聞ゆれば東おもてよりつゞきたる渡殿也そこよりいへる詞に此西おもてにぞ人のけはひする云々といひこの近き母屋につどひゐたるなるべしといひ又この北のさうじのわなたに人のけはひするをこなたやかくいふ人のかくれたるかたならんといひ又女君はたゞこのさうじぐちすぢかひたるほどにぞふしたるべきとあるなどをあはせておもふに空蟬の居る所すなはち母屋にて其西に對の屋など有てそこに軒端荻はすゑざま也かくして見る時は母屋の奥は東南にて西北は端なるべしかれ空蟬を奥の人とはいへる

なり此段の事を長澤氏のもとへかたらひやりてあげつらひしに圖を作りておこせられぬかくては心得やすげなれば右に其圖をさながら舉て初學の人に示す帚木卷のさまをもついでに記したれば合せ見て大かたをさとるべし　**たゝみひろげてふす**　六丁ウ〔細〕屏風なるべし次の詞に見えたり〔拾〕今按疊廣げ歟あつさをわびてくつろぎふす心歟たゝみひろげにふすと有けんをひろげてと寫し誤る歟そのゆゑは風吹とほせといはゞ廣げたる屏風もたゝむべきことわり也又たゝみたる屏風をたゝみといふべからず又とばかりそらねして火あかきかたに屏風をひろげてといへる重疊せり〔新〕後に火ある方をさへんに便あるかたへ屏風をたゝみよせて所をひろくしさて人々しづまりて後和らおきて火有かたへ屏風引ひろげて入れ奉る也〔玉〕屏風をかたはらへたゝみよせてふす所をひろくする也又ひろげては風の吹とほすへき道をひろくする意にても有べし人ある方にたつる也といへる注はひがこと也たゞ源氏君の入給ふべき道をあけんため也拾遺に云々といへれどいかゞ下に屏風をひろげてといへるを重疊なりといへれど然らずたゝみよせたるかの屏風を火あかき方に引ひろぐる也〔餘〕いにしへの疊は今のうすべり也御座といふものは今の疊のごときものなるべし物語ぶみに疊とかけるをかれこれかよはして考るに皆うすきものと思はるさていにしへの家居はみな板にてはりて其上にうすき疊をしきていぬる時は別に床などをおく事なるべしからばこゝは風の吹とほさんため可もて疊をおしひろぐるなるべし後世の疊を見たる意にてはこゝの解通ぜず古の疊の今のうすべりといふ物なる事は別にいへり〔釋〕伴雄云餘滴の解いまだ盡さずいにしへの疊は今のうすべり也といへるはよろし御座といふは今の疊のごとき物也といへるはわろし今の疊のごときをいにしへは字音に帖といへり御座はおましにて貴人客人の來る時に敷設る座なるゆゑにしか唱ふるにて必しも疊にはかぎる事ならねどまづ疊を敷てその上に褥褥などをしきて座とする故にうちまかせて疊を御座とはいひならへる也云々〇廣道案に右の說どもの中には餘滴に疊はうすべりなりといへるを得たりとすべし右の說の次に疊のうすき物なるよしの例どもいと多く擧たりしかどうるさくて今は皆はぶ

きつ本書を見るべし但し御座の事は長澤氏の辨へたるが如し又風の吹とほさんため手して疊をおしひろぐる也といへるもいかゞ疊をひろげたりとも風の吹とほすべきことわりはなし風吹とほせといひたるはは し に寢る事を人に疑はせじとていへるまでにて疊の事にはあつからぬことなるをやさて又これを屏風と見られたる說どもはすべてひがこと也上に屏風ともいはずしてゆくりなくたゝみひろげてといはんものかは拾遺にいはれたるごとく下の屏風といたづらに重なりてさやうには聞えがたし常には寢ざる障子口の板敷にふす故に疊をひろげてしきたりとして事もなく通ゆべし　**ゆかのしもに**　七丁ウ〔新〕よき人は濱ゆかの上にぬるなり侍女などはたゞ下にふしたり〔釋〕案に帚木卷になげしのしもに人々ふしていらへすなりとあると全く同じさまなればこゝも長押より下の方を床の下といへるなるべし新釋の濱床のことはいかゞなう餘滴にも帳臺の事といふ說をあげ又六窓軒記聞といふ物を引て濱床のことをいへれどもしたがひがたし猶いはゞこゝは空蟬と軒端萩と二人もろともに寢たる所なればさるむつかしき物に入て臥たらんにはかならずそのけしきをもあらはし書ではえあらぬ所なるをさはなくてたゞ一人ふしたるを心やすくおぼすとある文の勢ひさらにさる事とは聞えぬものをや〇伴雄云ゆかといへるは母屋一間みながらをいふ也母屋と寢殿とは床一段高くつくれり庇の間は低し長押を堺とすこれいにしへの家作のさまなり云々　**いせをのあまの**　十一丁ウ〔餘〕河海すゞか川いせをのあまのすて衣しほなれけりと人やみるらん後撰戀三伊尹朝臣集にはすゞか山とあり四句しほなれたりとせり詞書に女のもとにきぬをぬぎおきてとりにつかはすとてと有このはしがきにてよく聞えたり　歌　**うつせみのはにおく露の**　十二丁ウ〔玉〕此歌の事拾遺にこの歌全篇伊勢集にありといふ古本にはありけるにや今考るにあることなし「うつせみをおもふにこゑのたゝざらばまた衣手に露やおきなん此歌のみ有古人おぼえ損じけるかといへり今思ふに此歌伊勢集にありとは河海に見えたり後の注どもはそのもとをば尋ねたゞさずしてたゞ河海によりていへれば伊勢集にあるよしいへるもとりがたしさて河海は古歌をおぼえたがへて引れたるたぐひなどいと

多かればこれもおぼえたがへにこそ有けめ此歌もしかの集の古本には有しかとも思はるれど此物語の例は古歌を今の歌にして入れたる事なければ河海に他の物語のさる例どもをあげられたるはよりがたし又これは空蟬の贈答にはあらず此時に相應したれば伊勢集の古歌を御たゝう紙のはしに書そへたる也といへる注もとりがたし此歌をあげたるやうたゝ空蟬のあらたによめるさまにこそ聞えたれすべて此物がたりのやうしか古歌を全く一首あげたるやうの例はなきことなるをや

○夕顔卷餘釋

六條わたりの御しのびありき 一丁オ〔河〕六條秋好中宮母儀前坊御息所の在所也中將御息所貞信公女前坊御息所後に重明親王の北方になる此例歟齋宮女御の母大臣女以下一同也伊勢物語にむかし左のおほいまうち君いまそかりけりかも川のほとりに六條わたりに家をいとおもしろく作りてすみ給ひけり〔湖〕前坊は保明親王謚號ニ文彦太子ト一になぞらふこれ延喜の御宇春宮にたち給ひて早世也北方御息所は中將御息所貞信公の女になぞらふこれ保明親王かくれ給ひて後重明親王の北方になりて齋宮女御をうみ給へり此物語の御息所も大臣のむすめとかけり准據相當なるべし〔岷〕前坊とは文彦太子などの如く春宮にて位につき給はぬ以前早世し給ひ或は小一條院は春宮の位を辭し給ふ是皆前坊也云々〔新〕保明太子の事になぞらふなどいふは例のことにてこゝは似ても侍るべけれど惣てさることにはあらねば心ゆかじ **ひがき** 同（釋）檜木をうすくへぎてそれを組合せて垣にしたる物也ふるき繪どもに見えたり **はじとみ** 同〔花〕下はかうしはた板などをうちて上にしとみをつりて外へあぐるやうにしたるを云車にもはじとみとてあり上の蔀ばかりをあぐれば半蔀とは名付たる也〔細〕後拾遺雜一月のあかく侍ける夜はじとみに女どもの立て侍けるを男まねらんなどいひ入させ侍ければよみ人しらず「誰とてかあれたるやどゝいひながら月より外の人をいるべき〔餘〕和名抄周禮注云節音部字亦作レ蔀和名之度美擾レ暖障レ光者也と有これは常のしとみ也はじとみはそれを半ら上の方へあぐるやうに作れる物を云 **玉のうてなも** 同ウ〔餘〕何せんに至のうてなも八重むぐらしげれる宿もふたりこそねめ此歌六帖卷六むぐらの部に有て四句はへらん中にとせりもとは萬葉集卷十一に玉しける家も何せん八重むぐら覆小屋毛妹與居者（オホヘルヤモイモトアリテハ）**ありかけだつ物** 同〔河〕紫明抄に公良三位が説などゝて秘事げにいひたれどもあながち然らざるか大管會のしとみやといふ物也今陣座の前に是をたつ裏書云へいのおほひを切かけてしたる也俗にへいのおほひをきりかけといふ〔巴〕かべにせん所を板にてかりそめにしたり大裏などにもありがんぎなどのやうに板にてしたる也〔餘〕宇治拾遺に水干のあやしげなりけるがほころびたえにたるをきりかけの上よりなげこして云々更科日記に關ちかくなりて山づらにかりそめなるきりかけといふ物したるかみより丈六の佛のいまだあらづくりにおはするがかほばかり見やられたり大和物語此大德坊にしける所のまへにきりかけをなんせさせける其けづりくづにかきつけゝる雜する所に板をめんとりばにしてふちをして垣のやうにせし物也 **ずゐじん** 二丁オ（釋）隨身は字の如く身に隨ふといふ義也執政大臣また左右大將などの召使ひ給ふ武士を隨身といふすべて唐ざまの御制度の時にはやんことなき人も文官にて兵器など帶給はねば路次の警固の爲などに衛府の武士を賜ふこれを兵仗を給ふといふそは執改大臣などにかぎれる事也近衛の大中將などはもとより其府を司り給へば隨身を召使ひ給ふ也さて隨身は太刀を帶び弓箭をとりて先驅（サキ）にたちて非常をまもる事也 歌 **こゝろあてに云々** 四丁ウ〔新〕おしあてに源氏にておはすらんとおぼゆるは光りもことなる御顏なればと也さて此歌は次の詞にいかに聞えむなどいひしろふと云且夕顏上の樣かくさし出たる事すべき女とも見えねば女房のよみて夕顏のかきしなるべしあてはかにゆゑづきたればと有は女房にはあらじとおぼゆ（釋）此事舊注にもさゞ〳〵に論ぜられたること岷江入楚に委く見えたりされどさばかりにいはんは餘り委しきに過たるべしたゞかの宿より誰ともなくて出したりとのみ見て有べし **揚名介** 五丁オ〔秘〕今案揚名二字諸國介にかぎるべからず故に揚名關白と清愼公はの給へり又揚名掾揚名目ともいへり揚名はたゞ名ばかりといふ心也たとへば其官になりたれども職掌もなく得分もなきをいへり或抄に

揚名介は不レ給二籤符一と見えたり官符を給はるほどにては國へくだりて吏務をしるべき也寛弘二年除目藤原維光望二揚名介一申文にて常陸權介に任ぜらる近頃貞和二年除目執筆（後普光園攝政）自給申文に藤原良清望二揚名介一とありて山城權介に任ぜらる愚老も先年執筆の自給に此申文を献じて常陸權介に任じ侍りき云々（拾）つれ〴〵草に政事要略に揚名目ありといへり介と目とのあひだに據あれば揚名據といふものもあるべきことわり也かやうにかねて思ひしに揚名問答にひかれたるにはたして據の字あり新續古今集雜中に云源氏ものがたりの揚名介の事を忠守朝臣に尋ね侍るとて申おくりける藤原雅朝朝臣「つたへおく跡にもまよふ夕がほの宿のあるじのしるべともなれかへし丹波忠守朝臣「心あてにそれかとばかりつたへきてぬし定まらぬ夕がほの宿揚名介は所傳もたしかならぬ事此かへしに明白なり云々（釋）年山紀聞に薩戒記（中院定親卿日記）應永三十三年三月廿七日除目の處に云今度右府臨時に被レ申之文揚名介申文也件文云被レ任二常陸介一。正六位上藤原朝臣國貞。望二諸國揚名介一。應永卅三年三月廿七日。同廿九日記云揚名介事自レ院以二葉室中納言一被二尋下一云揚名介先例任レ國幷請レ文等可二注進一者此事迷惑凡任レ國者山城上野常陸近江等之由見二抄物一此事大内記爲清朝臣後日談曰上皇就揚名介事一被レ尋レ仰少納言良資入道常宗一常宗注二進五國一其時被レ散二御不審一云々此事若以二源氏物語之說一可レ定二一國一之由思レ召處今度申文望二諸國揚名介一云々依レ之御不審出來歟云々或古人物語云圓明寺關白見二物賀茂祭一之時山城介渡之由人々稱レ之圓明寺殿被レ仰云揚名介渡　被レ仰人々聞レ之其後諸使等渡二大路一之時又同揚名介渡　被レ仰了揚名介秘事也而無二左右一山城介渡之時被二仰出一忽覺悟爲レ令レ隱二揚名介事一後々毎度被レ仰云々此時以來人々皆揚名介知二山城介事一云々と有賀茂祭の揚名介は山城介に限るべし源氏物語のはいづれの國と定めがたし右の諸國の間なるべし作り物語なればたゞあるとの留守をいはん爲まで書るなるべし巳上紀聞伴雄云この薩戒記の說いかゞ圓明寺關白賀茂祭を見物せられし時云々と仰られしは既に此頃は諸國の守介據目等みな有名無實の職にて揚名なるをなほ舊例のまゝに山城介がいかめしくそうそぎてわたるを見給ひてあの樣にいかめしくして渡れども揚名介なれば詮なき事よとしたには慷慨を含みて仰られし一時の詞也然るをその詞によりて此時以來人々皆揚名介知二山城介事一と記せるはあさましき事也また揚名介の任國を上野上總常陸近江に限れるよし記されたるもいかゞ何國にても無實の職掌ならんには皆揚名なる物をや爲章が年山記聞に云々といへるも猶くはしからず又云揚名は漢書に揚二名於匈奴一とあるなどにもとづきて名のみきゝては有實職の如く邊鄙の者は意得べきのよしを含みてつきたる名なるべし賴業私記に故信西入道云揚名介正權之外介也不レ預二公廨一云々とあるもてあきらかなりなほ揚名と云事は小右記に揚名關白あり九條相國除目抄に正六位上加茂朝臣忠信望二揚名介一寛弘二年正月五日正六位上藤原朝臣維光望二申諸國揚名介一寛弘二年正月廿一日など見ゆ又うつほ物語祭使の卷にそのやうめいをやはくうにつまんとすとあるは揚名を功に申立んとするにやとの義にて揚名は勳功になるまじきを云立（イヒタテ）にするにやと咎めたる也くうは功也萬葉に功（クウ）にまをさば五位のかゞふりとあり印本にくゝとあるは誤也又同物語初秋上にやうめいらう（勞）ある人にてなども見ゆ考合すべしといへり巳上伴雄説やうめいの事大かた右の說どもの如したゞ名のみ揚たる介といふ義也然るを餘濱に揚名とは孝經に立レ身行レ道揚二名於後世一以顯二父母一孝之終也と有よりとりたる文字也思ふにいにしへは學問なりてさて官に任じたる人をいひたるなるべしとて書生よりなり出たる官人を皆揚名といふものゝごといへるはいみじきひがこと也よしや揚名の字をば孝經などより取たるにもあれこゝにいへる揚名は事の意いたく違ひたる事上に引出たる諸記の文をもて知べし又新釋に給料を賜ふためにその人はなくて儲（マウ）おく名のやうにいはれたるはうらうへのひがこと也　歌よりてこそ云々　同ウ（新）よそながらの夕ぐれにほの見て定むるはいかにぞやしたしみて見よかしと也（玉）歌の意うちまかせては注のごとく聞えたるを又思ふに四の句かなたより見たる事ならば見けんなど有べきに見つるとあるは源氏君のみづから見給へることのやうに聞ゆるはもしは此歌にてはかの簾のすきかげに見えし女どもをさして夕顏の花にたとへたるにもあらんか詞はよみかけたる歌によりながらたとへ

をばこなたかなたうちかへして答るも例あることぞかし但初二句のさまは注のごとく見る方まさりて聞ゆ（釋）新釋にしたしみて見よといはれたるはいかゞ舊注いづれもその意にてなれ近づきてなどあれどよりてこそといひたるはたゞ近く立寄てといふ意のみにてさる意までとは聞えず小櫛の說はことわりなれどなほ女の源氏君を見つるよしなり　**かごとばかり七丁オ**　（餘）契沖云桑花物語にわかやかなる女房四五人ばかりうすいろのしびらどもかごとばかりひきゆひつけたり古歌にひたち帶のとつゞけたるこれにおなじかたばかりなどいふにかよひて聞ゆ　雜々記六帖「あづまぢの道のはてなるひたちおびのかごとばかりもあはんとぞ思ふ」　**げにをこがましう云々**　九丁オ（玉）げにとは空蟬の源氏君に逢奉ることを似つかはしからぬ身と思ひてつれなきをことわりとおぼせる詞也（釋）この說はわろしこゝは聞えたる如くにて實體なる長者（オトナ）をかくはづかしく思ふはげに我ながらをこがましく心はづかしきわざ也といふ意にてげには我ながらをこがましきをうけてげにといへる也　**むすめをばさるべき人にあづけて**　同（細）軒端荻をばとゞめ置て少將にあはする事なり（釋）案にさるべき人にとある語勢今既に少將にあはせたる意とは聞えずたゞ然るべき人に預けて國へ下らんとする事のみと聞えたりされば人に預んなど云わたりしはどに藏人少將のかたらひつきたりと見るべし　**御よはひのほどもにげなく**　十丁オ（釋）この御息所の御齡の事は諸抄にいはれたるごとく榊卷に「十六にて故宮に參り給ひて二十にておくれ奉り給ふ三十にてぞけふ又こゝのへを見給ひけるとおるは源氏君廿三の年なればことしは源氏君十七御息所廿四なる事論なし故に似げなくとはいへりこの榊卷の詞につきて周防國岩國の賀屋千邦がもとより同じ里の春田正鞆（チナミ）といふ人の考なりといひおこせける事を因にこゝに書つくそはかの榊卷に「申の時に內にまゐり給ふ御息所御こしにのり給へるにつけても父おとゞのかぎりなきすぢにおぼしこゝろざしていつき奉り給ひしありさまかはりて末の世に內を見給ふにも物のみつきせずあはれにおぼさる十六にて云々とある此父おとゞのかぎりなきすぢに云々とあるを思ふに御息所をつひには皇后にもとおぼして前坊の御妃に奉り給ひしなるべし然るに十六にて故宮に參り給ひてとあるは源氏君九才の時にあたれば朱雀院春宮に立給ひし後也桐壺卷に源氏四つになり給ふ年の春一のみこ朱雀院春宮に定まり給ふよしあればいかゞ也もし前坊春宮を辭し給ひなどせし後に御息所參り給ひしならば父おとゞのかぎりなきすぢにとおぼしゝ本意にかなはずいかにぞやといへりげにかくいひつめて見る時は作りぬしのあやまちに似たりかやうの事は作り物語のならひにてさるくまゞ〳〵まではさしも深くは思ひ構へられざりしと見えてをり〳〵いかゞしき事どもゝあれどそは大かたに見過すべし但かゝる事をも見出られたる春田氏のいたつきはいといみじといふべし　**さぶらひわらはは**　同（新）既に廊の方なれば源氏の近習童のあるしてをらせ給ふとみゆることさらめきたるさしぬきのといふは此花をらんとてわざと着たらんごとく見ゆるといふ意なれば是却て常に着て有しもの也しかれば女のわらはてふはわろし（釋）殊更めきたるといへるは童の姿の事にてさしぬきのみの事にはあらず右の說はいかゞ也（餘）狹衣に池の汀のやへ山吹は井手のわたりにことならず見わたさるゝ夕ばえのをかしさをひとり見給ふもあかねばさぶらひわらはのをかしげなるがちひさきして一枝をらせ給ひて源氏の宮の御方にもてまゐり給へればと有これさぶらひわらはとは狹衣の大將のつかひ給へる童也こゝも源氏のわらはなるべし　**ながや屋十二丁オ**（新）萬葉十六に橘の守の長屋と侍れば道ちかく建たる長き屋にて今いふ物見といふ物のごとく高くゆかをしたるべし其前に檜垣して上に五間ばかり半蔀しわたしたる也此家いとむね〳〵しからぬ體なるを五間ばかり蔀をあげんは長屋なることしらる　**右近の君こそ**　同ウ（箋）こそとは官女をうやまひていふ詞女嬬こそといふがごとし（湖師）こそとは人をよびかくるとていふ詞也云々（拾）今按よびかくるとていふ詞といふ說は誤なり初の說よしする玄に京にこそといふ詞もおなじ詞と見えたり後拾遺にすまひこそといふ女の名あり宇治拾遺に地藏菩薩を地藏こそといひ花こそ物はおもはざりけれといふ歌を通後卿難ずとて花こそといふを女の名のやうなりと申されたる事あり大和物語にも聞給ふやにしこそとあり（餘）うつほ物語にたゞこそあてこそ榮花物語のさ

ま〳〵のよろこびにおとゞこそ若紫卷にうへこそ落くぼにおとゞこそ此外わまた見えたり後拾遺にくそたちといふも同じ詞と見えたり狹衣に道成詞におとどこそこれ猶申おほし給へ此卷の末に北殿こそ聞給や金葉集戀下物へまかりける道にはしたものゝあひたりけるをとはせ侍ければ上東門院に侍るすまひこそとなん申すといひけるを聞てよめる源緣法師「名きくよりかねてもうつる心かないかにしてかはあふべかるらん清少納言にわか君こそまづ物きこえん

(釋)右の説ども人の名につけたるこそと辭のこそとまがへたるはわろしすべてこそは辭ながらなねと其物事をとり出たる意あり人に向ひ呼かけなどしていふこそは皆然なりこゝもその意にて右近を呼かけて右近の君こそまづ物見給へといへる也まづといふに心を付べし他の女房もあれど第一に右近をとり出たる也さてこそその結びは給へのへなり次の詞に中將殿こそといへるこそもかづらきの神こそといへるこそも皆同じく末にぬれたれなどれといひて結びたり下に北殿こそきゝ給へやとあるも同じくこそは給へのへにて結びてその下にいひすてのやもじをつらねたる也然るを聞給ふやとふもじをそへてよみたる本は誤れりかくてはやもじ激辭となりてとひかけたる意となればかしこの事のさまにかなはずてにをはの格にもはづれたればかた〳〵誤也さて人の名につけたるはいかなる意にてつけたるにかそはよく知れねど中昔の比多かりし事にてくそといふもかよひて聞えたりされどもこゝなるは彼とは別の事なるをおしこめてひとつに擧たるは委しからずもしかのたゞこそあてこそすまひこそなどの例にていはゞこゝをも右近こそといはではかなはぬを右近の君こそと君といふことの下にいへるにてもうやまひ詞にも名につけたるにもあらぬをしるべし **いそぎくるものは** 同

(玉)花宴卷にこなたざまにくるものか明石卷に月夜にいでゝ行道するものは紫式部日記に雪はふるものかなどありこれらを合せて思ふにものはとものかと一つにてはとかとのうち一方は寫し誤なるべしさていづれ正しからんと思ふにものかのかた正しかるべしかくてこれは其事にいきほひをあらせてつよくいふ詞也(釋)榮花物語見はてぬ夢の卷に月いとあかきに御馬にてかへらせ給ひけるをおどし聞えんとおぼしおさてける物かゆみやとゞふ物してとかくし給ひければ御そのそでよりやはとほりにけりとある物かも小櫛に引れたる花宴卷の例なりこれも一本には物はとありさてこのかの辭はおしはかりていへる疑ひの辭にて花宴卷なるはおぼろ月夜に似る物ぞなきと打ずしてこなたざまにくる物かとあれば來るともゆくともおぼつかなきがやう〳〵こなたざまにくるさまと推量りてかといへる也榮花なるはおどし聞えんとおぼされし隆家の心をおしはかりてかといへる也これによりておもへば明石卷なるもかならずかの誤にて月夜に出て行道する物かやり水にたふれ入けりとたふれ入たるよしを行道すとて立出けんとおしはかりたるなるべしさらではかしこは聞えがたし然ればこゝもかの誤にて橋より落たるをおしはかりていそぎくる物かといへるにもあめれど猶こゝはかくても聞ゆる也さるは急ぎ來る者はの意にて物見んとていそぎはしりて長屋へ來る女房をさして者はといへりとしてたがふ事なければ本のまゝにてあるべしされば右の例とは別なる詞なり **かづらきの神** 同

(餘)清正集かづらきやくめのつぎはしつぎ〳〵にわたしもはてじかづらきの神「かづらきやくめのつぎはしならなくにわたしはやまじくめのかけぢに **しひておはしまさせそめてけり** 十四丁オ(釋)一本にしひてをしのびてとあるは事もなく聞えたり然れどもこの宿へ源氏君をかよはせ奉らん事はいとわづらはしき事のさまなるをもてしひてといへるもよろしからんとて今はその方によりつきて源氏君をかよはせ奉らん事のかたきといふ故はまづ〻の夕顔上は頭中將におもはれて子さへいできたる後なるをたゞかの北方四君の方よりうたてある事の聞えこしにおぢてはひかくれつゝめしつかふ女房をも我どもとおもはするさまにしてある所なるを惟光わたくしのけさうをして立よりたるは夕顔に文かよはしたるか又その女房に言よりたるか今少しわきがたけれどいづれにしても源氏君にはかにおはしまさせそめんことはいとかたかなる事の情也いはんや下文のさまを考るに夜中に人をしづめて顔をかくしてかよひ給へるをやかくては更に女のうけひくべきさまにはあらずさればしひてといへるかたかなへるに似たりかくひつかしき事の情なる故にこれを委しくかゝんにはい

と〳〵くるしむべき事なるをもて次に此ほどの事くだ〳〵しければれいのもらしつとて省かれたる也見ん人心をつけてよく〳〵考へさとるべしさてかくあやしげにかきなされたるは皆變化の段をあらはさんとてわざとかくゆくりかなるさまに物せられしなるべし **あかつきの道** 同ウ〔餘〕清正集みじかよのこりすくなくふけゆけばかねてものうきあかつきの道 **あしたの露に云々** 二十丁オ〔餘〕河朝露貪ニ名利ヲ夕陽愛ニ子孫ヲ長慶集に見えたり又此作者の歌に「消ぬまの身をもしる〳〵朝がほの露とあらそふよをなげくかな玉葉雜四に載たり **何をむさぼる身のいのりにかと** 同〔新〕此山は皆黄金なりといへば寶を得世に富べき願をなすこと此時の常なりけん依て何をむさぼる身の祈にかとは書りされど當來導師と唱ふるからは此世の富をいのるのみならずこん世をもかねて願ふといひて我契り給ふことにたとへ給ふ〔釋〕むさぼるは上に引れたる朝露貪ニ名利ヲ の句を思ひてかゝれたるなるべし **あれたるかどの云々** 廿一丁オ〔餘〕帳江入楚に拾遺集第三秋河原院にてあれたる宿に秋來といふことを人々よみ侍りけるに惠慶法師「八重むぐらしげれるやどのさびしきに人こそ見えぬ秋はきにけり〔釋〕是は類例なるべし **おきながら川** 廿三丁オ〔拾〕水原抄等に奥中河とある說は大に誤なり引ところの歌は萬葉第二十に有て於吉奈我河波と書り日本紀第廿八云男依等與ニ近江軍ニ戰ヒ息長横河ニ破レ之延喜式第廿一諸陵式云息長陵舒明天皇之祖母名曰ニ廣姬ニ近江國坂田郡これらを引合せて考ふるに近江國坂田郡にある息長河なり萬葉に奈我と書るも長にて中にあらぬ證なりにはは水鳥にて息のながき物なれば枕詞におけりいきを萬葉にはおきその風ともいへり延喜式兵部式に近江國横河驛あり横川を息長にあれば息長川といふなるべし **べちなふ** 同〔河〕李部王記天慶三年十一月二十七日巳刻冷泉院別ニ納ニ所失ニ火此外諸院多在レ之別納は別に建たる屋なり別納にて大饗おこなはれたる事多し小寢殿なり〔新〕禁中に別納と云所あり又大臣定れる封戸の外に國より納物のある侍りそれを封戸の別納といふ此心にて此預り其別納物ある方に曹司をかまへて住なるべし〔釋〕べちなふの名はもと別納物を入おくより出たるならめど後世なるは必しも然らず河海の說

の如くなるべし **御くだものなどまゐらす** 廿四丁オ〔釋〕或抄に貴人は殿上人とて御陪膳申す人もれき〳〵也前にとりつぐ御まかなひ打あはずといへり初に惟光は御供に參らざりし也惟光をたづね出してさて御菓子をまゐらする也といへるはわろし上に御まかなひ打あはずとありしは朝のほどの事なるをこれはやゝ夕つかたの事と聞えて上にゆふ露にひもとく花はと歌にもありてさてかたらひくらし給とあるも朝のほどゝは聞えずされば こゝは夕づけて惟光たづね參りて御くだ物を持來て奉りし事とすべしあしたの御かゆなどはともかくもして參らせしなるべし下に所にしたがひてこそとあるをもおもへさてかゝる事を餘りに委くあなぐりて注するは過たる事にて中々也 **なごりなくなりにたる御有さまにて** 同ウ〔玉〕これは源氏君みづからの御事をのたまへりと聞えたるに御字いかゞ後に誤りて加へたるにや〔玉補〕湖月頭書草子地と見たる說よしさては御字誤にあらず嘉基は云こは夕顔の上の事をのたまへる也源氏君に身の上を打まかせてさそひ給ふまゝにともなはれながら猶誰とも名乘給はぬを心のうちのへだてとはの給へる也といへり〔釋〕嘉基が說の如くなるべし **をかしげなる女ゐて** 廿五丁ウ〔細〕御息所の念なるべし〔萬〕御息所の事也源氏の思ひくらべ給へるによりて邪氣になれるにや〔釋〕これらの說どもにこの變化の物を御息所の怨念と見られたるは葵卷の事によりておしあてに定められたる也とはまづ此卷のはじめに六條わたりの云々と書出せしより次々にかのわたりの事は見えたれど未いかなる人といふ事をばあらはさずたゞ六條わたりの一人のやんことなき女にかよひ給ふさまにのみいへるに此夕顔の事は俄に出來たる事にて御息所の知せ給ふべきやうもなければ怨念あるべきことわりなしされば唯此あれたる院にすめる變化の物の所爲とのみ見るべき也然れども六條の事もそのにほひとはしたる書ざま也さるは此卷の初をかしこの事もて書おこされたるよりして御息所の打とけぬ御本上をも書あらはしおきてこゝにいたりて御息所と夕顔とを思ひくらべ給ふ事をいへるなど又おのがいとめでたしと見奉るをば云々といへるも全くかの御息所の事を源氏君のいとほしく思ひ出給ふにまりてあらはれたる變化とおぼしき書ざま

なれば也されば此院にすめる妖物の御息所のさまになりて源氏君の思ひしをれ給ひ夕顔上の物おぢする本上なるを氣どりてあらはれたるさまとは心得べき也もし舊說の如き意ならばをかしげなる女とはいはずして六條わたりの御ありさまなる女のなどいはでは(え)あらぬわざ也さてまた此下に引れたる江談抄の河原院の准據の事などはげにさる物語の世にいひふれけんを思はれたりとは見ゆれどもそれにつけても中々に御息所の怨念ならぬ事をばしるべしすべてこの大かたのさまは此卷の末に源氏君の夢に夕顔を見給ひし處に「あれたりし所にすみけん物のわれに見いれけんたよりにかくなりぬることゝおぼしいづるにもゆゝしくなんとあるが作りぬしの意と見えてこの變化の事の注釋の如き詞也心をつけて咏はふべしそも〳〵此變化の事の一段よはかなく作り出る物がたりなればいかさまにもめづらしくおどろ〳〵しく書なさるべきをさはあらずして皆源氏君の御心よりまねきむかへ給へるさまにかゝれたるはかのもろこしにいはゆる妖は人によりておこるなどいへる類のことわりを深くしたに思はれたる物とおぼしくこかしこ打かすめていかなる故とも知れぬやうに書まぎらはされたる筆づかひかへす〳〵もめでたくして作りぬしのざえのいたりふかきを見るに足れり

こととなることなき人を 同〔細〕夕顔上は三位のむすめ也其俗姓さしもなきをかくことなる事なきとはいへり云々(釋)此注も餘りにあなぐり過給へる說にてよろしとも聞えず頭書に擧たる小櫛の如くなるべし

つる打してたえずこわづくれ 廿七丁オ〔拾〕萬葉第四「梓弓つまびく夜音の遠音にも君がみゆきをぞかくしよしも同十「はや人の名におふ夜ごゑいちじろく我名をいひてつまとたのまん

むかし物語にこそ 廿八丁ウ〔河〕〔餘〕江談抄云資仲卿曰寛平法皇與京極御休所同車渡御河原院觀覽山川形勢入夜月明令取下御車疊爲御座與御休所令行房內之事殿中塗籠有人開戸出來法皇令問給對云欲賜御休所法皇答云汝存生之時爲臣下我爲主上何恨出此言哉可退歸者靈物乍恐抱法皇御腰御休所半死失顏色御前駈等皆候中門外御聲不可達只牛童頗近侍食御牛召件牛童令召人々差寄御車令彼乘御休所顏色無色不能起立令扶抱乘還御之後召淨藏大法師令加持繩以蘇生云法皇依先世業行爲日本國王雖去寶位神祇奉守護追退融靈了其戸面有打物跡守護神令追入之跡也又或人云法皇御簾中融靈參居檻邊云(釋)この物語そのかみよりいひ傳へし事なるをしたに思ひてかゝれたる事諸抄のごとくなるべし但しゝに昔物語とあるはひろく昔よりの物語をさしたるにて必しも此物語のみの事にはあらずさて此物語のやうを思ふに法皇依先世業行爲日本國王などいへる口つき全く僧どもの僞り作れるなるべしもし又まことにさる事有しならば奸僧どもの融公の靈に託ておどし奉れるにぞあらんさる類の事をり〳〵ありげに見えたる御世のさま也

いのちをかけて 卅一丁オ〔餘〕拾遺集戀四「何せんにいのちをかけてちかひけんいかばやとおもふをりもありけりこの上句に似たり

神事なる頃は 卅五丁ウ〔新〕延喜式神祇三云凡觸穢惡事應忌者人死限三十日自葬日始計又云觸死葬之人雖非神事月不得參着諸司并諸衛陣及侍從所等かゝれば九月の神事をはゞかりて今より內に參らざるよしかされど神事なる頃は云々てふ文末をかねたりとも見えずもし石清水の八月十五夜の祭をいふか其外八月の神事はきこえず

かしこくもとめ奏らせ給ひて 同〔玉補〕嘉基云小櫛いかゞこのかしこくはかたじけなしの意とは異也おろかなる涙ぞ袖になどいへるおろかのうらなり伊勢物語にむかしをとこ女いとかしこくおもひかはしてこと心なかりけり又同書昔かやのみこと申みこおはしましけり其御子女をおぼしめしていとかしこくめぐみつかう給ひけり大和物語つゝみの中納言のきみ十三のみこの母みやすん所をうちに奉りけるはじめにみかどはいかゞおぼしめすらんなどいとかしこく思ひなげき給うけりなどこの外あまたあり(釋)詞の例は此說のごとくいみじくなどいふ意につかひたり然れども必しもおろかのうらなる詞にはあらず其本はみな恐多くかたじけなき意より出て轉りたるがそこの事のさまに隨ひてさまざまに聞ゆる事いみじくといふ詞のごとしてゝは帝の源氏君をもとめさせ給ひしを中將のかしこくとのたまへるなればなほ本の意也小櫛ひがことにはあらず

さらに事なくしなせと云々 卅七丁ウ〔細〕こと

なくは無事也難なく沙汰せよと也〔孟〕〔岷〕葬禮の事を取つくろへとのたまへどあか事々しくすべきにもあらず我に任せられよと惟光が申す也〔湖師〕更に事なくしなせとは更に事がましからずひそかにしなせと也さやうにはの給へど惟光が御前を立を御覽じて忍びかねてみづからも出たち給ふとの義也〔釋〕こととなくは細流のごとくなるべし取つくろへとのたまへどゝある注は語勢過たり湖月師說はひがこと也さて頭書に擧たる小櫛の說にこと〳〵しくし侍るべきにもあらざれば心やすしと申す也とあるはわろかめりそのほどのさほうの給へどゝあるどの辭よりうけて何かといひたる語勢またたつがいとかなしくおぼさるればとあるかもじの勢などをよく〳〵あぢはふべし堀江孟津の說のごとき意と聞ゆる也猶よく考ふべし

川の水にて手をあらひて 四十一丁オ〔給〕敏達紀曰於是綾糟等懼然恐懼乃下泊瀨中流一向三三諸岳一漱水而盟曰云々〔釋〕こゝは清水の觀音を拜せんとて手をあらひたる也拜する時手を洗ふ事は今の人もする事にて何の事もなし契沖の抄にはかゝる無用の事をり〳〵あり

ぶくいとくろうして 四十二丁オ〔河〕清少納言枕草子にぶくいとくろき男の白張きたるとあり源光行俊成卿に申談して此物語の句を切聲をさしける時こゝにいたりて筆をおさへて右近初參の時分且又隱密事之也着服しかるべからずと申されけるに清少納言枕草子にもありとてすみて聲をさゝれけり此事しらざる人々服の義を立る歟ふくもとくろき也いとりは五音相通の字也通用つねの事也たとへばふくらかにて色黑き也云々〔明〕花說ふくりと肥て色黑き心と云々〔新〕服の黑きといふことも也より也其主の同じくいたみ給ふ服なれば初參を論ずる場にあらず且かくし給ふとてもおもてに出て人目にかゝるべきにも侍らず人間に御前に召れなどすれば是又論ずることなし云々又ふくりと肥たるなどいふは論にもたらぬ說也〔餘〕今本の枕草子にはいろくろき人のすゞしのひとへきたると有てふくいとくろき男の白はりきたるとはなしむかし本にはしかありけん〔釋〕此段の舊注は例の餘りにわなぐりたる說也新釋の辨いとめでたし又引れたる枕草子の文は例のおぼえたがへ給へるなるべしふくいとくろき男とは何の事ぞやさらに言の意聞えがたしすべていともい

ともひがことなり

けがらひいみ給ひしも 四十三丁オ〔新〕穢をはゞかり給ふ也夕の死に源の忌は有べからす只穢をいみ給ふといふべししかれども猶令を以てみれば忌有べし穢の日數の世の定めおのづから御病の立給ふ日までなりしかばしかいふのみ

御名がくしも 四十四丁オ〔湖〕一說此御名がくしとは源の事を云也さばかりにこそはとは大かた源とは推量したれ共ふかく忍び給ふ故に名を顯し給はぬにこそとはおしはかり聞えながら等閑にまきらはしとは源の一旦のすさみばかりなればこそかやうにはうちとけ給はざらめと夕顏の心に源を恨み給ひしと右近が申す也〔釋〕此說大かた得たりと聞ゆるを解ざまのわろくていとくだ〳〵しく意得にくし其中にふかく忍び給ふ故に名を顯し給はぬにこそはとゝいへるは頭書に擧たる小櫛にもかゝる小屋に通ひ給ふ事をつつましくおぼして名をば顯し給はぬにこそあらめとあると同じけれど本文のうへにさる意は見えず名をかくし給へども源氏君ほどの人ならんと推量り給ひしといふ意のみ也源を恨み給ひしといへるも詞過たり只うき事に覺したりとのみあるをやさてこの御名がくしといへる體意いとめづらし又さばかりにこそとあるもなきらはしけれどこれは下に「たしかならねどけはひをさばかりにやとさゝめきしかば云々」とあるは全く源氏君の事と聞ゆればこゝもそれに准へて源氏君ばかりの人といふ意と知れたり

すみわび給ひて山里に 四十五丁ウ〔餘〕いせ物語すみわびぬ今はかぎりと山ざとに身をかくすべき宿もとめてん

されぼよと 四十六丁オ〔湖〕内々其人にやと思ひ給ひし故されぼよと思ひ給ふ也〔釋〕或抄云前になほかの頭中將のかたりしとこなつうたがはしくと有内々うたがはしかりしに今聞あらはしてされぼこそとなほ〳〵殘り多く思ひ給ふ也

かのあもし院にこの鳥の鳴しを 四十七丁オ〔細〕あもし院とは河原院也院に此とよみ切て鳥の鳴しとよむ說あり此といふ詞はうたひものなどにやすめ詞におくたぐひ也此時はいへばとの聲に梟を思ひ出たるなりさもあるべきにや一說たゞあもし院にとよみて此鳥のなきしとよむべき也此河原院には終日居給ひしほどに鴿の啼事もあるべき也それをおぼし出すなるべし物語には前に鴿の沙汰なかりし故にむつかしき沙汰ありかやう

に心をやりてみれば相違なき者歟〔釋〕後の說よろし前の說はいみじきひがこと也前に梟をとり出たる餘韻にこゝに鴿を取出て畫間の事をおもはせたるいと巧なり　歌**見し人の云々**　四十八丁ォ〔餘〕齋宮女御集をゝはゝの北の方「見し人の雲となりにし空なればふる雪さへもめづらしきかな此歌をかへて用ゐたり諸抄此歌をひかずわすれたるにや〔釋〕かへて用ゐたりといふはわろきいひざまなりあまたの歌の中には意の似たるも多かるをいづれも其歌により其歌をかへたりとせんはいとあぢきなし此物語はさらに他の歌を作りかへたることなき例也諸抄も忘れたるにはあるべからずもとよりことなれば引れざりしにこそ〔拾〕異本にむつかしきとあるは寫しあやまれるなるべし新古今哀傷におなじ人の歌に「見し人のけふりとなりしゆふべより名ぞむつましき鹽がまの浦」これを引合せておもふべし　歌**とはぬをも云々**　同ウ〔細〕此歌の結句花鳥思ひわづらふとあり思ひわづらふは源氏の病惱を思ひよせていへりとひ給はぬはわづらひ給ふ故とおしはかる心也云々これはあまりなる義歟此本は思ひみだるゝとありしかればわづらひなきか〔餘〕源のわづらひ付給へるは八月十七日なりこの前に廿よ日おもくわづらひ給へど九月廿日の程にぞおこたりはて給ひぬると有をかぞふれば三十三四日をへぬ右近をめしいでゝのどやかなる夕ぐれに御物語し給ふと有はそれよりわづらひ日比へたる時なるべし此次にかの人の四十九日忍びてひえの法華堂にてず經などせさせ給ふとあれば此歌よみておこせたるはわづらひ付給ひてより四十餘日をへたるなるべし源の方には病おこたり給へれど文のかよひもなければ猶わづらひ給ふと思ひて文奉りたるなるべし歌にいかばかりかはといへるは五十日をふくみてよめるならんか三の句ほどふるにといひていかとつづけたれば五十日をふくませていへるにやあらんこは臆說ながら思ひよりぬればしるしつ源のなやませ給ふは五十日ばかりにやなりぬらんわがおもひなやむは五十日のみにあらずといへるをいかばかりといへる詞にそへてよめるにや〔釋〕こは穿鑿に過たるか語脈もさは聞えねど珍らしければ試に擧つ　**あやしやいかにおもふらんと云々**　四十九丁ウ〔細〕藏人少將自然知たらん事をいかゞと也〔湖師〕少將の心のうちはいとほしけれども又軒端の荻のけしきも床しければ御文をつかはし給ふ也〔新〕此所は意得がたし思ふに荻のはやく世をしれるを少將のあやしきことかなと思ひゐたらんを今文かよはさばされば/よと思はんもいとほしけれど又かの女も捨がたくおぼせばといふならんか下に我なりけりと思ひ合せばと云を見るべし〔釋〕細流の注は事の心聞わきがたし湖月師說はいとほしけれどもといへる少したがへり新釋は大かたよろしきを少將のあやしきことかなと思ひゐたらんをといはれたるは猶わろしとにかくにあやしやとあるを少將のあやしと思ふことゝしては語格たがへり　歌**ほのかにも云々**　同〔新〕煩ひてよみがへり給ふを荻をおぼす故といひなしてさてかりそめにも契りし事なくばかく思ひわづらふを問給はぬうらみを何しにかかけて申さんさるほのかなりとも契のあればこそと也かごとは託言にてうらみなどを人にかけていふなり云々〔餘〕この結ぶといへること諸抄あきらかに注せず僻案に思ひいづるまゝをかきつく萬葉第一君がよもわがよもしれやいはしろの岡の草根をいざむすびてな同卷十一あし引の名におふ山すげおしふせて君しむすばゝあはずあらめやも同十二しろたへの我紐の緒の絕ぬまにこひむすびせんあはんひまでに伊勢物語うらわかみねよげにみゆる若草を人をむすばん事をしぞ思ふ萬葉十一いもが門行すぎかねて草むすぶ風吹とくなあはん日までに古今戀五花すゝき我こそしたに思ひしかほに出て人にむすばれにけりなどいひて草をむすびて男女の相かたらふよすがとせる事古歌にあまた見えたり後世緣結びとて神の御まへなる木にかうよりしてむすびつくるは古き遺風ならんかこゝもさる心にてそこと我なかはかねてむすび置たりとの給へるなるべし〔釋〕新釋にわづらひ給ふをとはぬことをかごとゝいへるやうにいはれたるは舊注の意にてわろしさて餘滴に結ぶといふ事の例どもを擧ていへる事はさもあるべし草などを結ぶは男女ひとつによりあふにたとへたるにて今もさる事するならはしの國々もあり然れども引たる萬葉の歌なるは皆事の誓にせしわざと見えて今世にする緣結びなどゝは意異なりさるは上に引たる君がよもわが世もしれやなどいふ歌も戀の意とは聞えぬに卷二に有馬皇子の紀伊國にて失はれんとし給ひ

し時松枝を結びて「磐白の濱松がえを引結びまさきくあらば又かへり見んとよみ給ひしなどを思ふべし戀の歌によめるも皆ふたゝび逢んことの誓にせしさまに聞ゆされば是は別なり後世にいへるはたゞ緣の結ばるゝ事或は契を結ぶなどいふ事を草にいひかけたるのみ也さて其草などを結ぶといふも殊更に誓ひて結ぶ意にはあらでたゞものゝさはりにならぬやうに引結びておくによせて結ぶとはいへりと聞えたりされば是れも少しく意異なり此差を思ひ分つべし

うちとけで 同〔拾〕注空蟬と軒端のむかひし事也○今按この注のこゝろならばうちとけてのでもと濁りて軒端萩にくらべていよ〳〵空蟬の用意ありし事をほめ給ふ心なるべしでもと清て軒端の事と見ば人といふ事のかなはねば誤也〔餘〕今案ずるに契說にてはなにの心ばせと有より軒端の萩をいへりと見し也むかひゐたる人とは空蟬をいひうとみはつまじきとは源の心に飽はつまじきさまよと思ひ給へる也湖月師說及箋の說はでの字を清て人とは萩をさしていへりと見たる也穩ならず **四十九日** 五十一丁オ〔細〕いづくにても訓によむべし〔拾〕拾遺に藤原輔相が四十九日を音に隱題によめる歌もあれば只音しかるべきかこの次にはいはく幾十よ日とあるをもとをかあまりとよめといへるは心得がたしとをかあまりならば直にさかくべし餘の字をかんなに書たるを見ながらいかゞ訓にはよむべき五六日七八日なども作者は音を用ゐてや書けん四五人なども同じ **願文** 同〔河〕清和天皇貞觀九年十月勸學院南邊更建二一院一號二延命院一乃日主上自製二願文一云々願文自作例是也〔花〕重明親王家室藤原氏四十九日願文後江相公朝綱書レ之見二文粹一生者必滅釋尊未レ免二栴檀之烟一樂盡哀來天人猶レ逢二五衰之日一此願文之詞也云々 歌 **なくなくも云々** 同ウ〔新〕本は旅などにゆく夫の紐をば妻のむすびて又逢ふ時解んなどいふ意の歌萬葉に多し然るを是は身まかれる女の爲の布施のさうぞくの紐なれば源氏わがゆふ云々とよみ給へりされば是も今かくゆふ紐をわれもこん世となりての何れの世にか夕顏ととき夫婦となりてあらんと先夫婦の上にていひて且解脫の門にといはれたるは猶舊注にすがられたる也此歌にさる意までではなし **いよのすけかんな月のついたち比くだる** 五十三丁ウ（釋）關屋卷に伊與介といひしは故院かくれさせ給ひて又の年ひたちになりてくだりしかばかのはゝき木もいざなはれにけりと有故院かくれさせ給ひて又の年とは桐壺帝崩御の翌年にて源氏君廿四歲の時也試に此年よりかぞふるに八年の後にあたれりされば伊豫の任四年にして京へかへり又他國の守になりて四年國へくだりさてかへりて又常陸介になりたるなるべしさて常陸の任六年にして上洛するよし見えたるは任國の政よかりしかば年を延られたるなるべしさて其間の事をすべて省きたるは空蟬君は卷中のむねとある人ならねば任國へやりて筆を省きたるもの也 **ぬさ** 同〔餘〕和名抄云道祖風俗通云共工氏之子好二遠遊一故其死後以爲レ祖和名佐倍乃加美亦云道神唐韻云禓音觴和名太無介乃加美道上祭一云道神也眞淵云手向の神は古事記日本紀等に伊弉諾尊御帶をなげ給ひてなれる神を道の長ちはの神といひ御褌を投給ひてなれる神をちまたの神といひ御杖をなげ給ひてなれる神をくなどの神といふこれらの神ぞ道の神におはせば旅路に手向するも此神也然るを和名抄に他國の神をのみ擧しはよしなしといへり 歌 **あふまでの云々** 五十四丁オ〔河〕あふまでのかたみとてこそとゞめけめ涙にうかぶもくづなりけり 歌 **せみの羽も云々** 同〔拾〕後撰戀四につらくなりにけるをとこのもとに今はとてさうぞくなどかへしつかはすとて平なかきが女今はとて梢にかゝる空蟬のからを見んとはおもはざりしをかへし源巨城わすらるゝ身をうつせみのから衣かへすはつらきこゝろなりけり〔河〕ありし薄ぎぬに冬の裝束をそへてつかはしけるか仍てたちかへてけるといふ歟〔巴〕十月朔日に更衣あり一年に二度ありこうちきをかへし給ふを見て也〔箋〕河海の義ならば今返しつかはされし薄衣は夏衣にて時をうしなへり我身の有さまかくのごとしと音をなくといふにや又の義は衣をかへすは不逢人のしわざなればかへすを見ても音をなくといふ歟（釋）河海の說は文外のおしはかりにて此歌のみにてはさは聞えずましてそれをたすけてとかれたる箋の義はいよ〳〵わろしたちかへてけるといふはたゞ夏と冬と時のおしうつりてかはりたるにそへていへるのみの事と見るべし巴抄は其意とは見ゆれど詞足ずして聞えがたし 歌 **すきにしる**

云々秋のくれかな 同ウ〔細〕是は十月の歌なるを秋の暮かなとよめる餘情比類なき也歌の道かやうの所に心を付べき事也惣じては春と秋との中に夏冬はこもる也拾遺集にも雜の春秋の中に夏冬はこもれり〔箋〕此義非二正義一歟只九月盡の歌と分別すべし其故は上詞に伊與介神無月朔日ごろにくだるとあるはあらましごとなれば當時も十月にはあらず又けふぞ冬たつ日也けるもしるくといふも九月中立冬の節の日をいへり然ばこれも十月にあらずけふわかるゝといふは九月盡秋の別の事也四十九日も過秋もけふの空にといひる別にもよほされて哀傷の心切なればかく詠じ給ふ也過去の人もけふゆく秋も也云々若けふ別るゝといふに空蟬が事を含むべくは詞書にその句有べきを伊與介下國の事はかきもらしたり云々其上此卷は夕顔上の列傳なれば卷の終を夕がほの事にて書をさむ旁以九月盡哀傷の歌と治定すべき也然れば秋の暮といへる其煩ひなき者乎〔玉〕上に冬たつ日といへるは九月の末立冬の日なるべければ此歌に秋の暮とよめる論なき事也又上に十月のついたちごろにくだるといひて此歌にけふ別るゝとよめるけふは今といふ意にてかならずしも其日にはかぎらず秋のくれといふ事妨なし〔餘〕九月の末といへるいかゞ宣長も九月の末の立冬といへど夕顔の四十九日は十月四五日頃なるべければそれ過て後を九月也といはんはかなはず○孟齋宮女御集に過にしもいまゆくすゑもふたみちになべてわかれのなき世なりせば此歌齋宮集にあることなし今おとせるにや〔釋〕細流は花鳥の說をさながらに擧られたる也さて秋の暮といへるは頭書に擧たる鈴木氏が說のごとく十月になりての立冬の日によめる意也過にしもといひけふ別るゝもといへる二つのもは共に秋の事をさしていへりとせざれば此歌は解がたし箋に夕顔の哀傷とのみ定められたるは此理を思ひもらし給へるからのしひ言と聞ゆ又此卷は夕顔上の列傳なれば云々とあるもいかゞ也ことは帚木卷よりこなたの空蟬と夕顔との事を引すべて結びたる所なれば空蟬の事なくてはあへなきなりけふぞとあるも空蟬のふりはなれたる事よりうけたる語脉なるをやさて孟津に引れたる歌は河海より見えたるが餘滴にいへるごとく齋宮女御集の今の本には見えず歌のさまの餘りに似たるを思へば例の暗記

のまゝにみだりに書つけ給へるなどにやあらむかの抄にはさること他にも多く見えたること拾遺にいへるがごとし **見ん人さへ** 五十五丁ォ〔玉補〕源氏君に逢見奉らん限りの女をさへかたほならずよき人のみとせんはものほめがち也となり小櫛にはとき誤られたり〔釋〕此說はひがことなりもしさる意ならば見給はん人をさへなどいはでは例にかなはずたゞに見ん人さへといひたるは傍より見たる人の意なる事明らけし小櫛誤にあらず

校正譯注源氏物語餘釋二之巻目錄

若紫巻

わらはやみ
北山になんなにかし寺といふ所に
よのひがものにて
近衛の中將をすてゝ
はゝこそ故有べけれ
なさけなき人になりゆかば
あぜちの大納言
おとなになり給ふものなれば
瀧のよどみも
すこししぞきて
うどんぐゑ
歌おく山の云々
どこ
こんがうじのずゝ
こんるり
とよらの寺
ひちりき
さうのふえ
きん
山の鳥もおどろかし
まれ〳〵はあさましの御事や云々
いのちたに
おしつゝみ給へるさまも
王命婦
くらふの山に
ほだし
あしわかの浦
歌あさぼらけ云々
きりのまがき
さはりしもせじ
あづまをすがゝきて
はるかに霞みわたりて云々

末摘花巻

兵部大輔
父君のもとをさとにて
ひたちのみこ
いま一くさや
あはれは聞しる人こそあれ
御かさやどり
ふたま
いとつゝましげに
さくはち
たいこをさへ
くたいてける云々
みだいひそく
しろきぬの
しびう
さすかに櫛おしたれてさしたる額つき
内教坊
内侍所
ゆるしいろ
うはしらみたる
なこりなうくろきうちぎ
ふるぎのかはきぬ
わかきものはかたちかくれず
ひともかしてきうたとは
今やう色のえゆるすまじくつやなうふるめきたるな
ほしの云々
うらうへひとしうこまやかなる云々
くれなゐの一はなごろも
だいばん所
たゝらめの花
みかさの山のをとめをばすてゝ
かいねり
歌あはぬ夜を云々
御そひとぐ
をとこだうか
七日のせちゑ
きやうだいからくしげかゝげのはこ
けうあるもんつきて
はぐろめも
かく心ぐるしきものをも見てゐたらて

紅葉賀卷

朱雀院
行幸
青海波
かれうびんが
歌から人の云々
かうやうのかたさへたど〳〵しからず云々
御后ことはのかねてもと
かいしろ
いうそく
かざしの紅葉云々きくを折て
なやらふとて
名だかき御おひ
内宴
歌よそへつゝ云々
たゝちりばかり此花ひらにと聞ゆ
あざれたるうちすがた
さうのことは中のほそをのたへかたきこそ
平調におしくだして
うねべ女藏人
御けつりぐしみうちきの人
まかは
いみじうはづれそゝけたり
まだかたる物をこそ思ひ侍らね
見まほしきはかぎりありかゝるをとや
うんめいてん
瓜つくりになりやしなまし
がくしうにありけんむかしの人も
なか〳〵しるく見つけ給ひて云々その人なめりと見
給ふに
ほころびは
歌あらだちし云々
おびは中將のなりけり我御なほしよりは云々はたそ
でもなかりけり
まことはうしや世中よ
とこの山なる
七月にそ后ゐ給ふめりし
御こしの内もおもひやられて

花宴卷

南殿のさくらの宴
たんゐん給はりて
やすき事なれど
春の鶯さへづるといふまひ
柳花苑
かうじもえやらず
きこえたがへたるもじかなとて
しるしの扇はさくらのみへかさね
とゝのへさせ給へるけなり
そしうなる
弓のけち
藤の宴
女みこたちなども
櫻のからのまの御なほし
袖口などたうかのをり
扇をとられて
ひとうれしきものから

校正譯注源氏物語餘釋二之卷

萩原廣道纂注

○若紫卷餘釋

わらはやみ 一丁オ〔餘〕續博物志卷十云瘧鬼小不能病二巨一人一故曰壯一士不レ病レ瘧昔一人云君一子不レ病レ瘧蜀一人以二孩一瘧一爲二奴一婢瘧一秦漢故事云昌一意子七歳七月七日死後爲二豆鬼一著レ人爲二瘧病一故爲二童病一　宇治拾遺十二むかし閑院大臣殿冬嗣三位中將におはしける時わらは病をおもくわづらひ給ひけるが神名といふ所に叡實といふ持經者なん童病よく祈りおとし給ふと申人有ければこの持經者にいのらせんとて行給ふに云々（釋）わらはやみといふ名のよしは右に引たる秦漢故事の事より出しなるべし舊注に瘧のおとしやうなど記されたるは餘りに過たりたゞまじなひ加持をさせんために北山のひじりがり行給ふとのみ見てことたるべし　**北山になんなにがし寺といふ所に** 同（釋）河海にこの北山に萬葉集の向南山にたなびく雲といふ歌を引給へるを拾遺にことゝ〳〵しく辨へたりされどすべて用なければ共にはぶきつ京より北の方なる山なれば北山と今もいひてながひあるべくもあらずなにがし寺は鞍馬寺也とて鞍馬寺の緣起など擧られたるも共に不用の注なれば今はとらずたゞ其わたりのことゝのみ見てあるべし　**よのひがものにて** 四丁ウ〔新〕世中にすぐれてひが物ぞといふなりされど此入道をひがものといふは思ふにこは源家の大臣の子なりけるを時の他姓の執政のわがまゝしつゝ源家はかげもなきやうなるをくちをしく思ひて時にへつらはねば内のまじらひも心ゆかで中將をすてゝ國守とはなりしならんその上に娘のよろしきを見ていかで内にも奉らんとおもへど家の内もとまず且いきほひなければ奉るべきよしもなくなどある故に國守にて内々ゆたかになりてむすめをかしづきたてゝ末のすぐせまかせんなどの意也（釋）此新釋の論は皆文外のおしはかりごとなれどげにこのほどの世はさるやうもありしならんとて試にかきくはへつ　**近衛の中將をすてゝ** 同〔河〕藤原實方朝臣長德三年正月十三日辭二左中將一任二陸奥守一卽日還昇此一外例可レ勘〔細〕上略また山蔭の中納言中將を辭して備前守に任じて國に下るよし三代實錄に見えたり〔拾〕佐理卿の大貳に請ひなりて下られしなどを思ひてかけるにや　**はゝこそゆゑあるべけれ云々** 六丁オ〔細〕良清が詞也母の族姓をいふ也松風卷に此族姓の事見えたり〔弄〕系圖には誰ともなし但松風卷に大井の古卿兼明親王の事見ゆしかればかの御女に准じて心得べきにや（釋）准據の事は例のよしなしゆゑ有といふことをあながちに族姓の事と見られたるもいかゞ唯よしある人といふがごとき意也こゝはむすめのかしづきざまの事をいへるなれば族姓の事のみにはあらじ　**なさけなき人になりゆかば** 同ウ〔河〕後々の國司の事を云也素寂はにの字を止て丁見をくはへたり不レ足二信用一〔岷〕人なりゆかばゝなさけなき人國司になりてゆかばと云歟用べからず〔細〕今までは國守の所望するをもいひのがれけれども後々に情なき人などの此國の守に成て入道が心おきてをも云やぶりて迎へとる人もあるべきと也〔餘〕上のゐなかびたらんをうけていへるにて其むすめの情なくこちなきものにおひたちゆかばといへるなるべし心やすくてしもえおきたらじはさやうにこち〳〵しくなりゆかばいかにいつきやしなふ事のおろかならぬ親なりとも心やすく見るべきや安堵するよはあらじといへる心ならん（釋）後々の國司の事といふ說はよしなきこと玉小櫛にいはれたるが如しにの字を止てとある說も國司ともいはでたゞなりゆくとては聞えがたき事河海に用ゐられざりしがごとし餘滴の說はきはめてひがこと也人にとある語さらに女の事とは聞えず親の安堵せぬよしにいへるもこゝにはかなひがたしたゞ安心してむすめを今までのやうにてはえおくまじといふ語勢にのみ聞ゆる也さて愚案は頭書に注せるがごとくなるを猶また案に「いでやさいふともといふより「したがひたらんはといふ迄は一人が難じていへる詞「はゝこそ故有べけれといふよりは良清ならぬ又の一人が入道のかたざまの事を知居ていふ詞とも見るべきかとにかくにゆゑあるべけれ「もてなすなれとある二ッのれの辭抑へていへる意か推量りていへる意かまぎらはしき故にうつなく定めてはいひがたし猶他の例どもを見合せて考へ物すべくなん　**あぜちの大納言** 十三丁オ〔河〕養老二年始置二按察使一（釋）職原抄云陸奥出羽按察使府按察

使相當從四位下近代納言已上兼レ之　**たとなになり給ふものなれば**　十五丁オ〔玉補〕給ふるとか侍るとか有べき所なり給ふ物とあるは誤也〔釋〕此説一わたりさる事のごとくなれど猶思ふにおとなになるといへるは成長して人の妻になる事と聞ゆればこゝは源氏君の室となり給ふべき事をいふ故に敬ひて給ふといはんもさるべき事なるにや　**瀧のよとみも**　同ウ〔玉〕少し打そゝぐといふばかりの雨に瀧の水のまさんことといかゞとも聞ゆれど瀧はたゞ山川の早瀬のことなればその細き流れなどはしばしふる雨にもたちまち水はますことなり〔新〕瀧の淀には常は音すくなきを雨に風さへふけば淀も水増て音高きといふ歟〔細〕雨に瀧のおとのますこと也山中一夜雨樹抄百重泉などいふがごとし〔河〕古今戀二「瀧つせの中にもよどはありてふをなどわが戀のふちせともなき〔餘〕山中一夜雨云々これは王維が作にて送二東川李使君一と題せる詩中の二句なり〔釋〕本のまゝにて右の説どもを助けていはゞ瀧の淀も打そゝきたる雨にまさる故に落ゆく瀧の音もまさるといひて有べし然れども猶頭書に擧たる玉小櫛補遺の説ことわり有べし　**すこしぞきて**　十六丁オ〔玉〕源氏君也此詞ほとけのといふ上へうつして心得べしすこし退き給ふ故に見え給はぬによりてひがみゝかとたどる也〔釋〕此説いかゞなり「聞しらぬやうにやはとてねざり出る人あなりといふにつゞけて書たればさは聞えがたし出たる人のすこし退きてひがみゝかとたどる也前後の文勢を味はひてしるべし隔句法とてもかやうの所入まじりては聞えぬことなるうへに情景もいたく劣れるをやくらさ故にすこし退きてうかゞひたるさま也　**うどんぐゑ**　二十丁オ〔河〕天一台云優曇華三千年一一現々則金輪王出云々文句云優曇華者新云鄔曇鉢羅一翻爲二瑞應花一金輪一王出海一水減少金輪路一現此一華乃生金一輪一王之先一兆　又云靈一瑞一華似二蓮華一故云疑一云法華無一量一劫難レ聞譬如二靈瑞一者有二所以一若三千年此一花現者何爲二靈一瑞一乎答云　一一義云此一花開一時分歷二三千年一歟每二三千年一非レ云二出現一〔細〕優曇華此云二瑞應一泥洹經云閻浮提内有二樹一王一名二優曇華一有レ實無レ花優曇鉢樹有二金華一者世乃有レ佛　**たく山の云々**　同ウ〔孟〕「あし引の山櫻戸をまれにあけてまだ見ぬ花の色を見るかな〔細〕山櫻戸を稀にあけての句法也〔拾〕今按定家卿の歌は萬葉第十一「足引の山櫻戸を明置てわがまつ人をたれかとゞむる此歌を本歌の本體にして腰の句あけ置てといふを今のこゝのまれにあけてといふにかへ下句花こそあるじ誰を待らんは公任卿の花こそ宿のあるじなりけれといふをとりてわが待君をといふにあはされたれば彼腰の句は此歌をとられたりとこそあるべきにかへりてこゝを彼句法といふは顚倒せり孟津に定家卿の歌の下句をまだ見ぬ花の色をみるかなとあるは暗記のあやまり歟傳寫の誤歟おく山の松の扉とは萬葉に「奥山の眞木の板戸をおしひらきしゑや出こね後は何せん」「奥山のまきの板戸を音はやみ妹があたりの霜の上にねぬ」「おく山のまきの板戸をとゞとしてわがひらかんに入來てなさねこれらは眞木は奥山に有物なればかくつゞけたりこれら同じつゞけやうなる上やがて所にかなひてよめり花のかほとよめる歌　後撰春下「きのふ見し花の歌とてけさみればねてこそさらに色增りけれ　三條右大臣興風集」うすくこき色はまがへど花といへばひとつかほにも見えわたるかな拾遺」さくら花露にぬれたる顏みればなきてわかれし人ぞ戀しき　**どこ**　同〔餘〕行法肝要抄云五鈷三鈷金佛蓮三部杵也五鈷五部之金剛故爲二金剛部一三鈷三部一體故爲二佛部一獨鈷摧破杵也西方爲二通調伏一妙觀察智説レ法斷疑是摧破也西方蓮華卽理也理獨一法界故爲二一鈷一　**こんがうじのずゝ**　同〔最〕欽明天皇御時太子六歲十月に百濟國より經律幷種々の重寶等を吾朝へ渡さるゝ中に件の御念珠有レ之歟大和國法隆寺へ文永の頃能海法印良觀上人同道して參詣之次彼寺重寶等拜見之時御念珠兩三連在之其中に金剛子數珠相交者也〔餘〕數珠經略云其數珠體種々不レ同二校量一乃至穗子摺「一遍得二福千倍一蓮子得二福萬倍一水精得二千億倍一若二菩提子一或手一持得二福無量一　**こんるり**　同〔餘〕名義集曰瑠璃此云二青色寶一言二金翅鳥之卵殼一鬼神得レ之出賣二與人一名二紺瑠璃一　**とよらの寺**　二十二丁オ〔餘〕大和高市郡にあり三代實錄卷四十三宗岳朝臣木村等言建興寺者是先祖大臣宗我稻目宿禰之所レ建也云々彼寺推古天皇之舊宮也元號二豐浦一故爲二寺名一云云〔釋〕北畠守部が催馬樂譜の入綾に云豐浦寺の事行囊抄を考るに云元興寺は飛鳥村の西南久米寺へ行方ニ在豐等村ノ内也昔ハ四方ニ四門ヲ建テ四ノ額ヲ掛

タリ扃曰東門ニハ飛鳥寺西門ニハ葛城寺一本ニハ法興寺ト誤レリ南門ニハ元興寺北門ニハ法滿寺ト云境内方廿二町餘最坊舍數十宇有シト也今ハ僅カニ二間三間ノ瓦葺ノ御堂ニ御丈一丈釋迦佛ノ銅像一體昔ノ餘波ニ殘レリ云々豊浦寺云是也」と見え又大和巡路記に此寺の記錄とて引て右の趣にいへり然れば此寺東門は飛鳥に向ひたる故に飛鳥寺といひ西門は葛城に向ひたる故に葛城寺といひしなるべし推古御時葛城邊にいまだ寺あらざりければ彼四ッ五ッの寺號の中にも豊浦はもとの大宮の號飛鳥葛城は地名なりける故にかの四天王寺を難波寺といひしやうに專ら此二ッを以て呼しならんかし然るときは別に葛城寺といふが有しにはあらず今此四句は彼榎葉井の在方角を此寺の前通にして少し西の方にあるよしを詞をかへて云るにて二ヶ寺のあはひと云にはあらず云々則葛城寺の前なるや其同じ豊浦の寺の西なるやといふ意なり又其えのはゐも葛城寺のえのはゐといひならへるまゝに無名抄のごとくにはかけるなればかれもひが事にはあらじ」といへり此說さもあらんか然れども引たる書後世の物なればなほよく其たしかなる證を考へ合せて定むべくなん　**ひちりき**　同〈河〉律書圖云大篳篥小篳篥〈岷〉事物紀原云說文曰羌一人所ㇾ吹其聲悲切本名二悲篥一〈餘〉和名抄云律書樂圖云云々畢栗二音和名比千利岐　**さうのふゑ**　同〈河〉笙說文曰笙十三簧象鳳之身一吳曰列管以象二鳳翼一也或云鸞翼鳳音爾雅曰夫笙謂二之簧一郭璞曰列二管匏中一施二簧管端一列仙傳曰王子喬好吹ㇾ笙作二鳳鳴一鸞鳳類故通言ㇾ之李嬌笙詩曰形寫歌鸞翼聲隨舞一鳳哀　**きん**　同ウ〈河〉琴神農作云云元五絃宮商角徵羽是也加二文王武王絃一合七絃也琴操曰長三尺六寸六分象二三百六十日一前廣後狹象二尊卑一上圓下方象二天地一五絃象二五行一〈釋〉河海抄此次に五節の事あり又白虎通に琴者禁也禁二追於邪氣一以正二人心一也といへるを引て源氏君わらはやみの時分なれば僧都琴をすゝめ申も若心有歟などあるは餘りに過たるべし又允恭天皇天武天皇の彈給ひし事をも唐の琴のごと注し給へるもいかゞ天武の御事はさもあらばあれ允恭の御時のは日本琴なる事決し　**山の鳥もねどろかし**　同〈河〉琴書師曠晉之樂官也工二於琴一能易二寒暑一占二風雨一晉平公鼓之感二玄鶴一六十下一舞　列子云瓠巴鼓二琴瑟一鳥舞而鳴魚躍而遊矣〈餘〉史記師曠援琴一奏玄鶴一雙集二于門一再奏延頸而鳴舒翼而舞

まれ〳〵はあさましの御事や云々　二十五丁オ〈箋〉たまさかの一言も曲なきと也傍におきて其時々恐び給ふ事などこそとはゐはつらきなどゝいふ恨もわらめ本臺の人には似合ざる詞ぞと源のゝたまふ也〈萬〉いやしき人などこそといへるにや〈釋〉右の說どもまれ〳〵はとあるをたまさかの一言と注せられたるはもしの意をばいかゞ釋べき必さはあるまじき也萬水一露にいやしき人などこそといへるは分際とあるにはかなへれどこゝは尊卑をいふ所ならねばなほ本臺と側室との分際なるべし　**いのちだに**　同〈河〉〈細〉「いのちだに心にかなふ物ならば何かは人をうらみしもせん〈餘〉此歌大に誤れり上句は古今集離別白女がよみたる何かわかれのかなしからましといへる歌をそのまゝ用ゐたりさて下句の何かは人をといへるは後撰集一によみ人しらず「わたつみにふかき心のなかりせは何かは君をうらみしもせんとあり又伊勢集につらくなりたる人に「わたつみのふかき心のかはらずは何かは人を恨みしもせん古今後撰の歌の本末を合て一首となして引たるは笑ふにたへぬことなり源注拾遺新釋にも是をとがめいはざりしは見おとしたるにや　**たしつゝみ給へるさまも**　二十六丁オ〈花〉河海につゝみぶみをたて文の事にいへるおほつかなしつゝみ文は宇治の卷に見えたりたて文にてはあるまじきにや嫁娶記に見え侍り艶書のつゝみやうは假令紫或は紅の薄樣二重に歌をかきておしたゝみて引むすびて墨を引て其を又薄樣を一重にて藥もしは砂逢などの如くつゝみて同薄樣をほそくきりてひねりて頸をゆふ也これに墨を引不ㇾ引は兩說也〈新〉花鳥の說まことなるべし雅亮裝束抄に女御參聟取などの文は結びて裹むとあり　**王命婦**　二十八丁オ〈河〉王氏の命婦也又上古は王姓をも給ける也續日本紀曰藤津王等言亡父存日作二請ㇾ姓之表一云臣男四人女四人雖ㇾ蒙二王姓一以ㇾ世言ㇾ之不ㇾ殊二匹庶一〈釋〉王姓をも給けるとあるはいふかしき注也姓を賜はるはやがて臣下の列に入給ふ證なれば王といふ姓を給ふべきいはれなし續紀に王姓とあるはさる姓ありしにはあらすたゞかろく添ていへるのみ也そは此時始て姓を賜はらんとて表を上り給へるなれば此前に姓のなかりし事はしられたりさてこの王命

婦は王とある人の女などの命婦になれるをいふなるべし　**くらぶの山に**　二十九丁オ〔花〕六帖二「くらぶ山くらしと名にはたてれどもいもがりといはゞ夜もこえなん今案此歌いたくかなはねどもくらぶ山をくらきかたによめる歌なればこゝの詞にすこしきたよりあるにや心は夜がはやくあくればしばらくくらき所にやどりはとらまほしきと也京極中納言のこゝの詞をとりてよめる歌兼厭暁戀「今夜だにくらぶの山にやどりもがなあかつきしらぬ夢やさめぬと」「やどりせぬくらぶの山をうらみつゝはかなの春の夢のまくらや〔餘〕眞淵云天武紀に倉部倉歴など有は近江也山城に在と後にいふは誤也歌は古今集に二首あり又暗にはふを清競には濁るといふ説は古意にくらき説也かゝるいひよせはその本語のまゝに云てよせたき心には清も濁るもかゝはらぬ例なるを古意しらぬ人はかゝる説をいふ也此くらぶはもと濁る言也　**ほだし**　卅四丁オ〔餘〕古今集雜下ものゝべのよしな「世のうきめ見えぬ山路へいらんには思ふ人こそほだしなりけれ和名抄刑罰具鋌加奈保太之鎖足具也　**あしわかの浦**　卅八丁オ〔細〕蘆の若きにわかの浦をよせたり〔拾〕今按蘆若の浦を別にひとつの名所とするは誤れるを此細流にはよく釋し給へり蘆の若きによせたる事少納言がかへしにあしを捨て只わかの浦とよめるにて明らか也又元眞集にかのえさるを隱題によめる歌「なにはがたこげと小船はあしわかのえざるほどこそ久しかりけれこれは蘆分小舟さはりおほみの心にてあしわかのしげれる江をこぎさるほどの久しきとよめり若きあしはことにやはらかなる物にてよわければ古事記にも武雷神建御名方神の御手を取給へば若葦のごとしといへり萬葉第二の歌に葦わかの足痛吾勢とよめり別に注之〔新〕元眞集に云々てふによれば攝津にあしわか江といふ有かしからば少納言が返しは只わかき心にのみよりて紀の國のわかの浦をとり出たるなるべし返歌に其を意得て他の名所をもていふも常ある事也〔拾〕細新勅撰戀一よみ人しらず「あしわかの浦にきよするしら波のしらじな君は吾おもふとも此歌六帖卷五いひはじむといへる題の部にいれり新勅撰集戀一にいだせり立ながらかへる波とは後撰集戀四よみ人不知「こりずまの浦のしら波立出てよるほどもなくかへるばかりか〔釋〕拾遺

よろし新釋はわろし河内に若江といふ所も今あれどなほそれにはあらじかし　歌朝**ぼらけ云々**　四十一丁ウ〔拾〕今按霧の立まよふといふを道をまよふにかねたり萬葉十一「妹が門行過かねて草結ぶ風吹とくなあはん日までに催馬樂の歌もこれより出たるべし〔釋〕この説霧の立まよふを道をまよふにかねたりとあるは過たるべしたゞ霧のまよひにもゆきすぎがたき意とのみきこえたる物をや　**きりのまがき**　四十二丁オ〔拾〕菅家萬葉下「君に見えんことやゆゝしき女郎花霧のまがきに立かくるらん「さやかにもけさは見えずやをみなべし霧のまがきに立かくれつゝ曾丹集「山里にきりのまがきのへだてずばをちかた人の袖も見てまし　**さはりしもせじ**　同〔餘〕後撰戀五「思ひやる心ばかりはさはらじをなにへだつらん峰の雨にさはらずまできてそら物語などしけるをとこのしら雲大和物語としこ雨のふりける夜ちかぬを待けり雨にやさはりけんこざりけり次郎百首隔遠路戀「都人戀しきまでに音せぬはなこそその關にさはるにやあらん萬葉五「すべもなくくるしくあれば出はしりいなゝと思へどこらにさやりぬこのさやりぬに同じ障らるゝなり　**あづまをすがゝきて**　四十六丁オ〔釋〕日本琴をあづまといふはもと東遊の歌をひくより出たる名なるべしさて東遊といふ名は東國のひな歌をかしくうたふより出たる也もろこしの琴にむかへてやまと琴といふだにいかゞしきいひざまなるに東としもいひならへるはいとあかぬこと也これわが皇國の固有の琴なるものを〔河〕あづまは和琴の總名なれども又東調とて秘曲ある也常陸歌は風俗の秘事四首の其一也東調にて此歌をうたふを今の世しる人まれ也云々〔花〕和琴に菅攬片攬とて神樂催馬樂に用る事あり五ッ拍子にはすがゝき三度拍子にはかたがきといへり又箏にも毎樂曲終にかくを菅攬と云と云々〔弄〕一禪御講釋の時は未分明の由のたまひきと云々尙可尋〔最〕凡菅根をあつめて其音をかきいだしてすがゝきの秘曲とす和琴のかたち弓を六張たてならべてその姿につくれり本はせばく末はひろし云々親行許へ和琴大夫敎豪狀云あづまをすがゝきてひたちには田をこそつくれとは畫身にいとなむ事に候をみな被知食て候めどもあづまと申候名は和琴をばたゞも申候へども是は東調と申て道の秘事

にて候ひたちには田をこそと候は風俗の秘事四首の内第一の也あづまのしらべにてすがゝき候て風俗をばうたふことにて候を今はくはしくしりてト人もすくなく候らんそれをしらん人は心みよと書置て候けるやらんと思候間涙難禁候如何云々行阿云若菜上に柏木衛門督のすがゝきしたるとあり其所より三四行がかみにしらべにしたがひてあとあるべしとみえたる也若紫此段と若菜上の詞と符合せり(釋)河海の說は右の最秘抄の旨をつゞめて記し給へる也然れども此所の文の意さるむつかしき事とは聞えずもし東調へに彈給ふ意ならばあづまにとこそ有べけれさればこことはたゞあづま琴をすがゝき給ふ也

追加 **はるかにかすみわたりて云々** 三丁ォ (釋)中島廣足の海人のくゝ都に云源氏物語の文にいはゆる草子地の詞あり人々の詞あり又人々の心のうちをたゞにいふ詞あり此三の差別其詞つゞきの堺大かたはいとよくわかれたるをまたおのづからうつりゆきて地の詞より人の心のうちをいふ詞になり或は心のうちをいふ詞より地にうつり其間に人の詞のまじりなどなほさま〳〵にはたらかしかきたる所ありこれ紫式部が文法のすぐれたる故のみにはあらずすべて物語文はそのかみ人の物がたらふまゝを記せるさまに物したれば詞のしらべにまかせておのづからしかうつれるもの也今俗にも人のさま〳〵と世のありさまをかたりあふ中にはさやうのおもむきにおのづからうつり行語あるを其しらべにまかせてきく人はたしらず〳〵よく聞とりゆくが如しさるを玉小櫛に詞の堺なくてとゝのはぬやうにおもはれてもしの落たるにやなどいはれたる所もあるは委しく考へられざりし故なりかれ今其例をいさゝか左にあげぬ」とて卷中の例ども擧られたる中にこゝの文も出たるを既に本文を彫せたる後に此書を見たりしかばいとくちをしくてこゝに物しつ ○「はるかにすみわたりて四方の梢そこはかとなうけふりわたれるなど(源氏物ノ調ニウツル)ゑにいとよくもにたるかなかゝる所にすむ人心に思ひ殘す事はあら(地アリ)じかしとのたまへば云々又「くれかゝりぬれどお(人ウシ)こらせ給はずなりぬるにこそはあめれ云々(調ニウツル)この說いとよろしければ隨ふべしされば(源氏物ノ調ニウツル)かしこの釋に「はるかにかすみわたりてといふ所より源氏君の詞なるべしといへるも語中にけしきをかたり給也といへるも共にわろかりきけしきをかたる中に詞にうつる法也とこそいふべかりけれ

○末摘花卷餘釋

兵部大輔 二丁ウ〔玉〕此人わかむどほりとのみいひていづれの子ともしられずまぎらはしきしるしざまなるを今よく考ふるにこれも常陸親王の御子にて末摘花君の御せうとの如く聞えたり其故はむすめの命婦が事をいふに父君の許を里にてといひて下に父の大輔の君はほかにぞ住けるこゝには云々といへるは末摘花と御兄弟なれば同じ宮にも住べき人なる故也もし御兄弟にあらずはほかにすむことをことわるべきよしなきにあらずや又命婦が常陸宮に參り通ふも此緣によりてなるべしもし然らずは參り通ふゆゑよしをいふべきことなるにそれを何ともいはずしてたゞ父君の許を里にて行かよふといへるつゞきにやがてこひたちのみこの云々と書出たるはその父君の御父の常陸宮といはぬばかりに聞えたり又下に命婦が源氏君のために媒する事をいへる所に父君にもかかる事なんともいはざりけりとあるも末摘花の御せうとなる故とこそ聞えたれもし他人ならむには人の忍び事の媒する事を父などにはいふまじきはもとよりの事なればかくことわるべきにあらざれば也されば必末摘花の御せうとゝ聞えたるにたしかに然いへる文もなく又末摘花の御身のたづきなき事どもなどいへる中に蓬生卷にまれにも訪ひくる人は御せうとの禪師の君のみなるよしのみ見えて此大輔君の事は此卷にもかの卷にもいかにとも見えたる事なきなどは御せうとのやうにも聞えずこれかれまぎらはしき事なり然るに諸抄にかつてそのさだなきも又いかにぞや(釋)此說いとよく考へられたり案に蓬生卷なる禪師の君は此兵部大輔の君の出家せしさまにかゝれしなどにもやあらんさてかく書かすめて見ん人のとりあはせて此は其人也とやうに考へしるべく記されたるも卷中一箇の文法にてもあるべし **父君のもとをさとにて** 同〔孟〕末摘の父宮也〔拾〕今按此說誤也上にいへる兵部大輔なり其上ちゝ君をとは此上に末摘の事なくていふべきやうなし又此說のごとくならば故常陸宮とつゞくべきやうなし又ことば顚倒せり〔新〕下に父の大輔の君は外にぞ住けるこゝにはとき

どきぞかよひける命婦はまゝ母のあたりはなどいふを心得誤りてさま〳〵いへど上には先一わたりいひて次に委しく明す文例にてその住もつかぬなどはこゝにはかゝはらで只父の大輔の方を里なるべき理りをもて先かくかける也實に王家統なる故と見えて下にも大輔の君と書たればこゝに父君とかけるはもとよりなり云々　**ひたちのみこ**　同〔新〕親王此大守に任ずる事は類聚三代格第五云天長三年九月六日官符云應レ任二親王一國守事上總國常陸國上野國云々この後親王の任ぜし例數ふべからず抄どもには或は引おくれなどして擧たり〔花〕光孝天皇承和五年正月任二常陸大守一其後貞純親王代明親王元長親王等任じ侍る也〔明〕考二續日本紀第五一承和五年正月庚申朔壬申四品忠良親王爲二常陸大守一從五位下藤原朝臣貞公爲レ介〔釋〕この常陸國の大守に任ぜられし親王を常陸の皇子とも宮ともまうす也　**いま一くさや**　三丁オ〔拾〕細流の說可然但詩もあまりに好みもし作りもせんはうたてかるべく酒もすこしなどはいふべきにあらねど詩をあまりに作らんよりは酒はすこし好むともうたてかるべし　**あはれは聞しる人にこそあなれ**四丁ウ〔河〕ものゝあはれしる人にこそあれ　六帖「琴の手をきゝしる人のあるなべにいまぞたちはてしを」をもすくべき朔月ニ引ルゝつぐべきトアリ〔餘〕今本六帖にはことの音をきゝしる人の有ければ今ぞたちいでてをゝもすくべき〔花〕ものゝあはれしる人こそあなれ伯牙彈レ琴鍾子期知レ音たる心也〔弄〕〔孟〕命婦をさしてしる人といへり〔岷〕あはれしる人こそィ本あはれきゝしる人こそ〔釋〕此所諸本異同ありて意の明らかならざる事右に擧たるがごとし案に河海に引れたる歌はかの伯牙鍾子期が故事を思ひたる歌なればしる人と云を鍾子期にして命婦にあてられたる意と聞えたりさては擧給へる本のものゝあはれとあるにかなはず又「人にこそあれ」といふてにをはゝ既に在つる人の事を後より評ずる意となれゝばさらにかなひがたし花鳥には人にのにもじなけれど伯牙云々を引給へれば猶しる人は鍾子期にて命婦をさゝれたるなるべしさては又人こそあなれとある辭にたがひてあはれしる人を傍にしたる意となれゝば下文に續きがたし岷江又一本にあはれしる人こそとあるはみづからのうへをさゝれたりとすれば卑下の詞となりて聞

前後に一説とあるは伴越が誤なり

えぬにはあらざるべしされど他の本どもに皆きゝしるとあればそれも猶いかゝあらむとにかくに聞しる人又しる人などいふを鍾子期が事によそへて命婦をさせりといふ說どもは前後の文につゞけてかなひがたしそのうへ物の音を聞しる人とあらばこそさもあらめあはれをしるとあるをもて鍾子期にはあてがたきものをやさればみなひがと也今は「あはれは聞しる人こそあなれ」といふ本に隨ひてさる琴の音まさるべき夜のけはひなどいふ物のあはれは心ありて聞しる人こそさやうにはあらめわが拙き琴にてはもゝしきに行かふ人のきくばかりにやはあるべきといふ意に定めつ猶よく考ふべし　**御かさやどり**　十一丁オ〔餘〕いもが門せなが門云々此催馬樂のもとは六帖卷一雨の部に「いもが門ゆき過かねつひぢがさの雨もふらなんあまがくれせんといへるより取たり萬葉卷十一に「いもが門行過かねつ久かたの雨も零奴可其乎因將爲」と有て六帖とはすこしたがへり〔釋〕ひさかたをひぢがさとよみ誤りたる事もいとふるき事と見えて此物語枕冊子などにも皆ひぢがさ雨などいへり臂をかざす意也といへるは昔よりさる意に思ひ誤れるなるべし　**ふたま**　十五丁オ〔釋〕枕冊子くちをしき物の下に五月の御さうじのほどしきにおはしますところぬりこめのまへ二間なる所をことにしつらひたればれいざまならぬもをかしと有又桃華殿のひんかしのひさしの二間に御しつらひはしたり云々とも有新後撰集に御持僧に加はりて二間に侍りけるとを思ひ出て前大僧正禪助「天の下千代に八千代といのるこそよゐのむかしにかはらざりけれ禁秘御抄云二間敷二疊一帖一北間向二妻戸一敷二阿闍梨座一半疊一南間如二御講之時一懸二御本尊一寄二障子一也眞俗交談記云二間御鏡毎月十一日辰一點奉レ拜之給嵯峨天皇御記云毎月朔朝御代鏡奉レ拭レ之伯督所役也着二淨衣一用二覆面一正月朔無二其事一除夜勤仕也日中行事に清涼殿とうろ五額間をのぞきてそれより南のかたへ四間ごとにあり二間のまへおの〳〵すはうの網にかけたり云々など見ゆ一翁云二間はよろしきゝはの家には必しつらふ事也宅神を祭り或は佛像をもかけなどする爲の間にて別に清まはりて物する也內裡にては仁壽殿清凉殿にありて神鏡をも祭り又佛像をもかけ僧徒をさふらはせ給へり二間本尊二間供など諸記錄にあまた見

えたり但し平常に設置くにはあらず齋會などある時にのぞみての鋪設なり云々こゝは末摘花の里亭の廂の中にて二間とりたるその二間のうちに末摘を置源を廂にするゑたる也さはなるとは隔の中の障子の事也云々此說のごとくなるべし　**いとつゝましげにたぼしたれど云々夢にもしり給はざりければ云々**　同〔玉〕ばはどの誤なるべし又上なるつゝましげにおぼしたれどのどはばの誤なるべし〔玉補〕云々と小櫛にあれどおのれはさは思はず本のまゝにてよけんとぞ思ふ〔釋〕今案に補遺の說のごとくなるべしつゝましげにおぼしたればのばは句を隔て「命婦のかういふをあるやうこそはと思ひて物し給ふといふ所へかけて心得べし　**さくはち**　廿一丁ウ〔河〕詠二尺八一遊仙窟長一尺八寸舌四寸八分律書圖云又云尺八爲二短笛一玄宗皇帝前身爲二羅漢一也好吹二尺八一被二擯出之一見二聖會傳一　**たいこをさへ**　同〔餘〕和名抄云律書樂圖云爾雅云大鼓謂二之鼖一晉墳和名於保豆々美一云四之豆豆美今接細腰鼓有二一二三之名一皆以應レ節次第取レ名也〔花〕禮記曰鐘鼓在レ庭琴瑟在レ堂延喜四年三月廿四日覽二舞樂一左大臣時平公仰令レ推二大鼓階前一自打レ之云々大鼓はかならず堂下にてうつ事也但寛治六年五月廿五日殿上競馬六番之時主上　堀川院　自打二大鼓一給此時置二堂上一也　**くたいてける云々**　廿二丁オ〔河〕腐クタス〔拾〕今按河海の心は命婦が心にくきほどにて止なんと思へりしをおしたちて逢てかれが心をむなしくするを令レ腐といひてくたしてけるをかれが我を心もなう恨み思ふらんと源の思ひ給ふと也只命婦が心をさま〳〵に摧きしかひもなくといふなるべし〔釋〕こゝは猶腐いての意也命婦が心にくゝて止なんと思へりしを源氏君の腐いてしひて逢給へる也けるの辭にて暫く切て心もなく此人のおもふらんをさへとつゞけてよむべし此人の心もなく思ふらんといふ意也我心を催くとはいへど人の心を摧くといふ事は例なき事なれば隨ふべからず　**みたいひそく**　廿三丁ウ〔河〕御臺秘色今の茶垸樣の物也　秘色事　今之秘色磁器、世言錢氏有レ國越州燒進、不得二臣庶用一之、故云二秘色一、皆見二陸龜蒙集一、秘色越器云、九秋風露越窯開、奪二得千峯翠色一來、好向二中宵一盛二沈澄一、共二縹中散鬪二遺杯一、乃知唐已有二秘色一、非二錢氏爲一始、類說　今案秘色は磁器也越州よりたてまつる物也

其色翠青にして餘にすぐれたり仍是を秘藏して尋常に不レ用レ之故是秘色云々〔花〕季部王記天暦五年六月九日御膳沈香折敷四枚瓶用二秘色一うつぼの物語云ひそくのつき今案秘色はあをき茶椀のたぐひを云也〔拾〕五雜俎云、陶器柴窯最古、世傳柴世宗時燒造、所司請二其色一御批云、雨過青天雲破處、這般顏色做一將來、然唐時已有二秘色一陸龜蒙詩、九天風露越窯開、奪二得千峯秘色一來、　**しろききぬの**　同〔釋〕したの小袖やうの物をいへるなるべしさらでは神事產所の外には白衣を本儀とする事はなければ也こゝは貧家なる故に小袖のまゝながらしびらをゆひ付櫛をさしたるなどのをかしさまさも也かれ下文に內侍所をいひてかの小袖の白きが內侍所の老女の神事に着たるにおもひよそへられたるさまとしらる　**しびら**　同〔釋〕一翁云しびらは上古にいはゆる褶の遺製也衣服令の義解に褶者所二以加二袴上一故俗云二袴褶一と見え集解の古記に褶謂似二婦人裳一也褶訓枚帶也といひ令抄に今私案褶着二袴上一也今禮服中所レ謂裳也とありて其寸法をも褶裳帶廣五尺二寸腰廣二寸五分長二尺三分と記されたり今も卽位の時に着する裳と異なることなしさてこれらは男子の服也婦女は褶と裙とを重ねて着る事にて褶は染色裙は纈染なるよし令に見えたり着るやうは集解の穴に女褶服二裙上一耳といひまた跡に婦女服二褶裙一謂男褶表袴上女褶先着レ褶而纈裙表而褶下端顯也とあるにて明らか也寸法は男女ともに異ならざりしやう也今京となりて後は女もなべて袴きる事となりてより禮服にも袴と裙をのみ着て褶を服る事は停られたり續日本後紀承和七年三月丁丑朔の詔に一裳之外不レ得二重着一と見えたり然れどもなほ行はれがたかりしにや延喜彈正式に凡婦人裙裳不レ論二貴賤一一裳之外不レ得二重着一單裳不レ在二制限一といふ事もありさて裳の製もやう〳〵かはりゆきて後の裳といふ物はこの褶と領巾とを合せてつくりたる物とおぼゆ今の裳の大腰といへるは褶の遺また引腰とて大腰よりつゞけて肩を打越て胸の邊にて結ふ紐は領巾の遺也されば古の褶裙の製とはいたく違ひたりかくて褶は着る時もなくなりて竟には褻服となり下ざまの女またはよきほどの婦にても打とけざまのをりなど袴にかへて着るやうになりしなるべしさるからにヒラミといふ古名もいつしかうせてシビラと

呼かへたるなるべしシビラは下平の略語にて裾のひらめくよしの名か云々夕顔の新釋に云々（此文カシコノ頭書ニ擧ゲタレバ略ク）令義解に枚帶也云々とあるはたがへりこれは上に引たる集解の古記の文也又上裳とて裳の腰にひらめなる絹をまとふとあるもいかゝ上裳とはすなはち裙下裳とは裙の事なるをや云々扨裙は推古紀十三年天武紀十一年に見えたる舊訓ヒラミヒラオビとありてシビラといふ訓は見えず和名抄にも字波美と有然るに梁塵秘抄に宇波母なたしびらといふ裙なり云々女房飾抄にもしびらは上裳の事也といへるは右の沿革をよくも考へず源氏物語の唱によりて打つけに說るものなるべしさばれ其大むねはたがふことなし云云」芳樹云穴（上ニ引ダレバ略ク）云々跡云云々古記云女裙俗云ニ引下裙ニ着ニ裙中ニ着ル總之裙也この說によれば裳よりも下に着るもの也河海に延喜式裙覆レ袴之衣也と見ゆこの袴は張袴の事なるべし張袴のうへに裙そのうへに裙也云々裙字シビラと訓べきがごとくなれども志比良は中古の俗稱にやとおぼしければ此令なるはなほ志多毛と訓べきにや志比良は下枚帶の略語ならんか志多毛は下裙也又うすもの〻裳云々は御息所に仕る女房の事にてこは裙のうへに裙を着たる式正の姿貴人の御前にてのさまも也中古より裙をも裳と書たるからに裙といふはいかなる物とも知れがたくなれども中古の裳は令の裙なりさて裙は袿の下に着るものとおもはる縫殿式に下裙と見え和名抄に下曰レ裳とある裙の事なるべし然るに字類抄に裙ウハモ名義抄に裙ウハミ和名抄に宇波美などあるは男服の事也女のは下に着るもの故に正しくは志多毛といひ俗にはしびらともいふべしこの物男の用ると女の用ると一字兩訓也まがふべからず云々」この二氏の說にてこの物のさまをしるべし夕顔卷に新釋の說をのみ擧たるはおろそかなりし故に再び注する也　さすがに櫛おしたれてさしたる額つき　同〔湖師〕おしたれてとはしどけなきさまなるべし（釋）本居翁云かやうの所に女の櫛をさす事は古風にて今やうにはせぬ事なるべし云々」廣道按に禁秘御抄に朝餉女房皆上レ髮三位以上釵子計也とあれば陪膳は髮を上る事本儀と見えたりさて櫛は髮上したる抑にさすものなるをこゝはさる儀式の形ばかりに垂たる髮ながらにて櫛をさしたるなるべし故におしたれとはいへる也さすがに

といふ語に心をつくべしさて此物語の比となりては宮たちの御家々などにては陪膳の櫛をさすなどの事は絶にたるを此常陸宮には猶かたばかりもさる儀の殘りねるが中々かたくなゝるよしにかける也　内教坊　同〔河〕内教坊在ニ大宿ニ今の大とのゐ也注大内裏にありける歟内裏の宮女の候ずる所也〔岷〕女房の樂をならはす所也琵琶行にも名屬ニ教坊第一部ニとあり〔餘〕續紀孝謙帝天平寶字三年正月饗ニ五位以上於朝堂ニ作ニ女樂於舞臺ニ奏ニ内教蹈歌ニ也或說内教坊者老女習ニ音樂於雅樂寮ニ而後教ニ諸女房ニ也妓女者多叙ニ從五位下ニ也職原聞書〔新〕拾芥抄云土御門北堀河西有ニ内教坊町ニ中右記云嘉承二年正月七日内教坊舞妓別當右中將師時傳取皇帝玉樹萬歲樂袍李花喜春樂五曲畢退歸　内侍所　同（釋）禁秘御抄云近代者如ニ内侍ニ不レ候ニ内侍所ニ上古者多以ニ溫明殿ニ爲レ局　階梯云本朝事始上崇神六年己丑始制ニ溫明殿ニ以三三種之神器ニ安ニ置此殿ニ後代之内侍所以ニ右之溫明殿ニ表始也榮花物語わかばえいばん所にてはかなくびやうぶきちやうばかりをひきつぼねてひまもなくゐたり拾芥抄云内侍所在ニ溫明殿ニ載令有ニ月析ニ主殿掃部女官同候ニ之ゆ

るしいろ　廿六丁ウ〔河〕聽色事延喜式云紅梅色也紅紫不ニ以爲ニ褻服ニと論語に云り然者此二色を聽色といふ歟但今のゆるし色は紅のうすき體也〔花〕延喜十七年參議三善清行請レ禁ニ深紅服ニ奏議云但淺紅輕黃未レ及ニ火色ニ者不レ在ニ制限ニ長保三年太政官符云紅紫服堤防自存中ニ袴直ニ袍下ニ襲之類或是用レ紅或亦用レ紫誠雖レ禁ニ其深染ニ未ニ曾制ニ其淺色ニ今案くれなゐひらさきはふかき色を禁色となづけ淺きをゆるし色といふ云々〔箋〕兩抄の今案其以然るべし延喜式に載る所も薄紅梅と心得て別儀なし論語の文是又相當せり是はゆるさるゝ色也薄きはゆるし色也（釋）花鳥の御說よろしかるべし或人云ゆるし色は卽禁色の事にてなべてはゆるさぬ色なれど勞功によりてゆるさるるを規摸とすればゆるし色とはいふ也政事要略には聽ニ禁色ニと書たる所もあり深き紅紫の外をゆるし色といはゞ赤も黃も綠も何も紅紫ならぬはみなゆるし色といふべきならずや云々といへり一わたりさる事のごとくなれど猶いかゞ也禁色は功勞に依てゆるさるゝなればこの末摘花君など私に奢給はんこといかが有べき禁色にまぎらはしき紅紫の色なる故にとり

わきて紅紫の淺さをゆるし色といはんはさも有べき情景也但し言の上はゆるされ色といふべきがごとくなれどさては言がらむづかしく聞ゆる故にゆるしいろといふなるべし今世に御免某といふがごとき意也赤も黄も緑も禁色の他は皆ゆるしいろといふべきやうなれど他の色は禁色に紛らはしからねば殊更にしかいふべくもあらずゆるすとは禁じたるをゆるす意なることはいふも更なれど似よりたるをゆるされて着んほどなるをばなほさてもいふべくなんなほよく考ふべし　**うはじらみたる**　同〔箋〕色のかへりたる也わりなうといへる詞にて見えたり一かさね両抄にはうちき一かさねと有河内本かくのごとき歟　**なごりなうくろきうちき**　同〔弄〕〔細〕紫の色のくろみたるなり〔箋〕此詞にて紅のうはじらみたるといふはべにの色ぬけたるとしるべし〔花〕きぬの次第にきぬの上にうはぎその上に小うちきなり寸法は次第にをめらかす也〔箋〕然らば末摘のうはぎはふるきの裘也此上に紅のうちきを着給ふと心得べき歟〔釋〕右の諸抄の御說どもいたくまぎらはしゆるし色のわりなううはじらみたるとあるは淺紅の年をへて上の白く成たる也さて一かさねとあればこれはきぬの事と聞えたりなごりなうくろきうちきかさねてとあるは紫の年をへて黑くなりたる袿をきぬの上にかさねてめしたる也さてうはぎにはふるきのかはきぬとあれば是は又その上に着給へるなるべし花鳥に小うちきとあれど小うちきは必小うちきとことわる例なればこれはたゞ袿なるべしさればかの御說はたのみがたし下よりかさねて上に及びたる次第と心得てかなふべしさて又なごりなうくろきとあるはもしくは紅にもあらんか紅も年をふれば黑むもの也されどゆるし色の上に又おなじ紅色を着給はんことはいかゞなるやうなれば是は紫といふ說に隨ふべくやあらん　**ふるきのかはきぬ**　同〔河〕杜詩云季子黑貂弊得レ無二妻嫂欺一注云蘇季子未レ用黑貂裘弊又出一遊數歲大困而歸兄弟嫂妻皆却笑レ之奉送魏六丈佑少府之交廣千家廿二又云兎應レ疑二鶴髮一蟾亦戀二貂裘一斟酌嫦娥寡天寒奈二九秋一月詩の心貧家の服にかなへり　西宮記曰臨一時一祭舞一人歸路着二黑貂皮衣一也　拾遺集云中宮安子ふるきのかはきぬを高光少將入道横川にすみ侍りけるにつかはしける「夏なれど山はさむしといふなればこのかはきぬは

風をふせがん　御返し「山風もふせぎとりつるかは衣うれしきなみに袖はぬれつゝ　六帖五　とこしへに夏冬ゆけや皮衣扇はなたず山にすむ人〔花〕江次第云昔蕃客參入時重明親王乘二鴨一毛一車一着二黑貂裘八重一見一物此間蕃客纔以二件裘一領一持一來爲二重物一見二八重一大慙云々〔新〕多武峯少將物語に中宮くるみいろの御ひたゝれくちなし染のうちき一かさねふるきの皮の御そ青にびのさしぬきあはせの袴奉れ給ふる歌「夏なれど山は寒しといふなればこのかはきぬぞ風はふせがん〔箋〕〔拾〕河海に引れたる拾遺集にはなし〔餘〕考るに貂は說文鼠屬大而黄黑爾雅翼貂實鼠類故字亦作レ鼦史記貨殖傳狐鼦裘千皮とあり　うつぼ物語藏びらきの卷に六尺ばかりのふるきのかはきぬあやのうら付てわたいれたる御つゝみにまぜ給ふと有玉造小町子壯裏書に貂裘濕二紅藍一而色濃也と見えたり（釋）山川正宣云凌雲集に御製吏部侍郎野美聞使レ邊賜二帽裘一歲晚嚴冬寒最切忠臣爲レ國向二邊城一貂裘暖帽宜二羈旅一特賜二卿之萬里行一　小野岑守遠使二邊城一王事古來稱二无レ盬一長途馬上豈云レ闌中略唯餘敕賜裘與レ帽雪犯風塵不レ加レ寒野美聞は卽小野岑守なり　妹子を因高葛野を賀能の類にて蕃客應接の稱呼を用ゐ給へる人といへり御製は嵯峨天皇の也この外貂裘のことと漢籍にはいと多かれどさのみはとて例のもらしつ　**わかきものはかたちかくれず**　卅丁オ〔花〕體無レ溫といはんとて火桶に火を入てもたせたり〔細〕〔新〕前に風吹あれておほとなぶら消にけるをともしつくる人もなし云々かしこへかけてみるべき也云々〔餘〕此說せんさくに遐たりこゝはわかき女と翁とを見給ひて劣者形不レ蔽老者體無レ溫といへる句を思ひ出給ひてずじ給へるさてその結句に入二鼻中一辛といへる句のあればふと末摘の顏をおもひ出されて笑ひ給へる也宵に來り給へる時おほとなぶらの消にけるをさへつきもなき御歸り路に詩を引いでゝの給ふべき物かはとてに烟火とはともし火の事にはあらぬをしひて說をつくり給へるなり云々　**いともかしこきかたとは**　卅三丁ウ〔河〕思ふ事をかざらずしてさしもにいひたるたゞこと歌の本意なればこれをかへりてかしこしとあざける也（釋）本文の頭書に愚案を注して後に河海抄の一本を見れば本文をもうたと引出て右のごとく注し給へり然ればかたとある本は寫し誤れる

事しるしされば右の河海を頭書にも擧べかりしを見おとして誤りたれば再びこゝに注す　**今やう色のえゆるすまじくつやなうふるめきたるなほしの云々**　卅三丁ゥ〔花〕榮花物語云祐子内親王紅梅十二を奉りたるを内の御つかひとて中納言の局參りたりけるが見奉りてうつくしの今やう色やと申けりうつは物語云わらはにつゝじのこうちきわか君のいまやう色のうちきゝ今案紅梅のこきをいふ也たとへばこき紅にもあらず又こうばいにもあらぬはしたのいろにて此比いできたる色なれば今やう色とはいへり大略ゆるし色と同じき也えゆるすまじくといふは紅のこきかたによりたれば禁色によりたるによりてえゆるすまじきとはいへり〔河〕聽色今樣色共紅色也見延喜式然らばゆるし色同物歟紅にならべてはゆるし色といひ紅に訓ずる時は今樣色といふ也えゆるすまじくとはゆるし色によそへてそしれる歟云々〔細〕〔岷〕花に見えたりこれはきぬの事也（釋）右の御說どもすべていかがまづ今やう色とは俗言に當世色といはんがごとくそのをり〳〵に流行する色の事にて禁色の事にはさらによしなしされば花鳥に此比いできたる色なれば今樣色とはいふ也とあるはよろし然るを濃紅にも紅梅にもあらぬはしたの赤色をいふやうにの給へるはわろし柏木卷にすき〳〵見ゆるにび色の御そども黄がちなる今やう色などき給ひ云々ともあれば今やう色はかならず赤色にかぎりたるにはあらで其をりをりの流行色をいへる事頭書に擧たる一翁說のごとくなるべしされどこゝは紅の今樣色なりしことは次々の歌文などにてしられたり然らば禁色ならぬ淺染の紅色なりしなるべし河海の說はなきらはしくさらに聞わきがたき中に聽色と同じ樣に注し給へるはひがこと也又えゆるすまじくとあるを禁色のかたに思ひよせ給へるなどもすべてひがこと也えゆるすまじくつやなう古めきたるとつゞけたれば古めきたるをさしてえゆるすまじくとはいへるにこそあれ細流にきぬの事也とあるもわろし今やういろの云々古めきたる直衣のとあれば直衣なること論をまつべきにあらぬをいかゞ心得誤り給ひけん　**うらうへひとしうこまやかなる云々**　同〔河〕表裏同色の濃也是も舊儀歟〔花〕上にいへる今やう色はきぬをいふ也此なほしもいまやういろのうらおもて同色なるをいふにや〔細〕

なほしをきぬにそへたる也當世の直衣とは見えず上古にはうらおもて紅の直衣もある歟〔岷〕今案紅の直衣の事所見分明ならず是は直衣にては有べからずいまやう色のえゆるすまじうつやなうふるめきたるといふまではきぬの事也さればふるめいたるといふにて句をきりて「なほしのうらうへひとしうこまやかなる事也　注ニこまやかなるといふを色のかたには見るべからずおりざまなどのこまやかなる心歟是今案の義也云々〔箋〕〔明〕御抄の說ふるめいたるといふまでを一句にしてきぬの事と見るなほしといふ詞より直衣の事に見る也花の說も大略かくのごとし然るを松殿裝束抄に紅直衣連綿也法性寺關白直衣布袴紅梅織物直衣紫織物指貫皆練着ヽ之寛弘四三五法成寺關白左府行ニ曲水宴ニ主人着ニ桃花直衣柳色指貫山吹色柏ニ永久三十一十四五節童御覽日法性寺關白紅梅浮文直衣蒲木指貫皆紅衣〔岷〕私云細の義はきぬはいまやう色直衣はこと色のこまやかなるといふ義也然るに箋の義は紅の直衣の例をひけも此義も勿論きぬはいまやう色也直衣も同じ色のこまやかなるといふ義也しかれば紅直衣のかたを執せられたりと見ゆ（釋）右の說々いたくむつかしふるめきたるといふまでをきぬの事と見られたるは上にもいへるごとく語脉切れずして文をなしがたしきぬならば必こゝにきぬといふべき所也古めきたる直衣のとつゞきたれば直衣なること疑ふべからずさて「うらうへひとしうこまやかなるといふは岷江の注におりざまなどのこまやかなる事歟とある說いとよろし色の事としてはこまやかなるといふ詞聞えがたしさるつやなく古めきたる色をいかでかこまやかなりとはいはんよく〳〵考ふべし或說にはまろ縹直衣まろ檜皮の直衣など裝束抄どもに見えしはうらおもてひとしき色の直衣と聞ゆればそれならむといへれどさてはこゝの文脉みだれてこまやかなるといふ詞何をさしたりとも聞えねばそれにはあらじさていとなほ〳〵しうつまゞ〳〵ぞ見えたるとあるは縫ざまのつたなくてつま〳〵のしどけなきをいふ也と同說にいへるぞよろしき　**くれなゐの一はなごろも**　卅四丁オ（釋）此歌の詞にてかの末摘花よりまゐらせられたる直衣は紅の淺き今やう色としられたり一花とはいかにも淺く染たるをいふなるべし壬二集に「初萩のひと花すりのたび衣露

おきそむるみやぎ野の原とあるは後の物ながら語例には引べし　**だいばん所**　卅五丁ォ〔餘〕禁秘抄云三間北間朝餉方敷二黄端畳一東倚子其南女房簡入袋辛櫃朱塗也臺盤上有二御膳棚一二階檜火櫃一園碁彈碁等同二殿上一中間臺盤東黑漆厨子上置二菓子等一其南立二馬形障子一鬼間方奥一間出也疊中幷南間紫端長押下二間是渡廊籠也南有二布障子一二間北遣戸一間蔀一間常不レ上二間際程副レ北立二馬形障子一西立二布障子一其外號二切簾一一間懸二遣戸御簾一二間也抑臺盤所東北障子到二鬼間一和繪也　**たゝらめの花**　同〔釋〕伴信友翁多々良女考一篇ありていと委しく論はれたり其要を摘ていさゝかこゝにしるす猶本書を見るべし○玉小櫛に件のたゝうめの花とあるを論ひてたゝらめなるべしと說れたるはまことにさることも也されど字鏡に太々良女式に多々良比賣とみえ後世の書どもにたゝらべといへる物いかなる物とも注されずおのれその物ざねをしらざればさらに考るにまづかのたゝらめの花の色のごとくうたひ給へるは政事要略六十七に載たる衛門府風俗歌に云々と見えたる歌にて其を歌ひ給へる下の心はかの末摘花の鼻の赤きにそへ給へるおもむきにて下文にも其心ばへ見えたれば多々良女の花は紅色なる事著し云々中略さはいへどその多々良女いかなる物にかと心にかゝりつるに此比源順朝臣集の古本の寫をみるに田畦のごとき形に歌四十五首を廻らしよむべく書とゝのへられつる中の歌に「をりをりにはふたゝべのうめなればをしめどかひなき花のにほひやといふが見えたり今考るにこのたゝべはたゝらめの急りたるにて紅梅のことなるべし其は内膳式に見えたる多々良比賣も同物にて漬年料雜菜の條漬二春菜一料の中に多々良比賣花搗三斗料鹽三斗と載られたるこれなるべしさてその多々良比賣花搗とあるは紅梅の花にてその苔を搗とりて鹽漬にして奉る料なるべし今の俗に梅の苔を鹽漬にして食の飣酒の肴などにすることあり馥氣ありてめでたき物也しかるに其を漬て後常の花の白きはやゝ黄はみゆくを紅梅は苔のほどは殊にあかき物なるがさながら有て色あせず美麗きものなればとりわきて紅梅を奉る例なりしなるべくまた此梅むかしより紅梅と呼てもてはやし來れるを御饌に奉るにもなほ然申さんはさすがにつきなければさらにうるはしく多々良比賣と稱へ名を申して奉り來れる例のなゝにやがて式にも其名もて載られたりし物なるべし細注但しか名づけたりけん意は考へ得ずしひておもへば多々良とは紅梅の苔のあかきを器に盛たるをたゝらの熾の色に思ひよせたるにはあらぬか但しこゝにいふたゝらは蹈鞴の事にはあらず埃嚢抄に大嘗會の火桶元三の御藥溫むるたゝらなどは世の始りの物なりしか冷泉院の御時燒たりといへりと記せるたゝらこれ也色葉字類抄に鑪をタゝラとよめり鑪は爐と同字也字書に火牀也と注せりさてたゝらの熾の色に云々とおもはるゝ事の掻練のあかきを火色といひなれたるにもいさゝかかよふこゝちす比賣は此花のうるはしくやさしきによりてたゝへもしつべし此はせめて試にいふのみ」さるをうちまかせて紅梅の一名の如くに呼こゝともなりてたゝらめといひ又たゝべと急ていふこゝともなりしなるべし○そへて云新撰字鏡に莘所巾反長也兼也姙也贅也聚也多々良女と見えたるものこゝにあげつらへるたゝらめなるべく思はるれど字注は他義なれば此物ざねを考ふべきよしなし正字通に莘草生三山澤一如二蒲黄一葉如レ芥とみえたれど何なる草とも知がたく花狀たゝらめには更に合はず又小櫛にいはれたるたゝらべと云ものいかなるものにか知らずおのれさきにたゝらめをたづぬとて本草の道にくはしき人々に問試たるに本草毒藥部に載たる石龍芮といへる物諸國の方言くさ〴〵ある中にタ、ラメ。タ、ラベ。タ、ベ。タ、ナベ。タ、ラビ。タ、ロベ。タ、ライなどとり〳〵にいへりいづれ本の名なるにかしらず注此方言の中にタ、ラメ。タ、ベともいへるを本考のたゝべの考の證とすべし　秋冬より溝漬また水田などの中に生出て二三月のころ五瓣の黄花開くもの也また濕草部にみえたる鱧腸をもタ、ラビといふ所あり此は春末夏初つかたに生出て夏のなかば枝頂ごとに白き碎瓣なる花さく物也これらをおきては似かよひたる名の草木をしらずといへりこの二種花色あかゝらずまた食料とすべきものにあらざれば本考にあげつらへる多々良比賣にも多々良女にもあらざること明かなり」巳上信友考　村田春海云字鏡に莘を多々良女と注せり因ておもふに式の多々良比賣は多々良女にて爛目の義なり和名抄に瞰タ、ラメと注せり瞰は眼瞼のはれて涙の垂る病なり凡て草に病の名をつ

けし事例多し龍膽草を疫草敗醬を血眼草などいへり今按にタヽラビといへる草ありこは本草に載る石龍芮なるべし其主療を見るに明目の效ありまた俗に突目といひて眼瞼の腫る病に此タヽラビの葉をとりて挫きたゞらして再び熨して挑げて項後の風府といふ穴所へはりつくればその腫を治する也されば いにしへたゝらめといへる草はまさしく今のタヽラヒなるべし」已上一翁云雅亮抄ひとかさねにきるきぬの色といふ條にうらこきすはう春はなでしこぞきる云々黄なるは秋よし春はなか〳〵二つなりにひとへかさねてたゝらべ色とてぞきるとあ此文くだ〳〵しけれど推て考るにうらこきすはうを二つばかりに黄なるひとへをかさねたる色をタヽラベと號けてきるといふ意也かゝればたゝらめ花は紅の深きに薄き黄をおびたるをいふ也」○廣道案に伴翁の考いと精しといふべし然れども紅梅の花漬を多々良比賣といはんことはなほいかゞあらん唯さる名の春菜の花を搗て鹽漬にしたるやうに聞ゆる也石龍芮はゆかしけれど花赤からねばげに信みがたし猶よく尋ねて定むべき也さて搗といふことを說れたる注に上ゴハ略稻麥の穗を連

*玉篇搗ノ注ニ同レ搗又搗ノ注ニ手推也築也トアリ

栁にて擊とるをかつといひ菓などの枝に在るをうちおとすをかちおとすともいふごとく苫の枝に在るを搗ととりたるをいふべし此外にも菁根搗韮搗などいふたぐひの見えたるは其物によりて搗ざまはたがへども同じ意ばへにてかつといひなれたる物なるべし」とあるはいかゞ搗はかつとも活きて搗和る事をいふ語と聞えたれば擊落す事にはあらず萬葉集十六にひしほ酢に蒜都伎合而鯛願ふとある合而をふるゝカテテと訓るも搗和ることゝ聞え和名抄薑蒜類に搗蒜を比流豆木とあるも蒜を搗たゞらして和合たる物と思はるされば多々良比賣花搗もかくいふものゝ花を搗たゞらして漬たるを搗と體言にいへるなるべしとにかくに搗は臼などにて搗碎くかたの語と聞えて擊落すをいふにあらざる事は引れたる菁根搗韮搗などうちおとす物ならぬにても著し搗栗なとはうちおとす名のごとくにも聞ゆれどこれも小き栗をば打碎きて用れば搗碎く方の語とぞ思ゆるさて又多々良といふを鑪の事として熾の色に思ひよせたるやうにいはれたる試の說もいかゞ也もし紅梅の花といふに依ていはゞ爛梅の略語などにもあらんか搗たゞらして貯ふ

る物なればかくもいふべくおぼゆされどなほ決めがたしよく〳〵人に問定むべくなん **みかさの山のをとめをばすてゝ** 同（釋）東遊求子の歌に云千者也布留、賀茂能也之呂乃、比女古末川、與呂川與不止毛以呂者可者良之、と有河海などに春日社にては三笠の山とうたふとあるは賀茂の社を三笠の山とかへてうたふといふ事なるべしこれ昔よりの傳にやおほつかなし案に古本東遊求子歌の裏書に立拯歌、春日歌、倭歌、柏木歌、といふ有てその春日歌の下に東遊之後多唱二件歌一故以附出といふ注ありさて其歌は加美乃末須、加須加乃波良一、多津也々乎止女、多津也々乎止女、也乎止女波、和加也乎止女波、加美乃也乎止女、加美乃也乎止女と有また風俗八乎止女の歌に也乎止女波、和加也乎止女會、太川夜々乎止女、太川也々乎止女二段加美乃萬須、太加末乃波良仁、太川也乎止女、太川也乎止女とあるは右の春日歌と同歌と聞えたるを唱へざまのいさゝかはれるのみなり太加末乃波良仁とある句を河海に引れたるにはこのみやしろにともあれは或は春日にては春日の原ともうたひかへしなるべしさて三笠の山のをとめとはなけれど右の春日の原にたつや八少女とあるをにほはせて他の人には知られぬやうに源氏君の歌ひかへ給ふさまに作者のあやなしてかゝれしにも有べきかさらば衞門府の風俗歌に東遊の求子の後にうたふ歌を繼てたゝらめの花の色の如きをと女をば去てといふ意にはのめかしの給へりとや見るべきされど春日も三笠山も共に何の緣といふことは知れがたし猶考ふべきなり

かいねり 同ウ（釋）宮重一淸云火色かいねりは男女にわたりて着する色目也女は衣に用ゐ男は下襲に用ゐらる裝束諸抄のおもふき染色の事にしるしたゆ初音卷にひかりなき黑かいねりのさゐ〳〵しくはりたる云々寄生卷にきよげなるほそながども白きかいねりなどたゞあるにしたがひて云々すでに黑かいねり白かいねりとある時は染色の事とは見えず地の事と見えたりされど裝束抄源氏諸抄みな染色の事と注せらる不審なきにしもあらず云々」伊勢貞丈主云搔練の事は中古より謹ならざりしにや何人のひひ出しにかかいねりを赤色の事として火色にならべてその差別を論ずる事になり諸說まち〳〵にして決しがたかりしに宮重一淸翁の源氏物語の黑かいねり白かいね

りを證として色のことにはあらず地の事也といへるにてよくわかれたり然れとも地の事とのみいひて何物の地ともいはざるは遺念なり今案にまづ掻練のかいとはたとへば行く事をかいゆく破る事をかいやる取ることをかいとるつくる事をかいつくなどいふ類のかいにて掻に意はなくたゞ虚詞也されば練ざる生絹に對して練たる絹をいひしこと明らか也」一翁云かいねりは專ら緋色の練絹をさしていふことゝ聞えたりさるはもとは練絹の緋色なるをさす唱にて緋のかいねりといひけんを語を約めてつひにはかいねりとだにいへば緋色の練絹の名と聞ゆることゝなりたるなるべしさるはこのかいねりの絹の色目は緋色なるが多く他色は稀なればおのづからさやうに打つけなる唱となりたる也他色なるは皆某色のかいねりと類を分ちていふことゝなりし物にて白かいねり黒かいねりなどいへる是なり白とも黒とも某ともわけずしてたゞかいねりといふは必緋色の練絹なりし故に火色と混れ來りて其別きはやかならずなりゆき後には附會の説もとり〳〵に出來れる也云々」廣道云右の説どもなほ諸書を擧ていへれど今は所せくて略きつかいねりは伊勢ぬしの説のごとく練絹より出たる名なるが後に緋色に轉りたる也但右の説にかいねゝのかいは云々といはれたる語例の中にかいとるはよろしかいやるは遣也破にはあらずかいつくは書つく也掻作にはあらすかいゆくといふ語は大かた無き語なりこれはついでにいふのみ也後世皆練とも書るは暗推の字なるべしさて後の裝束抄どもにはさま〴〵にいはれて或は裏打たるを云といひまたは裏を張たる也といひ或は裏紅の張たるを云といひ又は火色皆練同じ物也といひまた差別ありなどいはれたれどかいねりの本の意は右の説々にて明かなり後にはさる差別なども有しならめどなほ附會の説なりおほかたかばかりの事も家々にていたく秘られしほどに後にはいづれ宜しとも知れぬやうになりてさま〴〵の説ども出來にたる事は是のみにはあらずそのかみあぢきなき世の癖にてぞ有けらし 歌**あはぬよを云々** 同〔花〕今案見もし見よとやは我も見ん人も見よの心也かさねていとゞはかさね〳〵へだてたる事也〔細〕心はいとゞへだゝりたる中と思ひつるにから衣君が心のつらければなどへだてあるさまにうけ給はるは猶

朝ハ御ノ誤ナルベシ 乙巳二月日本紀ニ見ユ

猶心のへだてをかさねよとあるかと也云々〔明〕かこちたるなり〔拾〕源の我にねんごろに見よとてや此衣は給はりつらんと也花鳥に我も見んとあるは不レ稱歟〔釋〕結句は相互に見もし見られもせんとやと咎めたる意也とやとあるに心をつくべし花鳥いさゝかたがへり細流は衣の事の注なしいかゞ拾遺に我にねんごろに見よとてやといへるは又たがへりあはぬ夜をかさねてといふ語脉と見るべしいとゞはへだつる中にいとゞとびへるにてへだつる事のいよ〳〵かさなる意也〔餘〕うつぼ物語藏びらきの卷に「よそながらおほくの年もへだてけりころもうらみし時はいつぞも拾遺集の歌は頭書ニアゆひそひしほどは衣を中にへだてしだに疎かりしに今はあはぬ夜をさへいく夜もへだてしとなり **御そひとぐ** 卅七丁オ〔餘〕明阿法師のうつぼ物語に書そへたるを見れば一具をひとぐとよむべからずひとくだりとよむべし音にいはゞいちぐ也と有こゝももとは一具とかひとくだりとか有つらんをうつせる時にひとぐとせるにやされどひとぐうなどいふ詞も音訓をまじへてつけたり〔釋〕岷江に擧られたる本文にはやがてひとくだりとかゝれたりさる本もありしにやさらば寫し脱せるならむされどひとぐなどいふもこの物語の比の俗語と見てあるべし **をとこだうか** 同ウ〔河〕天武天皇三年正月朔朝ニ大極殿ニ詔男女無レ別闇夜踏歌男踏歌 聖武天皇天平元年正月十四日始有ニ男踏歌一女踏歌一天平十四年正月十六日天皇御ニ大安殿一宴ニ群臣一酒一酣奏ニ五節四舞一更令ニ少年童女一踏歌上是濫觴也〔餘〕聖武天皇天平元年云々この事續紀に載ることなし何によりてかける歟天平十四年云々これは續紀に見えて正月壬戌の日なり五節四舞とある四は田の字の誤なり舞の字の下に訖の字を脱せり是濫觴也の四字續紀の文にはあることなし〔釋〕踏歌のこと新釋などにも説あれど初音卷にかのわざの見えたる下にかいあつめて注せればこゝには略く **七日のせちゑ** 同〔釋〕伴信友翁七日節會白馬青馬の精考ありいと長ければ其文を約めて大ひねをこゝに注すくはしくは本書を見るべし○彼考に云正月七日青馬を御覽し給ふ事は萬葉集に水鳥乃可毛能羽能伊呂乃青馬乎家布美流比等波可藝利奈之等伊布右一首爲ニ七日侍宴一右中辨大伴宿禰家持預作ニ此歌一但依ニ仁王會事一却以ニ六日一於ニ内裏一

召二諸卿等一賜レ酒肆宴給レ祿因レ斯不レ奏とあるぞ書に見えたる始なる云々此卷の例に依るに聖武天皇乃御世天平二年正月七日の事也此事これより前に始給へるにか其は詳ならず又其後相續て行はれしにやそれも考る所なけれどうけばりたる恒例にはあらざりしにや色葉字類抄に本朝事始を引て光仁天皇寶龜六年正月七日天皇御二楊梅院安殿一設二宴於五位以上一已而內藏宴進二青御馬一兵部省進二五位以上裝馬一とあり河海抄にも此文を引て此青馬始也と注されたり此事續日本紀には載られずして弘仁內裏式正月七日の會式に引二青馬一式を載られたり水鏡に弘仁二年正月七日はじめて青馬をみそなはし給ひきと見え紹運錄嵯峨天皇の御譜に弘仁二始覽二青馬一と見えたるをおもへば中間廢られたりつるを此時再興し給へるをかくは記せるもの也國史には續日本後紀より始めて載られて仁明天皇の御世承和元年正月壬子朔戊午七日御二豐樂殿一觀二青馬一宴二群臣一と見えたるぞ始なる云々さてその青馬を覽し給ふことは右にいへるごとくかの助陽氣也文德實錄ノ文也上ニ引タルレバ今案遺ガハブキタルナリの謂にて江家次第白馬節の裏書に御馬本數廿一匹禮記曰以二青馬七匹一然而用二二十一匹一者三七之義也三陽之義之由見二寬平御記一また年中行事秘抄に帝王世記云高辛氏之子以二正月七日一恒登レ崗命二青衣人一合レ列二青馬七匹一調二青陽之氣一馬者主レ陽青者主レ春崗者萬物之始人主之居七者七曜之徵陽氣之溫始也など見えたる漢國の風俗により給へるものなりけりさてその青馬は儀式の青馬議の條の宣命に常毛見留青支馬見太萬閇退止爲豆奈毛云々弘仁內裏式內裏儀式和名抄に爾雅注云莢雖令孩莢者蘆初生也吐敢反俗云葦毛是也青白如二莢色一也とある毛色にて白馬毛付奏文にも葦毛とかく例なるをおもふべしさてその青といひ葦毛ともいふ毛色を又或は青鯊毛ともいへり云々そは蒼鯊の羽色に似たる由なりしかれば今俗に水青といへるぞ當るべき云々かくて今の俗になべて葦毛といふ毛色をば昔は葦花毛と稱へり云々葦花毛としもいへるは青に白が雜りて葦葉に其花の白きが散かゝりたるに似たるをもて稱けたるなるべし云々さて今俗に青毛といふを古は黑みどりといへり云々然るを後の御世となりて青馬を白馬に更めて覽し給ふことになれり其は醍醐天皇の御世延長の末つかたよりの事なるべし云々さ

て遂に其青馬儀の字をも白馬と改られたりいはゆる白馬奏白馬節會などこれなりされど白馬と書ても詞にはなほ舊のまゝにアヲウマと唱ふ例也かくてしか白馬と書たる事の書に見えたる始は日本紀略村上天皇の天曆元年正月七日癸巳白馬宴と書るを始にて次次皆白馬とかき其外の書どもまた家々の記どもにも延喜より後のものには皆白馬と書て青馬と書るはをさ〳〵ある事なしさて然白馬に更給へる謂は年中行事秘抄に正月七日白馬事十節記云馬性以レ白爲レ本天有二白龍一地有二白馬一是日見二白馬一卽年中邪氣遠去不レ來などいへる方の說にさらに據給へるものなるべし云々」○廣道云此下なほいと委しけれどかばかりにても大かたの故はしらるべしとて今は略きつさて本日の式は弘仁內裏式に左右馬寮引二青馬一入レ自二延明門一云々度二殿庭近衞分配前後一每二七匹一前後寮官人分レ陣云々出レ自二延秋門一訖儀式に左右馬寮牽二青馬一入レ自二延政門一云々其行列也左近衞左右各五人前行左右馬寮頭次レ之青馬七匹在レ中次レ之左右寮允左右各一人次レ之青馬七匹在レ中次レ之左右寮屬左右各一人次レ之青馬七匹在レ中次レ之左右寮助左右各一人次レ之右近衞左右各五人次レ之江家次第に左右馬頭度次二白馬七匹一次左右允次白馬七匹次左右屬次白馬七匹次左右助次右白馬陣度畢次白馬經二殿上前無名門明義門仙華門一度二御前一自二瀧口一出など見えたるおもふきを考へて其おほかたの樣をしるべし

いからくしげかゝげのはこ 冊八丁ウ（拾）和名抄云鏡臺辨色立成云加々美加介此和名あれど昔より音にいひなれけるにや今も然いへり又云嚴器俗用二唐櫛匣三字一加良玖師介（釋）鏡臺はかゝみかけもちろん也其圖は類聚雜要抄に見えたりからくしげは櫛を入るゝ匣也其圖も同書に見ゆ唐としもいへるは形の唐めきたるをいへる也古玉くしげなどいへるは圓き筒なりしを玉とはいへる也其後にもろこしより渡し來れる物など有て其樣にこちたく造れるをとりわきて唐くしげとはいへるなるべし搔上の宮は髮を搔上る具をいるゝ故の名なるべしこれもまた雜要抄に圖有てその納る物を記せるに懸子に螺鈿櫛二枚鉸十疋鑢子六疋髮搔二櫛掃耳決在二折立一身納二三寸八分丸鏡筥一合一在レ鏡在二折立一と見えたり然るにからくしげにいる物も大かた同じさまに見えたるはいかなる由にか

あらん案に唐くしげはおもだゝしき元服の儀式などにも見えたるを掻上筥はさばかりは見えずされば恒に用ゐる櫛笥にやあらん或説に此筥は婦人の用るものにて主とは解櫛を收たる物なるべしといへりさもやあらむ雅亮裝束抄童殿上のみづらゆふ條に此物の見えたるは童のみづらゆふは元服とはやゝ輕きからに掻上箱を用ゐる事にや岷江入楚にきやうだいのからくしけとある本あるよしを注して鏡臺の具のからくしげといふなるべし云々鏡臺などは男の具足と聞ゆと有さてはすこし意ことなりと聞ゆされども鏡臺と唐櫛匣とは別なれば猶いかゞあらん考ふべし

けうあるもんつきて 同〔花〕此一段の詞説々あり一には源氏のおくり給へるきぬどもの中にかゝるうはぎもありけるを今見いで給ふ也一にはうはぎばかりは末摘の方にしたてられたるをめづらしく思ひ給ふ也〔岷〕聞書此うはぎは末摘の方にしたてられたる也〔新〕源ゞりまゐらせし裝束をさながら皆着給ひしと源のおぼしよらで興ある紋様のうは着をのみいちじるく見ゆれば今までのさまと異なる故にさきにわがおくりしにやとあやしう見給ふなり〔釋〕花鳥の始の説よろしかるべし新釋湖月も其方を用ゐられたり

はぐろめも 卅九丁ウ〔釋〕女の齒黑する事いつの比よりかはじまりけん詳ならず堤中納言物語に人はすべてつくろふ所あるはわろしとて眉さらぬき給はずはぐろめさらにうるさしきたなしとてつけ給はずいと白らかにゑみつゝこの蟲どもをあしたゆふべにあいし給ふ云々とある文の勢その世よりひとふるき時よりつけたる事と聞ゆさて和名抄容飾具に齒黑文選注云黑齒國在二東海中一其土俗以レ草染レ齒故曰二黑齒一俗云波久呂女今婦人有二齒黑具一故取レ之とある黑齒國は皇國の事也などいへれども詳ならず順朝臣の意は今の婦人に齒黑の具あるが故に此文を取てこゝに引くとの意ばかり也さてこゝの本文の意を思ふに此比より昔は男にあふばかりの年比にならざればはぐろめはせざりけんを此物語の比となりてさるをさなき少女もはやうかねつくる事となれりと聞ゆ「古代の祖母君の御なごりにてとある文の勢さやうに聞えたり又上に引る堤中納言物語にまゆ更にぬき給はずはぐろめも云々といひとりかへばやにかしらあらはせ髪もかきたれなどしてみればあまのほどふさふさとかゝれり眉ぬきかねつけなど女びさせたれば云々などあるを思ふにかねつくるとまゆぬくとは必同時にせし事と聞えたりされば本書に「はぐろめもまだしかりけるを引つくろはせ給へればまゆのけざやかになりたるもうつくしうきよらなり」とかゝれたるはかねつくると眉ぬくと同時にするは定まりたる事なる故に齒黑めして引つくろはせ給へればまゆのけざやかにと齒の事をもて直に眉の事に相てらし及ぼしたる文意とおほしさらば湖月に齒黑めの後ぼうまゆの常の眉になりたるをいふ也とあるはうらうへのひがこと也常のまゆのぼゝうまゆになりたる也

かく心ぐるしきものをも見てゐたらで 同〔拾〕見てゐてあらで也天阿切多なればつゞめてかくはいへり上にうきよを見あつかふらんとくゆる心なれば心ぐるしきは末摘にて見てので濁るべきにや紫を心ぐるしといはゞ源の外におはするほどの紫の心をくるしといへる歟〔釋〕心ぐるしきは紫上也かくといふ詞に心をつくべし契冲は心ぐるしといふ語をたゞに心の苦き意に見られたる故に誤れり心ぐるしは俗言にキノドクナといふ意にてこゝは愛の餘りて立はなるゝがきのどくにこゝろぐるしといふ意に轉りていへるなり憂き世を見あつかふとあるが末摘花の事なり

○紅葉賀卷餘釋

朱雀院 一丁オ〔河〕朱雀院は三條朱雀也是後院なり古今集にも朱雀院とあるは宇多院の御事也脫屣の後は此院に御座ある故也〔箋〕代々のおりゐの御門朱雀院におはしましつるを承平の御門を朱雀院と申奉りてより此義なきなり承平の御門は延喜より後の事なれは此紅葉の時分をば其以前と心得べし〔釋〕拾芥抄云朱雀院累代後院或號二四條後院一三條北朱雀西四町四條北西坊城東とあり此物語に朱雀院と申奉る御門は桐壺帝の御子の帝の後におりゐさせ給ひてこの後院に御座まし〻によりて申す也今とは別也思ひ混ふべからすいづれの帝にても仙洞とならせ給ひて後此院におはしませばしか申奉る也朱雀はたゝ院の號なり

行幸 同〔細〕〔帳〕蔡邕云天子車駕所レ至見二令長三老官屬一親臨レ軒作レ樂賜以二食帛民爵一有レ級或賜二田租一故謂二之幸一 晉灼曰民臣被二其德一以爲僥

倖也 顔師古云幸者可慶幸也故福喜之事皆稱爲幸 〔餘〕蔡邕云は獨斷の語也晉灼曰は漢書高帝紀注に見えたり〔釋〕天子の行給ふ所には幸福ある意にて行幸といへるよしなり〔河〕朱雀院行幸之先例 延喜十六年三月七日辛酉行幸朱雀院有法皇五十賀 同年八月廿八日行幸同院詩題高鳳送秋類 康保二年十月廿三日行幸同院題飛鷹共舟輕 〔花〕この朱雀院の行幸は宇多御門の御賀になずらふる也その故は延喜十六年三月七日云々醍醐の御門の御時朱雀院と申は寛平法皇の御事也五十の御賀は三月の事なるをこの物語に十月のもみぢの頃にかきなしたるべし此卷に一院と申す事ありすなはち寛平の御門になずらふるなり桐壺の御在位の中に一院崩御の事見えざるは寛平法皇は延喜の御門崩じ給ひて後かくれさせ給ふ故也 〔新〕宇多天皇のことゝするは例のかたくなしいづれの御賀いつの御時にてもありなん 青海波 同 〔餘〕萬葉緯といへる書に樂詠一卷ありそれにしるしたるは輪臺新樂管絃時連吹青海波此曲昔者平調樂也而承和天皇御時此朝依勅被遷盤渉調曲舞者大納言良峯安世卿作樂者和邇部大田麻呂作詠者小野篁作也とあり〔新〕三位の人舞に立るゝ事古くも侍りしか考ふべし此時より後には後一條院治安三年十月十三日道長公のうへ倫子の六十賀の時經道卿の右兵衛督陵王をまはれし事榮花物語に見ゆ經道卿は公卿補任に寛仁四年從三位同年十一月正三位と見ゆれば治安にはすでに三位なりしなり かれうびんが 同ウ 〔河〕聖主天中天 迦陵頻伽聲、法華經 文句 伽陵嚬伽在卵聲勝衆鳥云々或迦樓頻賀 或曰伽陵嚬者梵語也唐云妙敎鳥此鳥鳴時音中囀苦空無我常樂我淨土也 〔細〕翻譯名義集云此云妙聲鳥大論云在殼中未出聲徹妙勝餘鳥正法念經云山名曠野其中有迦陵嚬伽出妙音聲美音若天若人緊那羅等無能及者唯除如來音聲 歌 から人の云々 三丁オ 〔河〕或本云「うら人の袖ふることは遠けれど浪のたちぬにあはれとは見き舞のすがたも海邊にかたどりたる事勿論也然而證本ことにから人のとある歟〔餘〕雅望考るに樂詠の書に舞手向一方摸寄皮引波體也云々と有さらば浦人といひ浪のたちぬといへるよせありて聞ゆされど此下に人のみかどまでおもほしやれる御后ことばなどあればから人のといへる五文字誤には

あらざるべし 細流抄に青海波は唐樂なりとしるし給へり今考るにから人とよみ給へるは舞人の出たるさまをいふなるべし細流に唐樂也としるし給へるはから人といへる文字につきていへるにやあらむ〔拾〕思ひながら逢ことの遠き中をかくかすめて立居につけてとはいへり舞には立居すればそれによせてたつにつけ居るにつけてもありし事ども思ひ出てあはれと見侍りきと也萬葉十一「立居するわざもしられず思へども妹につげねば問使もこず 同十二「立居するたどきもしらずわがこゝろあまつ空なり士はふめども 同十一「たちて思ひ居てもぞおもふ紅の赤裳すそ引いにしすがたを〔釋〕河海の或本の歌げにませ有て聞ゆるを下文の詞に打合ぬ事餘滴にいへるがごとし又餘滴に細流を舞したるはさることながらから人のとよみ給へるは舞人の出たるさまをいふなるべしといへるはわろし本文の頭書に擧たる河海抄の舞の裝束を考るにさばかり唐人めきたるいでたちとは思はれずされば此が事也拾遺の說逢ことの遠き中をかすめてといひ舞には立居すればそれによせてといへるはよろしきをわりし事ども おもひ出てといへるはいかがさては「大かたにはといふ次の詞に打あはぬものをや猶よく考ふべしそにかくに解得がたき歌になん有ける かうやうのかたさへたどゝしからず云々 同ウ 〔細〕此樂は唐の樂とも能分別し給ふをいふ也誠に后などに立給ふしたぢと源の思ひ給ふなり 箋同 〔花〕左右の樂のわけめをさへしらせ給ひてから人の袖ふることはよみ給へると源氏の女御をほめ給へる心なり 御后ことばのかねてもと 同〔細〕后の下地なり〔弄〕ささきがねにておはしませばかく申給へり〔湖師〕兼ても后としるきとの心なり〔箋〕藤つぼをよき立后の器かなと源の思ひ給ふ也是を只今藤つぼは后にあらずと云不審を河海にのせらる紫明抄ノ說也 はなはだ然るべからずかねてもとほゝゑまれてとある時は當時后と云にあらず后がねと云義也〔新〕こは唐樂高麗樂をわけてから人の云々とよみかくるをいひ人のみかどまでと有は此上の句に皆かゝりて御おぼしやうのひろきを云且まことに儲后のしらるゝとほめ給へり〔釋〕右の說どもいづれも釋得られたりとも聞えず先「かうやうのかたさへ云々とある下の注に左右の樂のわけめをしり給ひてから人のとよみ給へる

やうにいはれたるはさることのやうなれど頭書にもいへりし如く舞樂の盛なる御代にあひ給へるやんことなき御方ならば左は唐右は高麗といふばかりの事を知給はぬやうやは有べきそれ知給へるが御后がねといふことさらにことわり聞えず物遠くつきなき注といふべし新釋の說ざまは少しは理あるやうなれど猶同じ趣なれば論に及ばずとにかくにさる故事などの傳はりて異朝のふるきためしをしりてよみ入給へるが大かたの人のえしらざりし事などなりし趣に見さればこゝの詞は解がたし猶よく考ふべし **かいしろ** 四丁ウ〔孟〕垣代也警固也垣に立て此内にて裝束を着する也〔拾〕今案孟津の說おほつかなしやがて下に木高き紅葉のかげに四十人のかいしろいひしらず吹たてたる物の音どもにあひたる松風まことのみ山おろしと聞えて吹まよひ云々河海云長秋卿の笛譜云云々聲花云云々此說の如くならば樂人をすべて垣代といふ歟日本紀立二歌場一〔衆一歌場此云二字多我岐一〕續日本紀云天平六年二月癸巳朔天皇御二朱雀門一覽二歌垣一男女二百四十餘人五品已上有二風流一者皆交二雜其中一云々又稱德天皇由義宮にして歌垣を御覽じけることも記せり行列する事垣のごとくなれば歌垣といふ歟今垣代といへる是なるべし云々 **いうそく** 同〔河〕右族也華族也又云右職〔孟〕有職の人は諸藝に達して人體にいたるまでの心也〔餘〕荷田在滿云有職とかける文字義もなく聞ゆもし有識をいふにや雅望云右職の字なるべし前漢文王傳に選二郡縣小吏一開敏有二材者一親自飭厲遣二詣京師一受二業博士一數歲皆成就還歸爲二右職一〔注師古曰郡中高職也〕〔釋〕餘滴の說雅言集覽にも舉て物語ぶみの例ども多く引たりげに面白く聞ゆるやうなれど漢書なるは選舉につきていふ意と聞ゆればなほいかゞあらんとぞおぼゆる有識の字相應へるなるべし職字の非なるよしはやう多田義俊なともいへりさるを中昔ごろの衣服調度をしらぶる學問の號とせるなどはいみじきひがこと也さて物語ぶみに見えたるは孟津のごとき意也 **かざしの紅葉云々きくを折て** 五丁オ〔河〕楊氏漢語抄云頭花加佐之 又挿頭花挿は冠の角に指す也結たる藤を指事常にある歟冬も藤を指と聞し歟 菊挿頭事後撰云女八のみこ元良の御子のために四十賀し侍けるに菊花をかざして參議藤原伊衡朝臣「萬代の霜にもかれぬしらきくを

うしろやすくもかざしつる哉榮花物語云治安三年十月十三日殿の上道長公の上雅信の女の御賀なりかざしの花どもこがねしろかねの菊の花をつくりてこのきんだちかざしたる延喜十八年十月九日御記云女房侍レ前菊花盛開此夕更衣命婦藏人等相集頗設二小宴一云々中略臨レ明左衞門督折二菊花一奉二挿頭一〔新〕類聚國史に桓武の御時樂ならねど蘭を挿せしと見ゆさて此蘭はふぢばかまにはあらで菊をいふなり〔釋〕挿頭花は上古の髻華のなごりなるべし髻華も上古は直に髻にさしけんを冠の上に挿すことゝなりしは推古天皇の朝に唐ざまの冠位儀禮を摸し給ひし時よりの事と見えたり日本紀をよく讀て知るべしさて後は大かた作り花を用ゐらるゝ事なりし也されどこゝなるは折から風流の爲なれば眞の紅葉菊と聞えたり **なやらふとて** 十丁ウ〔河〕金谷園記曰爲二陰氣一時絕二陽氣一始來一陰陽相激化爲二疾厲之鬼一爲二人家一作レ病黃帝使二防相氏一黃金四目身着二朱衣一手抱二柟楯一口作二儺々之聲一以驅レ疫厲之鬼一至レ今歲除夜爲レ之 文武天皇慶雲元年甲辰十二月此年天下諸國疾レ疫百姓多死始作二土牛一追二大儺一除夜に儺を追事也鬼やらひといふ追の字をやらふとよむ也儺の字をもおにやらひと讀也始レ自二禁中一迄二于何家一行也〔餘〕こゝに慶雲元とせるは誤也續紀を考るに慶雲三年丙午のとし也〔新〕追儺をなやらふとよむやらふは追ことなり又鬼やらひともいふこは十二月除夜に大舍人寮方相をつとむ熊皮に黃金の四目をつけ朱衣を着楯戈を持たる鬼の形をなすさて此方相先儺聲をなして戈を以て楯を叩く群臣これをうけて呼つゝ方相を追て御前及びかた〴〵をわたる殿上人長橋の內にて桑弓蓬矢して方相を射るさてさま〴〵の事有て末には格子を放ちてふみならし白木燈臺を衝など亂りがはし然ればかの物を打ならしなとするまねすとて屋などこぼちたるなりけり惣て追儺の事諸書に見えて明らけし〔釋〕河海抄にはなほ多く諸書を引れたれどさしも用ある事ならねば今は略きつから國にては舊き習俗とおぼしく周の世より見え始たり皇國にはそれを移されたる也新釋の說は江家次第の文を採たる也同書の頭書に桑弓桑にあらず桃ならん蓬矢蓬にあらず蘆ならんと注せられたるは文選に桃弧棘矢とあるが本文なる故なるべしなほ委くは本書を見るべし **名だかき御れび** 十三丁

オ〔花〕うつほ物語云うへ世中に名高くつたはりける御おびあまたあるが中によしとおぼすをとり出させ給ひて大將にこれついたちにてうはいなどあらんをりものせられよとてたまふ云々〔箋〕玉の帶也名物花鳥に見ゆ私云玉帶有文無文丸鞆（なりのまろきなり）巡方（よはうなるなり）三位已上用レ之事による也四位參議も用レ之碼碯帶丸鞆ばかりなり石の帶といふ四位の人用レ之犀角帶巡方丸鞆あり五位用レ之烏犀帶是は牛角にてする歟　六位用レ之　**内宴**　同ウ〔弄〕正二三月中に清涼殿にて文人をめして詩を作り講ぜらるゝ事あり主上ならびに執柄赤色袍を着す保元に信西申行ひて後は絶たる事也　一注〔岷〕公事根源抄云内宴正月廿一日云々　中略頭書ニ注ス　廿一日廿二日の程子日にあたらば其日おこなはれて一二獻の後親王公卿に若菜の羹（アツモノ）を給ふ保元に信西申行ひし侍りし後はたえて侍るにこそ」私云弄花に一注としてしるしたると相違あり不審云々（釋）内宴の式西宮記に委く見えたり弄花に清涼殿とあるは公事根源に仁壽殿とあるをよしとすべきか西宮記に調ニ仁壽承香綾綺殿御簾一事仰ニ木工一云々と見えたり公事根源に子日にあたらば云々とあるは西宮記に當ニ子日一一二獻後女藏人等以ニ若菜羹一盛ニ土器一就ニ王卿座一相分と見えたる事也一二獻とあるは三獻の誤にて此上文に給ニ臣下三獻一と見えたる時の事なりまた公事根源の本書には廿二日の下に廿三日の三字あり岷江には脫たる也また弄花に正二三月中とあるは西宮記に應和二年二月廿日の例あり三月の事は見えず又保元に信西云々とあるは公事根源集釋に平治元年正月廿一日被行ニ内宴一と注して保元の事は見えず猶考ふべし　歌**よそへつゝ云々**　十九丁ウ〔新〕後撰に「我やどの垣ねにうゑしなでしこは花とさかなんよそへつゝ見む是をとりて惠子女王の其御子義孝少將の久しうまゐらざりける時なでしこの花につけてつかはしける「よそへつゝ見れどつゆだになぐさまずいかにかすべきとこなつの花とよめり今は此二首をかねて歌と詞になしたり惠子女王の歌は新古今に入たり此女王は冷泉院の比の人なり　**たゞちりぼかり此花びらにと闘ゆ**　同〔拾〕うつほ物語に花ざくらのいとおもしろき花びらにとて歌あり伊勢家集に梅の花のたよりにものいひたる人とおもはせてゑにどとこ女のゆきあひてものいひはじめた

るをひとつのひらにかゝせ給へる云々　**あざれたるうちきすがた**　同ウ〔弄〕大袿ばかりをきて云々〔新〕袿衣（ウチキ）は延喜式には中宮の御料にのみ有て天皇の褻（アツコノ）にあたれりしかるを後撰集に二條后の御前にて敏行朝臣の白き大うちき賜れりと見ゆれば大袿衣てふ名もはやくより有しならんさらば今源氏のうちきすがたと有は大袿也てふ注さもあるべきか　**さうのことは中のほそをのたへがたきこそ**　二十丁オ〔花〕箏（ハ）秦聲也世謂蒙恬爲レ之（ルヲ）絃有ニ十三一象（ニ）十二月一其一以象レ潤（ニ）也自レ一至（ルヲ）レ五大絃と云自レ六至（ルヲ）レ十中絃と云斗爲巾を細緒と云中のほそ緒は巾也平調の時は二七爲宮にて巾の緒は雙調にしらぶるをいふ也〔弄〕中のほそ緒とは巾の緒の事なるべし細緒よりも猶ほそき心なり中のこのかみといへる類也〔細〕箏の十三絃のうち斗爲巾此三の緒細き也其細緒の中の第一のほそをといふ心也兄弟をも弟を中のおとりといふ事やがて此物語に有〔箋〕箏は大絃四筋中絃四筋細絃四筋合て十二筋此外に巾の絃一筋きはめて細也十三絃中の細絃と云也河花兩抄の說相違人の兄弟の幼少なるを中のおとりと云此義に同じ（釋）本居翁書入本に村田光庸といふ人の說とて有を頭書には擧たり其次の文に云さて爲の緒よりも巾の緒はいよ〳〵細く又調子も盤涉調の時などは巾の緒は神仙調になりていよ〳〵高ければ爲よりも巾の緒はいよ〳〵絶（キレ）やすかるべきに巾をいはずして爲の緒をきれやすしといふはいかにとなれば右にいふごとく二七爲は宮にて其調子々々の主となりて何れの曲にても此三絃は餘の絃よりは格別に彈く事しけきが故也かゝれば花鳥に平調の時は二七爲宮にて云々とあるも心得ぬ注なり　**平調にわし下して**　同〔細〕巾の緒のせまりたるをおしくだす心なり〔萬〕平調より絃のせまりたるは呂一越性調也又こまゝ律平調歟にて有けるを平調におしくだしたるなるべしほそろぐせりは狛一越調の樂なり平調の位にて呂のしらべにかはりたる物也されば通法平調にといへるにや又平調よりかりたるしらべにて有けるを平調律にくだして其外の調子などをもひかせ給ひて後にこまゝ一越調になしてほそろぐせりを引給ひけるにやいづれにても其理有べしかたき調子どもをとあればあまたのしらべのてうしどもをといへるにや絃の物にも調子を引たるを今の世には管ばかりに吹く事

になり侍る也長享二年十月七日記之云々(箋)此已前のしらべ壹越調なるべし手もとへせまりたる調なれば巾の絃など誠に切にして堪がたき物也盤渉はさがり過たるに平調はよき程にたひらかなる調也壹越をおしさげてしらべられたる也(岷)此段心得がたきやうなる歟おしくだしてとはもとは壹越調にても有べしいかさまかりたる調子を平調にしらべたるなりさておしくだしてしらべかき合せばかりとよむべしさてほそろぐせりは長保樂の破也弄花の義にも狛一越といふはその聲平調にて呂也と有河海にも長保樂は右樂太食調とあり太食調は平調の聲にて呂あり狛笛の壹越調に廻ずる故にかくいへる也不審なき歟又昔は絃にも調子をひくと弄花の義にありさればかき合せばかりとはいへる也云々(釋)村田光庸云此注古來誤れる歟案に一より五に至るを大絃といひ六より十に至るを中絃といひ斗より巾に至るを細緒といふはさるべき事ながら巾の緒を中の細緒とする事心得がたし中のほそをといふは斗爲巾の正中のほそをといふ事にて中とは上中下初中後などいふ中の字の義にて爲の絃の事也さる故は何の曲にても二七爲の三絃宮になりて一越調の曲なれば一越調になり平調の曲なれば平調になり盤渉調の曲なれば盤渉調になりてそれ〳〵の樂の調子になりて主となる絃也されば中のほそをのたへがたきとは中のほそ緒は爲の絃にて絶やすき事をいへる也黃鍾調盤渉調などの高きにては爲の緒きれやすければ平調に柱をおしくだし下くしてしらべ給ふと也問云爲の絃より巾の絃ほそく且調子も盤渉調の曲なれば神仙調になり平調の曲なれば下無調になりて高ければ爲の絃よりは巾の絃絶やすかるべき歟答云さるにては中の字を中のこのかみなどいふ中の字の義とする說と同意にて非なりその故は右に辯ずるごとく二七爲の絃宮にして主になりて多く彈く絃にてそれにつゞきては一五十の絃徵にあたりてこれはた多くひく絃也はての絃も宮に比すれば彈ことすくなし然れば巾の絃にあらずして爲の絃なること明らけし」廣道云諸抄の說いとたど〳〵しくして決くかくと聞ゆるもなく紛はしけれど予管絃の事に疎ければ煩はしきを堪て諸注を悉く記しつそれが中には光庸といふ人の論さしあたりてげにとは聞ゆるやう也中の細緒とある中の字に說をつけて

中のおとり中のこのかみなどの中とせられたるはとにかくに强說なるべし上に何ともいはずしてかくふと中のとはいふべくもあらずまた平調におしくだしてほそろくせりを彈給へるやうにある注もひがこと也ほそろぐせりは「かきあはせまだわかけれど拍子たがはずとあれば上の平調にはあらでこれは笛を吹て調子をさだめそれにつけてかき合せし給ふ也さらでは搔合といふ事をふたゝびいふべきやうなし文の語脉によく〳〵意をつけて考ふべし猶其道にたけたらん人にたづねて決むべき也　うねべ女藏人　廿三丁ウ(花)采女々藏人とはこゝに書たれど藏人はうねべよりもあがりたる女官也さるによりて元三の御藥にも內膳司の御はがためをば采女役送して女藏人につたへ女藏人はいぜんのすけにはわたす也又御厨子所には采女の中をえらびて得選となづけて得選役送して命婦につたへ命婦はいぜんの典侍にわたす也さりながら節會の時は內膳司の晴御膳をば采女是を供ず陪膳のうねべとて執せらるゝ事也時にしたがひて上蔀にもなり下蔀にもなる事也加樣の事はいまめかしきやうなれど末の代にはしる人も有がたく又井中人などのためにこの抄はしるし侍るによりていまさらなるやうなれどことの次に申侍る也(釋)職員令曰采女司正一人掌檢校采女等事佑一人令史一人采部六人使部十二人直丁一人又云凡諸氏氏別貢女皆限三年卅以下十三以上雖非氏名欲自進仕者聽其貢采女者郡少領以上姉妹及女形容端正者皆申中務省奏聞と見ゆしかるを類聚國史大同二年五月の下また十一月の下に停諸國貢采女といふ事もあれば諸國より貢りしは此時に停られけん然れども同書弘仁四年正月の下に制令伊勢國壹志郡尾張國愛智郡常陸國信太郡但馬國養夫郡貢中郡司子妹年十六已上二十已下容貌端正堪爲采女者各一人と見えたれば此等の所々よりはなほ貢りけん延喜中務式に凡諸國所貢采女名簿者辨官經奏下知省記錄其由送內侍とも見えたれば大同に停られし後にまた貢るべきよしの制ありしにや禁秘御抄に陪膳采女尤可然事也近代漸令零落無極尤可有沙汰事也陪膳采女典侍仰之應和例也云々と見えたれば采女は御膳の事に主と仕奉る女官なりし也然るを後にはやう〳〵衰へて花鳥に注せられたるさまにはな

れりし也されど節會の時は云々とあるをもてその本職なる事は知られたりさて采女は宇禰倍と古書どもに見えてウネメとはいはす花鳥にも猶うねべとかゝれたりさるは采女部といふを切めていへるなるべし今ウネメとのみいふは字につきて訛れるにてなか

なかにひがことなり　**御けづりぐし　みうちきの人**　廿四丁ウ（餘）栄花物語根合の巻云みくしあげのないしのすけのほれなどいはせよとおほせらるればべんの内侍のすけ參り給へりけるのぼりてひのおましに御いしたてゝ御ぐしあげさせ給ひておはします（河）中院事書云御髪とる人の事也云々御梳櫛の人はわらはくびの無文の直衣を給はりて着する也仍て御うちきの人といふなり一説云御裝束奉仕する人也云云御門の無文のむらさきの御直衣を給はりてきる人をみうちきの人といふ云々（花）藏人私記十三云御髪御髮事侍臣之間撰堪レ事之人一供無二定例一皆着二當色一袍一注謂二之御袿一染二紫色一絹也納二藏人所一今案御もとゝりとり御びんにまゐる人は紫のきぬのなほしをきて祇候するをうちきの人とはいふ也（弄）見レ花みうちきとはきぬのなほしをいふ一注或抄御説うちきの人とは白きゝぬをきると也（岷）聞書御もとゝりとる人とわり又御さうぞくめさする衣文の人となり又御けづりぐしは源内侍みうちきの人は御もとゝりとる人と云々又けづりぐし御もとゝりは源内侍にて御うちきの人とは御さうぞくの衣文にまゐる人と也（新）此事藏人私記によらんもさることながら只御髮の事ならば同じ御座にても有べきか御衣を更るは所こそ有なればさる人めして他へ出させられんものなり且御けづりぐしの後は必御衣はかへ給ふべし又御髮のみに外へ出給ひてやがてかへり入せられんも頃はしかるべき事歟しかれば此御うちきの人は御裝束の事といふ説によるべくおぼゆ（玉）枕冊子に日のいるほどにおきさせ給ひて山井の大納言めしいれてみうちきまゐらせ給ひてかへらせ給ふ擬の御なほしに紅の御その夕ばえなどもかしこければとゝめつと見えたりこれも御裝束の事のやうにも聞ゆ猶よく考ふべし（釋）右の説どもいとさま〳〵にてまぎらはしされどこゝの文勢かならず頃書に擧たる萬水一露のごとくならではことわり聞えがたし花鳥に引給へる藏人私記の注證文のやうなれど當色の袍を着るはもちろんなる事を別に御袿といはんはいかゝしき名づけぎまなるべし又紫にまれ何にまれ賜はりたる御直衣を着たりとてそれを御うちきの人といはんもことわりなき名といふべしさるはたゝ大御身近くつかう奉る人なれば殊さらに賜はるまでにこそあらめそれをやがて職名のやうにはいふまじき理なり且かの私記の本文とはいたく異なる注なるもいふかしとにかくに「はてにけれはといひ「人めしてといへるにて別人の事とりまうすことはいと著きところなるをやまかは　廿六丁オ（細）はの字清濁兩義也清時は目皮也此義可然歟目の皮の白粉などにくろみたるさま也俗におしろいとみなといふがごとし（孟）まかばらといふ本あり老たれば目の皮くろみ落入也云々（湖師）まかはゝ俗にいふまぶた也（餘）和名抄唐韻云眶和名萬奈加布良目眶也按るにブラの約ばなればまかはともいふべし目皮の字は史記酈生傳に見えたり（釋）本居翁書入本云眶マカブラノ説可レ用ブラノ反ば也」廣道云右の説ども何ともなき事をいとことゞくしく注せられたるはいかゝまかはゝ目の皮也といふにて明らけき物をやまかばとよみてマカブラの反などあるはいふにも足ずさるむつかしき反切の論などすべて用なき事也　**いみじうはづれそゝけたり**　同（餘）はづれは俗にほつれといへり髪のほつれたるをいふ歟拾遺集哀傷「藤衣はつるゝいとは君こふるなみだの玉の緒とやなるらんそゝけは徒然草に鯉のわつ物くひたるは髪そゝけずといふこと見えたり新撰字鏡に鬢　とゝめれば髪による詞なり（釋）本居翁書入本一説云いみじうはづれは俗に目のはづれたると云詞なるべしハヅレより見ゆると云説は非なりいみじうはづれとゝめればはづれよりとは聞えず」廣道云餘滴にはづれは俗にほつれといへりとあるはたがへり髪ともいはずしてたゞにほつれといひてよからめやこれは體言にて髪のかゝりたる外れ際をいへる也さても猶髪とはいはざれどもさる一の名となりてはしか聞ゆる也そゝけの説はよろしはづれ目といへる説はいみじきひがこと也目にそゝけといふ詞有べしやは笑ふべし　**まだかゝる物をこそ思ひ侍らね**　廿七丁オ（花）萬葉四「しろかみに黒かみまじりおふるまでまたいとかゝる物はおもはず坂上郎女（拾）これは萬葉第四坂上郎女が歌なり拾遺戀五にも入たり黒髪二白髪

交至レ者如是戀庭未相爾〔餘〕雅望考るにまだかゝる物をこそ思ひ侍らねといふには此引歌かなはず初に内侍のもてる扇に木だかさもりのかたをゑがきてもりの下草老ぬればと書しを源の見給ひて森こそ夏のとたはれ給ひまたさゝわけば人やとがめん云々とよませ給ひたるなど皆扇の繪によりてつゞけ給へる也こゝに又かゝる物をこそ思ひ侍らねと内侍がいへるも森によりていへる也大和物語に良少將の歌「かしは木のもりのした草老の世にかゝる思ひはあらじとぞ思ふまたく此歌を思ひてまたかゝる物をこそ思ひ侍らねと内侍がいへる也云々〔釋〕餘滴の引歌も猶かなひがたし大あらきのもりを柏木の森とせんもつきなく引歌をとれる例にたがへり未を又とせるも文にかなはずひがことなり　**見まほしきはかぎりありけるをとや**　廿八丁オ〔河〕「いたづらにゆきてはかへる物ゆゑに見まくほしさにいざなはれつゝ「戀しさのかぎりだにある物ならば云々〔細〕引歌に不可及此人にてもなぐさめがたき也〔孟〕「いたづらにゆきてはかへる云々とにかくに源に逢たきと也〔箋〕人の高下尊卑は限ある物かな頭中將に誰人かは及ぶべき隨分の人なれども源氏のなずらへにも及ざれば只源氏のみ見まほしき也されば人の分際の限りあるものなるべしといふにや〔岷〕源氏のつれなくおはするなぐさめにと頭中將を思ひつれど見まほしきは源氏君にかぎりたるといふ事を見まほしきはかぎり有けるをとやとはかけり云々〔湖師〕中將にて慰んとは思へども實に逢まほしきは限り有て源より外にはなきとにやと草子地にいふ也〔新〕おもひなぐさむやと中將に逢ども猶まぎれかたく源の戀しきと也　追書かぎりあるの詞きこえがたし〔玉補〕。ともじなきを小櫛によしとせられたるは心得ず〔釋〕右の說ども何れも語の意をたしかに解れたるもなくいとたど〳〵し河海にいたづらにゆきてはかへるといふ歌を擧給へるはこゝにはよしなし細流孟津岷江湖月新釋の諸抄いづれも粗くして推量の說のみなる中に箋は一ふしありて聞えたりされどかぎりとあるを高下尊卑の分際のやうに記されたるは猶いかゞあらんこゝは尊卑の分際の事には更にあづからぬ所なるをや又ありけるをといふを。の辭も分際の事としては聞えがたし玉小櫛補遺に小櫛を難じたるはさる事ながら其說を擧ざれば

いかに思ひとれりともしられず皆いと貫かぬ注ども也予が考は本文の釋に注せるが如し　**うんめいでん**　同〔箋〕古語拾遺云至二于磯城瑞垣朝一漸畏二神威一同レ殿不レ安故更令下齋部氏率二石凝姥神一齋二天目一箇神一齋二氏一更鑄レ鏡造レ劔以爲二護身御璽一今踐祚之日所レ獻神璽劔鏡也　此文ハ今改メテ本書ヨリ引出ツ箋ニ引レタルハ違ヘレバ也禁秘御抄云垂仁天皇御宇始爲二別殿一御二溫明殿一白河院仰云内侍所神鏡飛出天欲レ上レ天而女官懸二唐衣袖一奉二引留一依二此因緣一女官守護云々〔岷〕溫明殿は云々頭書ニ引是白河院の勅定のごとし凡近代おはしますは春興殿なりそれをも内侍所と申て今も女官どものさぶらふ也主上神鏡と別殿におはします事は崇神天皇よりの事と古語拾遺に見えたり是を正說とすべし云々　**瓜つくりになりやしなまし**　廿九丁ウ〔花〕是は催馬樂の山城の歌の詞也是をとりてよめる歌六帖にあり「山しろのこまのわたりの瓜つくりならひて後ぞくやしかりける〔餘〕此花鳥の歌撰集には見えず拾遺雜下「おとにきくこまのわたりの瓜つくりとなりかくなりなる心かな　兼盛集　山城のこまのわたりを見てしがな瓜つくりけん人のかきねをこれこまの瓜つくりをよめりされど催馬樂の外はこゝに用なし〔細〕〔箋〕うりつくりいかにせん〳〵はれいかにせんのことばをとれり〔岷〕閑書うりつくりの歌をうたふことは歌の詞に成やしなましと有はこの瓜作り我を思ふといひて彼ものゝつまにやならんとなり其心を以てかゝる物思ひをせんよりはかゝるいやしきものゝ妻に成てなりとも思ひをなぐさめやせんいかにせんと歌の心に我思ひを引合せて此歌をうたふにや折ふしも又瓜の時分なり〔釋〕催馬樂なる山城歌は萬葉集十一旋頭歌に「山しろの久世のわく子がほしといふわれあふさわに我をほしといふ山しろの久世とある歌の意を本にて餘滴に引る拾遺集のとなりかくなりなるこゝろ哉といふ歌に合せて作りたるもの也さてしか作りたるうべにては岷江入楚に注し給へるごとき意と聞ゆ又内侍が此歌をうたふ意も岷江のごとくなるべし頭中將を瓜作りになぞらへたる也さるは中將は瓜作りのごと賤しき人ならねども心にかなはぬよりよそへてうたふなめりこの上文に「つれなき人のなぐさめにとおもひつれど見まほしきはかぎり有ける世とやいへる所にあはせて知るべ

し「すこし心づきなきと有は玉小櫛のごとく色めき過てほこりかなるをこゝろづきなく源氏君のおぼせる意なるべし　**がくしうにありけんむかしの人も**　同〔河〕文君事史記曰云々　司馬相如傳ヲ擧ラレタレド用ナケレバ今ハ省キツ〔花〕文君といひけん昔の人も。この文君を定家卿の本には鄂州にありけん人もかくやをかしかりけんとあり河海に兩說を出されながら鄂州はなほ物語の心にかなへりと注せられたりうりつくりの歌をうたふを源氏の立きゝ給ふは鄂州の女のうたふを樂天の聞しには似たるやうなれどもかの鄂州の女は十七八の物とみえたり源内侍のすけはさだ過たる齡也すこぶるなずらへがたく侍るにやこれによりて愚意には文君なほたより有て思ひ侍りそのゆゑは卓文君としよりて司馬相如にすさめられて白頭吟といふ歌をつくれり相如これを見てあはれと思ひけるにや源内侍のすけもとしよりて人のもてなさぬうらみありしによりて物語の作者文君をひきよせてかきたるべし〔新〕花鳥に此事定家卿の本にはがくしうと有親行本には文君などいひけん昔の人もとありとて兩義をもて爭へども琵琶としもいひ他の語も覺ゆる事多ければ老少にはかゝはらで琵琶行の意とおぼゆ云々　**なか〳〵しるく見つけ給ひて云々その人なめりとみ給ふに**　卅二丁オ〔細〕源はやがて中將としり給ふ也〔釋〕書入本に本居翁云わざとおそろしげにもてなしておどす也といふ事をしるく見つけ給ふ也細流非なり中將としり給ふことは下の「その人なめりと見給ふとあるがそれなれば事重る也」と有廣道案に此說はいかゞ也これは中將のあらぬさまにもてなして我としられとてわざとおそろしげなるけしきを見する故に却て著く中將也と見つけ給ふ也「我としりて殊更にするなりけりとゝいふ詞かの修理大夫などをさしたる語勢にあらず源氏君と知てことさらにおそろしげにもてなしつゝおどすはかならずうらなき中將なる事あきらけし「其人なめりと見給ふにとは著く中將と見つけ給ふ事をふたゝびたしかにいひて下の文を引起す筆也別なるにはあらずされば細流誤にはあらず　**ほころびは**　同ヲ〔雅集〕宇治拾遺七水干のあやしげなるがほころびたえたるを云々ほころびぬひにやりたればほころびのたえたる所をば見だにつけずして云々　雅望注　几帳のも又衣のもたと

へは闕腋のごとくはじめよりわざとぬひのこしたる所をほころびといへる也それがぬひてありし所までもほころびぬるをたえたるとはいへる也たゝぬひたるものゝほころびたるは勿論なり〔釋〕この雅望が說いとよろし直衣のもかならず腋の下をほころびといひけんこと知るべし　**歌あらだちし云々**　卅三丁オ〔餘〕後撰戀三人のもとにまかれりけるにすのもとにすゑて物いひけるをすをひきあげゝればいたくさわぎければまかりかへりて又のあしたに遣しける藤原清正「あらかりし波のこゝろはつらけれどすてしよせしに聲ぞ戀しき此歌を思ひてよみたるなるべし　**おびは中將のなりけり我御なほしよりは云々はたそでもなかりけり**　同〔花〕上略頭書ニ擧タリ藤裏葉卷に夕霧宰相中將のなほしの事源氏君の給ふとて非參議のほとなにとなきわか人てそふたあゐはよけれとの給へり非參議とは二位三位などの中將をいふすでに夕霧は八座に昇進し給ふことなれば花田のなほしをき給ふべきといふ心也榊の卷に源氏の帶をうす二あゐなるおびの御そにまつはれてとあり今頭中將はこき二藍なればわが御なほしよりは色ふかしといへる也近代直衣の帶に下襲の色をもちふ禁色人冬蘇芳　面白　禁裏濃打綾　夏蘇芳寒草文生道草四位以下非參議人冬躑躅　面白　禁裏濃打平絹　夏二藍　袋おはかた今も直衣をきる程の人はなほしの色を用ゐなほしきぬ人は下がさねの色を用べき事なるをなほしきる人の下がさねをもちゐるは略儀と覺え侍り〔箋〕帶は直衣のきれを用る儀也直衣ゆりざる人は下がさねの色を用べき也其中にも禁色非色の差別有べし色の事は貴人ほど早く宿德する故に頭君源氏に年ましなれども色こき也云々〔萬〕直衣をゆるされたる時のきれにておびをするといへり是規模なる事と也わかきは二あゐの色年たけたるははなだの色也宿德とて主人ほどの位はうす二藍をきる也源氏は三位也故にうすし頭中將は四位なる故にこき二あゐをき給ふ也二あゐはあゐとかりやすにてそむるといへり色ふかしとあるに見合すべし〔細〕鰭袖也ある說はたは辭也將字也不レ用レ之〔箋〕鰭袖也又ノ義將ノ字云々　**まことはうしや世中よ**　卅五丁オ〔花〕古歌の詞あるべし尋ぬべし〔弄〕本歌未見歌詞ならでも世中を觀じたるにても可然歟　細同〔箋〕理はあきらか也引歌未勘〔新〕是は古今集戀に「ながれて

は妹夫の山の中におつる吉野の川のよしや世中又雑に「しかりとてそむかれなくにことしあれば先なげかれぬあなう世中此二首をおもひてひとつにいひたるなるべし(釋)こゝは必引歌あるべき所なり弄花に世中を觀じたるとある注さらに意得ずこゝは互に戯れ給へる事の末なれば世間を觀ずるなどいふべき所ならず新釋は宜しげなれど猶引れたる二首の歌の意にてはこゝにはかなひがたし本文に注せる餘滴を得たりとすべしさて「まことにといふよりかたみにいひ合せ給ふ詞なるべし　**とこの山なる**　同〔新〕花鳥に云々眞淵云是は萬葉卷十一に狗上之鳥籠山爾有云云と有て注古の女は男に父母のゆるして逢時ならでは名はいはぬことのむね萬葉にも紀にも見ゆ」妹が實名はしらずと夫のゝ給ふに今はかく相逢ふ中なれば我名をまうさんといへる歌也然るを中比の人誤りていざとこたへてわが名もらすな　唱へ來れるをふるく古今集に好事の書入たるもの也さて此文の比には其誤唱へしをのみことわざにいひしと見えてかく書たりこれらは物がたりなればかくても有なん實の物ならばいかにぞや　**七月にぞ后ゐ給ふめりし**　卅六丁ウ〔河〕左傳曰帝嬪一妃曰二皇后一後漢書曰以二備レ内職一爲レ后正二位宮闈一同二體天皇一下略令曰中宮職謂二皇后宮一其太皇太后皇太后皇太后宮亦自中宮也」釋曰今稱二皇后一爲二中宮一也〔細〕藤つぼの女御中宮に立給ふ事也河内本に十月とあり七月可然歟そのゆゑは皇大后宮藤溫子昭宣公の御女也寛平九年七月中宮に立給ふ昌泰二年七月皇大后たり此等に摸して書侍るなるべし然者七月尤可然也　鬘弄同〔弄〕班子女王光孝后宇多母寛平九七廿六皇大后(釋)しひていはゞこれらの例を思ひてかゝれたるにもあるべからんさらば右の說どもに從はんか河海に引れたる文には七月の上にそのとしといふこと有さる本もありしなるべし　**御こしのうちもれもひやられて**　三十七丁ウ〔河〕伊勢物語二條の后のまだ東宮の御息所とまうしける時氏神にまうで給ひけるにこの石づかさにさふらひけるおきな「大原やをしほの山もけふこそは神世の事もおもひいづらめとて心にはかなしとや思ひけんいかゞおもひけんしらずかし〔萬〕此段よくこゝに心かなへり業平も后にむかしあひ給ひし事を今御供して思ひ出てよめり〔花〕中宮の行啓には鳳輦にめさるゝ事もあり

又庇さしのいとげの車に乘給ふ時もあるなり供奉人の行粧も乘物によりてかはることゝ侍るなり

○花宴卷餘釋

南殿のさくらの宴　一丁ォ〔河〕南殿櫻云々延喜御記にも群二列櫻樹東頭一などあり天德に燒たりけるを康保元年十一月に植らるすなはち枯る同二年正月に又植られて三月に花宴あり兩度之間一は重明親王家樹一は西京より移植らる其後度々燒亡に毎度植らるゝ者也〔湖師〕拾芥抄云南殿前庭櫻樹者本是梅也桓武天皇遷都之日所レ被レ植也而及二承和年中一枯失仍仁明天皇被レ改レ樹也云々〔河〕花宴事　延長四年二月十七日御記曰。此日殿前櫻花盛開。仰召二文人一聊開二花宴一昨暮預令レ召二可レ候文人一。今日遣レ使召二常陸太守貞眞親王一。左大臣。々々々有所レ煩不レ參。申尅常陸大守親王參入。同尅仰二源人一立二倚子東北庇自レ北第二間一。敷二菅圓座兩三枚於北階南簀子敷一。爲二親王納言座一。櫻樹下鋪二座西面一爲二文人座一。西尅左衞門督藤原朝臣參。即着二倚子一。令レ召二親王藤原朝臣等一。即參來侍座。仰令レ召二文人一。即文章博士公絃朝臣。民部大輔博文朝臣。右中辨大江。民部少輔諸蔭。侍二内御書所一。大内記橘正臣以下。文章生以上七人。參二入仙華門一着二樹下座一。侍臣給二紙筆一。仰令レ獻レ題。藤原公絃朝臣進昇殿。藤原朝臣座前給レ之。令レ書二題目一奏。花芳紅蘇殊。仰又令レ上。又書奏書レ之。櫻繁春日斜。仰以二後所一上爲レ題。又仰令レ探二韵字一。右近權少將實賴探レ韵奉上。次親王以下就二文臺一探レ韵。仰二清平朝臣元方在衛維時尹甫等一探レ韵令レ就二進中座一。于レ時内藏寮給二酒肴一。中納言藤原朝臣參入。仰令レ探レ題。其後仰召二樂所管絃者四五人一。時々奏二音聲一。以助二謳吟一。及二子尅一終。頭取二文臺一。以二公絃朝臣一爲二講師一讀レ詩。仰二文人等一近侍二砌下一令レ講。其後管絃頻奏吟詠不レ止。仰二常陸太守親王一彈レ箏。中納言藤原朝臣彈レ琴。及二丑尅一。給二親王納言御衣一。文人給レ綿。侍臣及樂所人等給二疋絹一。寅二尅入レ内。侍臣退出○度々花宴中延長四年例探韵以下尤相似たり○拾遺集天德三年三月内裏に花宴せさせ給ひけるに九條右大臣「さくら花こよひかさしにさしながらかくて千歲の春をこそへめ(釋)河海には右の外に延喜十七年三月六日康保二年三月五日同三年二月二十一日等の花宴の例どもを出されたれどさのみは

として今は省きつ諸抄にもいはれしごとく此物語のさまは延長の例に近く聞ゆれば彼度の例ばかりをこゝには擧たり委くは本書を見て知べし〔箋〕此卷の花宴事は紅葉賀卷におりゐ給はんの御心ちかうなるよしあり御脫屣程あるまじければ御在位の名殘に此宴を開き給ふの心なり延長四年の例を引用るも醍醐御門代の末の年號なるに依てその面影あり○凡勘例一度の例を守らず此物語のならひなりかれこれをもて取合せて分別すべし細同旨〔花〕桐壺御門を醍醐の帝になずらへ奉るにつきてかの御宇に花宴行はれしは延喜十七年三月六日常寧殿花宴詩題春夜翫櫻花延長四年二月十七日清涼殿花宴詩題櫻繁春日斜此兩度の例には過べからずみな探韵作文御遊の事あり延喜の常寧殿の花のえんも宴席をば清涼殿にてひらかれしなりこの物語の花宴も南殿の櫻を御覽ありて宴をは清涼殿にかへらせ給ひておこなはるゝ事と心得べき也云々〔略〕〔新〕或說に此宴南殿の櫻の宴とは書たれど宴席は清涼殿にてひらかれつらんといふはおもひ過したる說也只南殿の宴とあるにまかせて宴席もそこにて有しと意得んぞ直かるべき況や村上の大御時南殿の花宴有て席は他にてひらかれしよしもしるさず且圍碁などすら南殿にて有し事西宮抄に見ゆるをやさて此宴は內宴九日宴などよりはかろく又常の花宴曲水宴などよりはおもく書たりすべて此文は必しも古き例にも泥まずはた有べきほどの事をば加へたるも多く又後の世のならはしを有まじき事と思ひてかへたるも今はすたれたるをもいかであらばやと思ふをばむかしにかへして書つと見ゆるも侍りよりて古きも古からず新しきもあたらしからず例などをば有か無かに書し物をかたくなにわつるはかねの咎もて水の月の大きさをはからんとするが如し此卷にもかの桐壺のみかどを延喜の帝にたとへ奉りたるなどいふごときはいふにもたらぬ說なり **たんねん給はもて** 同〔花〕先第一儒者奉レ仰獻題。次書二韵字一盛二中埦一置二庭中文臺上一。近衛次將先探御料韵二字一置二筥蓋一。昇自二御前階一獻レ之。次王卿堪レ屬文一者。文人等。各進二文臺頭一探二一字一見レ之。奏二官姓名及所レ探韵字一也　今案探韵は各分二一字一侍る也とゝ〳〵く韵字かはる也故懷帝端作云春日同賦三春夜翫二櫻花一各分二一字一應レ製詩探得二某字一如此書レ之べきなり（釋）

新釋にも右の文を假字書にせられたり河海例と見合せて知べし **やすき事なれど** 二丁オ〔細〕〔岷〕詩の絕句一首作るべき事はいとやすき事なれど時宜にしあつかひたる也〔明〕今案あながち詩の事にあらず立出て探韵給はる時の進退をいふにや〔湖師〕明星の御說を用ゆべし〔玉補〕げに明星の御說よしやすき事は上のはる〳〵とくもりなき庭に立いづといへるをうけくるしげ也は上のはづかしくてとはしたなくてをうけたる也（釋）細流の御說よろし明星の義はたがへりさるを助けていへる說ども皆ひが事也こは地下の文人は帝東宮の御才かしこくかゝる方にやんことなき人おほく物し給ふ比なるにましてはづかしくて云云といふ意也やすき事なれどは異本にやすきほどの事なれどゝあるかたよろしかくてはいよ〳〵探韵賜はる時の進退をいふにやとは聞えがたし詩一首作る事はいと易きほどのことなれどゝいふことなるをやほどの三字は寫脫せる成へし **春の鶯さへづるといふまひ** 同丁ウ〔河〕南宮橫笛譜云昔善儛二此曲一者有二左大臣源信朝臣及巨勢式人等一仍承和御時勅二信朝臣以二此曲一令二傳習一畢成康親王合二于御笛一儛二於清涼殿前一視レ之者無レ不二感泣一　柳花苑同〔箋〕聞云大唐には人の死したる時あたらしく樂を作りて葬送の時これを奏する也此柳花苑も人の葬送に作りたる樂也さて吹て見たれは吉の聲あり不審なりとて棺槨をひらき見れば彼死人蘇生したる也それより吉の樂にもちゆるなり云々 **かうじもえやらず** 三丁ォ〔河〕或說云廣才の人難字を作によりて講師もえよみやらざる歟云々今案此義不甘心公宴の講師をつとむるほどの人難字を不二講得一乎只逸透なるを毎句よみやらす講じのゝしると云歟〔箋〕毎句透逸なる故各感ずるとて講頌中々事もゆかぬ體也又一本講師もえよみやらずと云本あり講師にをしへられてよむ物なればとゝこほる義はあるべからず〔釋〕宗祇が點したるはさやうの本ありしにこそされど今はしたがふべからず湖月抄の本にはかうじもえよみやらずとあり **うき身世に** 六丁ォ〔拾〕今案後撰戀二まかり出て御ふみつかはしたりければ「けふ過はしなまし物を夢にてもいつこをはりと君がとはまし中將更衣小大君集に「我しなばいつこをはりと尋てか此世につきぬ事もかたらん　聞えたがへたるもしか

なとて 同ウ〔花〕きこえたがへたるといふ詞を源氏の君の思給ふこゝろむけを女のきゝたがへてひとへになのらずはとふまじきにとりなして草の原をはとはじとやとよみ給へる也源氏の心ははじめよりさにてはなし問ふべき事はとゞめけれども猶露のやどりをたどらんほどもてさわがれん事のうしろめたかるべきによりてたしかになのり給へとはいへるなりしかなとてはしか〳〵のいはれにてあるといふ心を下の歌にのべ給へり「小さゝが原に風もこそふけは露のやどりをもとめうしなふべきいはれ也わづらはしくおぼすことなくはと下の詞にかきつゞけたるは二條のおとゞのわたりわづらはしかるべき事を小さゝが原の風にたとへたるへし云々(釋)しかなとてはしか〳〵のいはれにて有といふ心を下の歌にのべ給へりといふことはいみじき誤なり此事は水原抄に誤りそめ給へるを河海箋など皆この誤を改め給はず其中花鳥の説の委しきをとり出たるなり本居先生の玉小櫛に注ども いかゝ然也をしかなとはいかでかいはん又それにてはもといへるもあたらずとあり實に此説の如したゞもじかなにてよく聞えたれは今は諸説をあげず しるしの扇はさくらのみへがさね 九丁ゥ〔花〕今按櫻のうすやう面白しうらすはう也今按こきかたにかすめる月をかきたるはこさむらさきの雲をかきて月をいだしたるにや〔箋〕かさねのうらのこき紫也私こきすはうなるべしこのかたに泥霞を引て月をいだしたるへし花に雲といへる不審也一本三重がさねとあり青表紙になきは寫しおとされしか〔河〕清少納言枕草子「なまめかしきもの三重かさねの扇五重になりぬれはあまりあつくて云々(釋)櫻のみへがさねとあるによれり青表紙になきは寫しおとされしか とゝのへさせ給へるけなり 十丁ウ〔雅集〕萬廿八十八朝なきにかこ等登能倍續日本紀四此天下平治賜比諸賜比源癸八さうぞく人のありさまいみじうとゝのへたりと見ゆる中にも同九かたちすがたまばゆくとのへてわか紫廿三よろづをとゝのへ給へり貴合二えならぬ御よそひども御櫛の箱云々くさ〳〵の御たき物云々心ことにとゝのへさせ給へり(釋)俗にいふが如く物事のとりとゝのひて全き意也けは氣にてけしきをいふ意也 そしうなる 十一丁ウ〔弄〕奸かたむ心也朝にも出つかへぬものゝ中に上手などをたづね出

給へると也〔細〕そしうは奸字ねたむ心也公方の御用なとには出つかへずして隱れぬる者の中に物の上手などあるをばめし出し侍ると也(釋)なほ箋等にも同し樣のこゝろ也河海にはおほやけこと「かたむもの」のしどもをとて出されしは河内本の意なるべけれどかつて考ふる所なし奸字は記されたれどもいかにとも考へわたす事なければ其まゝさしおく也按に細流弄花などに奸と記されたるは河海の謬にならはれたるにや是にてそしうなるの意は解へからずしうは秀字などか又そは疎などにてしうは別に字あらん歟考へて定むべし 弓のけち 同〔河〕踏歌後宴弓結也延喜七年二月二十二日御記云稻掌は所レ奉二仕踏歌一後宴云々御射場中務親王左大臣以下侍更召二殿上公卿一預二召立一書別如レ例御一賭一物臣一下賭〔細〕今年右大臣の踏歌後宴ある也私の宴例考べしとあり踏歌後宴なり弓をいることあり一勘定れる事にはあらず藤花の時分の宴なればかくのごとくとりなし侍る也〔箋〕惣別は踏歌の後宴に弓の結あるそれはおほやけ事なりこゝの心は私に小弓遊有し其結に藤宴をせらるゝなり箋聞書弓をいたる結願などのやうの義也おしあけにの心也〔花〕二條のおとゞにて小弓あそびありてその結に藤の花のえんせられし也圓融院御集に結の比宮にわたらせ給ひて「弓はりの山のはさして入ときはあやしくものそかなしかりける 返し宮里ならて弓はりなから入月は山のはにだに立とまらなん 師説 弓の結はもと禁中にてある事なるを右大臣の家にてまなびせられし也(釋)すべて弓の結はおのづから一つの名目となりたり踏歌後宴を引れたるもこゝにはかなはぬにや箋聞の説とて弓をいたる結願などのやうとあるもこゝにはかなはずひが事也たゞ右大臣のかたにてありし弓の結とみるべし 藤の宴 同〔河〕飛香舍藤花宴有レ興延喜二年三月廿日此日左大臣飛香舍藤花下獻レ物事歟 うつほの物語云三月中の十日ばかりにふぢ井の宮に藤の花の賀し給〔花〕おほやけ事になずらへて右大臣の第にて藤花の宴あり又天暦三年四月十二日飛香舍藤花宴には和歌管結等あり 女みこたちなども 十二丁ウ〔細〕源と右大臣と御中よからぬ間ついでがてらよそよそしからずし給へと教訓ある也御門の御子たちをそだて給ふ弘徽殿なればおしなべてのやうにはおぼすまじきと也弄同〔玉〕みことあるは姫宮たちのごと

く聞ゆれどもこゝのやうを思ふになほ右大臣の御むすめたちの事とこそ聞えたれ源氏君の御姉妹としては事のさまおたやかならず〔玉補〕小櫛に云々とあれどいかゞあらん天子臣下の子をみことの給ふ事ありやいとおぼつかなし〔釋〕細流に源と右大臣と御中よからぬ間云々御教訓ある也とあるは過たり玉小櫛なるは玉小櫛補遺に辨へたるが如しうつなく臣子の子をみ子とは宣ふまじき也　**櫻のからのきの御なほし**　十三丁オ〔河〕からのきとは唐綺也うすきからあや也さてこゝに直衣布袴事とて例を多く擧られたれどさのみはとて今は悉く省く本書を見るべし〔花〕六條院はさくらのからのきの御なほしいまやうの御そひきかさねてしどけなき大君すがたいよ〳〵たとへんかたなし今按此物語に二所おなじ御よそひの事をかけり云々　**袖口などたうかのをり**　十四丁オ〔花〕榮花物語に枇杷殿（姸子三條院后道長公女）の大饗に女房の袖口ことごとしくいだされたるをは小野宮右大臣（實資公）は難ぜられしことありいまの物語にもこうきでんの女御のかどめい給へる御かたにて袖口とも目にたつばかりいだされたるを源氏君はふさはしからず思給ひて藤つぼわたりにはかうやうにことゞ〳〵しくはしたまはぬ物をと思ゐはせ給ふ也〔細〕けふはうち〳〵なる事をゐまりにことゞ〳〵しきさまと也　**扇をとられて同ウ**　〔河〕伊之加波乃云々源氏扇をとられたるを是によせてさまかへたる高麗人かなと云々〔拾〕細催馬樂石川の歌云々抄聞書石川は加茂の名所也むかし高麗人の住し也○今按鴨川を石川や蟬の小川といふ事は加茂の緣起をもて長明のはじめてよまれたる事にてこれよりさきには人しらずと彼人の無名抄に見えたり催馬樂にいへる石川鴨川の別名ならは歌主合せて申さるべし又世にも知人おほかるべければ歌合の時難ずるにも及ぶべからずこれは河内國石川郡なるべし其ゆゑは姓氏錄に河内國諸蕃に大狛連は出レ自二高麗國人伊一利一斯一沙一禮一斯一也大狛連出レ自二高一麗盜一士禰一貴王一也島一木高一麗一國伊一理一和一須使一主之後也これらを石川郡におかれたる歟さて其從者どもの末のものなと取かくしたることありけるにや〔花〕源氏の君あふきのぬしをしらんためのはかり事に「石川のこまう人におびをとられてからさ〻いするとうたふをあふぎをとられてといひかへたりあふぎのぬしはやがて心得べき也　**いとうれしきものから**　十五丁ウ〔花〕草の原をはとばじとや思ふといひしその人のこゝろとはきゝなせりうれしき物からの結語の詞おもしろくかきなせりかつ〳〵うれしくはあれどもいまだ六の君とはたしかにしらぬこゝろをふくませたり〔箋〕花說さも有ぬべし此物語誠に物語の眼也源氏の心にわくがれて有明のゆくへを尋ね知たき心なれば此時其人はたしかに知ぬるは本意のうへの本意なりされば女の身にて人にこそよれかろ〳〵しき事やと心に淺く思給ふよし也源氏の性萬事においてかくのごとし眼をつくべし〔細〕花鳥說面白し但し師說此結語は返歌をし給ふ事はうれしくはあれども女の身にとりてはちとかろ〳〵しとおぼしたる也是源の性なりいづくにも此心あり〔弄〕尋あひたるはうれしけれども女のすべきさまは然べからずと思給ふ心あれば物からといひのこしたり是又源の性也花鳥說も其故あるにや五六君の間未二分明一云々此外心ありいつれも面白歟此時のさまうれしけれども猶あぢきなく物思ふなるべき心をこめて物からといへるにや云々感あるにや聞書うれしき物からかろ〳〵しきも私云うれしき物からかろ〳〵しきが正說也花に五六分明ならねど弄の箋にいよ〳〵物思ひのまさるといふは異說也然ともいつれも面白しと心得へし〔箋〕細凡源氏物語の中にも此卷勝れたると也六百番歌合にも紫式部は歌よみの程よりも物かく筆は殊勝の上花の宴の卷はことに艶なる物也云々〔釋〕こゝはいひのこしたる說なればうるさけれど悉く擧たりおのが說は評釋の中に擧たるが如し

室松岩雄
保持照次　校
井上賴敎

明治四十二年十二月八日印刷
明治四十二年十二月十二日發行
大正十五年六月一日三版印刷
大正十五年六月五日三版發行

國文註釋全書　第十二編
源氏物語評釋

定價金五圓

著作權所有
不許轉刻複製

編輯者　室松岩雄

發行者　大阪市天王寺區堂ケ芝町百八番地　藤原久吉郎

印刷者　大阪市西區阿波座二番町一番地　日本印刷製本株式會社　代表者　堀越幸

發賣所

東京市外渋谷町下渋谷五六〇番地　皇典講究所國學院大學出版部

大阪市東區北久太郎町四丁目　合資會社　柳原書店　振替大阪二三一番

大阪市天王寺區堂ケ芝町百八番地　櫻園書院　振替大阪一七四番

皇學書院　振替東京一三九九〇番

63
85□

終